茨城県教育財団文化財調査報告第35集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9

小　場　遺　跡

昭和61年3月

財団法人　茨城県教育財団

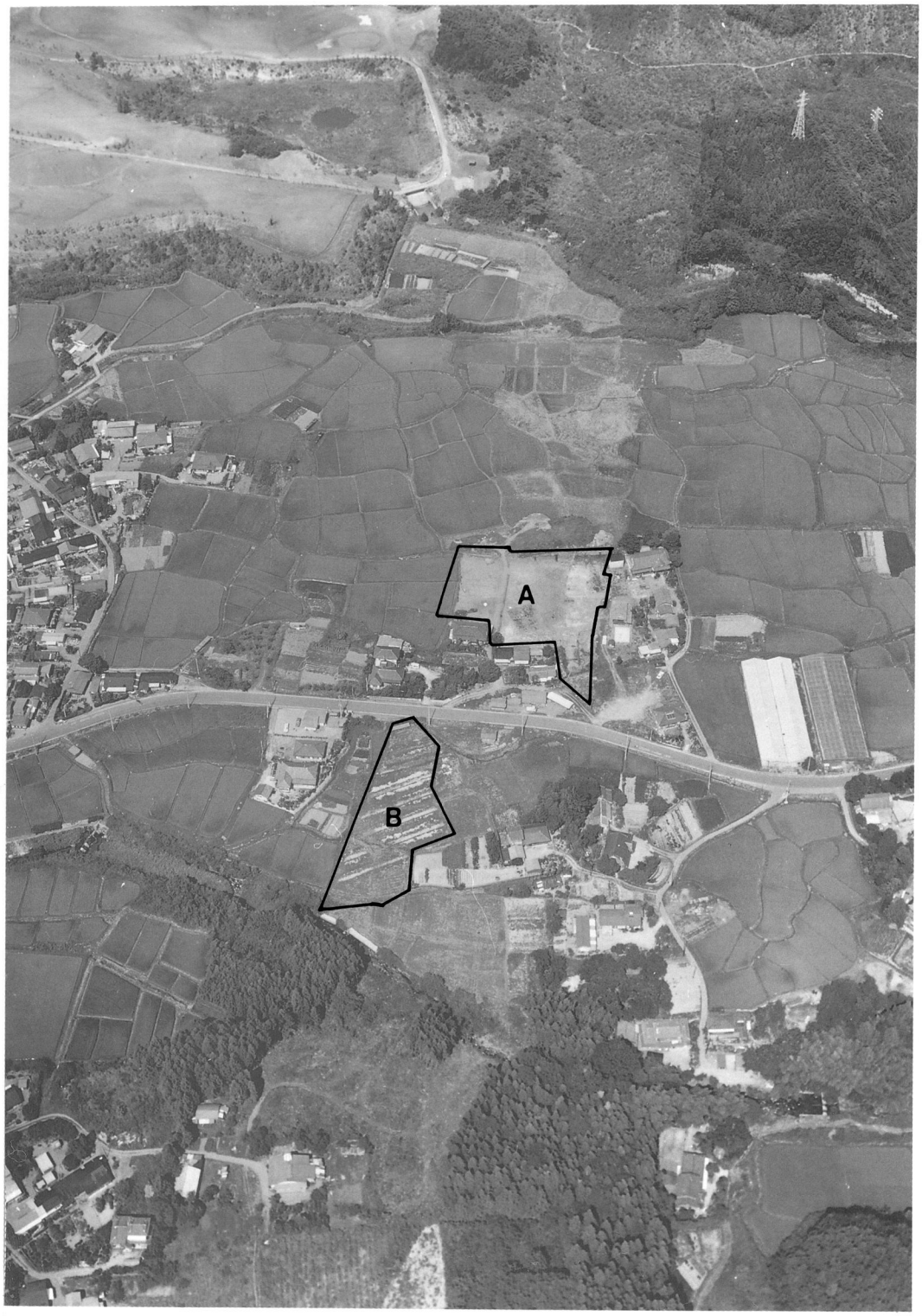
茨城県教育財団文化財調査報告第35集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9

小場（おば）遺跡

昭和61年3月

財団法人 茨城県教育財団



小場遺跡遠景

小場遺跡遠景

序

茨城県を縦断する常磐自動車道の建設工事が，日本道路公団によって進められておりますが，この予定地内には，数多くの文化財が埋蔵されておりました。茨城県教育財団は，昭和53年度以降日本道路公団との委託契約に基づき，埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

現在までに発掘調査を終了した遺跡は，常磐自動車道建設に伴う関連開発用地内に所在したものを含めて28か所の多くを数え，その調査の成果につきましては，遂次報告書にまとめて刊行してまいりました。

本書は，昭和59年度に発掘調査を実施した，高萩市に所在する小場遺跡の調査成果を集録したものであります。小場遺跡は，縄文時代の配石を伴う祭祀（さいし）跡・集落跡の遺跡として注目を集めております。本書が，研究の資料としてはもとより，教育，文化の向上の一助として広く活用されますことを希望してやみません。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である日本道路公団から寄せられました御協力に対し，深く感謝申し上げます。また，茨城県教育委員会，高萩市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導・御協力を賜わりましたことに対し，衷心より謝意を表します。

昭和61年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹　内　藤　男

例　　言

1　本書は，日本道路公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和59年度に発掘調査を実施した，高萩市上手綱小場に所在する小場遺跡の発掘調査報告書である。

2　小場遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		竹内藤男	
副理事長		川又友三郎	
常務理事		綿引一夫 萩原藤之助	～昭和60年3月 昭和60年4月～
事務局長		小林洋 堀井昭生	～昭和60年3月 昭和60年4月～
調査課長		青木義夫	昭和59年4月～
企画管理班	班長	市毛洋一	昭和59年4月～昭和60年3月
	〃	北畠健	昭和60年3月～
	主任調査員	加藤雅美	
	主事	鈴木三郎	～昭和60年3月
	〃	田所多佳男	昭和60年4月～
	〃	海老沢一夫	～昭和60年3月
	〃	大曽根徹	
	〃	山崎初雄	昭和60年4月～
調査第三班	班長	石井毅	昭和59年度
	主任調査員	沼田文夫	昭和59年度調査
	調査員	小山映一	昭和59年度調査
整理班	整理班長	渡辺千秋	昭和59年度
	〃	石井毅	昭和60年度
	主任調査員	沼田文夫	昭和59・60年度整理・執筆
	調査員	小山映一	昭和59年度整理

3　本書は，沼田文夫が執筆・総括編集を担当した。

4　本書の作成にあたり，獣骨の分析を早稲田大学教育学部講師金子浩昌氏に依頼し，玉稿をいただいた。また，土坑から採集した土壌のリン・カルシウム，堅果類の分析を，パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し，また，石器の石質鑑定を，茨城県立上郷高等学校教頭蜂須紀夫氏に御指導をいただいた。

5　本書に使用した記号等については，第4章第1節2の項を参照されたい。

6　発掘調査及び出土遺物の整理等に際して，御指導・御協力を賜った関係諸機関及び各位に対し感謝の意を表します。

目　　次

序
例　言

第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査経過……3
第２章　位置と環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……6
第３章　調査方法……9
　第１節　地区設定……9
　第２節　基本層序の検討……10
　第３節　遺構確認……11
　第４節　遺構調査……11
第４章　遺構と遺物……15
　第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法……17
　　1　遺跡の概要……17
　　2　遺構・遺物の記載方法……18
　第２節　配石遺構……24
　　1　第一次調査面の配石群……25
　　2　第二次調査面の配石群……63
　　3　第三次調査面の配石群……75
　第３節　竪穴住居跡……81
　第４節　土坑……160
　第５節　埋甕……234
　第６節　溝……236
　第７節　遺構外（遺物包含層）出土土器……245
　　1　土器捨場出土土器……245
　　2　遺物包含層出土土器……250

第8節　その他の人工遺物……280
1　把手……280
2　土製品……284
3　石器……314
4　骨角器……378
第9節　自然遺物……380
1　獣骨類……380
2　種子……382
第5章　まとめ……383
第1節　遺構……383
1　配石遺構について……383
2　竪穴住居跡について……390
3　土坑について……394
4　埋甕遺構について……398
5　溝について……399
第2節　遺物について……401
1　土器について……401
2　土偶について……407
3　石器について……409
終章　むすび……412
附章　リン・カルシウム，材・種子同定報告について……413
写真図版

挿　図　目　次

第 1 図　常磐自動車道関連用地内遺跡分布図　2
第 2 図　小場遺跡周辺地形及び遺跡位置図…　7
第 3 図　小場遺跡大調査区・小調査区名称図　9
第 4 図　A4i_5区土層柱状図 …… 10
第 5 図　小場遺跡調査区全体図…… 13
第 6 図　小場遺跡遺構全体図…… 15
第 7 図　第 1 号配石実測図…… 25
第 8 図　第 9 号配石実測図…… 26
第 9 図　第17号配石実測図…… 26
第 10 図　第21号配石実測図 ……27
第 11 図　第25号配石実測図 ……27
第 12 図　第30号配石実測図…… 28
第 13 図　第35号配石実測図…… 28
第 14 図　第44号配石実測図…… 29
第 15 図　第50号配石実測図…… 29
第 16 図　第57号配石実測図…… 30
第 17 図　第67号配石実測図 ……30
第 18 図　第72号配石実測図…… 31
第 19 図　第73－B号配石実測図…… 32
第 20 図　第79号配石実測図…… 32
第 21 図　第81－A号配石実測図…… 33
第 22 図　第87号配石実測図…… 33
第 23 図　第131号配石実測図 …… 33
第 24 図　第139号配石実測図 …… 34
第 25 図　第149号配石実測図 …… 34
第 26 図　第152号配石実測図 …… 35
第 27 図　第一次調査面配石実測図(1)…… 40
第 28 図　第一次調査面配石実測図(2)…… 41
第 29 図　第一次調査面配石実測図(3)…… 42
第 30 図　第一次調査面配石実測図(4)…… 43
第 31 図　第一次調査面配石実測図(5)…… 44
第 32 図　第一次調査面配石実測図(6)…… 45
第 33 図　第一次調査面配石実測図(7)…… 46
第 34 図　第一次調査面配石実測図(8)…… 47
第 35 図　第一次調査面配石実測図(9)…… 48
第 36 図　第一次調査面配石実測図(10)…… 49
第 37 図　第一次調査面配石実測図(11)…… 50
第 38 図　第一次調査面配石出土土器実測図(1) 54
第 39 図　第一次調査面配石出土土器実測図(2) 55
第 40 図　第一次調査面配石出土土器実測図(3) 56
第 41 図　第一次調査面配石出土土器実測図(4) 57
第 42 図　第一次調査面配石出土土器拓影図(1) 60
第 43 図　第一次調査面配石出土土器拓影図(2) 61
第 44 図　第一次調査面配石出土土器拓影図(3) 62
第 45 図　第89号配石実測図…… 63
第 46 図　第96号配石実測図…… 64
第 47 図　第98号配石実測図 …… 64
第 48 図　第100号配石実測図 …… 65
第 49 図　第105号配石実測図 …… 66
第 50 図　第109号配石実測図 …… 66
第 51 図　第110号配石実測図 …… 67
第 52 図　第167号配石実測図 …… 67
第 53 図　第170号配石実測図 …… 68
第 54 図　第176号配石実測図 …… 68
第 55 図　第二次調査面配石実測図(1)…… 71
第 56 図　第二次調査面配石実測図(2)…… 72
第 57 図　第二次調査面配石実測図(3)…… 73
第 58 図　第二次調査面配石出土土器実測図
・拓影図…… 74
第 59 図　第117号配石実測図 …… 76
第 60 図　第123号配石実測図 …… 76
第 61 図　第161号配石実測図 …… 77
第 62 図　第三次調査面配石実測図…… 78
第 63 図　第三次調査面配石出土土器拓影図… 79
第 64 図　第 1 号住居跡実測図…… 81
第 65 図　第 1 号住居跡遺物出土状況図…… 82
第 66 図　第 1 号住居跡出土土器拓影図…… 82
第 67 図　第 2 号住居跡実測図…… 83
第 68 図　第 2 号住居跡出土土器実測図・拓影図 84
第 69 図　第 3 号住居跡実測図…… 85
第 70 図　第 3 号住居跡遺物出土状況図…… 86
第 71 図　第 3 号住居跡出土土器実測図・拓影図 88
第 72 図　第 4 号住居跡実測図…… 90
第 73 図　第 4 号住居跡遺物出土状況図…… 91
第 74 図　第 4 号住居跡出土土器拓影図…… 91
第 75 図　第 5 号住居跡出土土器拓影図…… 92
第 76 図　第 5 号住居跡実測図・遺物出土状況図 93
第 77 図　第 6 号住居跡実測図…… 94
第 78 図　第 6 号住居跡遺物出土状況図…… 95
第 79 図　第 6 号住居跡出土土器拓影図 …… 96

第 80 図　第 7 号住居跡実測図・遺物出土状況図 97
第 81 図　第 7 号住居跡出土土器拓影図…… 98
第 82 図　第 8 号住居跡実測図・遺物出土状況図……100
第 83 図　第 8 号住居跡出土土器実測図・拓影図……101
第 84 図　第 9 号住居跡実測図・遺物出土状況図……103
第 85 図　第 9 号住居跡出土土器拓影図……104
第 86 図　第10号住居跡実測図……105
第 87 図　第10号住居跡出土土器拓影図……105
第 88 図　第11号住居跡実測図……106
第 89 図　第11号住居跡出土土器拓影図……107
第 90 図　第12・14号住居跡実測図……108
第 91 図　第12・14号住居跡出土土器拓影図…109
第 92 図　第13号住居跡実測図……109
第 93 図　第13号住居跡出土土器実測図・拓影図……111
第 94 図　第15号住居跡実測図・遺物出土状況図……112
第 95 図　第15号住居跡出土土器拓影図……113
第 96 図　第16号住居跡実測図……114
第 97 図　第16号住居跡遺物出土状況図……115
第 98 図　第16号住居跡出土土器実測図・拓影図……116
第 99 図　第17号住居跡実測図……117
第100図　第17号住居跡出土土器拓影図……118
第101図　第18号住居跡実測図……119
第102図　第18号住居跡出土土器実測図・拓影図……120
第103図　第20号住居跡実測図……122
第104図　第21号住居跡実測図……123
第105図　第20・21号住居跡出土土器拓影図…124
第106図　第22号住居跡実測図……124
第107図　第22号住居跡遺物出土状況図……126
第108図　第22号住居跡出土土器実測図・拓影図……126
第109図　第23号住居跡実測図……127
第110図　第23号住居跡遺物出土状況図……128
第111図　第23号住居跡出土土器実測図・拓影図……129
第112図　第24号住居跡実測図……131
第113図　第24号住居跡出土土器実測図……132
第114図　第25号住居跡実測図(1)……133
第115図　第25号住居跡実測図(2)……135
第116図　第25号住居跡遺物出土状況図……137
第117図　第25号住居跡出土土器実測図(1)……142
第118図　第25号住居跡出土土器実測図(2)……143
第119図　第25号住居跡出土土器実測図・拓影図(3)……144
第120図　第25号住居跡出土土器拓影図(4)……145
第121図　第25号住居跡出土土器拓影図(5)……146
第122図　第26号住居跡実測図……147
第123図　第26号住居跡遺物出土状況図……148
第124図　第26号住居跡出土土器実測図・拓影図……149
第125図　第27号住居跡実測図・遺物出土状況図……150
第126図　第27号住居跡出土土器実測図・拓影図……151
第127図　第28号住居跡実測図……152
第128図　第28号住居跡遺物出土状況図……153
第129図　第28号住居跡出土土器実測図・拓影図……154
第130図　第29・30号住居跡実測図……156
第131図　第29・30号住居跡遺物出土状況図…157
第132図　第29・30号住居跡出土土器実測図・拓影図……159
第133図　土坑実測図(1)……182
第134図　土坑実測図(2)……183
第135図　土坑実測図(3)……184
第136図　土坑実測図(4)……185
第137図　土坑実測図(5)……186
第138図　土坑実測図(6)……187
第139図　土坑実測図(7)……188
第140図　土坑実測図(8)……189
第141図　土坑実測図(9)……190
第142図　土坑実測図(10)……191
第143図　土坑実測図(11)……192
第144図　土坑実測図(12)……193
第145図　土坑実測図(13)……194
第146図　土坑実測図(14)……195
第147図　土坑実測図(15)……196
第148図　土坑実測図(16)……197

第149図　土坑実測図(17)……198
第150図　土坑実測図(18)……199
第151図　土坑実測図(19)……200
第152図　土坑実測図(20)……201
第153図　土坑実測図(21)……202
第154図　土坑実測図(22)……203
第155図　土坑実測図(23)……204
第156図　土坑実測図(24)……205
第157図　土坑実測図(25)……206
第158図　土坑実測図(26)……207
第159図　土坑出土土器実測図(1)……214
第160図　土坑出土土器実測図(2)……215
第161図　土坑出土土器実測図(3)……216
第162図　土坑出土土器実測図(4)……217
第163図　土坑出土土器実測図(5)……218
第164図　土坑出土土器実測図(6)……219
第165図　土坑出土土器実測図(7)……220
第166図　土坑出土土器実測図(8)……221
第167図　土坑出土土器実測図(9)……222
第168図　土坑出土土器実測図(10)……223
第169図　土坑出土土器実測図(11)……224
第170図　土坑出土土器実測図(12)……225
第171図　土坑出土土器拓影図(1)……226
第172図　土坑出土土器拓影図(2)……227
第173図　土坑出土土器拓影図(3)……228
第174図　土坑出土土器拓影図(4)……229
第175図　土坑出土土器拓影図(5)……230
第176図　土坑出土土器拓影図(6)……231
第177図　土坑出土土器拓影図(7)……232
第178図　土坑出土土器拓影図(8)……233
第179図　埋甕実測図(1)……234
第180図　埋甕実測図(2)……235
第181図　第１号溝実測図……237
第182図　第２・３・４号溝実測図……239
第183図　第５号溝実測図……243
第184図　溝出土土器拓影図……244
第185図　土器捨場出土土器実測図(1)……247
第186図　土器捨場出土土器実測図(2)……248
第187図　土器捨場出土土器実測図(3)……249
第188図　遺物包含層出土土器実測図(1)……257
第189図　遺物包含層出土土器実測図(2)……258
第190図　遺物包含層出土土器実測図(3)……259
第191図　遺物包含層出土土器実測図(4)……260
第192図　遺物包含層出土土器実測図(5)……261
第193図　遺物包含層出土土器実測図(6)……262
第194図　遺物包含層出土土器実測図(7)……263
第195図　遺物包含層出土土器実測図(8)……264
第196図　遺物包含層出土土器実測図(9)……265
第197図　遺物包含層出土土器実測図(10)……266
第198図　遺物包含層出土土器実測図(11)……267
第199図　遺物包含層出土土器拓影図(1)……268
第200図　遺物包含層出土土器拓影図(2)……269
第201図　遺物包含層出土土器拓影図(3)……270
第202図　遺物包含層出土土器拓影図(4)……271
第203図　遺物包含層出土土器拓影図(5)……272
第204図　遺物包含層出土土器拓影図(6)……273
第205図　遺物包含層出土土器拓影図(7)……274
第206図　遺物包含層出土土器拓影図(8)……275
第207図　遺物包含層出土土器拓影図(9)……276
第208図　遺物包含層出土土器拓影図(10)……277
第209図　遺物包含層出土土器拓影図(11)……278
第210図　遺物包含層出土土器拓影図(12)……279
第211図　把手実測図……283
第212図　土器片錘の重量分布……289
第213図　土製円板の重量分布……290
第214図　土偶実測図(1)……301
第215図　土偶実測図(2)……302
第216図　土偶実測図(3)……303
第217図　土偶・土版実測図(4)……304
第218図　土錘・土器片錘実測図(1)……305
第219図　土器片錘実測図(2)……306
第220図　土器片錘実測図(3)……307
第221図　土器片錘実測図(4)……308
第222図　土器片錘・土製円板実測図(1)……309
第223図　土製円板実測図(2)……310
第224図　土製円板実測図(3)……311
第225図　土製円板実測図(4)……312
第226図　その他の土製品実測図……313
第227図　石鏃の分類基準……314
第228図　石錘の重量分布……318
第229図　石器（石鏃）実測図(1)……348
第230図　石器（石鏃）実測図(2)……349
第231図　石器（石鏃）実測図(3)……350
第232図　石器（石鏃）実測図(4)……351

第233図　石器（石鏃）実測図(5)……352
第234図　石器（石鏃・石錐）実測図(6)……353
第235図　石器（石錐）実測図(7)……354
第236図　石器（石匙・スクレイパー）実測図(8)……355
第237図　石器（スクレイパー）実測図(9)……356
第238図　石器（スクレイパー）実測図(10)……357
第239図　石器（打製石斧）実測図(11)……358
第240図　石器（打製石斧）実測図(12)……359
第241図　石器（打製石斧）実測図(13)……360
第242図　石器（打製石斧）実測図(14)……361
第243図　石器（磨製石斧）実測図(15)……362
第244図　石器（磨製石斧）実測図(16)……363
第245図　石器（磨石）実測図(17)……364
第246図　石器（磨石）実測図(18)……365
第247図　石器（磨石）実測図(19)……366
第248図　石器（敲石）実測図(20)……367
第249図　石器（石皿）実測図(21)……368
第250図　石器（石皿）実測図(22)……369
第251図　石器（凹石）実測図(23)……370
第252図　石器（石錘）実測図(24)……371
第253図　石器（石錘）実測図(25)……372
第254図　石器（浮子・砥石）実測図(26)……373
第255図　石器（石棒）実測図(27)……374
第256図　石器（石棒・石剣）実測図(28)……375
第257図　石器（石剣）実測図(29)……376
第258図　石製品実測図(30)……377
第259図　石製品（玉）・骨角器実測図(31)……379
第260図　第一次調査面配石遺構配置図……385
第261図　第二・三次調査面配石遺構配置図…387
第262図　Ⅰ～Ⅴ期住居跡分布図……391
第263図　柄鏡形住居跡の主軸方向とその他の住居跡の長径方向……392
第264図　土坑形態分類・形態別分類……396
第265図　土坑形態別分布図……397
第266図　埋甕遺構の掘り方の長径方向と埋設土器の傾斜角度……398
第267図　埋甕・溝分布図……399
第268図　土偶出土分布図……407
第269図　石器の種類別割合……409
第270図　石器類の石質分類……410

表　目　次

表１　常磐自動車道関連用地内遺跡一覧表　1
表２　第一次調査面の配石一覧表 …… 36
表３　第一次調査面出土土器観察表 …… 51
表４　第二次調査面の配石一覧表 …… 69
表５　第二次調査面出土土器観察表 …… 70
表６　第三次調査面の配石一覧表 …… 77
表７　土坑一覧表 ……172
表８　土坑出土土器観察表 ……208
表９　埋甕一覧表 ……234
表10　土器捨場出土土器観察表 ……245
表11　遺物包含層出土土器観察表 ……250
表12　把手一覧表 ……282
表13　土偶観察表 ……286
表14　土器片錘一覧表 ……293
表15　有溝土錘一覧表 ……296
表16　土製円板一覧表 ……296
表17　その他の土製品一覧表 ……300
表18　石鏃一覧表 ……322
表19　石錐一覧表 ……328
表20　石匙一覧表 ……329
表21　スクレイパー一覧表 ……329
表22　打製石斧一覧表 ……330
表23　磨製石斧一覧表 ……331
表24　磨石一覧表 ……333
表25　敲石一覧表 ……340
表26　石皿一覧表 ……341
表27　凹石一覧表 ……341
表28　石棒一覧表 ……342
表29　石剣一覧表 ……342
表30　石錘一覧表 ……343
表31　その他の石器・石製品一覧表 ……347
表32　配石群形成時期と確認できた配石に伴う土坑数……389
表33　住居跡一覧表 ……393
表34　土坑形態別集計表 ……395
表35　溝一覧表 ……400

写真図版目次

中表紙　小場遺跡遠景
ＰＬ１　遺構全景
ＰＬ２　調査前風景，トレンチ発掘（Ｂ地区）
ＰＬ３　Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｂ配石群，第９・11・12号配石
ＰＬ４　第25・26・28・29・31・34号配石
ＰＬ５　第35・37・38・42・43号配石
ＰＬ６　第48・55・75・80号配石遺物出土状況，第72・79・81・84号配石
ＰＬ７　第92・94・95・96・97・98・99・100号配石
ＰＬ８　第106・107・112・115・116・120号配石，第108号配石遺物出土状況
ＰＬ９　第121・122・123・124・125・126号配石，第123号配石遺物出土状況
ＰＬ10　第129・130・133・134・135・136・138・141号配石
ＰＬ11　第142・143・146・148・149・150・151号配石，第151号配石遺物出土状況
ＰＬ12　第152・158・162・168・171・177・178号配石，第170号配石遺物出土状況
ＰＬ13　第１号住居跡遺物出土状況，第１・２号住居跡
ＰＬ14　第２号住居跡石組炉，第３号住居跡，第３号住居跡石囲炉
ＰＬ15　第４号住居跡炉遺物出土状況，第４・５号住居跡
ＰＬ16　第５号住居跡石組炉，第６号住居跡遺物出土状況
ＰＬ17　第６号住居跡石組炉，第７号住居跡，第７号住居跡石囲炉
ＰＬ18　第８・９・10号住居跡
ＰＬ19　第11・12・13号住居跡
ＰＬ20　第14・15・16号住居跡
ＰＬ21　第16号住居跡石組炉，第17号住居跡石囲炉，第18号住居跡
ＰＬ22　第20・21・22号住居跡，第22号住居跡遺物出土状況
ＰＬ23　第23・24号住居跡，第25号住居跡遺物出土状況
ＰＬ24　第25号住居跡遺物出土状況，第25号住居跡
ＰＬ25　第26・27号住居跡，第28号住居跡遺物出土状況
ＰＬ26　第28・29号住居跡，第29号住居跡遺物出土状況
ＰＬ27　第29号住居跡遺物出土状況，第29・30号住居跡
ＰＬ28　第２・８・13・17号土坑，第５・６・22・25号土坑遺物出土状況，第９号土坑土層断面・遺物出土状況
ＰＬ29　第22・25・31・47号土坑遺物出土状況，第31・48・60・65・68号土坑
ＰＬ30　第69・74・83・85・87・90号土坑，第71・72・87号土坑遺物出土状況
ＰＬ31　第91号土坑遺物出土状況，第112・113・118・120・123・124・130号土坑
ＰＬ32　第139・143・155・173号土坑遺物出土状況，第158号土坑土層断面，第158・163・164・173号土坑
ＰＬ33　第178・180・186号土坑遺物出土状況，第178・189号土坑石出土状況，第184・185・188・190号土坑
ＰＬ34　第192・193号土坑遺物出土状況，第193・195・197・200・202・294号土坑，第194号土坑石出土状況
ＰＬ35　第203・205号土坑遺物出土状況，第203・206・208・211号土坑，第204・218号土坑石出土状況
ＰＬ36　第219・221号土坑石出土状況，第219・220・222・224号土坑，第222・224号土坑遺物出土状況
ＰＬ37　第225・228・229号土坑石出土状況，第230・233・236・306号土坑，第234・238号土坑遺物出土状況
ＰＬ38　第239・241・246・252・254・255号土坑，第248・249号土坑土層断面，第253号土坑遺物出土状況
ＰＬ39　第256・259・262・264・265・266・270・286号土坑，第257・260号土坑石出土状況，第258号土坑遺物出土状況

ＰＬ40　第271・276・290号土坑遺物出土状況，第271・287号土坑，第286・295・300号土坑石出土状況
ＰＬ41　第304・305・311・317・318・321・325号土坑，第304号土坑石出土状況，第309号土坑遺物出土状況，第312号土坑土層断面
ＰＬ42　第326・330・333・334・335・353号土坑，第330号土坑石出土状況，第336号土坑断面
ＰＬ43　$A4e_6$・$A4e_7$・$A4g_8$・$A4h_4$・$A4h_7$・$A5j_5$・$B4c_2$区遺物出土状況
ＰＬ44　$B4c_2$・$B4c_3$・$B4c_4$・$B4c_5$・$B4d_8$区遺物出土状況
ＰＬ45　$B4d_8$・$B4d_9$・$B4f_9$・$B4h_9$・$B4i_9$・$B4j_0$・$B5a_3$・$B5a_8$区遺物出土状況
ＰＬ46　$B5b_9$・$B5c_1$・$B5c_3$・$B5c_4$・$B5c_8$・$B5c_0$・$B5d_2$区遺物出土状況
ＰＬ47　$B5d_3$・$B5d_9$・$B5e_1$・$B5e_7$・$B5e_8$区遺物出土状況
ＰＬ48　$B5f_1$・$B5f_2$・$B5f_3$・$B5f_5$・$B5g_1$区遺物出土状況
ＰＬ49　第95・140・161・166・337・338号土坑内埋甕遺構
ＰＬ50　第１・２・３・４・５号溝
ＰＬ51　第25号住居跡と作業員，調査風景，遺跡見学
ＰＬ52　配石出土土器
ＰＬ53　住居跡出土土器(1)
ＰＬ54　住居跡出土土器(2)，土坑出土土器(1)
ＰＬ55　土坑出土土器(2)
ＰＬ56　土坑出土土器(3)
ＰＬ57　土坑出土土器(4)
ＰＬ58　遺物包含層出土土器(1)
ＰＬ59　遺物包含層出土土器(2)
ＰＬ60　遺物包含層出土土器(3)
ＰＬ61　遺物包含層出土土器(4)
ＰＬ62　土偶(1)
ＰＬ63　土偶(2)
ＰＬ64　土偶(3)
ＰＬ65　土偶(4)
ＰＬ66　土偶(5)・その他の土製品
ＰＬ67　土錘(1)
ＰＬ68　土錘(2)
ＰＬ69　土器片錘(1)
ＰＬ70　土器片錘(2)
ＰＬ71　土器片錘(3)
ＰＬ72　土製円板(1)
ＰＬ73　土製円板(2)
ＰＬ74　石鏃(1)
ＰＬ75　石鏃(2)・石錐
ＰＬ76　石匙・スクレイパー
ＰＬ77　石錘(1)
ＰＬ78　石錘(2)
ＰＬ79　打製石斧
ＰＬ80　磨製石斧
ＰＬ81　磨石
ＰＬ82　敲石・石皿・凹石
ＰＬ83　石剣・石棒
ＰＬ84　その他の石製品
ＰＬ85　石製品・骨角器・焼骨片(1)
ＰＬ86　焼骨片(2)
ＰＬ87　同定焼骨片(3)
ＰＬ88　同定焼骨片(4)
ＰＬ89　材同定電子顕微鏡写真
ＰＬ90　種子同定拡大写真

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

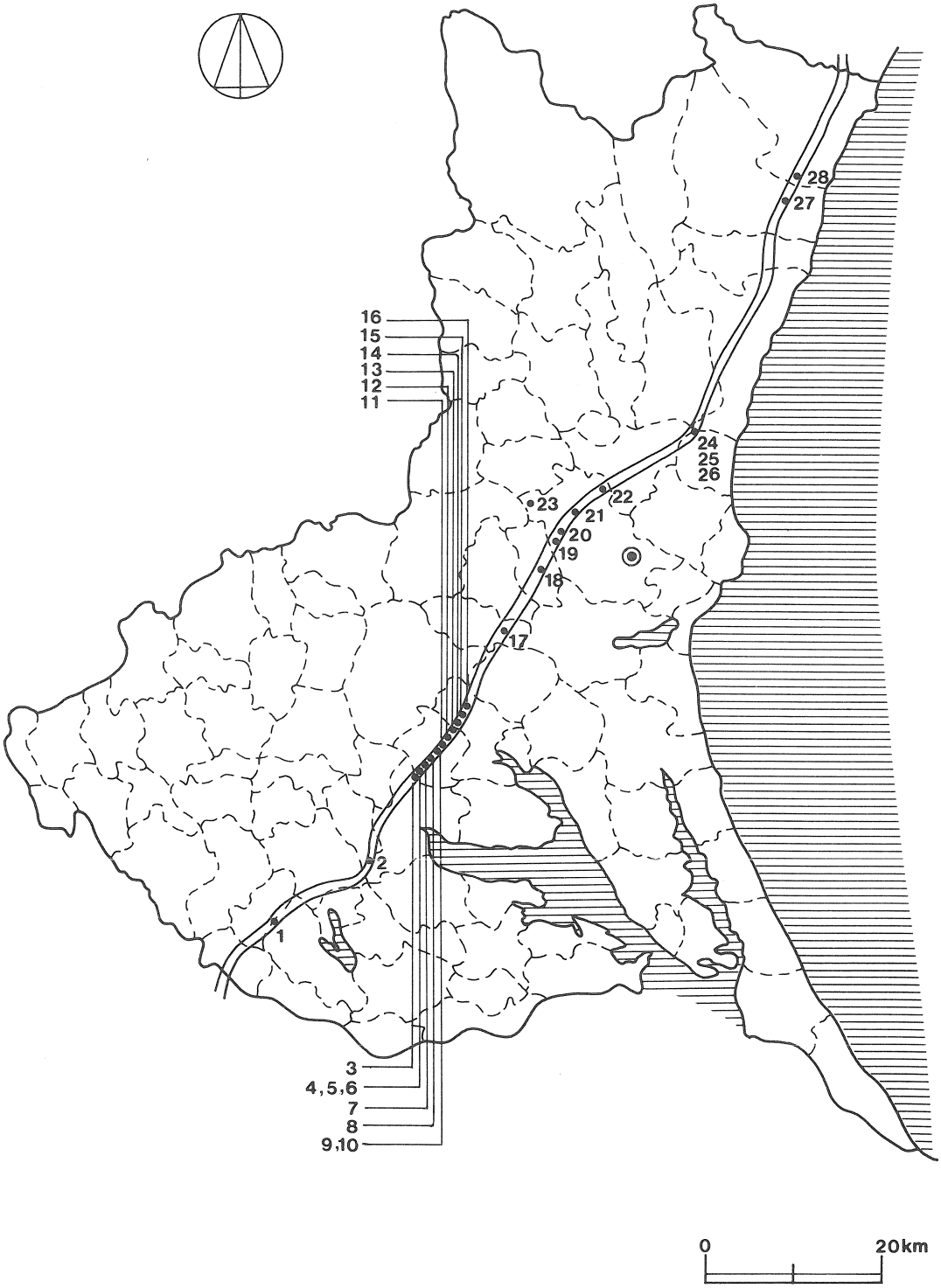
常磐自動車道の建設が昭和41年に計画されたことに伴い，ルート内の埋蔵文化財の分布調査が茨城県教育委員会によって実施された。これに基づき昭和52年，茨城県教育委員会は文化財保護の立場から，常磐自動車道のルート内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて日本道路公団と協議を重ねた結果，現状保存が困難な遺跡について記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は，昭和53年4月1日付けで日本道路公団と埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し，同年筑波郡谷和原村東楢戸古墳の発掘調査を開始し，逐次ルートに沿って北上しながら発掘調査を実施してきた。高萩市上手綱小場遺跡については，畑や水田の耕作面から縄文時代の遺物が出土し遺跡の存在が確認されていたが，道路建設のため盛り土工事が実施されることになった。従って，小場遺跡は，現状保存が困難なため，茨城県教育委員会の紹介により，茨城県教育財団が日本道路公団と委託契約を結び，昭和59年4月から同9月にかけて発掘調査を実施することになった。

昭和53年以降59年度までに，当財団が常磐自動車道関係で調査した遺跡は，下記のとおりである。

表1　常磐自動車道関連用地内遺跡一覧表

No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度	No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度
1	東楢戸古墳	古墳	古墳	昭和53年	15	鹿の子A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54年
2	下広岡遺跡	集落跡	縄文・古墳	昭和53・54年	16	鹿の子C遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54・55・56年
3	上稲吉西原古墳	古墳	古墳	昭和53年	17	塚原古墳群(2基)	古墳	古墳	昭和54年
4	上稲吉西原A遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	18	湿気遺跡	集落跡	古墳・近世	昭和54年
5	上稲吉西原B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	19	大塚新地遺跡	集落跡	弥生・古墳・平安	昭和54・55年
6	上稲吉西原C遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	20	松原遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54年
7	中佐谷十百遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	21	南原古墳群(2基)	塚・集落跡	奈良・平安・中世以降	昭和54年
8	中佐谷殿内遺跡	包蔵地	歴史	昭和55年	22	砂川遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	昭和55年
9	中佐谷A遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	23	木葉下遺跡	窯跡	奈良・平安	昭和56・58年
10	中佐谷B遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	24	石神外宿A遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	昭和57年
11	大塚古墳群(15基)	古墳	古墳	昭和53・54年	25	石神外宿B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和57年
12	松延古墳群(2基)	古墳	古墳	昭和54年	26	二本松古墳	古墳	古墳	昭和56年
13	志筑遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和53・54年	27	小場遺跡	集落跡 祭祀跡	縄文	昭和59年
14	宮部遺跡	集落跡	縄文・中世	昭和54年	28	細原遺跡	(集落跡)	先土器・縄文	昭和59年



第１図　常磐自動車道関連用地内遺跡分布図

第2節　調査経過

小場遺跡の調査対象面積は6,023m²（A地区3,583m²，B地区2,440m²）で，昭和59年4月から調査を開始し12月末日をもって全調査を終了した。以下発掘調査の経過について，その概要を半月単位に記述する。

4月前半　9日の調査区域の確認を手始めに，現場事務所設置場所を選定し，調査計画を作成した。その結果，まず小場遺跡の遺構確認調査を実施し，終了後細原遺跡の遺構確認調査を実施することにした。

4月後半　現場事務所，プレハブ倉庫の設置や発掘器材の搬入などの発掘準備の作業を進めた。また，23・25日の2日にわたって地元の地区委員・教育委員会に対し作業員雇用の説明会を実施し，作業員募集と発掘調査に対して協力を依頼した。

5月前半　10日に小場遺跡，細原遺跡の合同の鍬入れ式を小場遺跡において実施した。また，調査杭打ち作業後，小場遺跡B地区（南側）の遺構確認作業を4分の1のトレンチ発掘によって開始した。その結果，遺構・遺物を検出することができなかったので，B地区の調査はこれをもって終了した。続いて，A地区（北側）の調査区域内に，東西・南北にそれぞれ1本ずつのトレンチを入れて発掘し，確認調査を開始した。

5月後半　確認調査の結果，黒色土の層が50～80cmと厚く，その中に縄文土器片が多量に包含されていることが判明した。また，トレンチから土偶の顔部や台付異形土器がほぼ完形の状態で出土した。その後，水田・畑の耕作土の表土20～30cmを重機によって除去した。また，小場遺跡の確認調査と並行して，細原遺跡の上物除去とグリッド設定を実施した。

6月前半　小場遺跡の調査を一時中断して，細原遺跡の遺構・遺物の確認作業を実施した。

6月後半　小場遺跡の遺構確認作業を開始した。その結果，全域にわたって，配石遺構が検出され，縄文時代後・晩期の土器片をはじめ，土偶・石剣等が多量に出土した。しかし，黒色土の層が30～50cmほど残っており，遺構の確認は困難をきわめ，住居跡1軒，土坑数基しか確認できなかった。20日に小場遺跡，細原遺跡の今後の調査方法について検討を行った。その結果，小場遺跡は，黒色土を2～3層に分けて掘り下げていく方法で調査を進めることにした。

7月前半　2日に小場遺跡・細原遺跡の発掘調査の期間延長について，日本道路公団・茨城県教育委員会・茨城県教育財団の三者による現地協議会を行った。小場遺跡A地区東側部（下段部）の遺構調査を実施した。その結果，配石遺構及び縄文時代後期の住居跡2軒，土坑49基，溝1条を検出した。また，土偶，注口土器をはじめ多量の縄文土器片が出土した。

7月後半　16日に，国学院大学助教授小林達雄氏を招き，小場遺跡の性格，調査上の留意点等について指導を受けた。18日に日本道路公団と茨城県教育財団との協議の結果，小場・細原遺跡の調査期間を12月末日までに延長することになった。今月末日をもって，小場遺跡下段部の調査を終了した。

8月前半　小場遺跡の調査を一時中止し，1日から細原遺跡の調査を再開した。

8月後半　28日に，先に調査の終了した小場遺跡東側部（下段部）の航空写真を撮影した。

9月前半　3日から小場遺跡の調査を再開し，中央部（中段部）に，配石群3ヶ所を確認して調査を進めた。12日に小場遺跡発掘調査の中間報告を新聞紙上に発表した。

9月後半　中央部西側寄りにあった黒色土部分の性格が明確でなかったので，全体を6区に分けて調査を進めた。調査の結果，中心部に炉跡を検出し大型の住居跡であることが判明した。

10月前半　中央部（中段部）の3ヶ所の配石群の下に，住居跡16軒，土坑175基，溝3条を確認し調査を進めた。

10月後半　大型の住居跡の西側部分に農道がかかっており調査不可能のため，農道の取りはずしについて，委託者である日本道路公団に依頼した。その結果，重機で農道部分を取り除くことになり，30日に除去作業を実施した。

11月前半　中央部の調査をほぼ終了し，西側部（上段部）の調査を始めた。それと並行して，農道部分の下の調査を実施した。その結果，東西10.8m，南北11.6mの規模を有する縄文時代後期の大型の住居跡であることが判明した。

11月後半　西側部の調査の結果，2ヶ所の配石群とその下に住居跡9軒，土坑112基，溝1条を検出した。遺跡の性格等を明確にするために，土坑内覆土のリン・カルシウム分析を実施することになり土壌のサンプル採集を行った。

12月前半　調査も終わりに近づいたので，5日から調査体制を縮小し，洗浄作業に作業員を増員した。15日に現地説明会を実施し，補足調査を残して現場での調査をほぼ終了した。

12月後半　補足調査と並行して図面の点検作業，写真の整理作業を進めた。さらに，それと並行して遺物・発掘器材等の搬出を行った。19日には，航空写真の撮影を行い，20日に作業員の解雇をした。続いて24・25日に現場事務所を撤去し現場での全調査を終了した。9か月間にわたって調査に参加した作業員の数は，延5,111名を数えた。

なお，4月から12月までの調査期間を通じて，高萩市長，市内小中学校の児童，生徒をはじめ一般市民が多数遺跡を訪れ，見学者は1,228名にも達した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

小場遺跡は，茨城県高萩市上手綱字小場1787番地ほか12筆に所在する。

当遺跡の所在する高萩市は，茨城県の北東部に位置し，東部は太平洋に面し，西部は阿武隈高地が連なり，その分水嶺をもって久慈郡里美村に接し，北端は福島県東白河郡塙町に接している。東部の低地・台地は，これらの山地の東縁にひらけ，北部は北茨城市，南部は多賀郡十王町に接している。市域総面積は，193.79㎢で，東西17.6㎞，南北20㎞である。人口は，34,393人（昭和60年１月現在）を有している。

市域の東端を海岸線に沿って南北に国鉄常磐線と国道６号線が走っており，それらは関東地方と東北地方を結ぶ，経済活動の動脈として重要な位置を占めている。

高萩市の地形は，山地・海岸台地・沖積低地の３地形区に分けることができる。

山地は，市街地の北西部にひろがり市域の75％を占め，海抜300～400mのなだらかな地形をなしている。市域の山地は花貫川，大北川，関根川の各水系により大きく浸食されている。

海岸台地は，30～120mの海抜高度をもち，台高萩，駒木原，和野などの一連の台地は山地東縁の市域中央部をほぼ東南東の方向に走っており，また北側の海抜45m前後の赤浜の台地，上宿，南側の上台などの台地を形成し，主要な畑作地帯となっている。

沖積低地は，おおむね海抜20m以下で，現在の市街地をはじめ海岸の主要部を占めており，台地とは所により急崖をもって接し，明瞭な地形区分を示し，主に水田に利用されている。現在の市街地は低地でも砂丘の上に立地しており，この砂丘は，近接する伊師浜から高戸に至る海岸線，高戸・赤浜の海食崖をすぎて，中郷・磯原にかけて南北の方向に長く続いている。これらの砂丘は，多く松林となっており，砂丘の移動や潮風の防止の役割を果たしている。

当遺跡は，常磐線高萩駅から西方へ約4.5㎞の距離にある。多賀山地から東へ舌状に張り出した標高40～50mほどの緩やかに傾斜した台地上に位置し，北に関根川，南に関根前川が流れている。台地上はなだらかに傾斜して沖積低地へと続いており，水田・畑に利用され，集落が発達している。当遺跡の低地と高地との比高差は約２mあり，水田・畑・宅地として利用され，耕作土からは，土器片や石鏃が出土しており古くから遺跡の存在が確認されていた。

今回の調査区域は，常磐自動車道建設用地にかかる台地の先端部分で，調査対象面積は6,023㎡（Ａ地区3,583㎡，Ｂ地区2,440㎡）であり，現況は，水田・畑・宅地である。

第２節　歴史的環境

原始・古代における高萩市は，生活環境としての地形に恵まれ，阿武隈高地を開析して東流する関根川・関根前川・花貫川などの両岸に張り出した台地上には，多くの遺跡が点在している。

高萩市の原始・古代の遺跡は，『茨城県遺跡地図』[①]によると，先土器時代４遺跡，縄文時代27遺跡，弥生時代18遺跡，古墳時代21遺跡，奈良・平安時代１遺跡が確認されている。

まず，先土器時代の遺跡としては，上君田遺跡がみられる。同遺跡は，標高650～500mのなだらかな山腹に位置し，握槌形石器・ナイフ形石器・掻器形石器が発見されている。また，昭和44年に発掘調査が行われた赤浜遺跡（15）からは，ナイフ形石器や掻器形石器が出土している。[②]

縄文時代になると，海進によって島名や上手綱付近まで海水が進入し，海に突出[③]した島名の河岸段丘・台高萩・大高台・赤浜台地・館の坊・波打際にあたる上手綱の山麓，そして上君田の山地に縄文時代人の生活が営まれたのである。上君田遺跡・大久保遺跡・前の内遺跡（４）・宮脇遺跡（29）からは，縄文時代早期の土器が出土しており，また，館の坊遺跡（17）・若狭前遺跡（23）などからは前期の土器が出土している。中期・後期になると，比較的大規模な遺跡がみられるようになる。新田前（25）・後田（27）・堀の内（26）・甚四郎内（28）などの島名遺跡群からは，中期の初めごろにあたる阿玉台式土器や加曽利ＥⅠ式土器が出土している。これらの遺跡のほかにも，大高台遺跡（13）・雉之尾遺跡（10）・上宿遺跡（12）・小場遺跡（１）から後期の堀之内Ⅰ式土器や加曽利Ｂ式土器が出土している。

小場遺跡の周辺の遺跡としては，半径500m以内に釈迦堂遺跡（５）・前の内遺跡があり，半径１km以内には畑中遺跡（９）・川側遺跡（６）が存在する。これらの遺跡はいずれも阿武隈高地から東へ張り出した上手綱の台地上にある。

弥生時代になると，下手綱上宿尻・坂の上・館の坊・安良川丘・赤浜向原・南原・大久保などの台地で生活を営んでいたが，これらの遺跡は，いずれも谷や沖積地の降り口にあたる台地の端部に位置している。これは，稲作の普及によって水田にもっとも近い位置に集落を営んでいたことを示している。

古墳時代になると，階級社会が確立し，豪族は支配者として大きな権力を持ち，各地に高塚や墳墓を築造するようになった。高萩市においては，向原古墳群・赤浜古墳・高戸横穴・大久保横穴（16）・下手綱リュウガイ横穴（18）・高萩山王横穴等が知られている。中でも向原古墳群の行人塚古墳（19）からは，珍らしい人物埴輪が出土している。この人物埴輪は，明治30年９月28日，八木奘三郎氏によって，東京人類学会雑誌第138号に「常陸[④]多賀郡松原町発見の埴輪土偶」として報告されている。その後，高萩駅前の古墳から大耳の男の埴輪が発見され，明治34年５月，松村瞭氏によって，東京人類学会雑誌182号に「常陸国松原町発見大耳の埴輪土偶」として報告された。

第2図　小場遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	小場遺跡	集落跡 祭祀跡	縄文	11	松岡城跡	城館跡	鎌倉，室町	21	高浜古墳群	古墳	古墳
2	鐘撞堂遺跡	包蔵地	縄文	12	上宿遺跡	集落跡	縄文	22	安良川城跡	城館跡	鎌倉，室町
3	滝の脇遺跡	包蔵地	弥生	13	大高台遺跡	包蔵地	縄文，古墳	23	若狭前遺跡	包蔵地	縄文
4	前の内遺跡	包蔵地	縄文	14	北久保遺跡	包蔵地	縄文	24	駒木原遺跡	包蔵地	縄文
5	釈迦堂遺跡	包蔵地	縄文	15	赤浜遺跡	集落跡 古墳群	先土器・古墳	25	新田前遺跡	包蔵地	縄文
6	川側遺跡	包蔵地	縄文	16	大久保横穴群	横穴群	古墳	26	堀之内遺跡	包蔵地	縄文
7	堀之内遺跡	包蔵地	弥生	17	館ノ坊遺跡	包蔵地	弥生	27	後田遺跡	包蔵地	縄文
8	西館(西ダレ屋敷)跡	城館跡	鎌倉，室町	18	リュウガイ横穴群	横穴群	古墳	28	甚四郎内遺跡	包蔵地	縄文
9	畑中遺跡	包蔵地	縄文	19	行人塚古墳	古墳	古墳	29	宮ノ脇遺跡	包蔵地	縄文
10	雉之尾遺跡	包蔵地	縄文	20	肥前山古墳群	古墳群	古墳				

その他，松岡城跡（11）・館の坊古館（17）・西館（西ダレ屋敷）（８）・安良川城跡（22）などの中世の城館跡も存在する。高萩市には，このように多くの遺跡が点在し，原始・古代から各時代にわたって生活が営まれてきたことがうかがえる。

参考文献

①　『茨城県遺跡地図』　茨城県教育委員会　1977

②④『高萩市史　（上）』　高萩市史編さん委員会　1969

③　「赤浜遺跡発掘調査報告」　高萩市教育委員会　1972

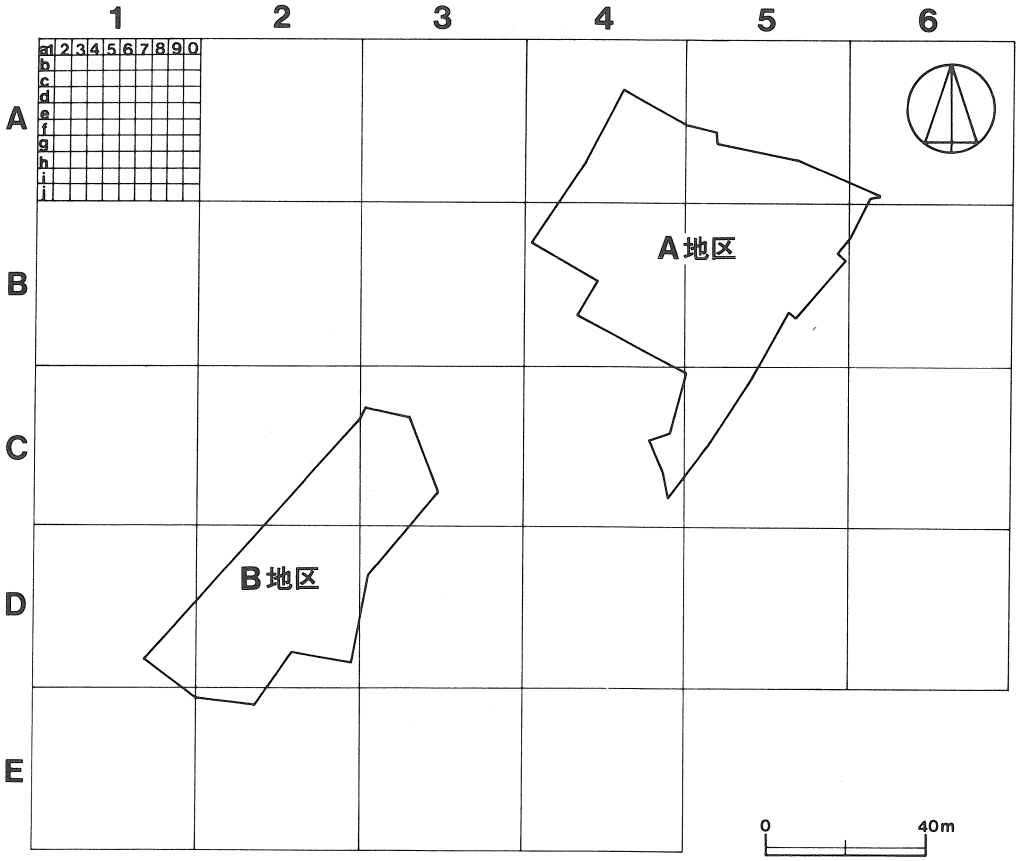
第3章　調査方法

第1節　地区設定

小場遺跡は，市道を挟んで北側にA地区，南側にB地区が位置しており，調査対象面積は，A地区3,583m²，B地区2,440m²である。A地区の現況は，東側が低く西側が高い階段状で，東側が宅地，中央部が畑，西側が水田である。B地区は平坦な水田である。

遺跡の位置を明確にし，正確な調査を期すため，日本平面直角座標第IX系X座標（南北）＋82,080m，Y座標(東西)＋75,960mを基準点とし，その基準点を中心に座標北で40m方眼を設定し大調査区とした。(基準点は，標高（TP）47,916m，磁北偏差6度40分である)。さらに，大調査区を4m四方の小調査区に分割した。すなわち，40mの大調査区内に4m四方の小調査区を100個設定したわけである。

大調査区は，基準点から北方へ40m，西方へ160mの点を起点とし，南へ「A」～「E」とし，東へ大文字で「1」～「6」とし，A1区・B2区等と表記した。小調査区は，南へ「a」・「b」～「i」・

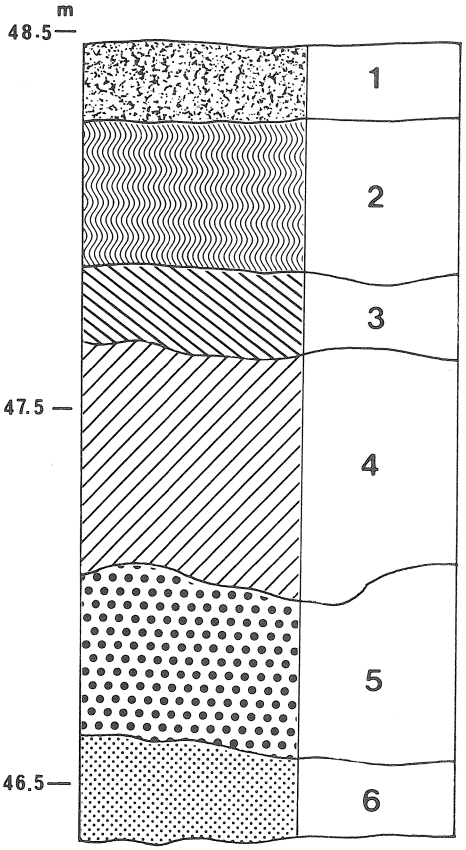


第3図　小場遺跡大調査区・小調査区名称図

「ｊ」とし，東へ小文字で「１」～「９」・「０」と表した。各調査区の名称は，大調査区と小調査区を合わせて「$A1a_1$」・「$B2b_2$」のように表記した。この小調査区をグリッドと呼称した。なお，基準点の測量杭打ちは，社団法人茨城県建設コンサルタントに委託した。

第２節　基本層序の検討

当遺跡Ａ地区西側の$A4i_5$グリッドにテストピットを掘り，土層を詳しく観察したものが，第４図である。１層は，黒色を呈する表土層で，20cmほどの厚さを有し，水田の耕作部となっている。２層は，砂粒を含む黒色土で上部は硬いが，下部は上部より軟らかく粘性がある。３層は，ローム粒子を多量に含む暗褐色土である。２・３層は，約50cmの厚さを有し，遺物の包含層であり，当遺跡の遺物はほとんどこの層から出土している。４層は，明褐色をした砂質ロームであり，当遺跡の土坑等は，この層を掘り込んで構築されていたものが多い。５層は，橙色をした粗い砂質で，40～50cmの厚さを有している。６層は，浅黄橙をした細かい砂質で，土坑の深いものは，この層まで掘り込んでいる。



土層解説

1	Hue 7.5YR	2/1	黒　色	表土層（耕作土）
2	Hue 7.5YR	1.7/1	黒　色	砂粒を含む黒色土で遺物包含層である。
3	Hue 7.5YR	3/3	暗褐色	ローム粒子を多量に含む暗褐色土で遺物包含層である。
4	Hue 7.5YR	5/6	明褐色	砂質ローム層
5	Hue 7.5YR	7/6	橙　色	粗い砂質層
6	Hue 7.5YR	8/3	浅黄橙色	細かい砂質層

第４図　$A4i_5$区土層柱状図

トレンチによる東西の土層を見ると，東側の一番低い部分は宅地で削平されていたが，黒色土は約10cmあり，その下に暗褐色土が20cmほど堆積している。暗褐色土の下は明褐色の砂質ロームであり，標高は45.8mほどである。西側の一番高い部分は水田となっており，テストピットとほぼ同一であるが，ローム面の標高は47.8mほどである。従って，西側の高い部分と東側の低い部分の比高差は２mあり，土層も西側から東側へ緩やかに傾斜している。

第３節　遺構確認

当遺跡の遺構確認は，次のような方法で実施した。Ａ地区は，耕作面から多量の土器片が採集できたので，まず，東西・南北にそれぞれ２m幅のトレンチを掘って，黒色土の層の厚さと，遺物の包含されている土層の状態を観察することにした。その結果，20cmほどの耕作部の下の黒色土の層は，東側の浅いところで30cm，西側の深いところでは60cmほどあり，その中に，土器片が多量に包含されていることが確認された。従って，住居跡などの遺構も黒色土中に存在するものと判断して，まず，耕作土の20cmほどを重機で表土除去した。その後，２m四方の小グリッドを設定し，15～20cmずつ掘り下げていく方法をとった。その結果，黒色土中に配石遺構群と石組炉を持つ住居跡を確認し，調査終了後，さらに，その下の黒色土を除去し遺構の確認調査を実施し，遺構調査を進めた。さらに，その下層（第３層）の遺構の確認を行った。従って，同一地点において遺構は少なくて２層に，大部分は３層に分かれて確認されたわけである。

Ｂ地区は，調査区の25％の割合で東西に２m幅のトレンチを９本掘り込んで，遺構・遺物の確認調査を行う方法をとった。その結果，Ｂ地区からは，遺構・遺物とも確認することができなかったので，Ｂ地区の調査を終了した。

第４節　遺構調査

住居跡の調査は，主軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け，１～４区に分割して掘り込む四分割法を基本として実施した。土坑の調査は，長径で二分する二分割法を用いた。溝の調査は，約５m間隔に土層観察用ベルトを設けて掘り込みを実施した。

土層については，色相，各種粒子の含有状態，粘性，硬度，締まり具合，吸水性等を観察して分類の基準とした。遺物の取り上げについては，住居跡，土坑，溝の各区名と，遺物番号，出土位置，レベル等を記録し収納した。

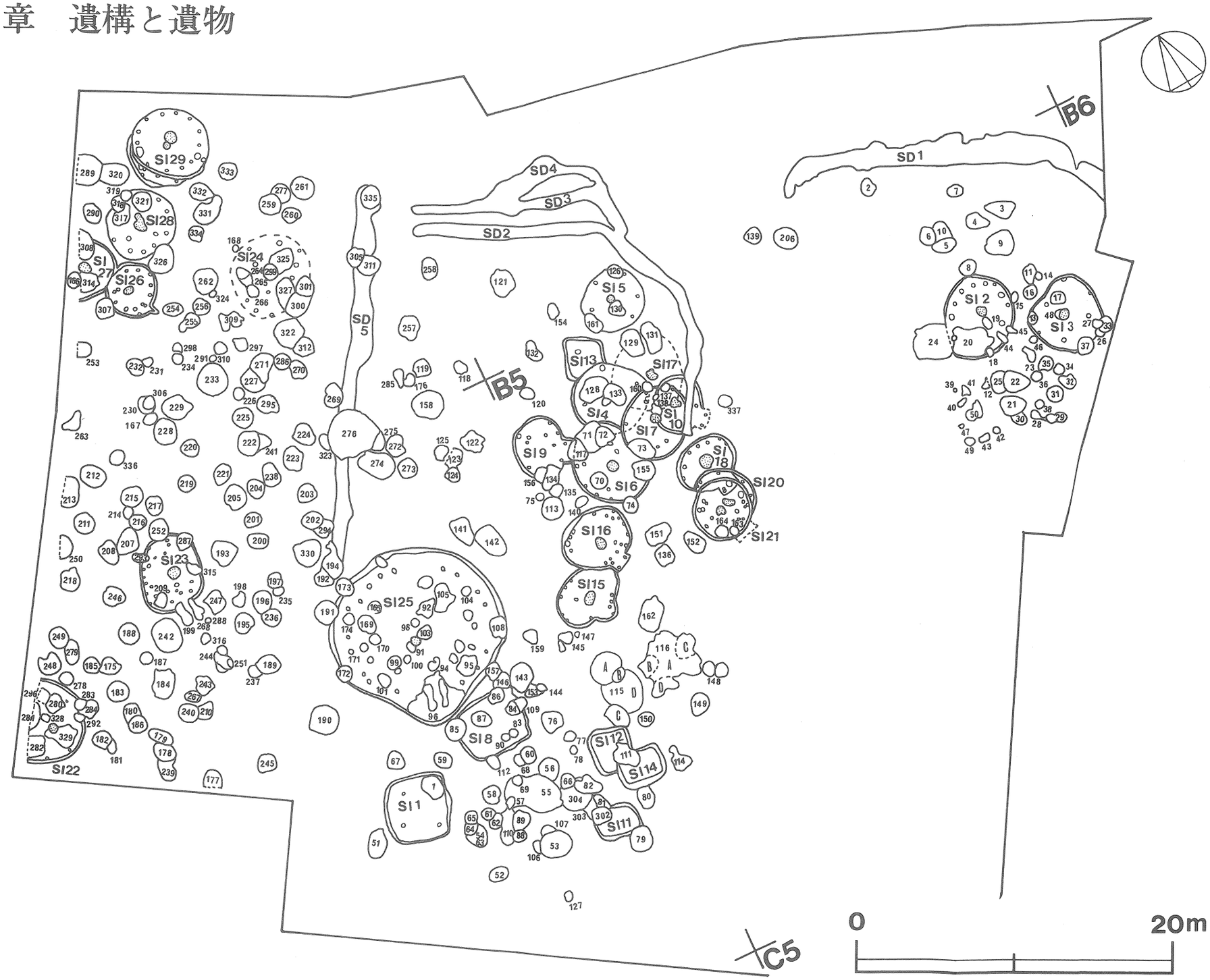
平面実測については，小調査区設定の基準線をもとにした水糸方眼地張測量で行った。また，土層断面，遺構断面の実測は，標高を用いて水糸を水平にセットし，水糸を基準として実測した。

炉跡についても住居跡，土坑の方法に準じた。記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成を基本とした。

配石遺構の調査は，配石遺構群の中の個別の配石について，平面実測を行い，その後，配石の断面の状態を観察するため，長軸で二分する二分割法を用いた。平面実測，断面実測については，住居跡，土坑の方法に準じた。記録の過程は，平面写真撮影→平面図遺物出土状況図作成→断面写真撮影→断面図作成を基本とした。

図面や写真等に記録できない事項に関しては，遺構カードや調査日誌に記録した。

第５図　小場遺跡調査区全体図



第６図　小場遺跡遺構全体図

第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

１．遺跡の概要

小場遺跡は，阿武隈高地から東に細長く張り出した標高47m ほどの台地上に所在する縄文時代後期・晩期の遺構を中心とした祭祀跡・集落跡である。

調査の結果，縄文時代の配石遺構，竪穴住居跡，土坑，溝，埋甕を検出した。

配石遺構は，181基検出され，Ａ～Ｍの13群に分けられる。その中からは，縄文土器，土偶，石剣，石棒，石鏃，骨角器，獣骨などが出土している。Ａ～Ｃ・Ｆ～Ｍ配石群からは，縄文時代後期の遺物が多く出土し，Ｄ・Ｅ配石群からは，縄文時代晩期の遺物が多く出土している。

住居跡は，縄文時代中期のもの１軒，後期のもの22軒，晩期のもの６軒，計29軒が検出された。中期・後期の住居跡は，平面形が円形または楕円形で，石組みや石囲いの炉をもつものが多い。とくに，遺跡中央部に検出された第25号住居跡は，縄文時代後期の竪穴住居跡であり，平面形は南北11.6m，東西10.8m のほぼ円形で，地床炉をもつ大型の住居跡である。晩期の住居跡は，平面形が隅丸方形，又は隅丸長方形をしており，炉は検出されなかった。

土坑は，縄文時代中期から後期･晩期までのものが344基検出された。平面形は円形のものを中心に，楕円形，方形のものがみられる。遺跡西側部の土坑は，袋状土坑が多く，土坑底部から石を出土するものが多い。また，覆土中からミニチュア土器が出土するものもある。

溝は，調査区の北側に４条と中央部に１条検出された。いずれも緩やかな傾斜地に構築されており，溝の上部には，配石遺構や後期の住居跡が検出されているので，縄文時代の溝と考えられる。

遺物は，人工遺物と石が中心であり，遺物収納コンテナ（40×60×20cm）に850箱ほど出土している。遺物の主なものは，土器，土製品，石器，石製品等であり，特に土器片の量が圧倒的に多い。土器は，縄文時代中期後葉の加曽利Ｅ式期，後期の称名寺式期・堀之内式期・加曽利Ｂ式期，晩期の安行式期，東北系の大洞式期に比定されるものがその大部分を占めている。土製品は，土偶101点，土器片錘318点，土錘29点，土製円板345点が出土している。主な石器としては，石鏃583点，石斧229点，石皿79点，凹石281点，磨石･敲石819点，石錘173点などがあげられる。石製品としては，ヒスイ製垂飾り１点，石剣・石棒216点が出土している。自然遺物は，シカ・イノシシの骨が中心であるが，イルカやウミガメの骨も出土している。また，クルミやドングリなどの炭化物も少量出土している。遺物の中では，土器片錘や各種石器の出土量が多いが，生活用具としての遺物ばかりでなく，土偶や台付異形土器，ミニチュア土器，手燭形土器，香炉形土器など祭祀的な性格をもったものも多く出土していることが特筆されよう。

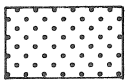
2　遺構・遺物の記載方法

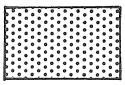
小場遺跡における遺構・遺物の記載方法は，下記のとおりである。

(1)　使用記号

名　称	記号	名　称	記号	名　称	記号	名　称	記号
住居跡	SI	配　石	SH	覆　土	X	土製品	DP
土　坑	SK	土器捨場	SX	床　面	Y	拓本記録土器	TP
溝	SD	ピット	P	土　器	P	石器・石製品	Q

(2)　遺構に伴う施設等の表示


炉跡


焼土

(3)　土層の分類

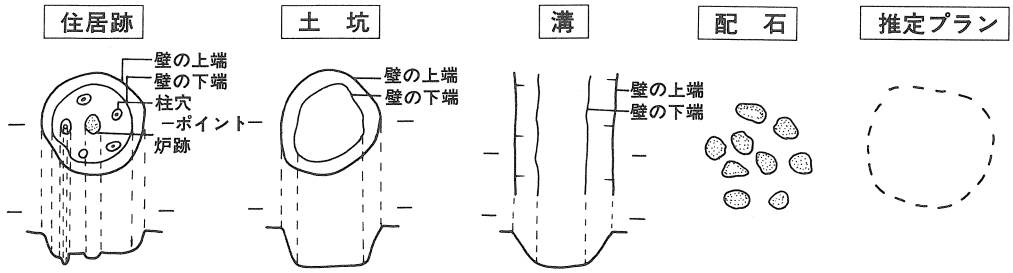
当遺跡の調査における土層観察は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社発行）を使用し，その後，整理の段階で土層を次のように分類記号化し，図中にその記号をもって記載した。

番号	土色名	色相　明度/彩度	含有物
1	暗褐色	Hue 7.5YR　3/2・3/3・3/4	a　砂粒を含む
2	黒褐色	Hue 7.5YR　3/1・3/2・2/2	b　大粒の砂を含む
3	褐色	Hue 7.5YR　4/3・4/4・4/6	c　山砂ブロックを含む
4	黒色	Hue 7.5YR　2/1・1.7/1・3/2	d　ローム土を含む
5	にぶい褐色	Hue 7.5YR　5/3・5/4	e　ローム粒子を含む
6	極暗褐色	Hue 7.5YR　2/3	f　砂質ローム
7	灰褐色	Hue 7.5YR　6/2・4/2	g　黒色土
8	明褐色	Hue 7.5YR　3/3・5/6・5/8	h　焼土粒子を含む
9	橙色	Hue 7.5YR　7/6・6/6	i　焼土
10	にぶい橙色	Hue 7.5YR　7/4	j　焼砂
11	浅黄橙	Hue 7.5YR　8/3・8/4	k　粘土粒子を含む
12	褐灰色	Hue 7.5YR　4/1	l　粘土
13	明褐灰色	Hue 7.5YR　7/1	m　炭化粒子を含む
14	暗赤褐色	Hue 5　YR　3/2・3/3・3/4・3/6	n　炭化物を含む

15	極暗赤褐色	Hue 5 YR 2/4	├─o 獣骨粉を含む
16	赤 褐 色	Hue 5 YR 4/6・4/8	└─p 獣骨を含む
17	明赤褐色	Hue 5 YR 5/8・3/6	
18	にぶい赤褐色	Hue 5 YR 5/3・4/4	
19	赤 褐 色	Hue 2.5YR 4/8	
20	明赤褐色	Hue 2.5YR 5/8	
21	橙 色	Hue 2.5YR 6/8	

※含有物の量については，少量（10%以下）検出されたものを基準とし，やや多くみられるもの（11～25%）については「’」を，さらに多く認められるもの（26%以上）は「”」を付加して表示した（例…*a*’，*a*”）。なお，含有物を集約して記号化したため，調査過程における観察所見を詳細に表現することは困難であった。記号表示することによって上層と下層に同一の記号を用いることも生じたが，調査の過程で作成した土層断面図を最大限活用することにした。詳しくは，住居跡の土層の解説の中で述べることにした。

(4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



① 配石は，縮尺1/20の原図をトレースして版組みし，それをさらに1/3に縮少して掲載した。

② 住居跡，土坑，溝は，縮尺1/20の原図をトレースして版組みし，それをさらに1/3・1/4に縮少して掲載した。

③ 炉・埋甕は，縮尺1/10の原図をトレースして版組みし，それをさらに1/3に縮小して掲載した。

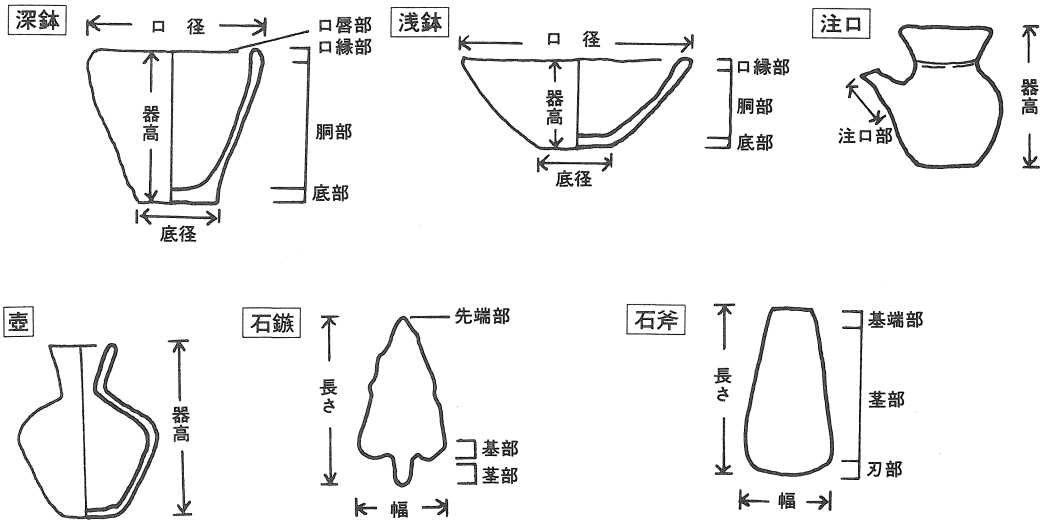
④ 遺構実測図の掲載については，できるだけ遺構番号順とした。

⑤ レベルはm単位で記載した。

⑥ 土坑については，一般的なものは「土坑」とし，墓壙についてのみ「壙」の字を用いた。

(5) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

各部位の名称と法量表現のための名称



① 土器の実測方法は4分割法を用い，中心線を挟んで左側に外面，右側に内面及び断面を実測した。

② 土器の文様帯の隆帯は，沈線は，縄文は で表した。

③ 土器拓影図は，断面図を右側に掲載した。

④ 土器の色調は，土層と同じ土色帖を用いて判別した。

⑤ 土偶の実測図は，表面→側面→裏面の順に実測することを基準にしたが，側面の状態によって表面→裏面→側面の順にしたものもある。

⑥ 土器片錘の実測図は，抉(えぐ)りを上下にして掲載した。

⑦ 石器・石製品の実測図は，三角図法を基本とし，正面の左側面を軸に反転したものを断面として右側に，上側面を軸に反転したものを平面として下側に実測した。また，遺物によっては，反転軸と各図の置き方を逆転させて実測したものもある。

⑧ 石器の敲きの範囲は←□ □→（------）で表し，磨りの範囲は，←○ ○→（—·—）で表し，凹みの範囲は◯で表した。

⑨ 縮尺の表示は次のようにした。

㋐土器の実測図については，1/3・1/6を基本とした。

㋑土器片，土製品，石器，石製品の実測図は1/3を基本としたが，石鏃などは1/1とした。

㋒縮尺の異なる実測図については，各々に別表示した。

㋓縮尺率は，S＝1/6 0 20cm / S＝1/3 0 10cm で表した。

(6) 一覧表の見方について

ア 配石一覧表

配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号

① 配石番号は，発掘現場で付した番号を使用した。

② 位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。

③ 長径方向は，座標北と長径のなす角度で示し，平面形が円形を呈するものは空欄とした。

④ 平面形は，配石の平面形状を表した。

⑤ 規模は，配石の最長部を長径とし，それに直交する最大幅を短径としてmで表した。

⑥ 配石数は，配石に使用された石の数である。

⑦ 形態は，集石遺構，立石遺構，組石遺構，環状配石遺構に分類した。

⑧ 配石群は，調査時に使用したA～Mで表示した。

⑨ 出土遺物は，出土した縄文土器片と石器の点数を記した。

⑩ 備考は，配石に伴う土坑番号と，多く出土している土器片の時期を記した。

⑪ 図版番号は，実測図の番号である。

イ 住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉 位置	炉 種類	覆土	出土遺物	時期	備考

① 住居跡番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用し，途中で住居跡と認められず調査を中止したものは欠番とした。

② 平面形は，掘り込み上面の形状を表した。

③ 平面形が円形，楕円形のものは，長径，短径で表し，隅丸方形，隅丸長方形のものは，長軸，短軸で表した。

④ 規模の長径×短径は，上端の計測値（m），壁高は残存壁高の計測値（cm）を表した。

⑤ 床面は，土坑一覧表の「底面」の項に準じて，「平坦」，「凹凸」，に分類表記した。

⑥ ピット数は，その住居跡に伴うと考えられるピット数を記した。

⑦ 炉は，炉の位置と種類を記し，炉の検出されない住居跡については空欄とした。

⑧ 覆土は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」，不明の場合は「不明」と記した。

⑨ 時期は，出土している土器形式をもとにして，Ⅰ期～Ⅴ期に分類した。

※ 上記以外の項目については，配石一覧表の記載に準じた。

ウ　土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)							

① 土坑番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また，整理の過程で土坑でないと判断したものは欠番とした。

② 規模の欄の深さは，開口部から底面の最深部までの計測値（cm）である。

③ 壁面は，底面からの立ち上がりの状態を下記の基準を設けて，次のとおり表した。

・およそ80°～90°の傾き――垂直　・およそ65°～80°の傾き――外傾

・およそ65°以内の傾き――緩斜　・開口部のくびれ――袋状

④ 底面は，底面の状態により次のように分類した。

平坦，皿状，凹凸，ゆるい起伏

⑤ 形態分類については，第5章第1節3の項を参照されたい。

※ 上記以外の項目については，配石・住居跡一覧表の記載に準じた。

エ　埋甕一覧表

番号	遺構名	位置	長径方向	平面形	傾斜角	掘り方規模		覆土	出土遺物	備考	図版番号
						長径×短径(m)	深さ(cm)				

① 傾斜角は，埋設されていた土器の傾きを示し，水平からの角度で表した。

② 掘り方規模は，埋甕施設の掘り込みの規模を記した。

③ 出土遺物は，土器の形式を分類可能な範囲で記し，不明の場合は空欄とした。

※ 上記以外の項目については，配石，住居跡，土坑一覧表の記載に準じた。

オ　出土土器観察表

図版番号	器種	法量 A・B・C(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考

① 図版番号は，実測図中の番号である。

② 器種は，深鉢形土器というように表示した。

③ 法量は，A－口径，B－器高，C－底径を表し，単位はcmである。なお，A・Cの( )は推定値であり，Bの( )は残存高である。

④ 器形の特徴及び文様は，器形→文様の順で述べた。

⑤ 胎土・焼成・色調の欄は，胎土→焼成→色調の順で述べ，色調は「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

⑥ 備考は，土器の残存率や土器の固有台帳番号（P番号）等を表示した。

カ　土偶観察表

番号	図版番号	台帳番号	出土地点	残存部位									大きさ(cm)			重量(g)	胎土・焼成・色調	備考
				頭	胸	胴	腰	右腕	左腕	右脚	左脚	不明	長さ	幅	厚さ			

① 出土地点は，土偶が出土した遺構名，小調査区（グリッド）名で表示した。

② 残存部位は，遺存部位（現存）の欄に「○」印を付した。左・右が不明の場合は，推定される部位を（　）書きし，不明の欄に「○」印を付した。

③ 大きさと重量の欄の（　）内数値は欠損部位の残存値である。

④ 備考は，土偶の特徴等を主に記した。

※ 上記以外の項目については，出土土器観察表の記載に準じた。

キ　土錘・土器片錘・土製円板・土製品・石器・石製品観察表

○土錘・土器片錘・土製円板

図版番号	台帳番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	抉り間の長さ(cm)	形状	備考

○石器

図版番号	台帳番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考

○その他の土製品・石製品

図版番号	名称	台帳番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考

① 図版番号は，実測図中の番号である。

② 台帳番号は，遺物の個別の番号である。

③ 長さ，幅，厚さは，それぞれ最大長，最大幅，最大厚の計測値である。また，大きさ，重量の欄の（　）内数値は，欠損石器の残存値である。

④ 石質の欄は，その石器を作る母岩の岩石名を表示した。

⑤ 備考の欄は，遺物の形態や特徴等を記した。

完形は完形品，一欠は一部欠損品，先欠は先端部欠損品を表わし，分胴，短冊，バチ，ミニ，楕円，円盤は，それぞれの形状を表わしている。分不は分類不能を表わす。

⑥ 石器の観察表は，器種によって，別項目を設けたものもある。

※ 上記以外の項目については，出土土器・土偶観察表の記載に準じた。

第２節　配石遺構

小場遺跡からは，竪穴住居跡や土坑の上部に堆積している黒色土層から配石遺構群が検出された。配石遺構群は，40～60cmの黒色土層に三段に重なって確認されたので，上層・中層・下層に分けて，それぞれ，第一次調査面，第二次調査面，第三次調査面の配石遺構として調査を進めた。個別の配石遺構については，本節では次のような名称を使用した。

集石遺構――石を狭い範囲に集めて配したものと，石が散在して配してあるもの。

立石遺構――配石遺構の中に立石を持つものや、単独に立てられたもの。

組石遺構――石を立体的に組み合わせたと思われる遺構。

環状配石遺構――石を環状に巡らせているもので，一部に集石遺構が含まれるものもある。

さらに，個別の配石については，調査をした順に第１号から第178号まで番号を付し，「第○号配石」と呼び，それらがブロック状にまとまっているものを「配石群」と呼ぶことにした。

第一次調査面の調査では，黒色土層を２ｍ四方の小グリッドに分割して，15～20cm掘り下げた面に，７か所の配石群を確認することができた。調査区の東側と西側の配石群の範囲は，比較的とらえやすかったが，中央部の配石群については，個別の配石としてのまとまりが把握しにくいこともあり，土器片の時期等を手がかりにしてとらえた。第一次調査面の調査終了後配石を取り除き，その下の黒色土層を15～20cm掘り下げたところ，中央部に２か所と西側部に２か所の配石群を確認した。この配石群を第二次調査面の配石群としてとらえた。この面の配石群の中の個別の配石は，第一次調査面の配石に比較してとらえやすい配石であった。配石群の検出された地域は，配石の下に黒色土が堆積しており，配石が検出されなかった地域は，部分的に砂質ロームが露出し，住居跡や土坑が確認された。第二次調査面の調査終了後配石を取り除き，その下の黒色土層をさらに15～20cm掘り下げたところ，中央部の第25号住居跡内と，そこから10m南東方向に配石群を確認した。それらの配石群を第三次調査面の配石群として調査を実施した。この面の配石群は，個別の配石としてまとまっておりとらえやすい配石であった。

当遺跡の個別の配石は，単独の配石と，配石の下に土坑を伴っているものとが存在するが，第一次調査面の個別の配石については，配石の下の黒色土層が厚いため，配石に伴う土坑の存在を確認することは困難であった。第二・三次調査面の配石に伴う土坑の存在の確認は，比較的容易であった。

出土遺物については，個別の配石に伴う遺物であるか否かの判断は，非常に困難であるが，配石の間から出土した遺物については，個別の配石の遺物として調査を進めた。

今回の調査では，配石として１つのまとまりをとらえることのできる遺構を，個別の配石としてとらえたが，これらの個別の配石は，今後も類例を参考にして配石として適当なものかどうか

検討して行きたい。

1 第一次調査面の配石群（第260図）

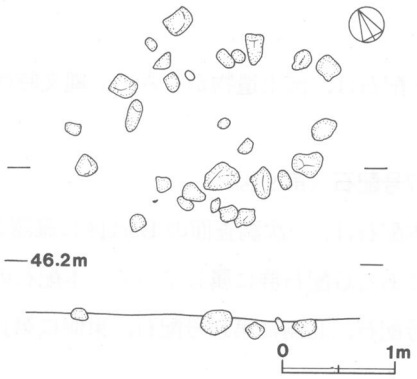
第一次調査面には，西側にA・B配石群，中央部にC・D・E配石群，東側にF・G配石群，合わせて7か所の配石群が検出された。A・B配石群は，平面的には，南北36m，東西20mほどの範囲に広がっているが，南北の中間付近で北側にゆるく傾斜をしているので，A・B配石群に分けて調査をした。A・B配石群からは，主に縄文時代後期の土器片が出土している。C・D・E配石群は，中央部の平坦部に検出され，南北40m，東西20mほどの範囲に広がっている。その北側部からは縄文時代後期の土器片が出土しており，その範囲をC配石群とした。それより南側の配石群からは縄文時代晩期の土器片が出土しており，その中で，第25号住居跡の上層部をD配石群，それ以外の区域をE配石群とした。E配石群の南側には，8mほど離れて2基の個別の配石が存在するが，この2基については，E配石群の一部としてとらえることにした。F・G配石群は，北東側の平坦部に検出され，南北24m，東西16mほどの範囲に広がっており，中央部の配石のない区域から，北側をF配石群，南側をG配石群に区分して調査を進めた。

第一次調査面から検出した個別の配石は，A配石群11基，B配石群24基，C配石群13基，D配石群16基，E配石群40基，F配石群7基，G配石群17基で合計128基である。

第1号配石（第7図）

本配石は，一次調査面のA5j_8区に確認され，調査区北東部にあるF配石群に属している。本配石の北側には，第4・24号配石が隣接している。

平面形は，長径2.4m・短径2.0mの楕円形を呈しており，大小28個の石で構築されている。長径方向はN－66°－Wを指している。石は，長径32cm・短径24cmほどの大きな石が9個と，卵大ほどの小さい石19個が，ほぼ環状に配石されており，中央部に配石のない空間部がみられる。北側部には，上面が扁平で，ほぼ方形の石が2個配石されている。石はほとんど河原石である。石は全体的にほぼ同一のレベルで平面的に配石されている。本配石の検出されたF配石群は，配石の下に全体的に黒色土が40～50cm堆積しており，土坑は確認されなかった。



第7図　第1号配石実測図

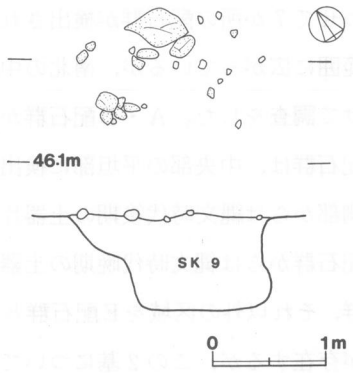
遺物は，配石全体に散乱した状態で，土器の口縁部３片，胴部38片，底部２片を出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構と思われる。

第９号配石（第８図）

本配石は，一次調査面の B5b$_9$区に確認され，調査区東部にあるＧ配石群に属している。本配石の南側には，第11・15号配石が接している。

平面形は，長径1.7m・短径1.0m の楕円形を呈し，長径方向はＮ―54°―Ｗを指している。卵大ほどの石が13個，比較的大きな石が11個配石されている。配石の状態は，長径50cm・短径34cmの楕円形状の扁平な石を北側に配し，その南側に小さい石を，ほぼ同一レベルで不規則に配石している。さらに，南側に30cmほど離れて７個の石を配石しているが，一部重なりあっている。石は全て河原石である。本配石の下には，第９号土坑が検出された。第９号土坑は，長径2.02m・短径1.76m の袋状土坑で，深さは84cmほどである。土坑の底部からは，よく磨かれた人頭大の石が１個出土している。配石の下に土坑が掘られているものは，墓壙といわれ，また，底部の石は鎮魂の意味をもつといわれていることから，墓壙と考えられる。従って，本跡は，墓壙を伴う配石遺構と考えられる。



第８図　第９号配石実測図

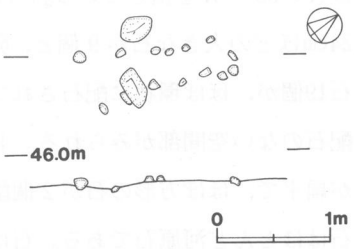
遺物は，配石の北側部に重なり合うようにして土器の口縁部４片，胴部64片，底部３片を出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構と思われる。

第17号配石（第９図）

本配石は，一次調査面の B5c$_9$区に確認され，調査区東部にあるＧ配石群に属している。本配石の南側には，第23号配石，北側に第16号配石，東側に第18号配石が接している。

平面形は，長径1.5m・短径0.8m の長方形を呈し，長径方向はＮ―21°―Ｅを指している。配石の状態は，卵大の小さな石が，南北に２列に並んで７個ずつ配石してあり，長径35cm・短形20cmほどの石１個は列の西側に，あと１個は，東側の列の小さい石の上に重



第９図　第17号配石実測図

なって配石されている。石は全て河原石で，２列の配石はほぼ同一レベル上である。本配石の下部には，土坑は確認できなかったが，第３号住居跡が検出されていることから，本配石は，第３号住居跡が廃絶された後に構築されたものである。

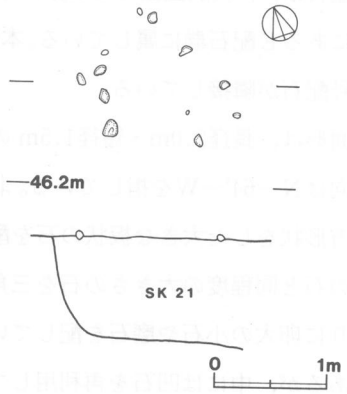
遺物は，土器の口縁部１片，胴部23片，底部１片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第21号配石（第10図）

本配石は，一次調査面の B5e_8区に確認され，調査区東部にあるＧ配石群に属している。本配石の東側には第20号配石，北側には第22号配石が接している。

平面形は，長径1.5m・短径1.0m の楕円形を呈し，長径方向はＮ－32°－Ｗを指している。卵大からこぶし大の石が12個，環状に配石されている。環状の内側は，配石がなく空間部となっている。石は全て河原石で，全体的に同一レベル上に平面的に配石されている。本配石の下には，第21号土坑が検出された。第21号土坑は，長径1.56m・短形1.33mの袋状土坑で，深さは92cmほどである。調査中に底面から水が湧き出し，底面の観察がよくできなかったが，底部より人頭大の河原石が２個出土した。第21号土坑は，本配石に伴う墓壙であると考えられる。



第10図　第21号配石実測図

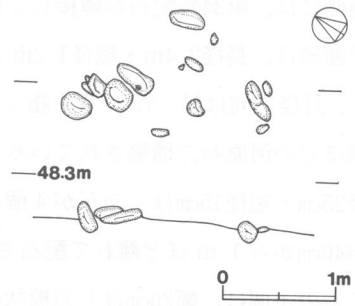
遺物は，配石全体に散乱した状態で土器の口縁部13片，胴部121片，底部７片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第25号配石（第11図）

本配石は，一次調査面の B4b_3区に確認され，調査区西部にあるＢ配石群に属している。本配石の西側には，約１ｍ離れて第130・131号配石が検出されている。

平面形は，長径1.9m・短径1.1m の不整楕円形を呈し，長径方向はＮ－45°－Ｗを指している。石棒状の立石を伴う立石遺構である。立石は，径10cm，長さ30cmほどの細長い石を北西側に立て，卵大から人頭大の河原石を楕円形状に配石して構築している。立石は，火を受けてもろくなっており，火を使用した配石であることがわかる。



第11図　第25号配石実測図

立石は，北西側にやや傾斜して立っているが，その東側には，径30cm近い円形状の石があり，立石の下部が石の下に一部入っていることから，後で傾斜したものではなく，傾斜して立てたものと思われる。本配石の下には，土坑は確認できなかった。

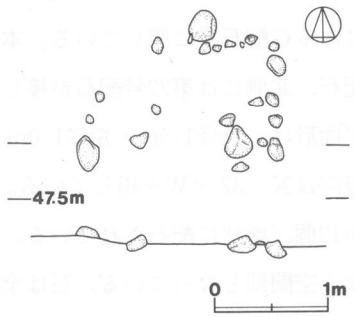
遺物は，立石の東側に散在した状態で土器の口縁部４片，胴部48片，底部２片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第30号配石（第12図）

本配石は，一次調査面の B4f_9区に確認され，調査区中央部にあるＥ配石群に属している。本配石の南東側には，第29号配石が隣接している。

平面形は，長径2.0m・短径1.5m の楕円形を呈し，長径方向はＮ－64°－Ｗを指している。北側に長径25cmほどの長方形状をした大きな板状の石を配し，その南側に，板状の石と同程度の大きさの石を三角形状に配し，そのまわりに卵大の小石や磨石を配している。石は全て河原石であるが，中には凹石を再利用して配石しているものもある。南東側の大きい石は，崩れやすい石であり，火を受けた石が風化してもろくなったものと思われる。本配石に伴うと考えられる土坑は確認できなかった。



第12図　第30号配石実測図

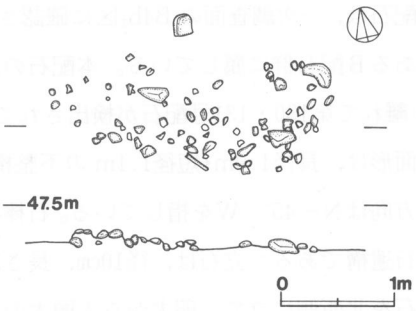
遺物は，配石全体に散在した状態で土器の口縁部９片，胴部38片，底部１片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代晩期の遺構であると思われる。

第35号配石（第13図）

本配石は，一次調査面の B4e_9区に確認され，調査区中央部にあるＥ配石群に属している。本配石の南側には，第34号配石が隣接している。

平面形は，長径2.4m・短径1.2m の長楕円形を呈し，長径方向はＮ－75°－Ｗを指している。大小80個ほどの河原石で構築されている。大きな石は，長径25cm・短径15cmほどの石が４個あり，それぞれが40cmから１ｍほど離れて配石されている。そのうちの１個は，幅20cmほどの板状の石で，本配石の北側に，平らな面を南側に向けて立ててある。残りの小石は，卵大からこぶし大の河原石で



第13図　第35号配石実測図

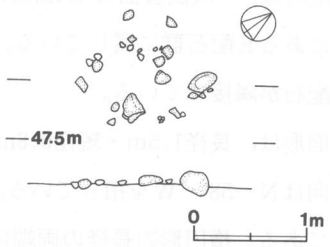
あり，大きな石のまわりに不規則に配石されている。本配石に伴うと考えられる土坑は確認できなかった。

遺物は，立石の真南１ｍに折れた石剣が１点と，土器の口縁部12片，胴部118片，底部２片が出土した。

本配石は，石剣の出土を伴う立石遺構であり，当遺跡の配石遺構の中では特異な遺構と考えられる。また，出土遺物からみて，縄文時代晩期の遺構と思われる。

第44号配石（第14図）

本配石は，一次調査面の $B4d_8$ 区に確認され，調査区中央部にあるD配石群に属している。また，第25号住居跡の覆土上に所在し，東側には第42号配石，南側には第39・43号配石，北側に第46号配石が隣接している。



第14図　第44号配石実測図

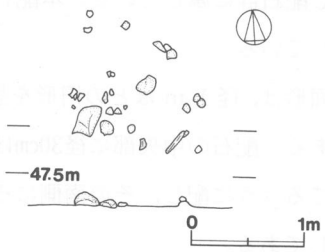
平面形は，長径1.2m・短径1.0mの不整円形を呈し，大小30個の河原石を配石してある。東側に径20cmほどの大きな石２個を約50cm離して配石し，その西側にこぶし大の石を配石してあるが，規則性はみられず，散在している。本配石の石は約３分の１が，火を受けた後に風化してもろく崩れやすくなったものである。従って、本配石は，何か目的をもって火を使用したものと考えられる。本配石に伴うと考えられる土坑は確認できなかった。

遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部24片，胴部96片，底部４片と注口土器の注口部が１点出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代晩期の遺構と思われる。

第50号配石（第15図）

本配石は，一次調査面の $B4c_9$ 区に確認され，調査区中央部にあるD配石群に属している。また，第25号住居跡の覆土上に所在し，南側に第47号配石，西側に第49号配石が隣接している。



第15図　第50号配石実測図

平面形は，長径1.6m・短径1.2mの楕円形を呈し，長径方向はN—33°—Wを指している。大小28個の河原石が配石されている。中央部と西側部に径20～30cmの大きい石を配石し，そのまわりにこぶし大の小石を配石してあ

る。特に規則性はみられない。本配石の石は，約3分の1が，火を受けた後に風化してもろく崩れやすくなったものであり，第44号配石と同様に，何か目的をもって火を使用したものと考えられる。本配石に伴うと考えられる土坑は確認できなかった。

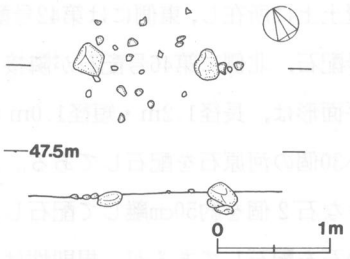
遺物は，南側部から粗製の石棒と，土器の口縁部22片，胴部99片，底部7片と注口土器が1点出土した。また，配石の間から，シカ・イノシシの骨片が少量出土した。

本配石は，石棒や骨片等が出土しており，当遺跡の配石遺構の中では特異な遺構と考えられる。また，出土遺物からみて，縄文時代晩期の遺構と思われる。

第57号配石（第16図）

本配石は，一次調査面のB4e_0区に確認され，調査区中央部にあるE配石群に属している。本配石の北側には第58号配石が隣接している。

平面形は，長径1.5m・短径0.8mの楕円形を呈し，長径方向はN—58°—Wを指している。大小24個の河原石が配してある。楕円形の長径の両端に，径30cmほどの円形状をした扁平な石を2個配石し，その間に卵大からこぶし大の石を22個配石してあるが，規則性はみられない。東側の大きな石の下から，小石が2個出土しているが，大きな石を支えるために置いたものか，偶然に置かれたものかは不明である。本配石にともなうと考えられる土坑は確認できなかった。



第16図　第57号配石実測図

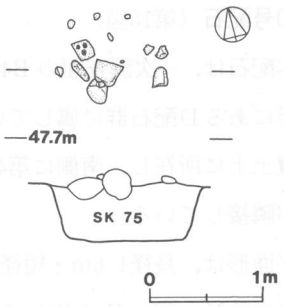
遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部6片，胴部40片，底部3片と注口土器の注口部分1点，石鏃1点が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代晩期の遺構と思われる。

第67号配石（第17図）

本配石は，一次調査面のB4c_0区に確認され，調査区中央部にあるC配石群に属している。本配石の南東側には第72号配石が隣接している。

平面形は，径1mほどの円形を呈し，大小13個の河原石が配してある。配石の中央部に径30cmほどの円形状をした大きな石を立てるように配し，その南側にその石を支えるような状態で配石してある。



第17図　第67号配石実測図

本配石の下には，第75号土坑が検出されており，土坑の覆土

中に石が沈みこんだものとも考えられる。中心から西寄りには，上面に3か所のくぼみをもつ，径20cmほどの円形状をした凹石を配しているが，凹石と配石遺構との関係は不明である。しかし，当遺跡から多くの凹石が出土していることから考えると，凹石を二次利用したものと思われる。小石は卵大からこぶし大の河原石であるが，規則性はみられない。第75号土坑は，長径1.35m・短径1.25m，深さ50cmほどの円筒状に近い土坑であるが，本配石との関係は不明である。

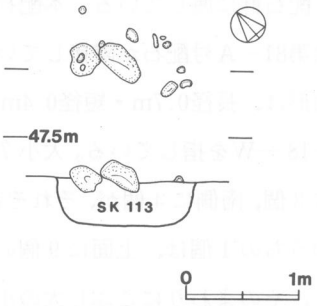
遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部20片，胴部194片，底部4片と石鏃1点が出土した。また，配石の間から獣骨片が少量出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構と思われる。

第72号配石（第18図）

本配石は，一次調査面の $B5c_1$ 区に確認され，調査区中央部にあるC配石群に属している。本配石の西側には第67号配石，東側には第68号配石が隣接している。

平面形は，長径1.2m・短径0.6mの楕円形を呈し，長径方向はN－20°－Wを指している。大小13個の河原石が配石してある。北側に配石している長径40cm・短径20cmの大きな石は，平面的に傾斜して配し，その下に径20cmほどの円形状の石を配して上の石を支えている。その下に土器片が入り込んでいる。本配石の下には，第113号土坑が検出された。第113号土坑は，径1.45×1.35mの円筒状に近い土坑で，深さは50cmである。底面からこぶし大の石が出土していることから墓壙と考えられる。第113号土坑は，本配石に伴う土坑であると考えられる。



第18図　第72号配石実測図

遺物は，配石全体に重なりあうようにして土器の口縁部68片，胴部480片，底部9片と注口土器の注口部分2点が出土した。また，シカ・イノシシの骨片が少量配石の間から出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構と思われる。

第73－B号配石（第19図）

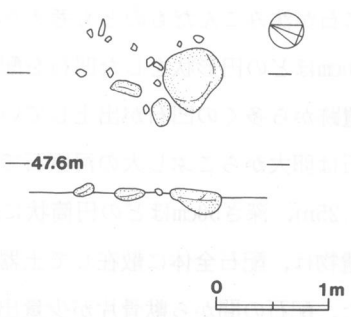
本配石は，一次調査面の $B5b_1$ 区に確認され，調査区中央部にあるC配石群に属している。本配石の東側には第76号配石，北側には第75号配石，西側には第68号配石が隣接している。

平面形は，長径1.2m・短径0.7mの楕円形を呈し，長径方向はN－14°－Eを指している。大小15個の河原石が配してある。本配石の南側には，径50cmほどの，ほぼ円形状をした上面が扁平の石を配してある。その石は，当調査区最大級の配石である。その北側には，小さな石が配してある

が，規則性はみられない。大きな扁平の石を南側に配し，北側に小石を配してあるのは，何か意味があると思われるが，それが何であるかは不明である。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。

遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部８片，胴部28片，底部５片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

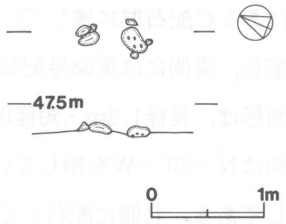


第19図　第73-Ｂ号配石実測図

第79号配石（第20図）

本配石は，一次調査面のB5b$_2$区に確認され，調査区中央部にあるＣ配石群に属している。本配石の西側には第76号配石，北側には第81－Ａ号配石が隣接している。

平面形は，長径0.7m・短径0.4mの楕円形を呈し，長径方向はＮ－18°－Ｗを指している。大小７個の河原石が配してある。北側に３個，南側に４個が，それぞれまとまって配石してある。４個のうちの１個は，上面に９個の凹を持つ径25cmほどの凹石であり，そのまわりにこぶし大の小石を配してある。凹石は，他の配石遺構と同様に，配石と直接関係あるものとは考えられない。したがって，二次利用されたものと思われる。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。



第20図　第79号配石実測図

遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部１片，胴部21片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

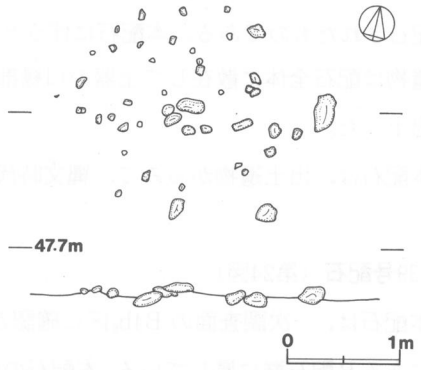
第81－Ａ号配石（第21図）

本配石は，一次調査面のB5b$_2$区に確認され，調査区中央部にあるＣ配石群に属している。本配石の東側には第80号配石，西側には第75号配石が所在している。

平面形は，長径2.0m・短径1.9mのほぼ円形を呈し，大きい石が数個と小さい石が40個ほど配石されている。大きい石は東側に60～80cmの間隔で本配石の東側半分を囲むように配石してあり，中心部には５個の石を50cmほどの範囲に楕円形状に配石している。石囲い炉のようにも思えるが，焼土粒子，炭化粒子は検出されないので，火を使用したとは考えられない。そのまわりに卵大からこぶし大の石が配石されているが，特に規則性はみられない。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。

遺物は，配石全体に重なり合うようにして土器の口縁部73片，胴部301片，底部22片と注口土器の注口部分１点が出土し，配石の間から骨角器（もり先）の１部や，獣骨片も少量出土した。

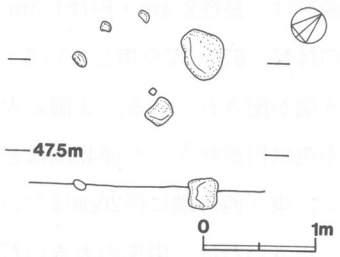
本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。



第21図　第81-Ａ号配石実測図

第87号配石（第22図）

本配石は，一次調査面の $B5c_2$ 区に確認され，調査区中央部にあるＣ配石群に属している。本配石の南側には，第78号配石が所在している。また，本配石の１ｍほど東側は，約１ｍの比高を持つ緩やかな傾斜地となっている。

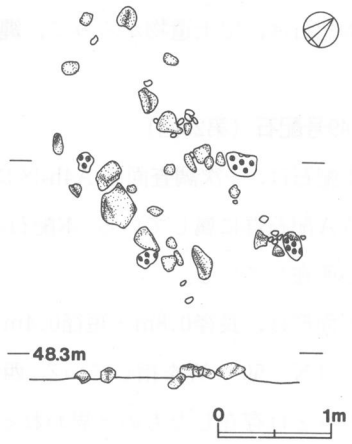


第22図　第87号配石実測図

平面形は，長径1.34m・短径1.0ｍの不整楕円形を呈し，長径方向はＮ―36°―Ｅを指している。径25cmと径50cmの大きな石が２個と，卵大からこぶし大の石が４個配石されている。径50cmの大きい石を北側に配し，その南西側に小さい石を３個，30cmほどの間隔で並べて配してある。径25cmの石は，東側に配してあり，中心部分には配石がなく，空間となっている。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。

遺物は，配石の内側に散在して，土器の口縁部４片，胴部90片，底部１片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。



第23図　第131号配石実測図

第131号配石（第23図）

本配石は，一次調査面の $B4b_2$ 区に確認され，調査区の西端にあるＢ配石群に属している。

平面形は，長径2.9m・短径1.5ｍの長楕円形を呈し，長径方向はＮ―83°―Ｅを指している。大小47個の石が配されている。配石の状態は，約１ｍほどの間隔で，東西に２列の帯状を呈している。それぞれは，とくに規則的に配石されているようすはない。全て河原石であるが，４個の凹石を利用しており，凹石はそれぞれ１ｍほどの間隔で菱形状に配されている。配石の下

は黒色土が堆積しており，第22号住居跡の覆土となっている。従って，住居跡の廃絶後，覆土上に配石されたものである。本配石に伴うと考えられる土坑は確認できなかった。

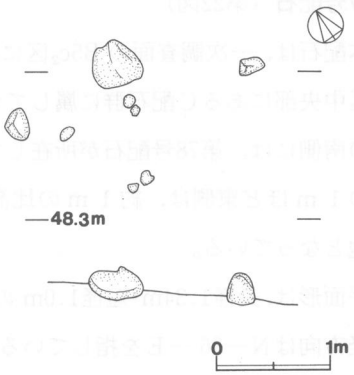
遺物は配石全体に散在して土器の口縁部26片，胴部112片，底部8片と注口土器の注口部分1点が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第139号配石（第24図）

本配石は，一次調査面の $B4b_6$ 区に確認され，調査区西側にあるB配石群に属している。本配石の西側2mには第138号配石が所在している。

平面形は，長径2.4m・短径1.3mの楕円形を呈し，長径方向はN—67°—Wを指している。大きい石3個，小さい石5個が配されている。3個の大きい石は北側に配され，中央に円形状をした径45cmほどの最大の石を配し，さらに，東と西の端に径20cmほどの円形状の石を配している。小さい石は，中央の大きい石の南側に2個，そこから0.5m南に2個ずつ配石されている。西側に1個だけ離れて配石されているのは，本配石と関係ない石とも考えられる。東側の幅20cm，高さ30cmの石は，立石配石で，平坦な面を南に向けて立ててある。本配石に伴うと考えられる土坑は確認できなかった。



第24図　第139号配石実測図

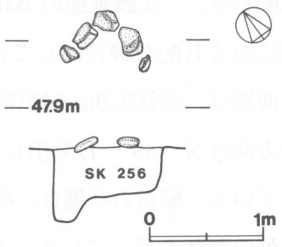
遺物は，立石の西側部を中心に土器の口縁部3片，胴部17片，底部2片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第149号配石（第25図）

本配石は，一次調査面の $A4h_7$ 区に確認され，調査区北西側にあるA配石群に属している。本配石の西側2mには，第148号配石が所在している。

平面形は，長径0.8m・短径0.4mの不整楕円形を呈し，長径方向はN—50°—Wを指している。西側部分は石が欠けているが，もともとは存在したものと思われる。本配石は，径20～25cmほどの楕円形状の石を，内側を高く，外側が低く，やや傾斜させてあり，ていねいに配石したことがうかがえる。本配石の下には，第256号土坑が確認された。土



第25図　第149号配石実測図

坑の規模は，径約1.1m，深さ58cmで円筒状の土坑である。底部に石が出土しており，墓壙と考えられ，本配石に伴う土坑と思われる。

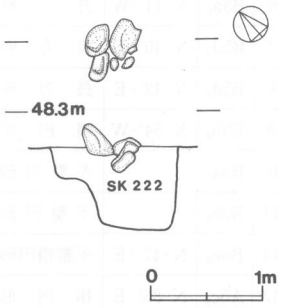
遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部８片，胴部101片，底部１片を出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第152号配石（第26図）

本配石は，一次調査面の A4a$_7$区に確認され，調査区北西側にあるＡ配石群に属している。本配石は，Ａ配石群の南端に位置し，第144号配石の南西側３ｍほどに所在している。

平面形は，長径0.6m・短径0.5mのほぼ円形を呈している。径30～40cmの楕円形状をした大きい石３個と，こぶし大の小さい石３個で構築されている。北側に配石された大きい石は，平坦な面を東の方向に向けて立ててあり，その前に５個の石を配した小さなまとまりのある立石遺構である。本配石の下に黒色土の落ち込みがあり，第222号土坑が確認された。土坑の規模は長径1.70m・短径1.50m，深さ90cmで，袋状土坑である。底部からこぶし大の石10個が出土しており，墓壙と考えられる。従って，本配石に伴う土坑と思われる。



第26図　第152号配石実測図

遺物は，配石の南側を中心に土器の口縁部13片，胴部35片，底部２片と注口土器の注口部分１点が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

表2　第一次調査面の配石一覧表

(1)

配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号
SH1	$A5j_8$		不整円形	2.40×2.00	26	環状	F	土器片43点，石器1点	後期後葉	7
2	$B5b_9$	N-23°-W	楕円形	1.08×0.80	12	集石	G	土器片26点，石器4点	後期後葉	27
3	$B5b_9$	N-5°-E	楕円形	1.50×1.10	35	集石	G	土器片36点		27
4	$A5j_9$	N-42°-W	不整楕円形	3.50×2.80	89	集石	F	土器片22点		27
5	$A6j_1$	N-8°-E	不整楕円形	1.94×1.40	86	集石	F	土器片30点		27
6	$B5a_0$	N-11°-W	方形	1.56×1.20	51	集石	F	土器片191点	後期後葉	27
7	$B5d_9$	N-40°-E	長方形	1.24×0.42	4	集石	G	土器片57点		27
8	$B5d_8$	N-12°-E	長方形	1.70×0.60	9	集石	G	土器片14点		27
9	$B5b_9$	N-54°-W	楕円形	1.70×1.00	24	集石	G	土器片71点	SK-9を伴う 後期後葉	8
10	$B5a_0$		不整円形	0.94×0.90	24	集石	F	土器片7点		27
11	$B5b_9$		不整円形	0.60×0.50	8	集石	G	土器片33点		27
12	$B5e_9$	N-47°-E	不整楕円形	1.48×0.90	20	集石	G	土器片4点		27
13	$A5c_8$	N-86°-E	楕円形	1.76×1.20	12	集石	G	土器片40点	後期後葉	27
14	$A5j_9$	N-5°-E	不整楕円形	2.70×2.00	99	集石	F	土器片6点		28
15	$B5c_9$	N-30°-W	不整楕円形	1.20×0.90	10	集石	G	土器片30点		28
16	$B5c_9$		不整円形	1.40×1.30	12	集石	G	土器片42点		28
17	$B5c_9$	N-21°-E	方形	1.50×0.80	16	集石	G	土器片26点		9
18	$B5c_9$	N-29°-E	三角形	1.80×1.30	23	集石	G	土器片18点		28
19	$A5c_8$	N-20°-W	不整三角形	2.08×1.20	11	集石	G	土器片22点		28
20	$B5e_8$	N-41°-E	楕円形	2.08×1.60	24	集石	G	土器片81点		28
21	$B5e_8$	N-32°-W	楕円形	1.50×1.00	12	環状	G	土器片141点	SK-21を伴う	10
22	$B5d_8$	N-31°-W	方形	2.50×2.30	73	集石	G	土器片25点	晩期前葉	28
23	$B5d_9$	N-49°-E	不整楕円形	1.50×0.80	9	集石	G	土器片82点	晩期前葉	28
24	$A5i_8$	N-46°-E	不整楕円形	1.90×1.60	33	集石	F	土器片87点	晩期前葉	29
25	$B4b_3$	N-45°-W	不整楕円形	1.90×1.10	15	立石	B	土器片54点，石器5点	後期後葉	11
26	$B4f_9$	N-55°-W	三角形	0.80×0.54	4	集石	E	土器片41点，石器1点		29
27	$B4f_8$	N-31°-E	三角形	0.90×0.60	12	集石	E	土器片39点，石器2点		29
28	$B4f_9$	N-37°-E	楕円形	1.60×1.00	33	集石	E	土器片61点，石器1点		29
29	$B4f_9$	N-35°-E	楕円形	1.30×0.80	27	集石	E	土器片82点		29
30	$B4f_9$	N-64°-E	楕円形	2.00×1.50	23	集石	E	土器片48点，石器1点	晩期前葉	12
31	$B4e_8$		円形	1.30×1.00	15	集石	E	土器片121点，石器1点		29
32	$B4e_8$	N-72°-W	楕円形	1.50×1.20	18	集石	E	土器片102点，石器1点		29
33	$B4e_9$		円形	0.36×0.30	4	集石	E	土器片17点		29
34	$B4e_9$	N-40°-E	楕円形	1.20×0.54	11	集石	E	土器片39点，石器4点		29

(2)

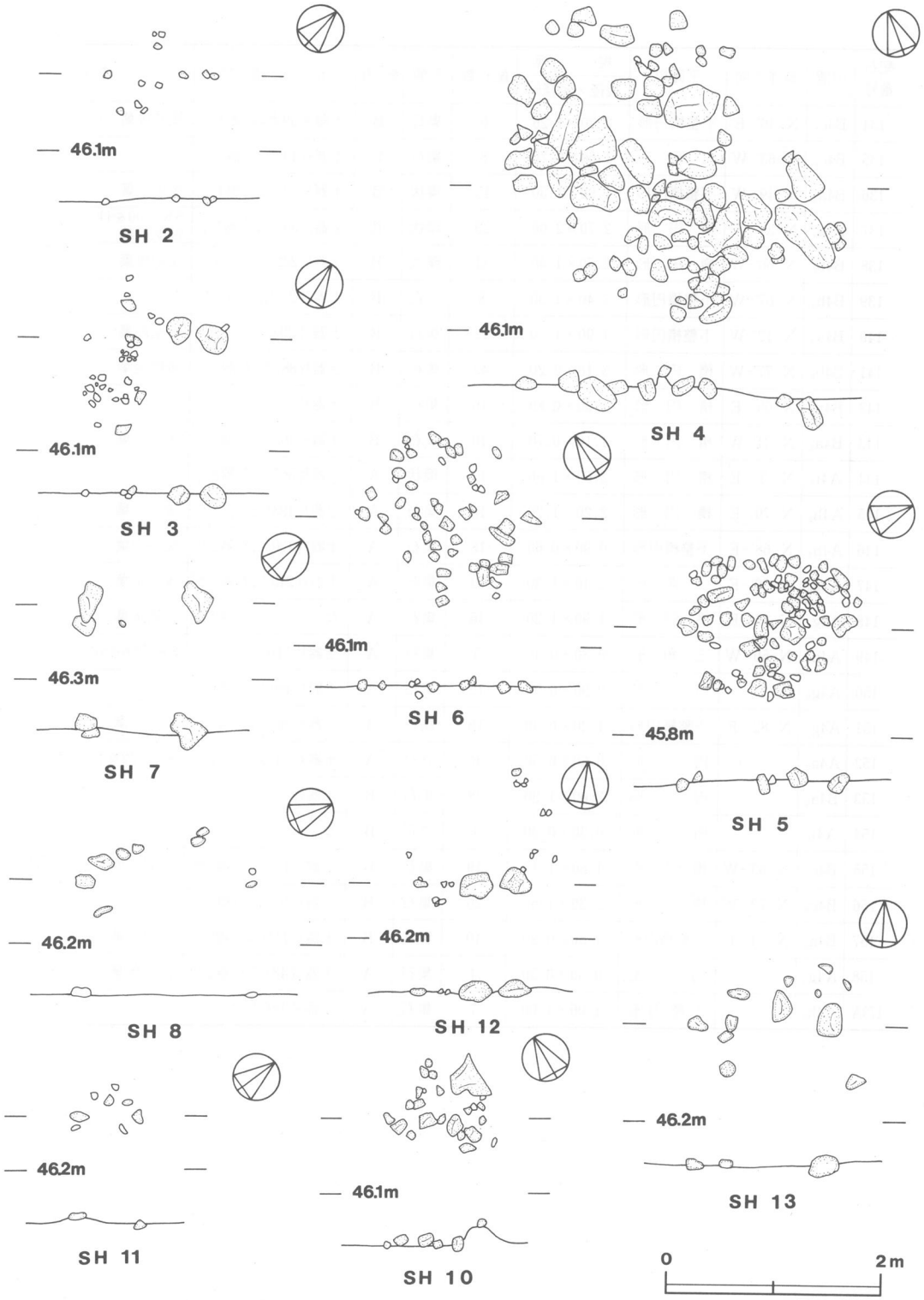
配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号
35	B4e$_9$	N-75°-W	楕円形	2.40×1.20	73	立石	E	土器片132点,石器4点		13
36	B4e$_9$	N-29°-W	楕円形	1.20×1.00	14	集石	D	土器片69点		29
37	B4e$_8$	N-0°-	楕円形	1.30×1.00	21	集石	D	土器片48点		29
38	B4e$_8$	N-18°-W	楕円形	1.70×1.10	24	環状	D	土器片46点	晩期前葉	29
39	B4d$_8$	N-13°-E	楕円形	3.40×2.20	132	集石	D	土器片839点,石器8点	晩期前葉	30
40	B4d$_8$		円形	0.80×0.70	19	集石	D	土器片69点,石器5点	晩期前葉	29
41	B4d$_9$	N-71°-W	楕円形	1.90×1.20	54	集石	D	土器片184点,石器1点	晩期中葉	30
42	B4d$_8$	N-9°-E	楕円形	2.20×1.40	75	集石	D	土器片261点,石器2点	晩期中葉	30
43	B4d$_8$	N-85°-W	三角形	0.74×0.50	7	集石	D	土器片101点,石器1点	晩期前葉	30
44	B4d$_8$		不整円形	1.20×1.00	30	集石	D	土器片125点,石器1点		14
45	B4d$_9$	N-61°-E	楕円形	1.80×0.90	27	集石	D	土器片152点,石器2点		30
46	B4c$_8$		不整円形	1.30×1.20	44	集石	D	土器片237点,石器3点	晩期中葉	30
47	B4c$_9$	N-40°-E	楕円形	3.60×2.20	154	集石	D	土器片913点,石器11点	晩期中葉	30
48	B4d$_9$	N-53°-W	楕円形	1.80×1.10	28	集石	D	土器片246点,石器1点		30
49	B4c$_8$	N-87°-W	楕円形	1.70×1.40	39	集石	D	土器片282点,石器5点		31
50	B4c$_9$	N-33°-W	楕円形	1.60×1.20	28	集石	D	土器片129点,石器2点	晩期前葉	15
51	B4c$_9$	N-35°-W	楕円形	1.70×0.80	13	集石	E	土器片118点		31
52	B4c$_9$	N-39°-E	三角形	1.40×0.80	8	集石	E	土器片94点,石器1点		31
53	B4c$_0$	N-47°-E	不整方形	2.14×0.94	20	集石	E	土器片18点		31
54	B4d$_0$	N-5°-W	長方形	2.80×2.10	47	集石	E	土器片77点,石器5点		31
55	B4e$_0$	N-70°-W	不整楕円形	1.40×0.86	13	集石	E	土器片54点,石器2点	晩期前葉	31
56	B4e$_0$	N-22°-E	楕円形	1.20×0.70	20	集石	E	土器片82点		31
57	B4e$_0$	N-58°-W	楕円形	1.50×0.80	24	集石	E	土器片50点,石器2点		16
58	B4e$_0$	N-56°-W	不整楕円形	1.74×1.34	29	集石	E	土器片156点,石器3点	晩期前葉	31
59	B4d$_0$		不整円形	1.13×0.90	26	集石	E	土器片93点,石器2点		31
60	B4d$_1$	N-37°-W	不整楕円形	2.50×2.00	107	集石	E	土器片309点,石器7点	晩期中葉	31
61	B5c$_1$	N-63°-E	楕円形	2.60×1.60	47	集石	E	土器片221点		32
62	B5d$_1$	N-69°-W	不整楕円形	1.62×1.30	46	立石	E	土器片94点,石器1点		32
63	B5d$_1$	N-40°-W	楕円形	1.30×0.90	30	集石	E	土器片90点,石器1点	晩期前葉	32
64	B5d$_1$	N-35°-E	方形	0.70×0.60	9	集石	E	土器片25点		32
65	B5d$_1$	N-26°-E	不整楕円形	1.20×1.00	25	集石	E	土器片121点,石器6点	晩期前葉	32
66	B5c$_1$	N-46°-W	不整楕円形	3.20×2.20	133	集石	E	土器片565点,石器4点		32
67	B4c$_0$		円形	1.00×0.90	13	立石	E	土器片218点,石器5点	SK-75を伴う	17
68	B5c$_1$		円形	0.90×0.80	11	集石	E	土器片64点		32

(3)

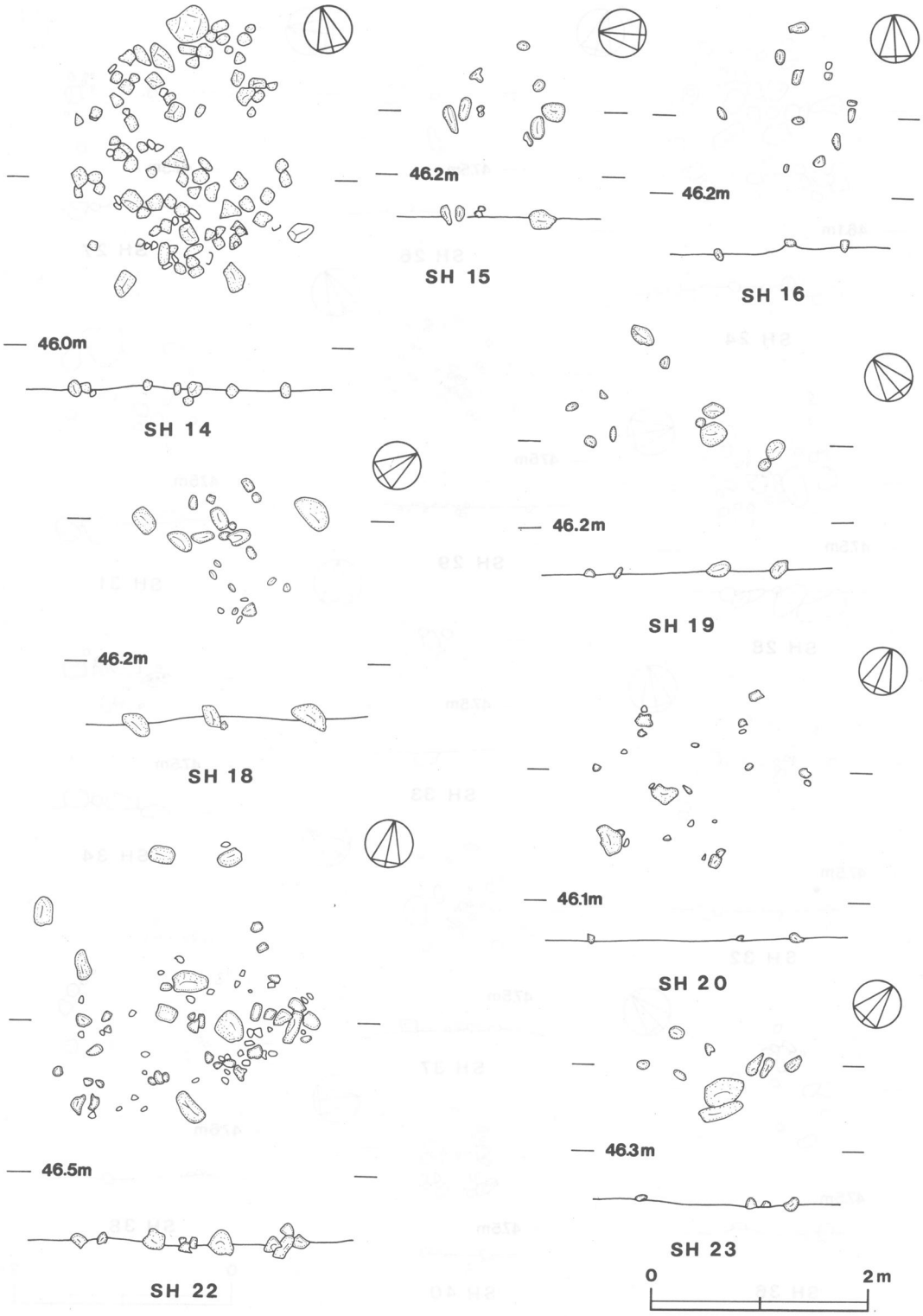
配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号
69	$B4b_0$	N-48°-W	楕円形	1.00×0.30	3	集石	E	土器片57点		32
70	$B4b_0$	N-24°-E	楕円形	0.90×0.40	9	集石	E	土器片143点,石器3点	晩期前葉	32
71	$B5b_1$	N-19°-E	不整楕円形	2.90×2.20	100	集石	C	土器片926点,石器10点	晩期中葉	32
72	$B5c_1$	N-20°-W	楕円形	1.20×0.60	13	集石	E	土器片559点,石器3点	SH-113を伴う 晩期前葉	18
73A	$B5b_1$	N-82°-E	楕円形	1.00×0.60	9	立石	E	土器片50点		32
73B	$B5b_1$	N-14°-E	楕円形	1.20×0.70	15	集石	E	土器片41点		19
74	$B5b_1$	N-55°-W	不整楕円形	1.80×1.50	39	集石	C	土器片150点,石器1点	晩期中葉	33
75	$B5b_1$		不整円形	2.80×2.70	83	集石	C	土器片583点,石器5点	晩期中葉	33
76	$B5b_1$	N-45°-E	楕円形	2.10×0.90	32	集石	C	土器片210点,石器3点	晩期前葉	33
77	$B5c_2$	N-25°-W	不整楕円形	2.40×1.70	34	集石	E	土器片212点	晩期中葉	33
78	$B5c_2$	N-42°-E	楕円形	2.20×1.60	59	集石	E	土器片240点	晩期中葉	33
79	$B5b_2$	N-18°-W	楕円形	0.70×0.40	7	集石	C	土器片22点,石器1点		20
80	$B5b_3$	N-13°-E	方形	1.60×1.60	33	集石	C	土器片287点,石器8点		33
81A	$B5b_2$		円形	2.00×1.90	45	集石	C	土器片397点,石器9点		21
81B	$B5b_2$	N-49°-E	楕円形	1.90×1.40	32	環状	C	土器片299点		33
82	$B5b_3$	N-30°-W	不整楕円形	1.50×1.10	27	集石	C	土器片90点,石器5点		33
83	$B5a_2$	N-77°-E	三角形	1.60×1.40	21	集石	C	土器片40点,石器2点		33
84	$B5a_3$	N-39°-E	不整楕円形	2.90×2.00	19	環状	C	土器片212点,石器3点		34
85	$B5a_3$	N-35°-E	不整楕円形	1.00×0.90	5	集石	C	土器片127点,石器2点		33
86	$B5j_3$	N-54°-E	不整楕円形	1.66×1.04	15	集石	C	土器片124点		33
87	$B5c_2$	N-36°-E	不整楕円形	1.34×1.00	6	集石	E	土器片95点,石器2点	晩期前葉	22
88	$B5d_2$	N-18°-E	不整楕円形	2.10×1.10	22	集石	E	土器片176点,石器10点	晩期前葉	34
95	$B5c_2$	N-46°-W	不整楕円形	1.30×0.90	21	集石	E	土器片142点		34
97	$B4d_8$	N-60-W	不整楕円形	0.90×0.48	8	集石	D	土器片167点,石器1点	晩期前葉	34
120	$B5e_1$		円形	0.60×0.60	6	組石	E	土器片8点	SK-127を伴う	34
121	$B4h_0$	N-10°-E	楕円形	0.60×0.40	4	組石	E	土器片11点		33
126	$B4e_5$	N-22°-W	楕円形	0.80×0.70	12	集石	B	土器片26点,石器2点		34
127	$B4d_5$	N-42°-W	三角形	2.10×1.30	10	集石	B	土器片13点,石器1点		35
128	$B5d_4$	N-70°-E	楕円形	0.70×0.30	2	立石	B	土器片36点,石器2点		34
129	$B4c_3$	N-0°-	三角形	2.30×1.90	15	環状	B	土器片67点	後期後葉	34
130	$B4c_3$	N-57°-E	楕円形	2.30×1.60	15	環状	B	土器片130点,石器5点	晩期前葉	34
131	$B4b_2$	N-83°-E	長方形	2.90×1.50	47	集石	B	土器147点,石器5点		23
132	$B4b_2$	N-20°-W	楕円形	1.70×1.10	21	集石	B	土器片164点,石器1点	後期後葉	35
133	$B4b_3$	N-12°-E	楕円形	0.60×0.35	4	集石	B	土器片6点, 石器1点		34

(4)

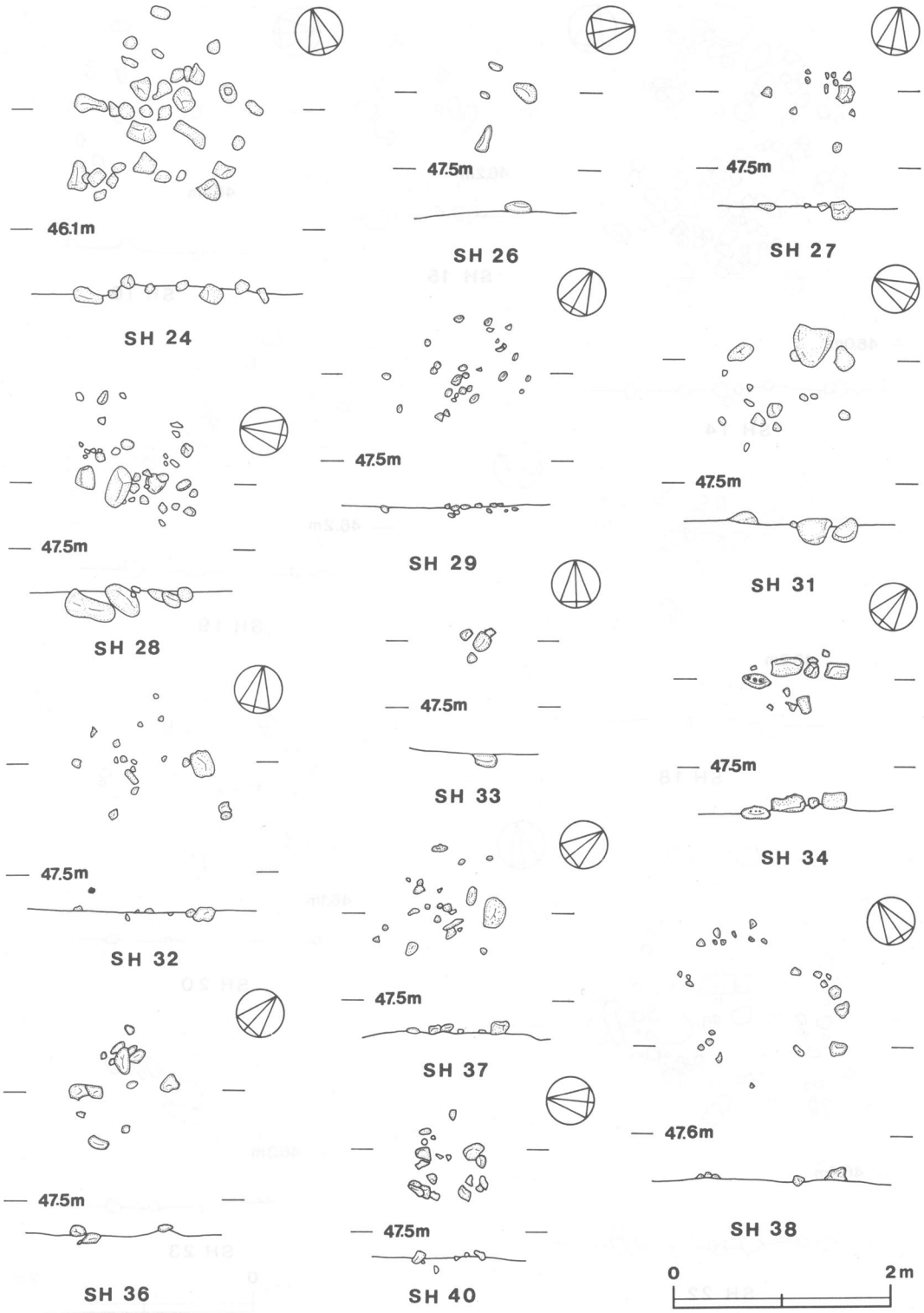
配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号
134	$B4c_4$	N-46°-E	不整楕円形	2.30×1.26	6	集石	B	土器片39点,石器1点	後期後葉	35
135	$B4c_4$	N-63°-W	三角形	1.60×0.70	8	集石	B	土器片14点,石器3点		35
136	$B4a_3$	N-49°-W	不整楕円形	1.90×1.50	15	環状	B	土器片21点,石器1点	後期中葉	35
137	$B4a_4$	N-34°-E	楕円形	2,70×2.00	29	環状	B	土器片560点,石器1点	SK-209を伴う 晩期前葉	35
138	$B4b_6$	N-60°-W	楕円形	2.60×1.40	31	環状	B	土器片222点,石器5点	後期後葉	35
139	$B4b_6$	N-67°-W	不整楕円形	2.40×1.30	8	立石	B	土器片22点,石器3点		24
140	$B4a_5$	N-12°-W	不整楕円形	1.90×1.20	12	集石	B	土器片293点	晩期前葉	36
141	$B4b_5$	N-77°-W	楕円形	3.10×2.20	42	集石	B	土器片887点,石器9点	後期後葉	36
142	$B4a_6$	N-69°-E	楕円形	1.90×0.80	16	集石	B	土器片102点		36
143	$B4a_6$	N-31°-W	楕円形	1.10×0.70	10	集石	B	土器片162点,石器2点	後期中葉	36
144	$A4i_7$	N-3°-E	楕円形	2.60×1.60	17	環状	A	土器片567点,石器2点		36
145	$A4h_6$	N-70°-E	楕円形	2.20×1.20	18	集石	A	土器片193点,石器2点	後期中葉	36
146	$A4h_5$	N-68°-E	不整楕円形	0.90×0.60	18	集石	A	土器片120点,石器2点	後期中葉	36
147	$A4g_6$	N-20°-E	三角形	1.40×1.30	13	集石	A	土器片215点,石器2点	後期中葉	36
148	$A4g_6$	N-75°-E	楕円形	1.90×1.20	46	集石	A	なし 石器2点	後期後葉	36
149	$A4h_7$	N-50°-W	三角形	0.80×0.40	5	集石	A	土器片110点	SK-256を伴う	25
150	$A4g_6$		円形	0.90×0.90	12	集石	A	土器片480点,石器4点		36
151	$A4g_7$	N-82°-E	不整楕円形	1.20×0.90	16	集石	A	土器片362点,石器3点	後期後葉	37
152	$A4a_7$		円形	0.60×0.50	6	立石	A	土器片51点,石器1点	SK-222を伴う	26
153	$B4a_6$		円形	2.00×1.90	28	集石	B	土器片55点,石器2点		36
154	$A4j_6$		円形	0.30×0.30	1	立石	B	なし		36
155	$B4c_6$	N-63°-W	楕円形	1.80×1.10	19	集石	B	土器片132点,石器4点	後期後葉	37
156	$B4c_6$	N-72°-W	楕円形	2.30×1.60	25	集石	B	土器片97点,石器3点		37
157	$B4a_5$	N-74°-E	不整楕円形	1.80×0.90	10	環状	B	土器片111点,石器2点	後期後葉	37
158	$A4g_5$		円形	0.50×0.50	4	集石	A	土器片48点,石器2点	後期後葉	37
173A	$A4h_5$		不整円形	1.06×1.00	7	集石	A	土器片126点		37



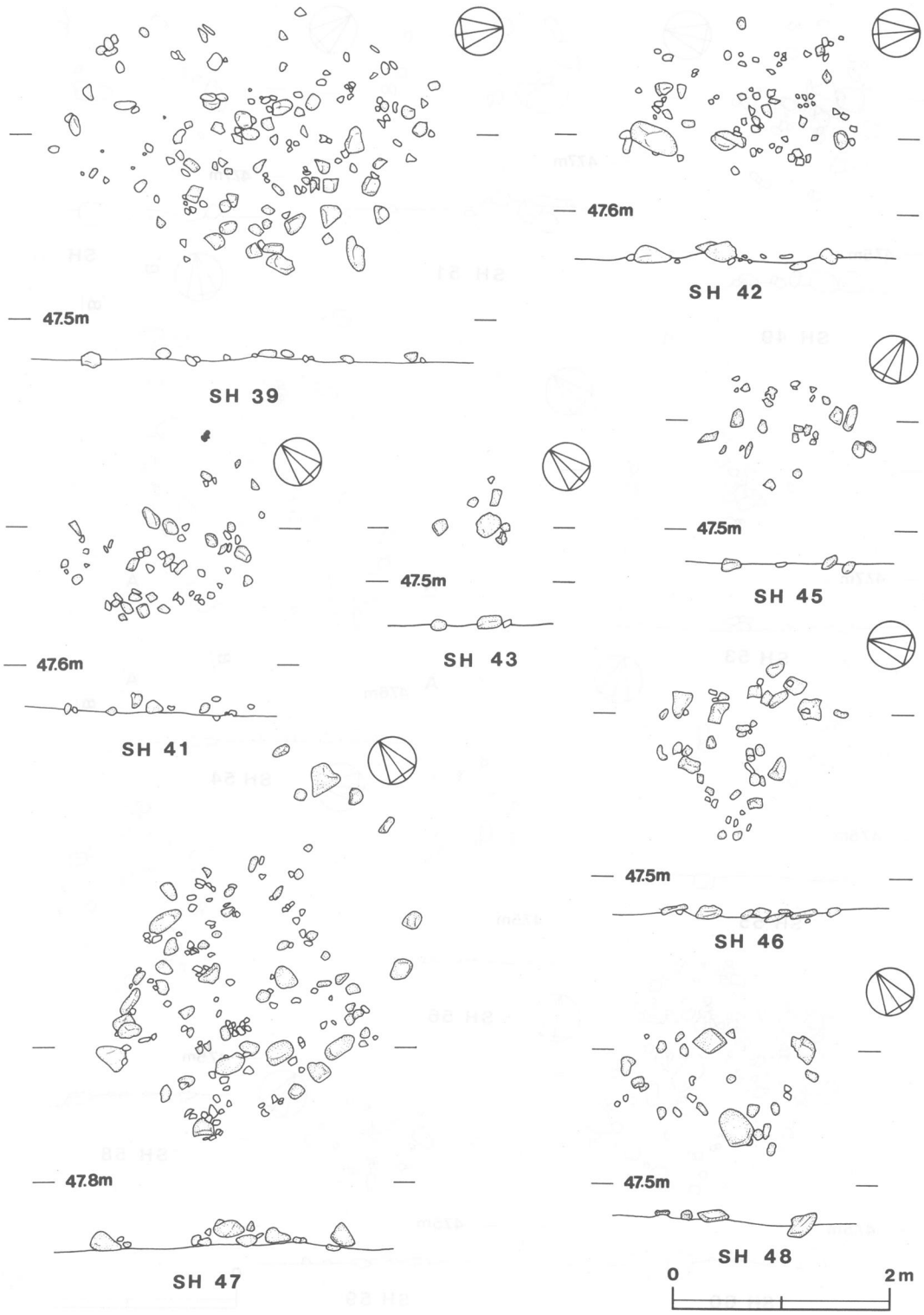
第27図　第一次調査面配石実測図(1)



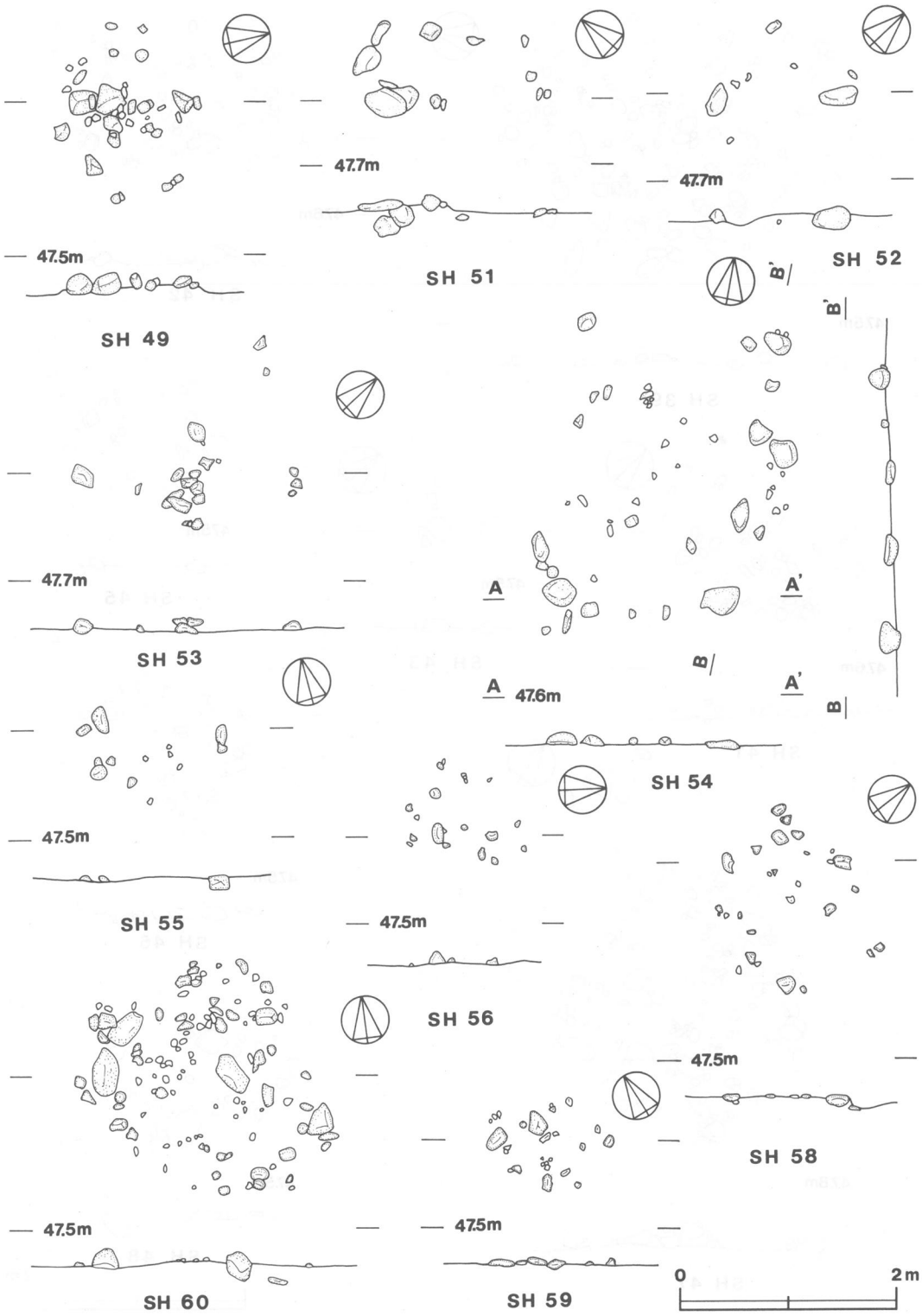
第28図　第一次調査面配石実測図(2)



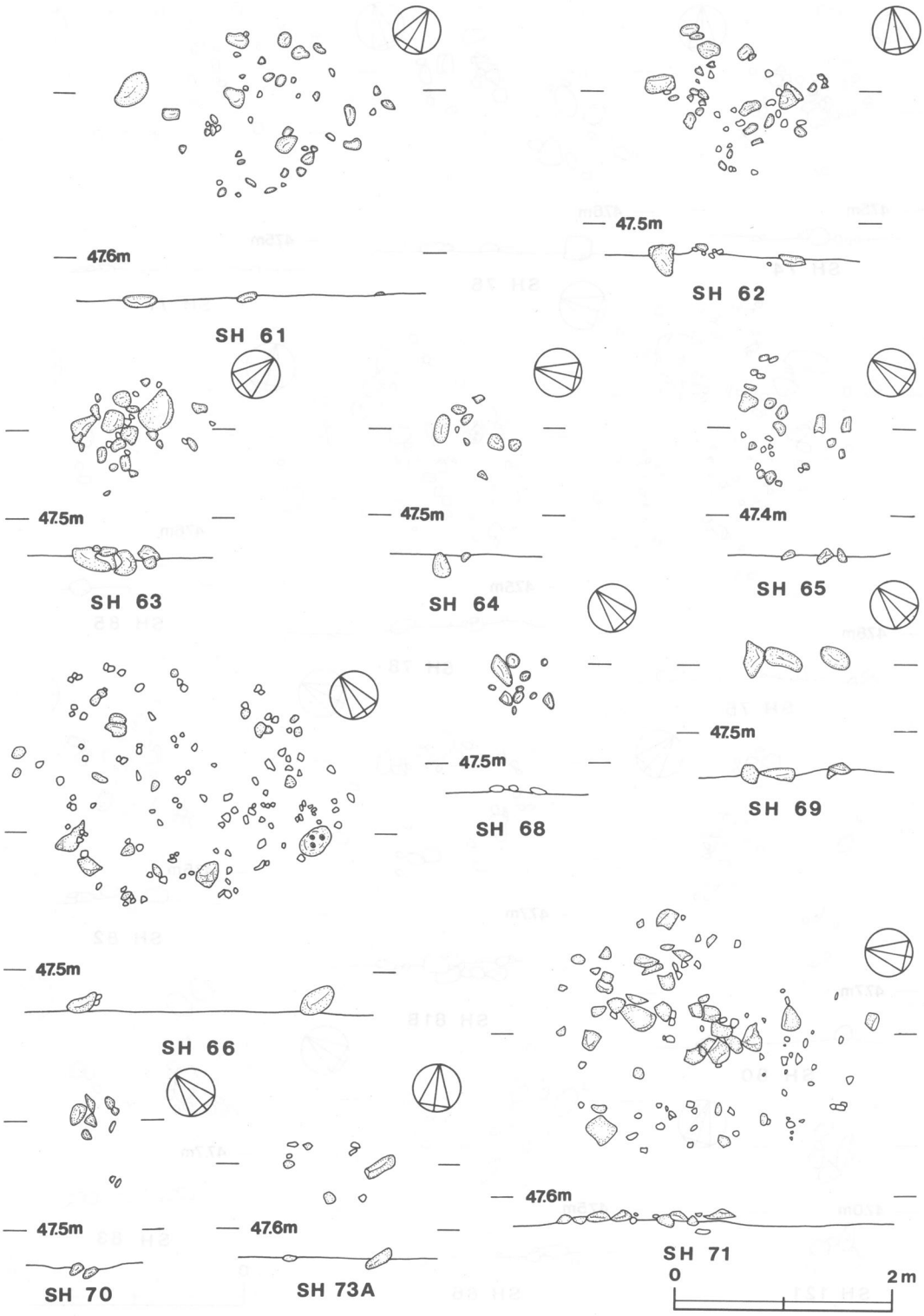
第29図　第一次調査面配石実測図(3)



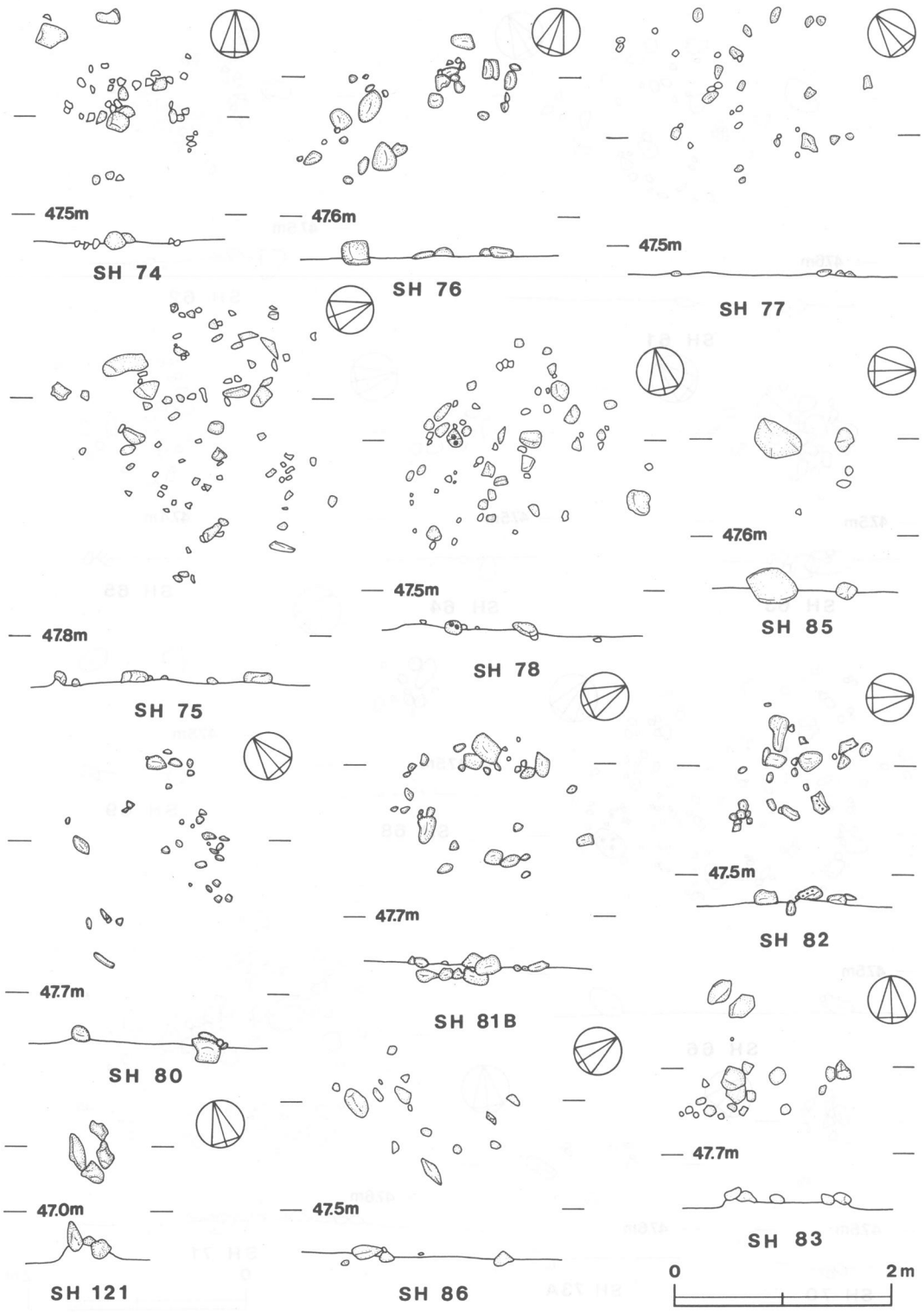
第30図　第一次調査面配石実測図(4)



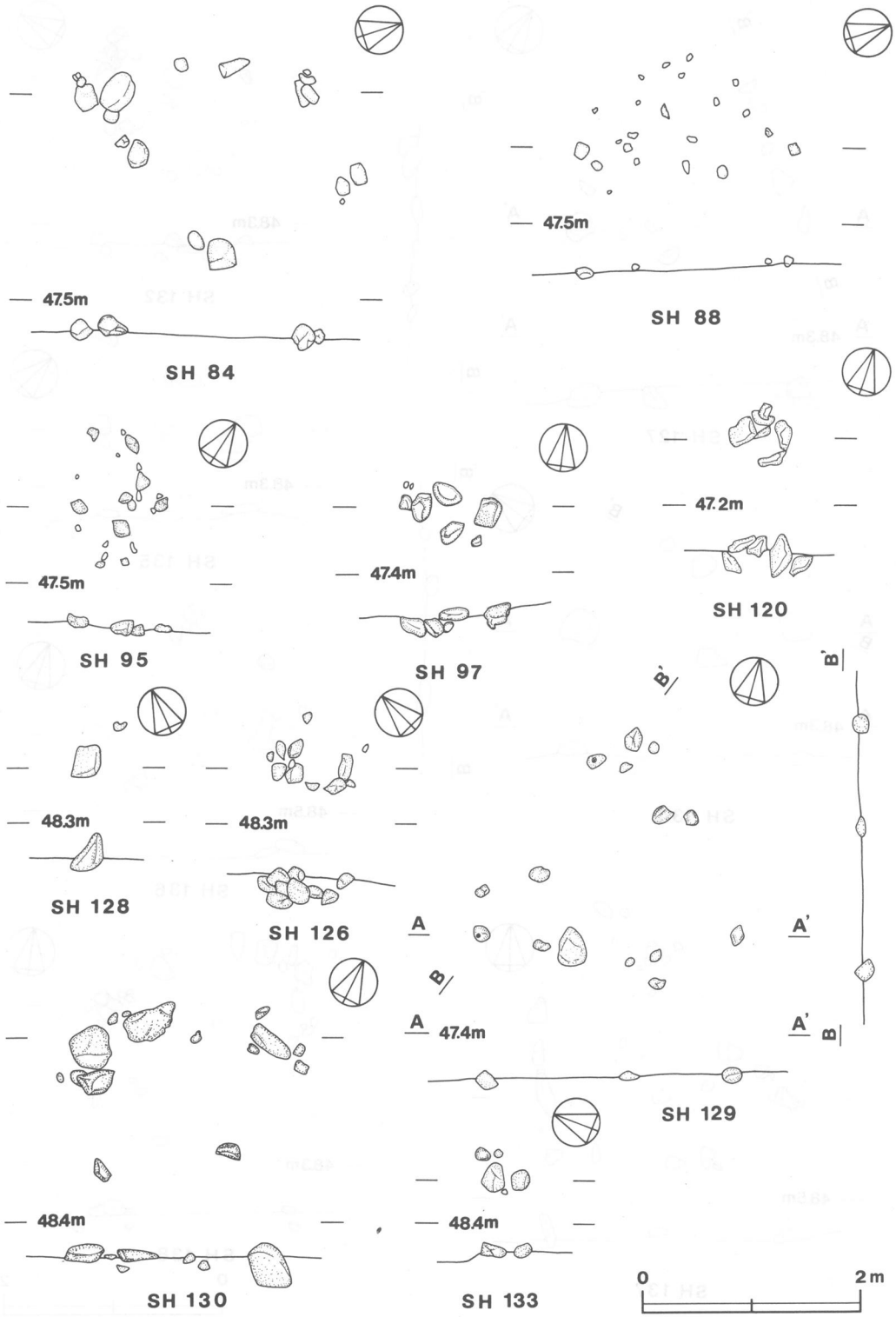
第31図　第一次調査面配石実測図(5)



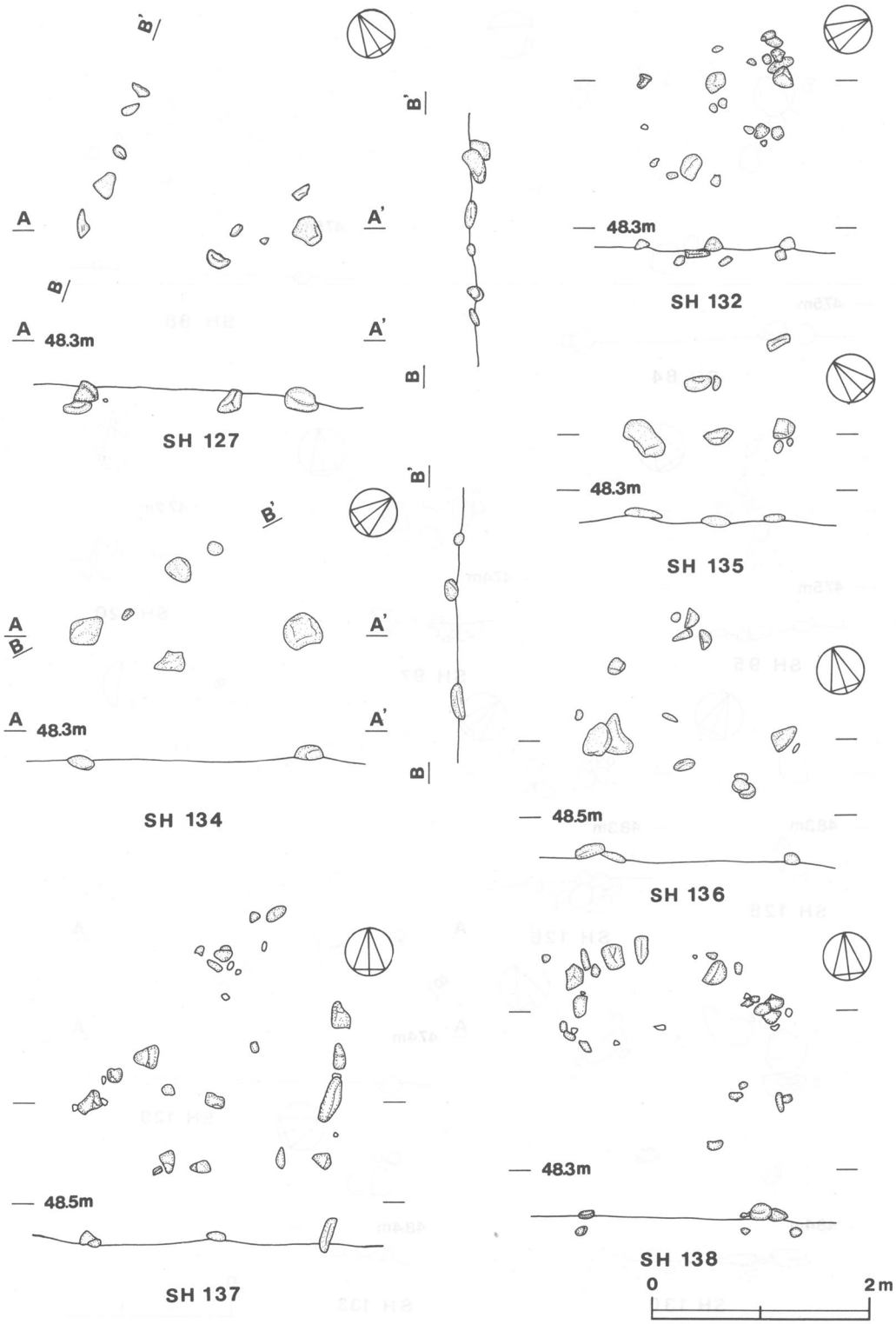
第32図　第一次調査面配石実測図(6)



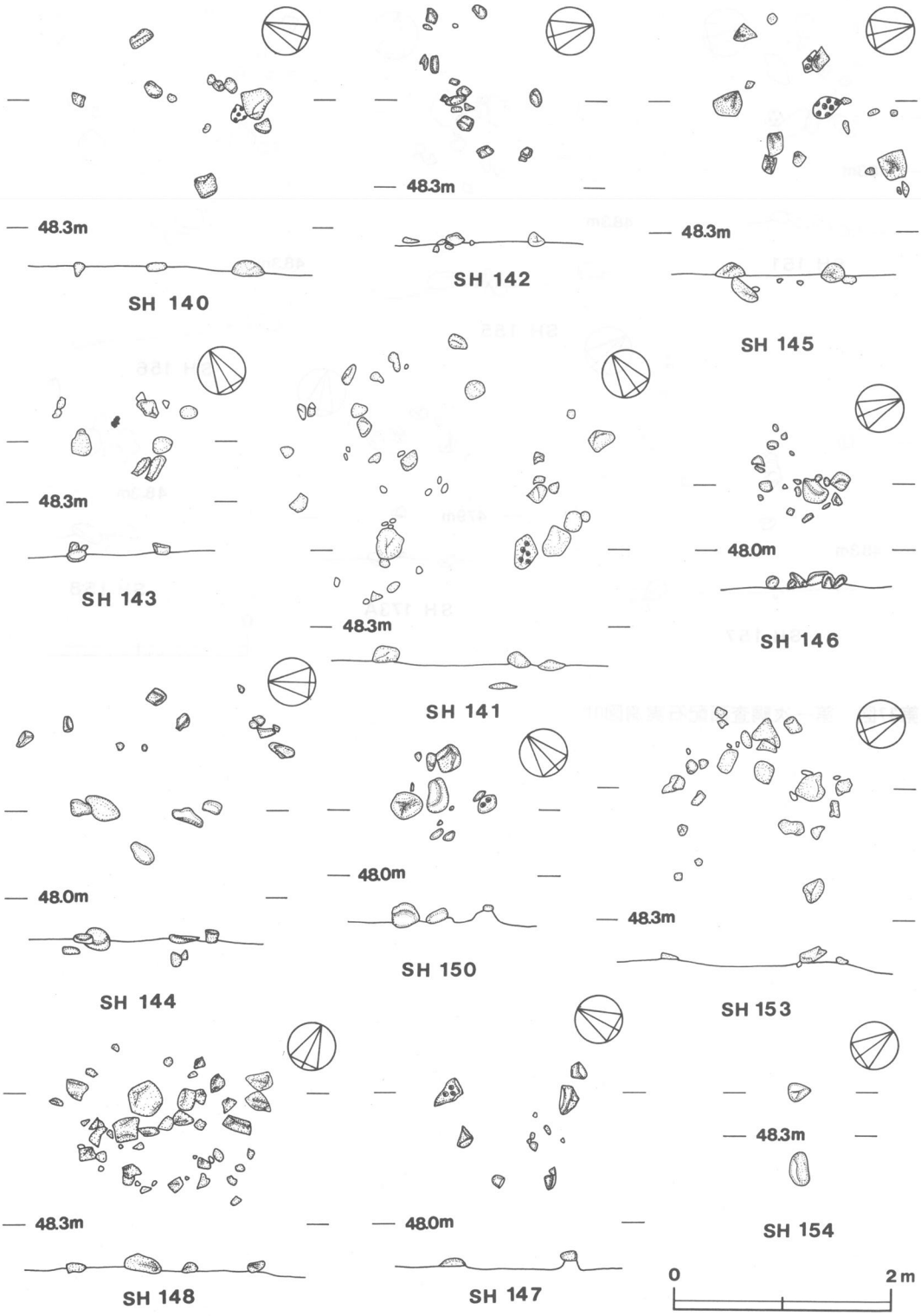
第33図　第一次調査面配石実測図(7)



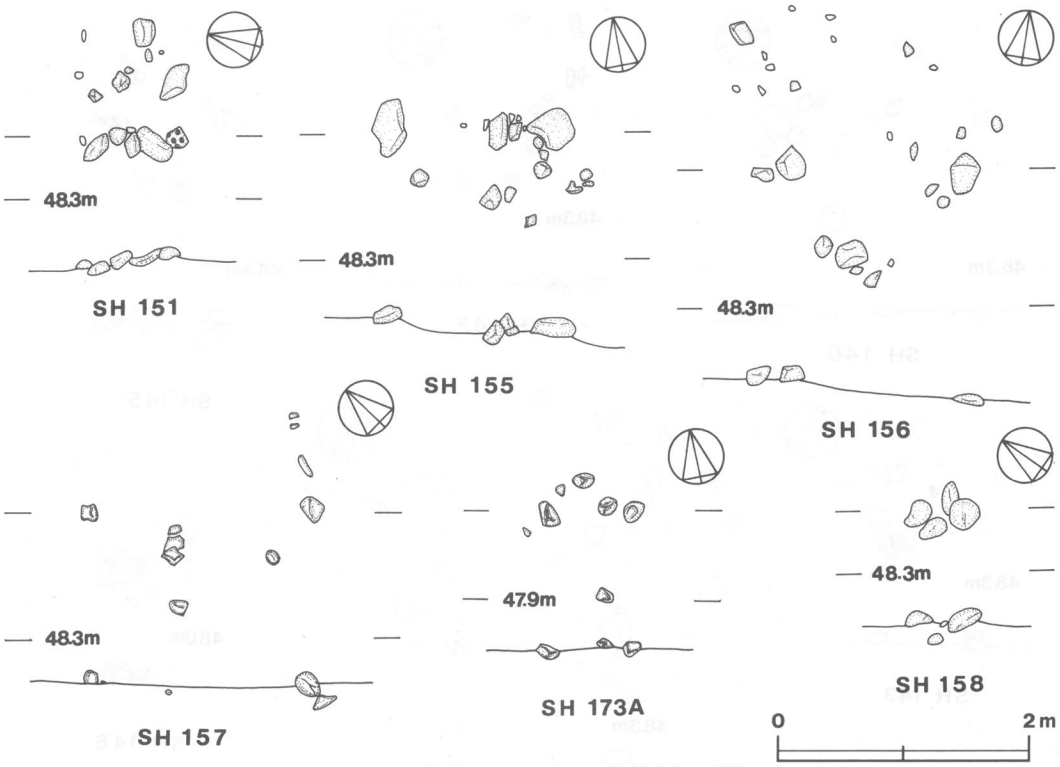
第34図　第一次調査面配石実測図(8)



第35図　第一次調査面配石実測図(9)



第36図　第一次調査面配石実測図(10)



第37図　第一次調査面配石実測図(11)

表3　第一次調査面出土土器観察表

(1)

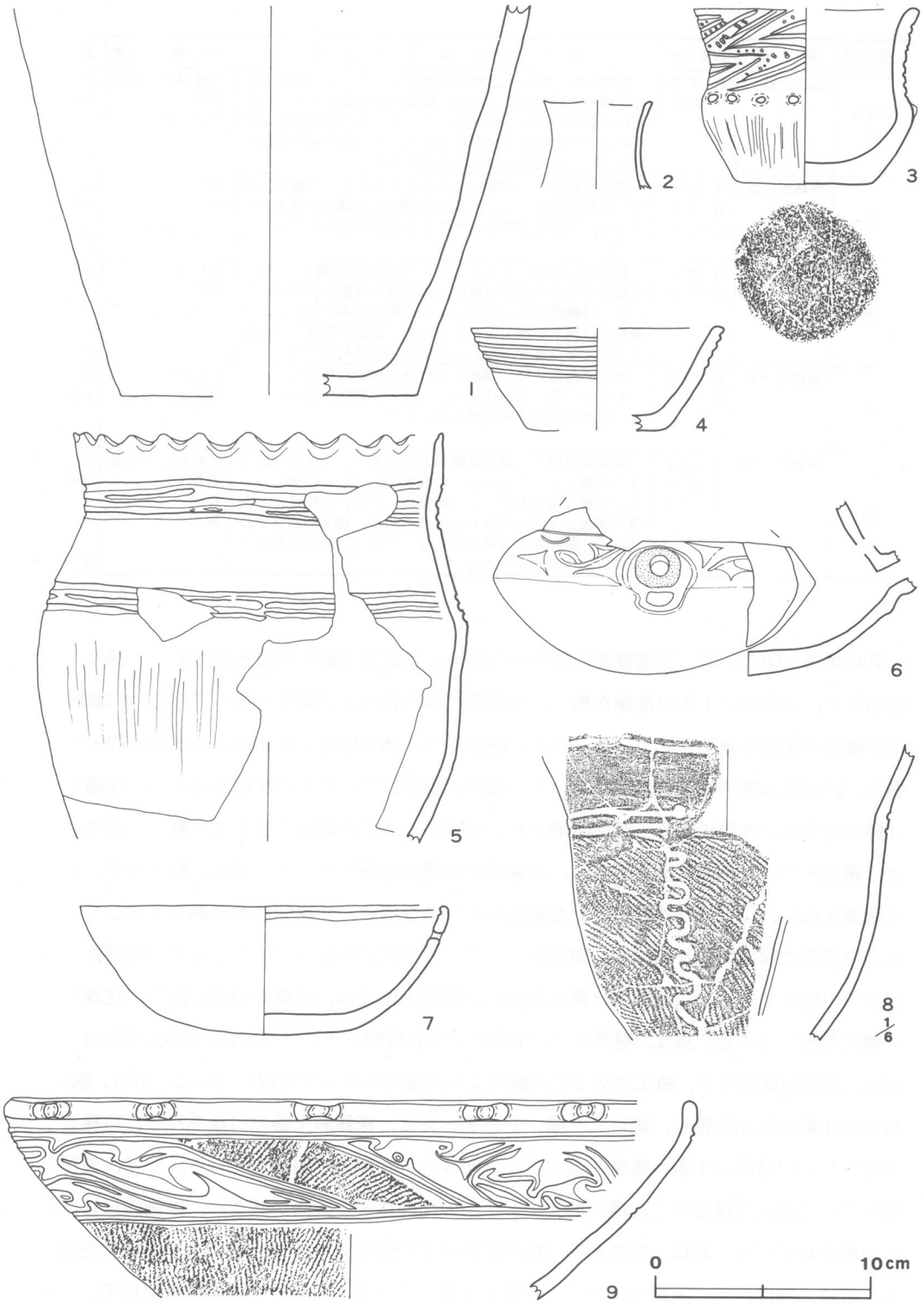
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第38図 1	深鉢形土器	B(18.2) C(13.8)	底部から胴部にかけての破片で，胴部は外傾して立ち上がり，上半分を欠損している。外面は無文で，ヘラ磨きの痕がみられるが，内面は，ナデ整形で作りが粗く輪積み痕がみられる。底部は無文の平底である。	砂粒・雲母・長石 普通 橙色	20% SH-35 P-118
2	壺形土器	A　4.6 B　(4.2)	頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がっている。口縁は，緩やかな4つの波状を呈している。頸部以下は欠損しているが，小型壺になるものと思われる。無文でナデ整形が施されているが，輪積み痕がみられ，粗い作りである。	砂粒・長石・石英 雲母 良好 橙色	10% SH-46 P-170
3	深鉢形土器	A(10.5) B(8.1) C　6.4	胴下部に稜を有し，その直上で大きく括れ，口縁部はやや外反して立ち上がる。胴部の膨らみの部分に貼付による瘤が18個巡らされている。胴上半部には縄文地文上に，ヘラ磨きによる綾杉状沈線文が左右交互に施されている。胴下半部には，縦位にハケ目が施されている。底部外面は平底で木葉痕がみられる。	砂粒・長石・石英 雲母 普通 灰褐色	70% SH-47 P-140
4	鉢形土器	A(12.0) B　4.8 C(6.6)	胴部は底部から直線的に外傾して口縁部に至る。口縁は平縁で，口縁部には5条の沈線を巡らしている。胴部は無文である。底部外面は平底で網代痕が認められる。内面には，ヘラ削りの痕が認められる。	砂粒・長石 普通 橙色	15% SH-48 P-224
5	深鉢形土器	A 17.1 B(22.1)	胴部は内彎して立ち上がり，頸部で緩く括れ，口縁部がやや外反している。口縁は小波状を呈し，口唇部に押圧を加えている。頸部には4条，胴部には3条の沈線が途切れ途切れに巡っている。胴部下半部にはハケ目状の沈線が縦位に施文されている。胴部全体にススが付着している。	砂粒 普通 褐灰色	30% SH-42 P-106
6	注口土器	B　(7.8) C　丸底	口縁部と注口部を欠損している。胴部は丸味をもって立ち上がり頸部で内彎している。注口は頸部の下端に斜め上向きの状態で貼付されている。注口下には，小さな突起を有している。注口部の両側に三叉文を描いているが，他は無文で横位のナデ整形が施されている。底部はやや丸底を呈している。	砂粒・雲母 良好 褐灰色	50% SH-50 P-189
7	浅鉢形土器	A 17.0 B　6.0 C　8.0	胴部から口縁部にかけて内彎して立ち上がっている。口縁部内面には後から穿ったと思われる孔がみられる。胴部外面は無文でヘラナデ整形が施されている。底部は平底である。	砂粒・雲母 良好 黒褐色	70% SH-70 P-103
8	深鉢形土器	A(34.6) B(27.4)	口縁部は頸部から外反して立ち上がり，胴部は大きく張り，胴下半部を欠損している。口縁は緩やかな波状を呈している。太い沈線が口縁近くに1条と，頸部に2条巡っており，その間は，無文帯となる。縄文地文上に，蛇行沈線と4条の沈線を垂下させている。	砂粒・雲母・長石 石英 良好 暗赤褐色	20% SH-66 P-136
9	浅鉢形土器	A(32.3) B(9.3)	胴部は外傾して立ち上がり，口縁部で内彎している。口唇外面には等間隔に突起を配し，口縁部文様帯が上下2条ずつの沈線で区画され，区画内に曲線的入組文，磨消縄文が施されている。沈線より下にはLR縄文が施文されている。	砂粒・石英・長石 雲母 普通 にぶい赤褐色	70% SH-46 P-177
第39図 10	深鉢形土器	A(18.3) B(28.5)	口縁部は，約2cm幅の貼り付けによる平坦な複合口縁である。隆帯には，長さ2cm，幅3mmの沈線が，途切れ途切れに2条ずつ平行に施されている。胴部全面には，網目状撚糸文が施されている。半精製土器である。	砂粒 良好 にぶい橙色	25% SH-72 P-97
11	深鉢形土器	A(24.0) B(28.5) C　8.2	口縁部は開いて立ち上がり，緩やかな波状を呈している。口縁部内面は1条の沈線を巡らしている。外面には4条の沈線を巡らし，その直下より胴部上半分にRL縄文が施文され，それより下部は無文となっている。	砂粒 普通 にぶい橙色	40% SH-70 P-124
12	壺形土器	B　(8.0) C　3.4	胴部は球状に内彎して立ち上がっている。胴部の最大径の部分に2条の沈線を巡らしている。口縁部文様帯には，沈線による曲線的磨消縄文が施されている。底部は，無文であげ底を呈している。	砂粒・長石・石英 普通 橙色	40% SH-75 P-125

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
13	深鉢形土器	A(19.0) B 19.0 C (6.0)	口縁は波状を呈し,口唇部はヘラ磨きが施されている。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部で内傾している。胴部上半部には縄文地文上に沈線による長楕円区画が描かれ，区画外には磨り消しが施されている。胴下半部は無文帯となっている。内面はヘラ磨き整形が施されているが，一部にススが付着している。底部は平底で網代痕がみられる。	砂粒・長石 良好 灰褐色	50% SH-75 P-88
14	深鉢形土器	B(13.8) C 8.0	胴部は外傾して立ち上がり，上半分を欠損している。胴部外面は，ヘラ削りが施されている。内面はナデ整形が施されているが，粗い作りである。底部は無文の平底である。	砂粒・雲母・長石 普通 にぶい黄橙色	20% SH-81 P-105
15	壺形土器	A 5.0 B 10.0	胴部は球状に膨らみ，内傾して立ち上がり，口縁部は頸部から外反して，「く」の字状を呈している。胴部上半分には，沈線による三角区画が，逆位と正位に交互に施されている。頸部には，輪積み痕をとどめている。粗雑な作りである。	砂粒 普通 にぶい橙色	30% SH-97 P-129
16	壺形土器	A 9.2 B 8.5 C 4.0	胴部は球状に膨らみながら立ち上がり，口縁部は，頸部から外反して「く」の字状を呈している。口縁は小波状を呈し，口縁部は縄文地文上に2条の沈線を平行に巡らしている。胴部文様帯は，縄文地文上に沈線による入組文・三叉文が施されている。底部は脚付き底である。	砂粒・雲母 普通 黒褐色	40% SH-129 P-130
第40図 17	深鉢形土器	A(21.3) B(10.5)	口縁部は波状を呈し，波頂部に2条のキザミ目を入れた低い突起と，高い双頭突起が交互に配されている。低い突起の直下には玉抱き三叉文が施されている。口縁部文様帯は縄文地文上に沈線による入組文と刺突文を施している。内面はナデ整形が施されている。	砂粒・雲母 普通 灰褐色	10% SH-141 P-135
18	ミニチュア土器	A (6.6) B 5.8 C 4.0	胴部から口縁部にかけて外傾して立ち上がっている。口縁部に刺突文が巡っているが，一部磨滅して見えない部分がある。輪積み痕がみられ，粗い作りである。底部は無文の平底である。	砂粒 良好 浅黄橙色	50% SH-141 P-99
19	ミニチュア土器	B (1.5) C 4.8	無文の台付土器の台部片である。胴部と台部の接合面からそっくりはがれている。粗い作りの土器である。	砂粒 普通 明褐色	50% SH-141 P-19
20	深鉢形土器	A(26.6) B(19.0)	胴部は外傾して立ち上がり，口縁部近くで外反している。口縁は，大小の双頭突起を交互に配した波状を呈している。大きい双頭突起の下には，三角形状に磨消縄文が施され，その中には三角形沈刻文が施されている。小さい双頭突起の下には,弧状の磨消縄文が施されている。胴部文様帯には，彫刻的な玉抱き三叉文と，変形楕円区画が単位文様的に描かれている。	砂粒・雲母 良好 にぶい褐色	10% SH-137 P-175
21	浅鉢形土器	A(19.3) B 9.6 C 7.2	胴部は底部から内彎しながら立ち上がる。口縁部に6条の沈線が平行して巡り，蛇行沈線で区切られている。他は無文帯である。内面は丁寧にナデ整形が施されている。底部はあげ底ぎみで，網代痕がみられる。	砂粒 良好 浅黄橙色	40% SH-143 P-109
22	深鉢形土器	A(18.4) B (8.2) C 7.0	無文の底部片で，胴部にかけて大きく外傾している。底面は中央部がわずかにくぼんでいる。外面は粗くヘラナデ整形されている。底部には網代痕がみられる。	砂粒・雲母 良好 にぶい黄橙色	20% SH-145 P-121
23	注口土器	A 6.7 B 10.2 C 3.1	口縁部の一部を欠損している。口縁部はやや内彎して立ち上がり，一条の隆帯を巡らしている。口縁に4単位の突起を配している。胴部上半部には，削り出しによる曲線的モチーフが描かれ，下半部は無文である。注口は上向きにそりをもって付けられ，その基部には，沈線を巡らせている。底部は高台状を呈し，2条の沈線が巡っている。全体にヘラ磨き整形が施されており，丁寧な作りである。	砂粒 良好 黒褐色	90% SH-46 P-25

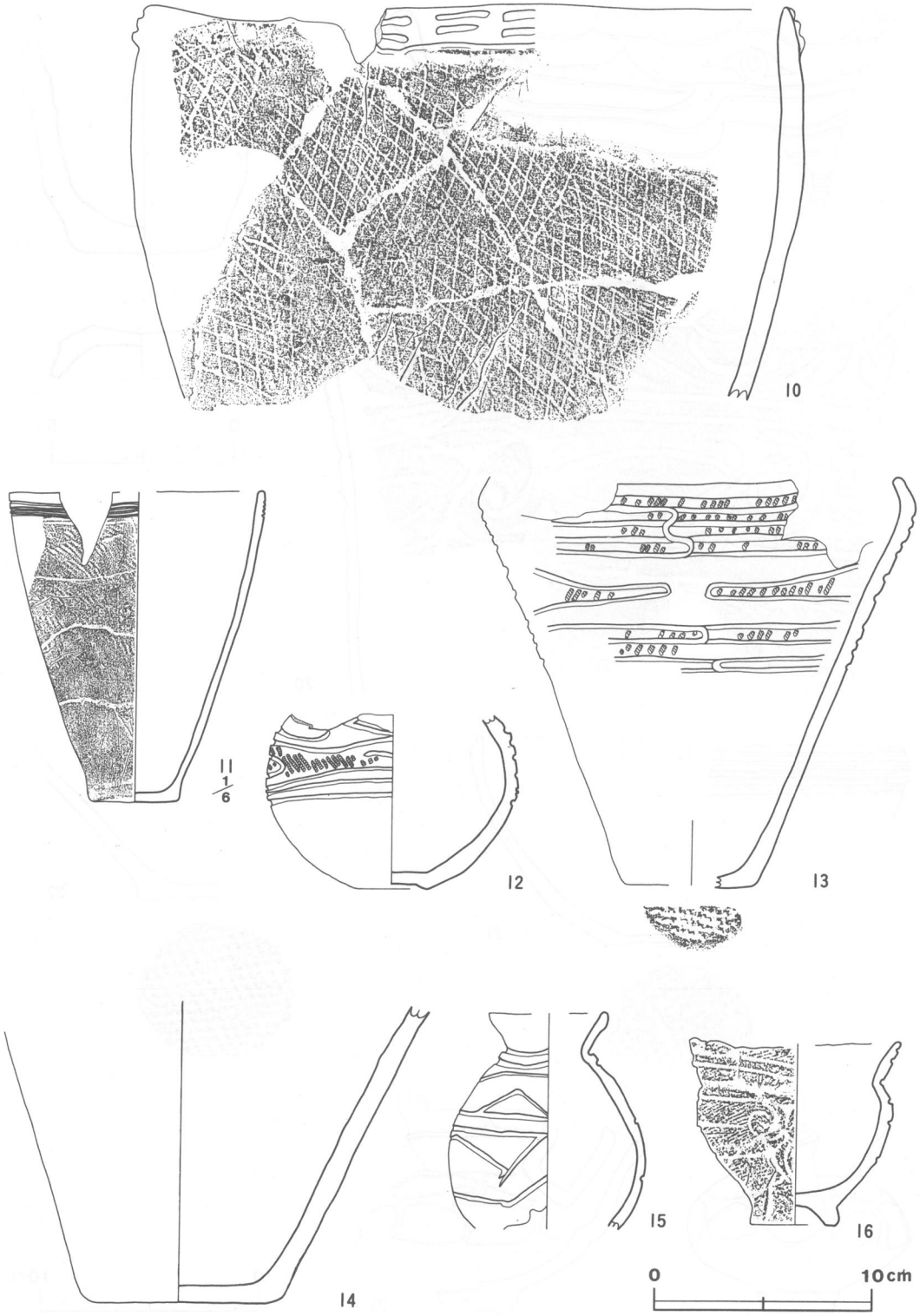
(3)

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第41図 24	注口土器	B (8.2) C 丸底	胴部は丸く膨らみ，楕円形状を呈している。胴部中位には瘤状突起を付している。胴部には沈線にキザミ目を入れ，弧状のモチーフを描いている。注口部は胴部の中位に，やや上向きに付されており，注口部下端に突起を有している。底部は無文の丸底である。	砂粒・長石・雲母 良好 にぶい褐色	40% SH-151 P-190
25	浅鉢形土器	A 18.6 B 6.9 C (12.0)	胴部は底部から内彎しながら立ち上がり，口縁は，緩やかな波状を呈している。胴部全面にLR縄文が施文されている。内面は丁寧なナデによる整形が施されている。	砂粒 良好 にぶい黄橙色	15% SH-147 P-127
26	深鉢形土器	A (28.0) B (13.0)	胴部から外傾して立ち上がり，口縁部で内彎している。口縁は3単位の波状口縁で，波頂部には把手を貼付している。口縁部には，沈線による長楕円区画が描かれ，区画内には縄文が施文されているが，器面が磨滅して文様など見えない部分が多い。胴部下半部は無文である。	砂粒・石英 良好 にぶい褐色	10% SH-155 P-137
27	深鉢形土器	B (6.2) C 9.5	無文の底部片で，胴部の下位は底部から外反して立ち上がっている。器面は粗く，ヘラナデ整形が施されている。底部は平底で網代痕がみられる。	砂粒・長石 良好 にぶい黄色	20% SH-147 P-123
28	深鉢形土器	A 23.1 B (25.8) C (7.7)	胴部は底部から直立気味に立ち上がり，中位からは大きく外傾して立ち上がる。口縁部でわずかに内彎している。口縁は波状を呈し，口縁部近くには，沈線による長楕円区画が3段に施され，区画内には，縄文が施文されている。胴部以下は無文帯となっている。底部外面は平坦で，網代痕がみられる。	砂粒・長石・石英 雲母 普通 褐色	30% SH-155 P-132

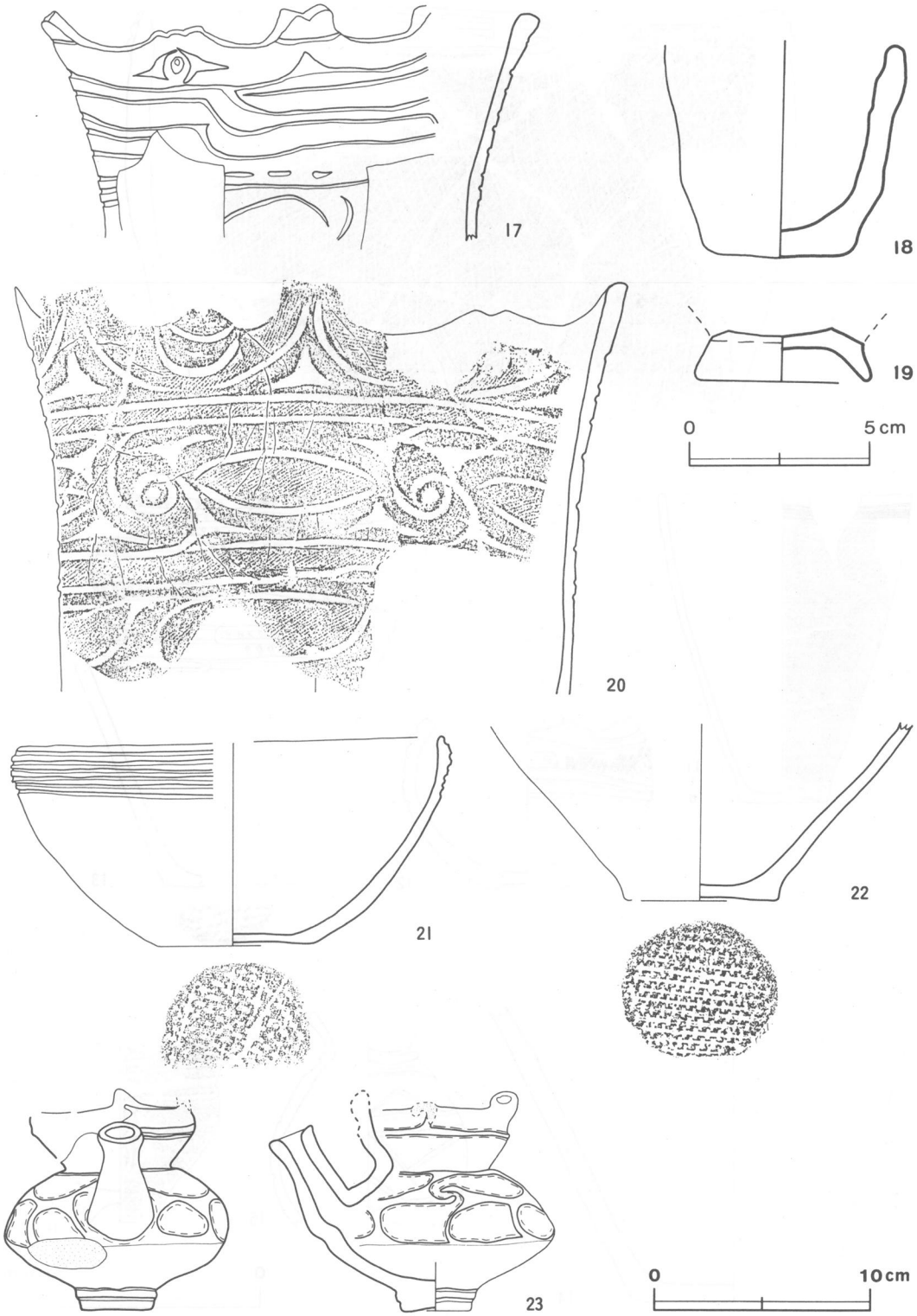
第42図29～50は，第一次調査面の配石から出土した縄文土器片の拓影図である。29は，波状口縁部片で，口唇部に1条の沈線を施し，波頂部には竹管による刺突を施している。口縁部文様帯には縦位の沈線を垂下させている。30は，胴部片で，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフを描き，区画内は磨消縄文が施されている。31は，胴部片で，2条の沈線を巡らし，沈線から上には縄文地文上に沈線による三叉文が描かれ，沈線から下には縦位に撚糸文が施文されている。32は，頸部片で，2条の沈線を巡らし，沈線間には縄文を施している。33は，胴部片で，竹管による刺突を施し，以下には沈線により曲線的モチーフを描き，沈線間は磨消縄文を施している。34は，口唇部に瘤状突起を貼付し，頸部から「く」の字状に外反して立ち上がる口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部には縄文を施し，胴部上位には，沈線を斜位に施し，沈線から下には縄文を施している。35は，胴部片で，沈線による曲線的モチーフが縦位，斜位に描かれている。36は，波状口縁部片で，縄文地文上に沈線により曲線的モチーフを描いている。37は，胴部片で，斜位の沈線を交互に施し，網目文を描いている。38は，深鉢形土器の口縁部片で，口縁直下を無文帯とし，口縁部に1条の隆帯を巡らし，上向きの舌状突起を貼付している。39は，波頂部を欠損している波状口縁部片で，縄文地文上に2条の沈線による区画が施され，区画内には，磨り消しが施されている。40は，胴部から口縁部にかけての破片で，細い沈線により曲線文を描いている。41は，胴部片で，隆帯を貼付し，菱形文を施している。42は，平縁の口縁部片で，口縁直下



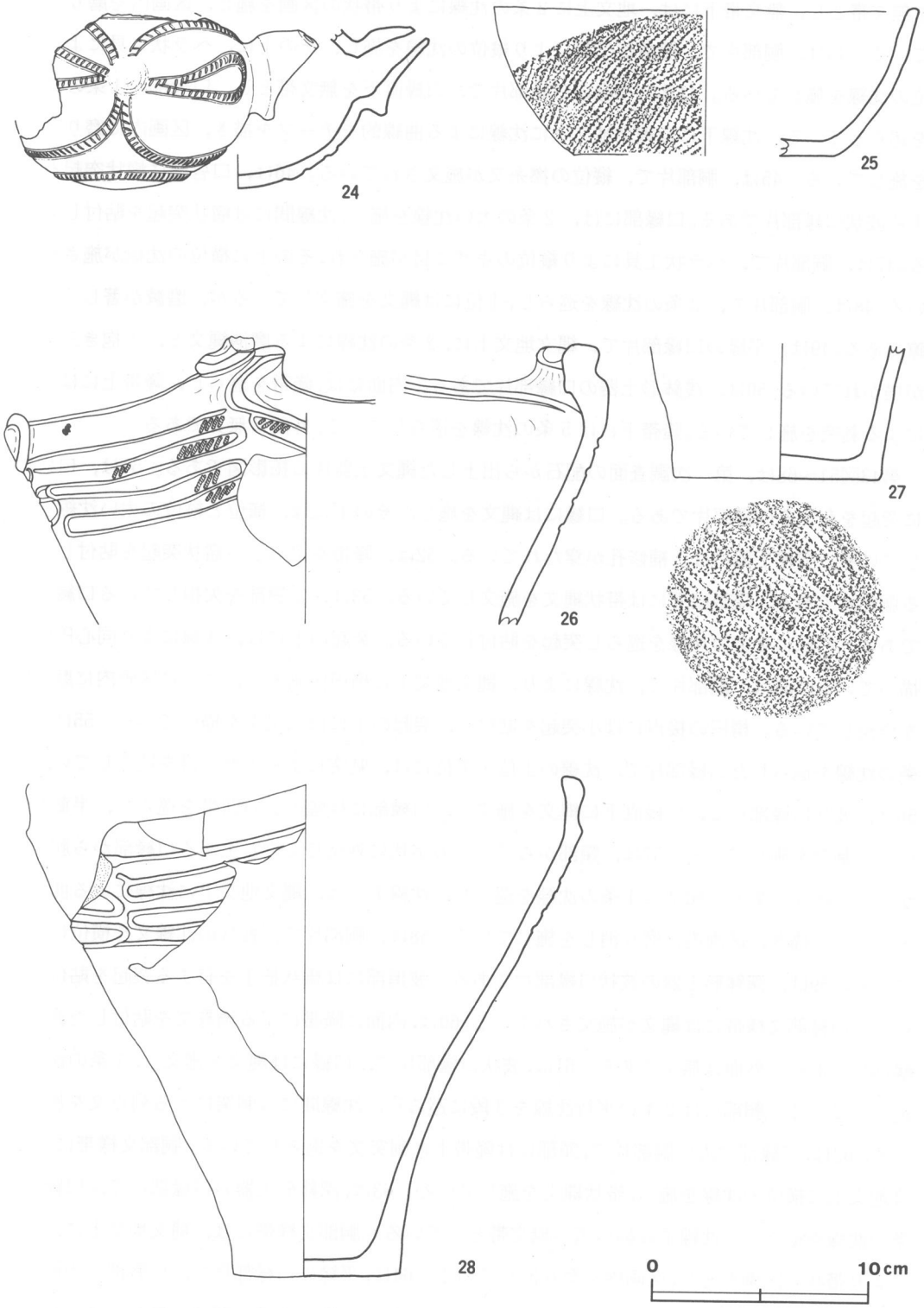
第38図　第一次調査面配石出土土器実測図(1)



第39図　第一次調査面配石出土土器実測図(2)



第40図　第一次調査面配石出土土器実測図(3)



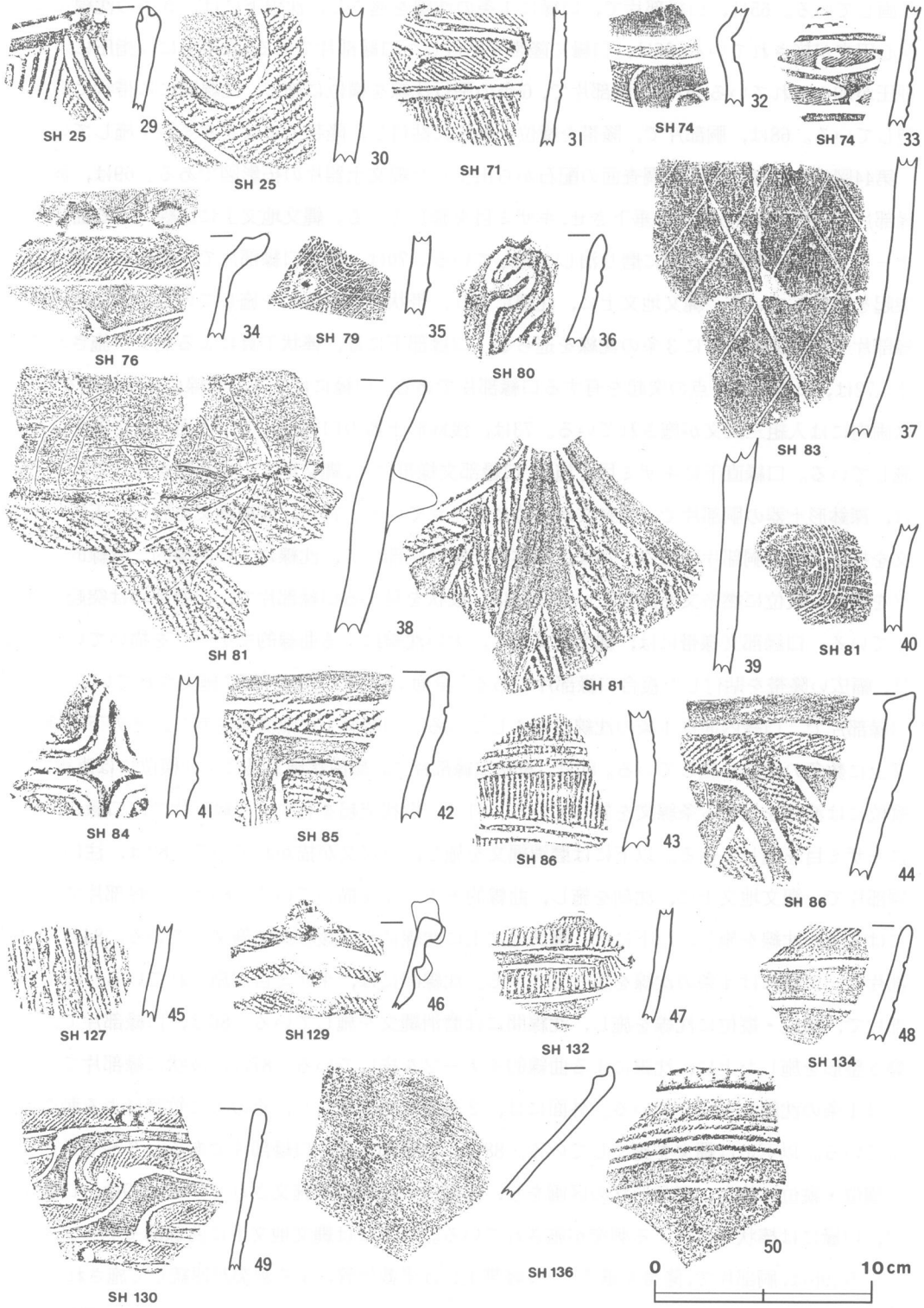
第41図　第一次調査面配石出土土器実測図(4)

を無文帯とし，無文帯下には，地文上に2条の沈線により帯状の区画を施し，区画内を磨り消している。43は，胴部片で，櫛歯状工具により縦位の沈線を施し，その上に，ヘラ状工具による横位の沈線を施している。44は，平縁の口縁部片で，口縁直下を無文帯とし，口縁部に1条の沈線を巡らしている。沈線下には縄文地文上に沈線による曲線的モチーフを描き，区画内に磨り消しを施している。45は，胴部片で，縦位の撚糸文が施文されている。46は，口唇部に瘤状突起を有する波状口縁部片である。口縁部には，2条の太い沈線を施し，沈線間には瘤状突起を貼付している。47は，胴部片で，ヘラ状工具により縦位のキザミ目が施され，その上に横位の沈線が施されている。48は，胴部片で，2条の沈線を巡らし，上位には縄文を施文しているが，磨滅が著しく不明瞭である。49は，平縁の口縁部片で，縄文地文上に，2条の沈線による磨消縄文と，玉抱き三叉文が描かれている。50は，浅鉢形土器の口縁部片である。内面には，隆帯を巡らし，隆帯上には竹管による刺突を施している。隆帯下には5条の沈線を巡らしている。外面は無文である。

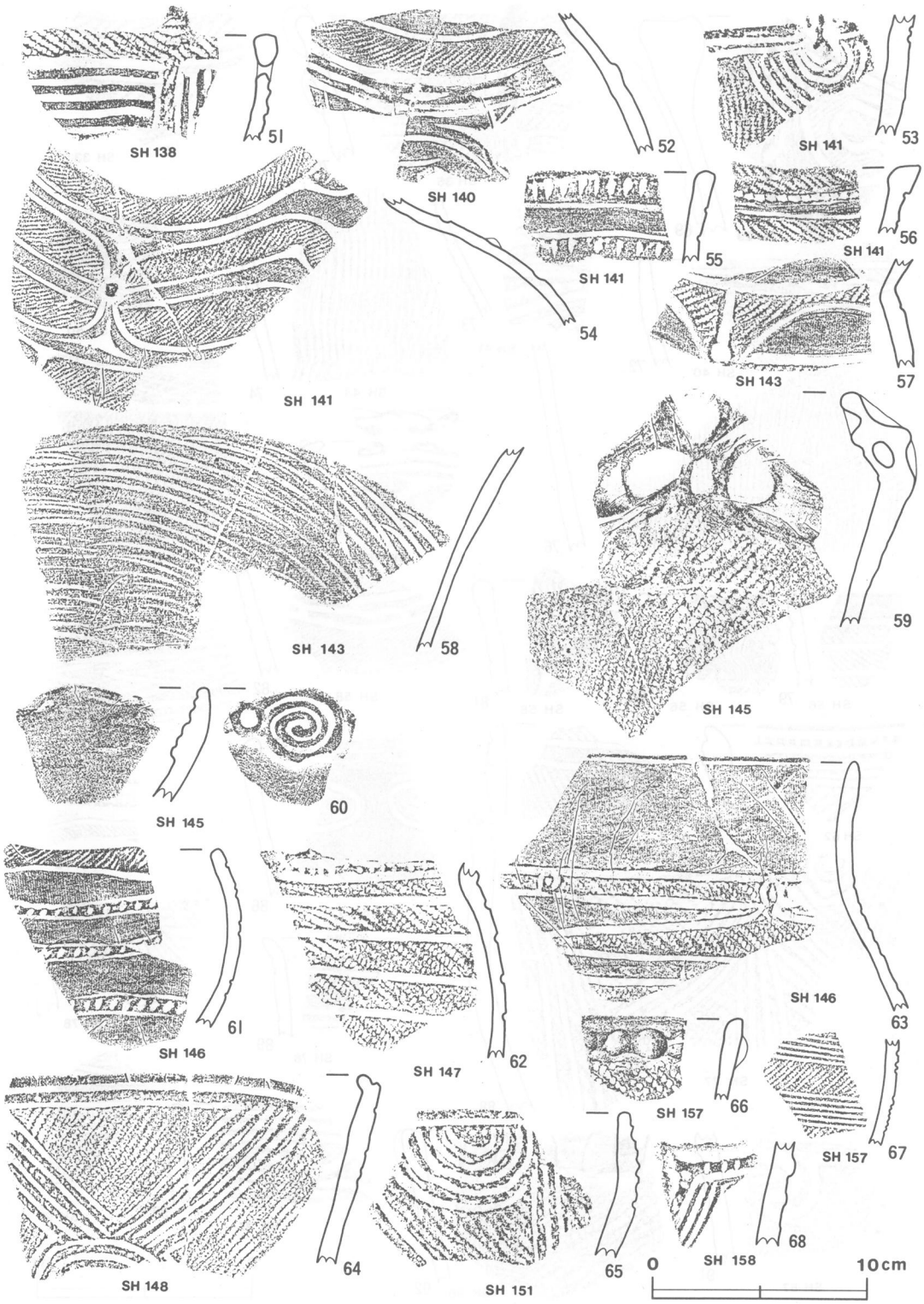
第43図51～68は，第一次調査面の配石から出土した縄文土器片の拓影図である。51は，口唇部に突起を有する口縁部片である。口縁には縄文を施し，その下には，横位と縦位の太い沈線を施している。突起下部には，補修孔が穿たれている。52は，隆帯を巡らし，瘤状突起を貼付している胴部片である。隆帯直下には帯状縄文を施文している。53は，口唇部を欠損している口縁部片である。口縁に2条の沈線を巡らし突起を貼付している。突起の下には，沈線により同心円文を描いている。54は，胴部片で，沈線により，縄文地文上に楕円区画をし，さらに区画内に磨消帯を作出している。楕円の接点には小突起を貼付し，突起の下には三叉文を描いている。55は，2条の沈線を巡らした口縁部片で，沈線の上位・下位には，刺突によるキザミ目を巡らしている。56は，波状口縁部片で，口縁直下に縄文を施文し，口縁部には幅の広い凹帯を巡らし，半截竹管による刺突を施している。57は，頸部から「く」の字状に外反して立ち上がる口縁部から胴部にかけての破片である。頸部に1条の沈線を巡らし，沈線下には，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフを描き，区画内は磨り消しを施している。58は，胴部片で，弧状の沈線文を横位に施している。59は，深鉢形土器の波状口縁部片である。波頂部には橋状把手を有する突起を貼付している。口縁部文様帯には縄文が施文されている。60は，内面に隆帯による渦巻文を貼付した波状口縁部片である。外面は無文である。61は，波状口縁部片で，口縁には縄文を施文し，1条の沈線を巡らしている。胴部には2条の平行沈線を3段に巡らし，沈線間には刺突による列点文を施している。62は，口縁部に近い胴部片で，頸部には隆帯上に刺突文を巡らしている。胴部文様帯には，縄文地文上に横位の沈線を施し，帯状縄文を施している。63は，深鉢形土器の口縁部片で，口縁に1条の沈線を巡らし，沈線下は幅の広い無文帯としている。胴部文様帯には，縄文地文上に，沈線により帯状の区画を施し，区画内を磨り消している。64は，平縁の口縁部片で，口唇部と内面にそれぞれ沈線を巡らしている。外面には，縄文地文上に，5～6条の沈線を斜位に施し，逆三角形を

区画している。65は，口縁部片で，口縁に1条の沈線を巡らし，沈線下には，5条の沈線による同心円文が施されている。66は，口縁に隆帯を貼付した口縁部片である。隆帯上には指圧による，押圧が加えられている。67は，胴部片で，6条の平行沈線を横位に施し，沈線間には帯状に縄文を施している。68は，胴部片で，隆帯を横位・縦位に貼付し，隆帯上にはキザミ目を施している。

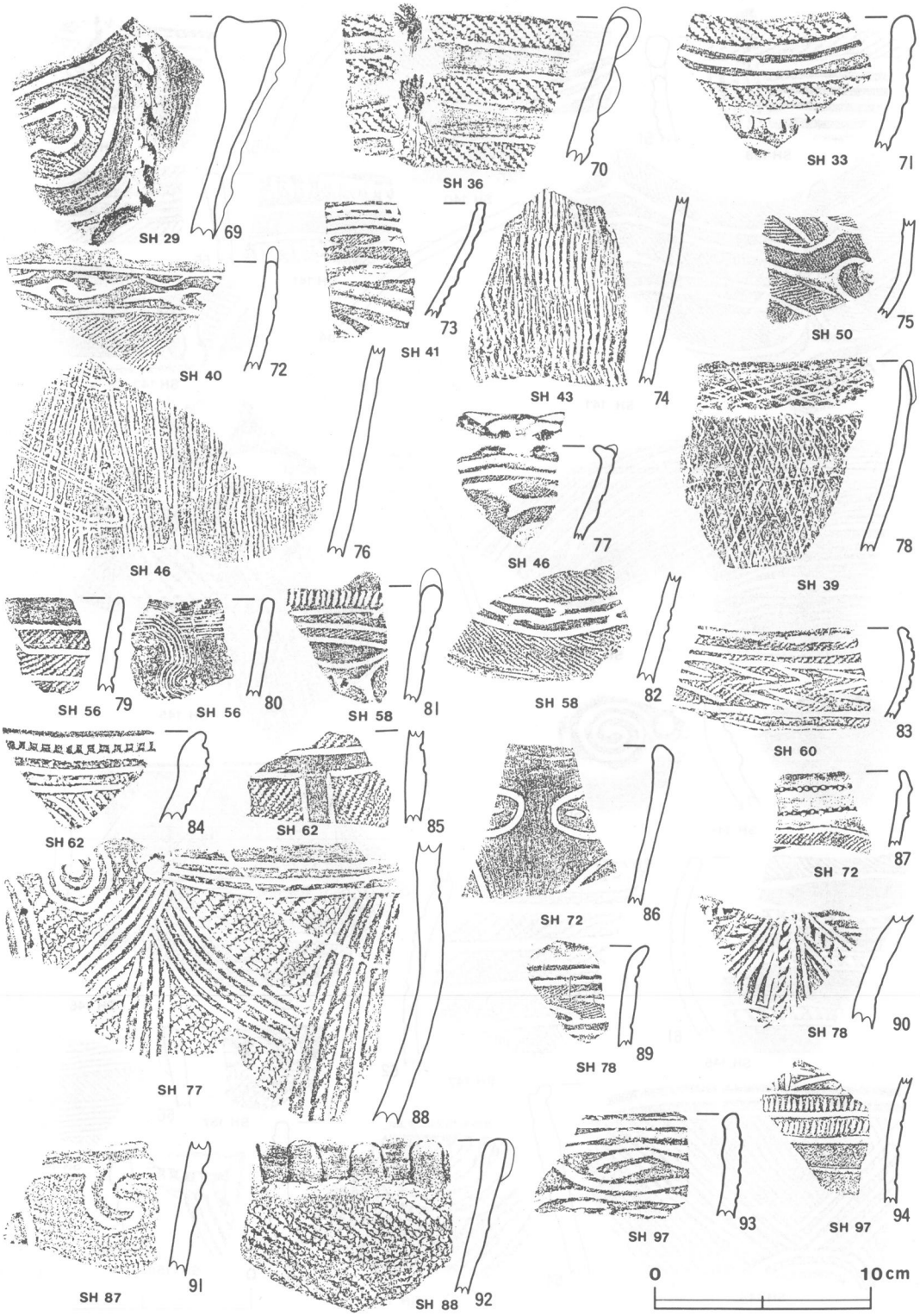
第44図69～94は，第一次調査面の配石から出土した縄文土器片の拓影図である。69は，波状口縁部片で，波頂部から隆帯を垂下させ，キザミ目を施している。縄文地文上に沈線による曲線的モチーフを描き，モチーフ間に磨り消しを施している。70は，波状口縁部片で，縦位に2個の瘤状突起を貼付している。縄文地文上に，沈線により，帯状の磨り消しを施している。71は，波状口縁部片で，縄文地文上に3条の沈線を巡らし，口縁部下には，棒状工具による刺突が施されている。72は，口唇部に3点の突起を有する口縁部片である。口縁には2条の沈線による区画を施し，区画内には入組三叉文が施されている。73は，浅鉢形土器の口縁部片で，内面には1条の沈線を施している。口縁直下にキザミ目を施し，口縁部文様帯には，縄文地文上に沈刻を施している。74は，深鉢形土器の胴部片で，撚糸文が縦位に施されている。75は，磨消縄文を施し，玉抱き三叉文を描いている胴部片である。76は，深鉢形土器の胴部片で，沈線による曲線的，直線的モチーフを描き，縦位に撚糸文を施している。77は，波状を呈する口縁部片で，口唇部には突起を貼付している。口縁部文様帯には，縄文地文上に，太い沈線による曲線的モチーフを描いている。78は，幅広い隆帯を貼付した複合口縁部片である。全面に撚糸文が網目状に施文されている。79は，口縁部片で，口縁内面に1条の沈線を巡らしている。口縁直下に無文帯を有し，その下の縄文地文上に数条の沈線を施している。80は，波状口縁部片で，櫛歯状施文具により横位には直線的に，縦位には波状を呈する条線文を施している。81は，瘤状突起を有する口縁部片で，口縁には斜位にキザミ目を施している。以下には磨消縄文を施し，三叉文が描かれている。82は，注口土器の胴部片で，縄文地文上に，沈刻を施し，曲線的モチーフを描いている。83は，口縁部片で，口縁には3条の沈線を施し，以下には，縄文地文上に沈線による綾杉文を施文している。84は，口縁部片で，口縁には4条の沈線を巡らしている。沈線間には，キザミ目が施されている。85は，胴部片で，横位・縦位に沈線を施し，沈線間には磨消縄文を施している。86は，口縁部片で，ヘラ磨き整形を施した上に，沈線による曲線的モチーフを描いている。87は，波状口縁部片で，内面には1条の沈線を巡らしている。外面には，2条の沈線を巡らし，その上に竹管による刺突を施している。以下には縄文を施文している。88は，口唇部を欠く口縁部片である。3～5条の沈線を横位・縦位に施し，三角形状の区画をし，区画内には縄文が施文されている。89は，口縁部片で，口縁には棒状工具による刺突が施されている。以下には縄文地文上に曲線的モチーフを描いている。90は，胴部片で，隆帯を垂下させ，隆帯上には半截竹管による刺突が連続して施されている。91は，胴部片で，縄文地文上に太い沈線により曲線的モチーフを描いている。92は，深鉢形土器



第42図　第一次調査面配石出土土器拓影図(1)



第43図　第一次調査面配石出土土器拓影図(2)



第44図　第一次調査面配石出土土器拓影図(3)

の口縁部片で，口縁に幅広い隆帯を貼付し，指圧による押圧が加えられている。以下には，大粒の縄文が施文されている。93は，浅鉢形土器の口縁部片で，内面には幅の広い沈線が施され，外面には，横位の沈線が曲線的に描かれている。94は，数条の沈線を巡らし，沈線間にキザミ目が施されている頸部片である。

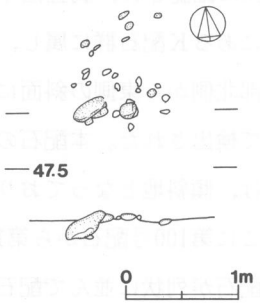
2 第二次調査面の配石群（第261図）

第二次調査面には，西側のA・B配石群の下層にH・I配石群が確認された。H配石群は，南北20m，東西16mほどの範囲に広がり，I配石群は，南北15m，東西8mほどの範囲に広がっている。中央部のD配石群の下層にはJ配石群，E配石群の下層にはK配石群が確認された。J配石群は，南北8m，東西8mほどの範囲に広がり，第25号住居跡内にすっぽり入った状態で検出された。K配石群は，南北18m，東西12mほどの範囲に広がっている。中央部北側と，東側の第二次調査面には，配石は確認されなかった。

第二次調査面から検出した個別の配石は，H配石群11基，I配石群6基，J配石群10基，K配石群15基で合計42基である。

第89号配石（第45図）

本配石は，二次調査面のB4e_0区に確認され，調査区中央部にあるK配石群に属している。本配石の東側2mほどに第90号配石が所在している。一次調査面の配石とのレベル差は，15cmほどである。



第45図　第89号配石実測図

平面形は，長径1.06m・短径0.9mの楕円形を呈し，長径方向はN－2°－Wを指している。大きな石3個と，小さな石24個が配石されている。大きい石は南側に配され，そのうち1個は，傾斜した状態で大部分が土中に埋っており，あと1個は大きい石を支えるような状態で下に入っている。石の形からみて，立石が自然に傾斜したものとは考えられず，もともとこの状態で配石されたものと思われる。小さい石は，その北側に不規則に配されている。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。

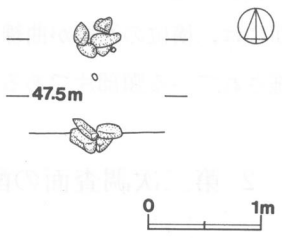
遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部13片，胴部208片，底部9片と石鏃2点が出土した。

本配石は，出土遺物から見て，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第96号配石（第46図）

本配石は，二次調査面のB4c_0区に確認され，調査区中央部にあるK配石群に属しているが，配石群の中では，本配石だけが，群から北側に5mほど離れた位置に所在している。

平面形は，長径0.54m・短径0.4mの楕円形を呈し，長径方向はN－14°－Eを指している。径25cmほどの円形状や楕円形状をした大きな石が二重に重ねてある。多くの配石は平面的に配石されているが，本配石は石を重ねてあり，他とは異なった配石であるので，組石遺構として調査した。大きな石の南側に卵大の石が1個離れているが，本配石とは関係のない石と考えられる。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。



第46図　第96号配石実測図

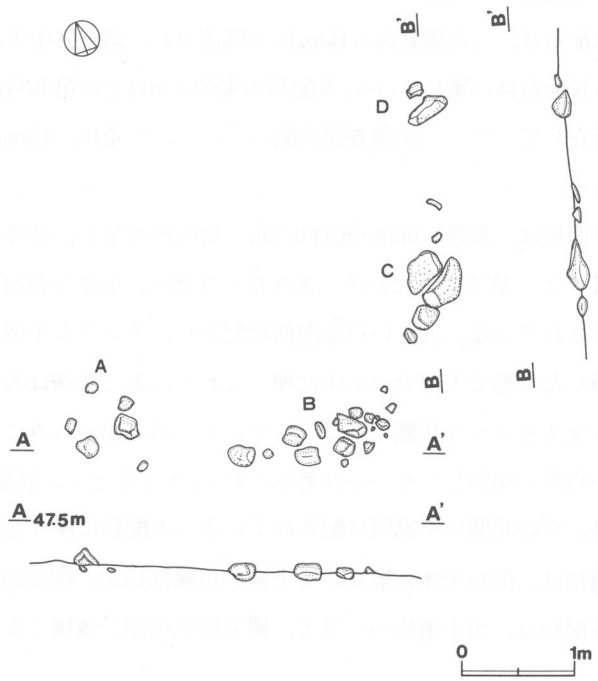
遺物は，重ねた配石の周囲に土器の口縁部43片，胴部333片，底部8片と配石のまわりから獣骨片少量が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第98号配石（第47図）

本配石は，二次調査面のB5d_2区に確認され，調査区中央部にあるK配石群に属し，中央部北側から東側の斜面にかけて検出された。本配石の東側は，傾斜地となっており，そこに第100号配石から第104号配石が列状に並んで配石されている。

平面形は，幅0.5～0.6m・長さ6mほどの帯状を呈し，半環状に列をなして並んでいる。半環状の帯は，A～Dの4か所の小ブロックに分けることができる。Aブロックは，大きい石2個，小さい石4個が



第47図　第98号配石実測図

ほぼ円形状に配されている。Bブロックは，大きい石4個，小さい石13個が幅0.5m・長さ2mほどに不規則に配されている。Cブロックは，大きい石3個，小さい石3個が幅0.5m・長さ1.5mほどに配されている。Cブロックの大きい石は，本配石の中では最大の石を使用している。Dブロックは，大きい石1個，小さい石1個を寄せて配してある。西側半分にも環状に配石されていたものと考えられるが，この部分には，第7号住居跡が重複していることから，住居跡が構築される際にこわされたものと考えられる。A～Dの小ブロックがそれぞれ個々の配石とも考えられるが，半環状に検出されたので，半環状の配石として調査したものである。半環状の配石は，調査区では本配石だけである。本配石に伴うと考えられる土坑は確認できなかった。

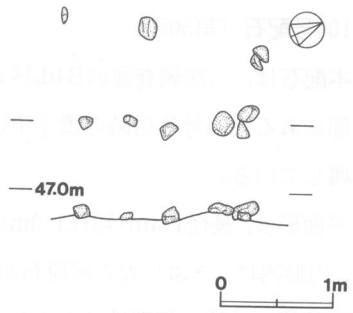
遺物は，環状にまわる配石の両側部を中心に土器の口縁部22片，胴部59片，底部7片と石鏃3点が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第100号配石（第48図）

本配石は，二次調査面に確認され，調査区中央部にあるK配石群に属している。本配石の北東側には第101号配石が所在している。

平面形は，長軸1.90m・短軸1.0mの長方形を呈し，長径方向はN—35°—Eを指している。南北方向に二列に並んで配石されている。東側の配列は，北側に径20cmほどの石を3個置き，そこから約30cmずつ南側に1個ずつ3か所に配石されている。西側の配列は，北側に径15cmほどの石を2個置き，そこから約80cmほど南側に1個ずつ2か所に配石されている。東側の配列と西側の配列の間には，配石は確認されなかった。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。



第48図　第100号配石実測図

遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部1片，胴部21片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

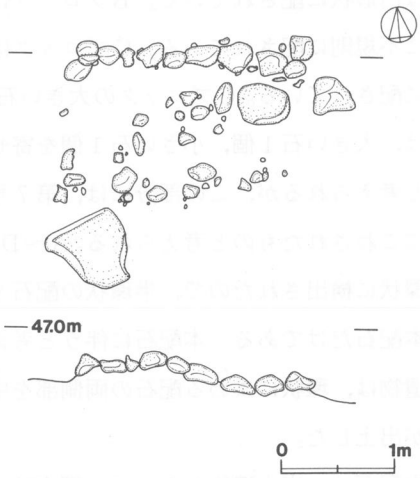
第105号配石（第49図）

本配石は，二次調査面の$B5f_2$区に確認され，調査区中央部にあるK配石群に属している。本配石の北側には，2m離れて第99号配石が所在している。

平面形は，長軸2.7m・短軸1.5mの長方形を呈し，長径方向はN—60°—Eを指している。東西方向に長く，大小66個の石が配されている。本配石の北側には，径20～30cmの円形・楕円形をし

た比較的大きい石を12個ほど東西に丁寧に一直線に並べて配石している。東側は西側より低く，高低差は約10cmほどある。南側には，比較的小さい石を20個，大きい石を数個列状に並べて配石している。北側と南側の配石の間は1mほどあり，そこに大小20個ほどの石が不規則に配石されている。北東側の径50cmほどの円形をした石は上部が平坦であり，本配石の中では最大である。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。

遺物は，北側と南側の列状の配石の中間地点を中心に土器の口縁部16片，胴部109片，底部5片が出土した。



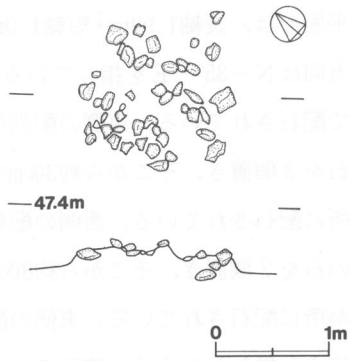
第49図　第105号配石実測図

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構である。

第109号配石（第50図）

本配石は，二次調査面のB4d$_8$区に確認され，調査区中央部にある第25号住居跡の覆土中に検出され，J配石群に属している。

平面形は，長径1.4m・短径1.3mのほぼ円形を呈しており，円形内に，こぶし大の河原石が主に配石されている。配石状態には特に規則性はみられない。火を受けたうえに風化して，もろく崩れやすい石が多い。本配石は，第25号住居跡の覆土上層に検出されたものであり，住居の廃絶後，配石されたものと考えられる。従って，本配石は第25号住居跡より新しいものと考えられる。本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。



第50図　第109号配石実測図

遺物は，東側部分の配石の間からほぼ完形の打製石斧が出土した。また，土器の口縁部5片，胴部18片，底部1片が出土した。

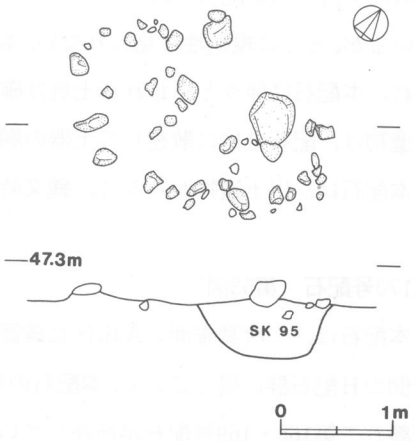
本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第110号配石（第51図）

本配石は，二次調査面のB4d$_8$区に確認され，調査区中央部にある第25号住居跡の覆土中に検出

され，Ｊ配石群に属している。

平面形は，長径2.54m・短径1.70mの楕円形を呈し，長径方向はＮ－77°－Ｅを指している。大小46個の石が配石されている。本配石の東側には，ほぼ円形をした径40cmほどの平坦な石が，土器の上部にふたをかぶせた状態で配石され，その下には深鉢形の土器が埋設されていた。土器は石の重みで口縁部がつぶれた状態であった。また，本配石の下からは，埋設土器を伴って埋設土器の掘り込みが検出されているが，覆土は，人為的に埋めもどされた状態を示している。埋設土器は，配石を構築する際に埋設されたものと思われる。埋設土器の掘り方の規模は，長径1.40m・短径1.15m，深さ40cmほどであり，埋設土器は，埋葬に関するものと考えられる。従って，本配石は埋葬施設を伴う配石遺構と考えられる。



第51図　第110号配石実測図

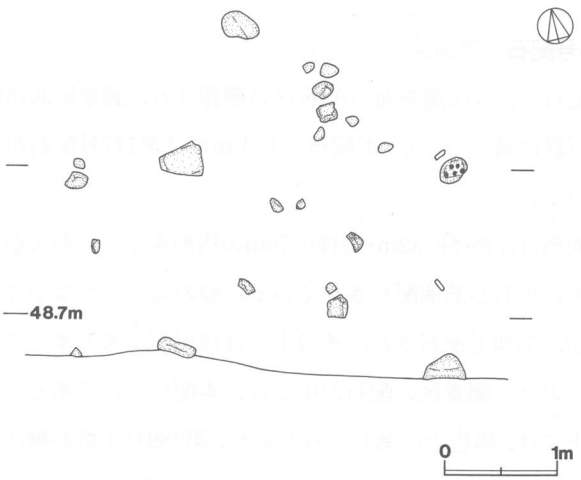
遺物は，配石全体に重なりあうようにして，土器の口縁部19片，胴部129片，底部４片とシカ・イノシシの骨片を少量出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第167号配石（第52図）

本配石は，二次調査面のB4 b_5区に確認され，調査区西側にあるＩ配石群に属し，南側２ｍには第165号配石が所在している。

平面形は，長径3.60m・短径1.60mの不整楕円形を呈し，長径方向はＮ－78°－Ｗを指している。大小21個の河原石が配されている。中央から西寄りに，長径30cm，厚さ10cmほどの平坦な長方形状の石が倒れた状態を呈しているが，もともとは立ててあったものと思われる。また，東端には，径25cmほ



第52図　第167号配石実測図

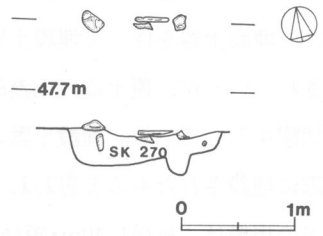
どの凹を持つ石が配石されている。大きな2つの石の中間2mほどには，こぶし大の石が配石されているが，とくに規則性は見られない。本配石は長径3.60mの広がりをもつ立石配石であると推定され，本配石に伴うと思われる土坑は確認できなかった。

遺物は，配石全体に散在して土器の胴部6片，底部1片を出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第170号配石（第53図）

本配石は，二次調査面のA4i_8区に確認され，調査区北西側のH配石群に属している。本配石の南側には，2mほど離れて第168・169号配石が所在している。



第53図　第170号配石実測図

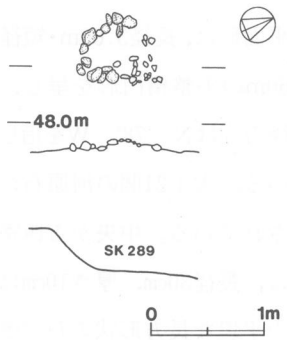
平面形は，東西方向に長さ約1m，幅20cmの帯状を呈し，長径方向はN—82°—Wを指している。東端と西端に径20cmの大きい石を配し，その石の間から長さ約30cmの石棒の破片がほぼ水平に倒れた状態で出土した。配石の下に黒色土の落ち込みがあり，第270号土坑が検出された。土坑の規模は，長径1.55m・短径1.30m，深さ70cmで円筒状の土坑である。底部から石が出土しており，墓壙と考えられる。従って，本配石に伴う土坑と思われる。

遺物は，石棒の他に，土器の口縁部2片，胴部55片，石錐1点が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第176号配石（第54図）

本配石は，二次調査面のA4e_6区に確認され，調査区北西側のH配石群に属している。本配石の北1mには第177号配石が所在している。



第54図　第176号配石実測図

平面形は，長径0.82m・短径0.70mの円形を呈し，卵大からこぶし大の小石が35個配石されている。形の同じような小さい石だけが，35個も配石され，その上，ほぼ円形にまとまって検出されたのは，調査区の配石の中では，本配石だけである。本配石の下には，黒色土の落ち込みがあり，第289号土坑が検出された。土坑の規模は長径2.15m・短径1.50m，深さ30cmで，鉢形状の土坑である。底部からこぶし大の石が数個出土しており，墓壙と考えられる。従って，本配石に伴う土坑と思われる。

遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部16片，胴部102片，底部４片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

表４　第二次調査面の配石一覧表

（１）

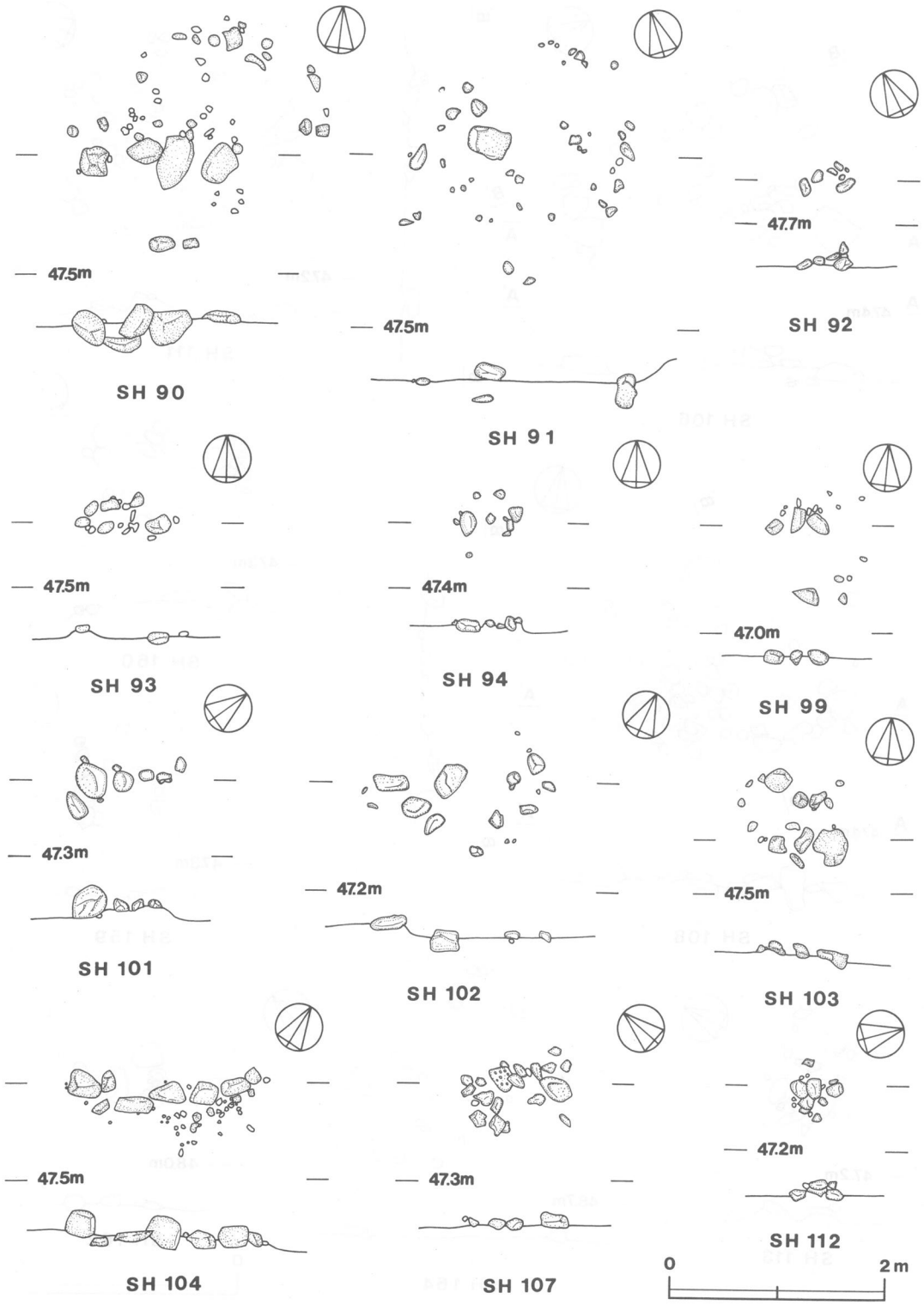
配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号
89	$B4e_0$	N-2°-W	楕円形	1.06×0.90	27	集石	K	土器片230点，石器3点	晩期中葉	45
90	$B5e_1$	N-37°-E	長方形	2.24×1.60	55	集石	K	土器片620点，石器6点		55
91	$B5d_1$		円形	2.20×2.00	44	集石	K	土器片1,089点，石器3点	晩期中葉	55
92	$B5d_1$	N-0°-	楕円形	0.50×0.30	7	集石	K	土器片３点		55
93	$B5d_2$	N-87°-W	楕円形	1.00×0.40	17	集石	K	なし，石器５点		55
94	$B5d_2$		円形	0.70×0.54	11	集石	K	土器片８点		55
96	$B4c_0$	N-14°-E	楕円形	0.54×0.40	7	組石	K	土器片384点	後期後葉	46
98	$B5d_2$	N-14°-E	その他（くの字形）	6.40×0.70	32	環状	K	土器片88点，石器3点		47
99	$B5e_2$	N-31°-W	台形	1.10×0.76	17	集石	K	土器片３点		55
100	$B5d_3$	N-35°-E	長方形	1.90×1.08	10	環状	K	土器片22点		48
101	$B5d_3$	N-17°-E	楕円形	1.15×0.50	9	立石	K	なし		55
102	$B5d_3$	N-75°-E	楕円形	1.80×1.00	16	集石	K	土器片90点，石器1点	後期後葉	55
103	$B5c_3$	N-65°-W	楕円形	1.10×0.75	18	集石	K	土器片60点，石器1点	後期後葉	55
104	$B5c_3$	N-68°-E	楕円形	1.80×0.80	49	集石	K	土器片60点		55
105	$B5f_2$	N-60°-E	不整楕円形	3.40×2.40	76	集石	K	土器片130点，石器6点	後期中葉	49
106	$B4c_9$	N-2°-W	不整楕円形	2.54×1.50	29	集石	J	土器片231点，石器3点	晩期前葉	56
107	$B4d_9$	N-54°-W	長方形	1.08×0.60	21	集石	J	土器片63点，石器2点		55
108	$B4d_8$	N-77°-W	楕円形	2.74×1.80	50	集石	J	土器片146点，石器2点	後期後葉	56
109	$B4d_8$	N-0°-	不整楕円形	1.40×1.30	48	集石	J	土器片24点，石器1点	後期後葉	50
110	$B4d_8$	N-77°-W	楕円形	2.54×1.70	46	集石	J	土器片152点	晩期前葉	51
111	$B4d_7$	N-0°-	不整楕円形	2.40×2.10	50	集石	J	土器片254点，石器5点	後期後葉	56
112	$B4d_8$		円形	0.60×0.50	14	集石	J	土器片28点		55
113	$B4c_8$	N-57°-W	楕円形	1.20×0.90	25	集石	J	土器片31点	後期後葉	56
159	$B4c_7$	N-0°	不整楕円形	1.10×0.90	12	集石	J	土器片47点，石器1点		56
160	$B4d_7$	N-74°-E	楕円形	1.60×1.20	22	集石	J	土器片50点		56
162	$B4d_5$	N-42°-E	三角形	0.90×0.50	7	集石	I	なし，石器２点		56
163	$B4d_4$		円形	0.30×0.30	1	立石	I	なし		57
164	$B4d_4$	N-82°-E	方形	1.90×1.05	13	集石	I	土器片17点，石器2点		56
165	$B4c_4$	N-54°-E	三角形	2.40×1.80	13	環状	I	土器片35点，石器5点		57
166	$B4c_4$	N-80°-W	楕円形	1.35×0.60	8	集石	I	土器片11点，石器1点		57

配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号
167	$B4b_5$	N-78°-W	不整楕円形	3.60×1.60	21	立石	I	土器片7点,石器1点		52
168	$A4h_7$	N-66°-W	三角形	2.06×1.70	39	集石	H	土器片325点,石器5点	SK-295を伴う	57
169	$A4j_8$	N-13°-W	方形	1.24×0.48	6	集石	H	土器片93点	SK-269を伴う	57
170	$A4i_8$	N-82°-W	長方形	0.92×0.18	4	集石	H	土器片57点,石器3点	SK-270を伴う	53
171	$B4i_9$		円形	0.70×0.48	3	集石	H	土器片8点, 石器1点		57
172	$A4i_8$	N-70°-W	楕円形	0.66×0.30	3	立石	H	土器片251点,石器2点	後期後葉	57
173B	$A4h_5$	N-3°-W	楕円形	1.10×0.70	24	集石	H	土器片126点	後期後葉	57
174	$A4f_7$	N-68°-W	不整楕円形	1.50×0.90	8	集石	H	土器片73点,石器1点		57
175	$A4f_6$	N-46°-W	楕円形	1.72×0.80	12	集石	H	土器片201点		57
176	$A4e_6$	N-47°-E	不整円形	0.82×0.70	35	集石	H	土器片122点,石器5点	SK-289を伴う 後期後葉	54
177	$A4e_7$	N-51°-E	楕円形	0.84×0.50	4	集石	H	土器片66点		57
178	$A4i_9$	N-65°-W	楕円形	1.26×0.44	3	組石	H	なし		57

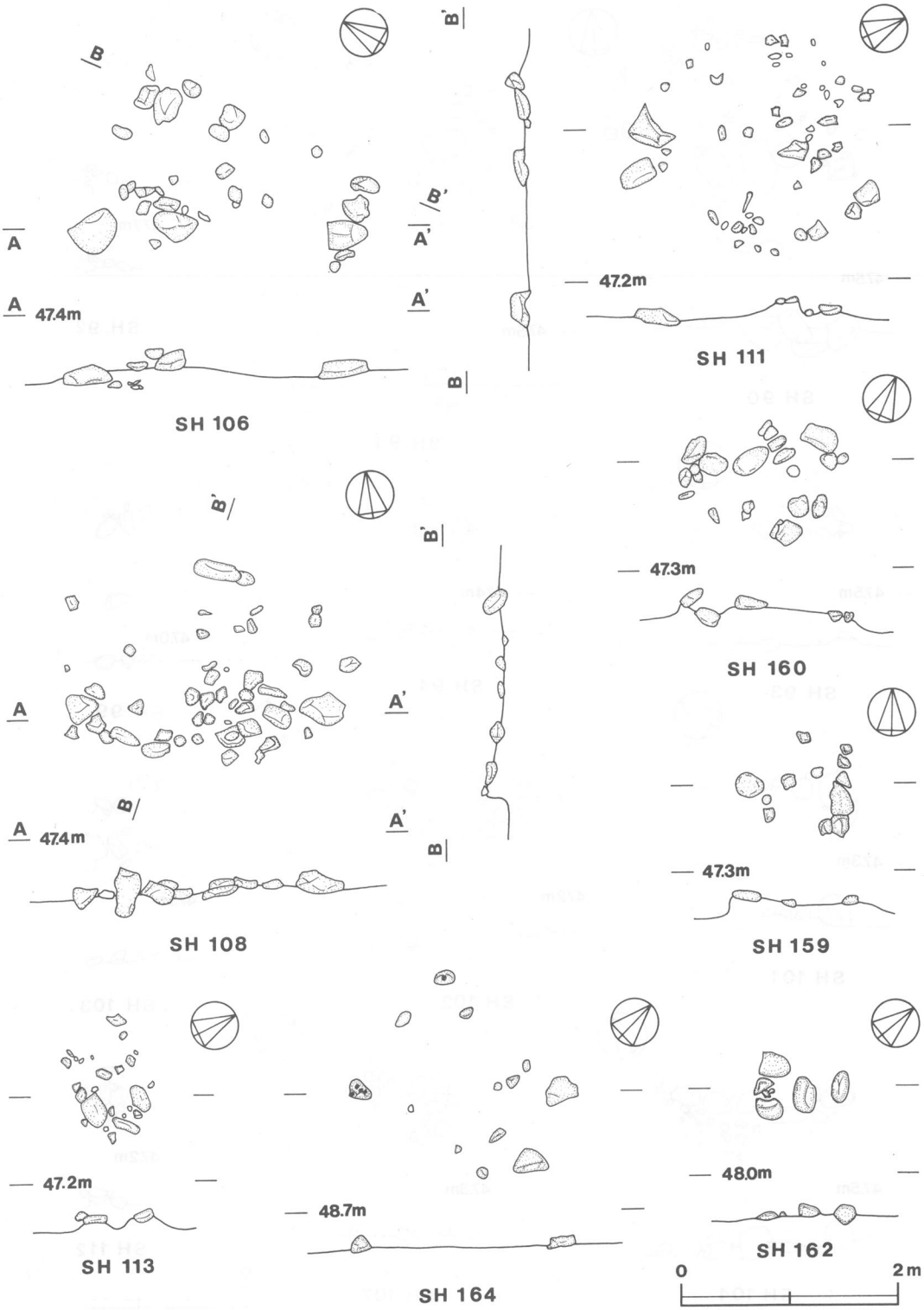
表5　第二次調査面出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第58図 1	香炉形土器	A 3.4 B (7.8) C (4.7)	胴部が大きく膨らみ「く」の字形を呈している。胴下部は無文帯で胴上部には三角形の切り込み孔を6か所配している。孔の周囲には，沈線を巡らし，縄文を施している。胴上部と下部の境には突帯を巡らし，大小の突起を配している。口縁部には双頭突起を4か所配している。底部は脚付き底と推定され，胴部と底部の境には隆帯を巡らし，隆帯上には縄文を施し，突起を4か所配している。	砂粒・長石・石英 雲母 良好 にぶい褐色	90% SH-108 P－826
2	浅鉢形土器	A (17.6) B 5.8 C 3.9	胴部は底部から直線的に外反して立ち上がり，口縁部で垂直ぎみに立ち上がる。口唇部に1条の沈線が巡っている。胴部文様帯には，磨消縄文による入組文と三叉文が施されている。底部外面は帯状の隆帯を環状に巡らせている。内面は丁寧なナデ整形である。	砂粒・長石・石英 雲母 良好 灰褐色	20% SH－89 P－134
3	深鉢形土器	B (7.5) C 3.9	胴部は外傾して立ち上がり，胴上半部を欠損している。無文土器でヘラ削りの痕がみられ，粗い作りである。底部は無文の平底である。	砂粒・長石・雲母 普通 にぶい橙色	40% SH-111 P－108

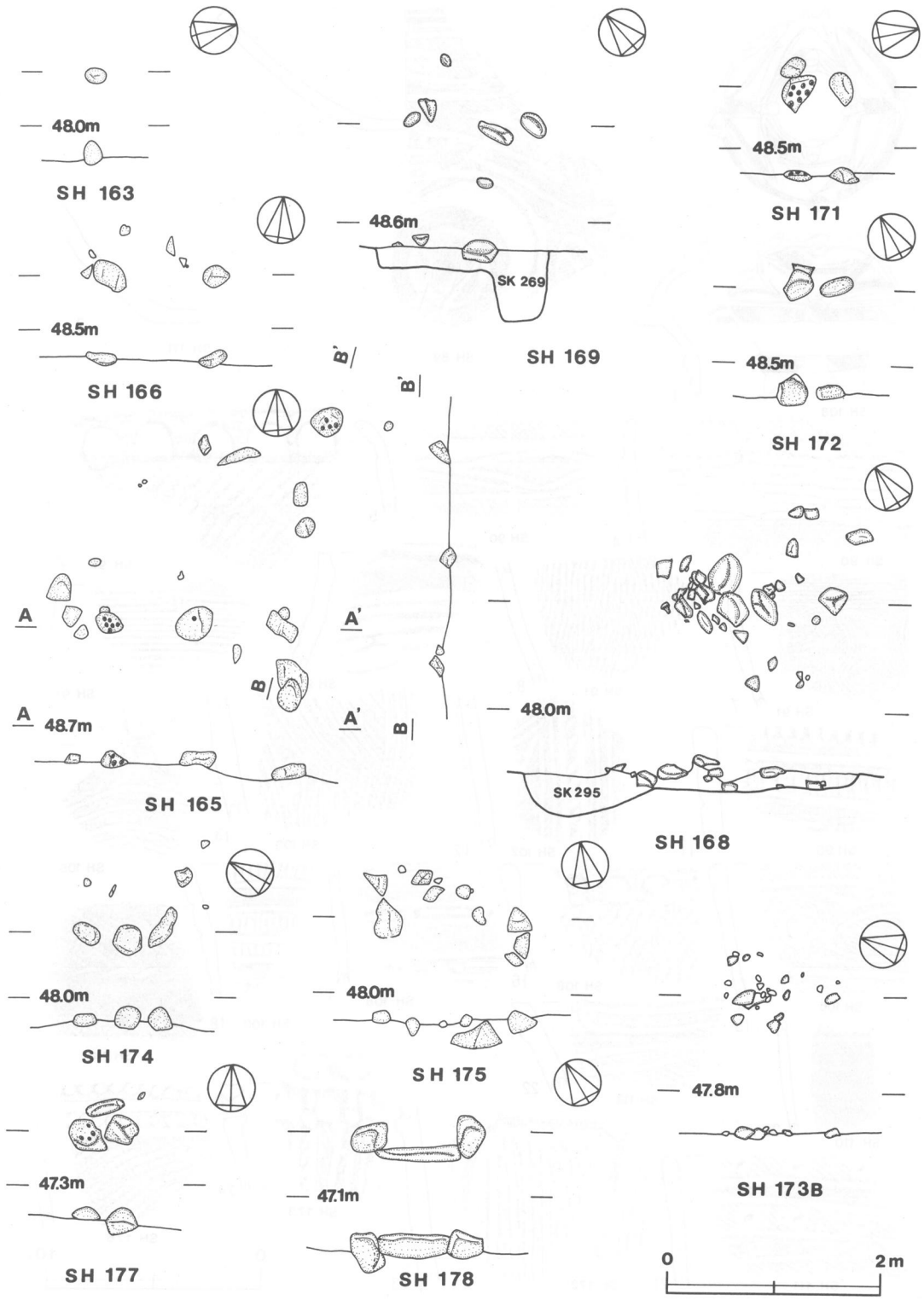
第58図4～25は，第二次調査面の配石から出土した縄文土器片の拓影図である。4は，口唇部に突起を有する口縁部片である。口縁直下に縄文を施し，以下には幅の広い凹帯に浮線工字文を描いている。5は，口縁を欠損している口縁部片である。2条の沈線を巡らし，沈線間に2条の沈線により菱形文を施している。6は，口縁に隆帯を貼付した複合口縁部片である。隆帯には，指圧による押圧が加えられている。7は，口縁に横位の沈線を施し，以下に櫛歯状施文具による波状文を垂下させている口縁部片である。8は，胴部片で，縦位の撚糸文を施している。9は，口唇に沈線を巡らしている口縁部片で，口縁直下を無文帯とし，以下に太い沈線を横位に施して



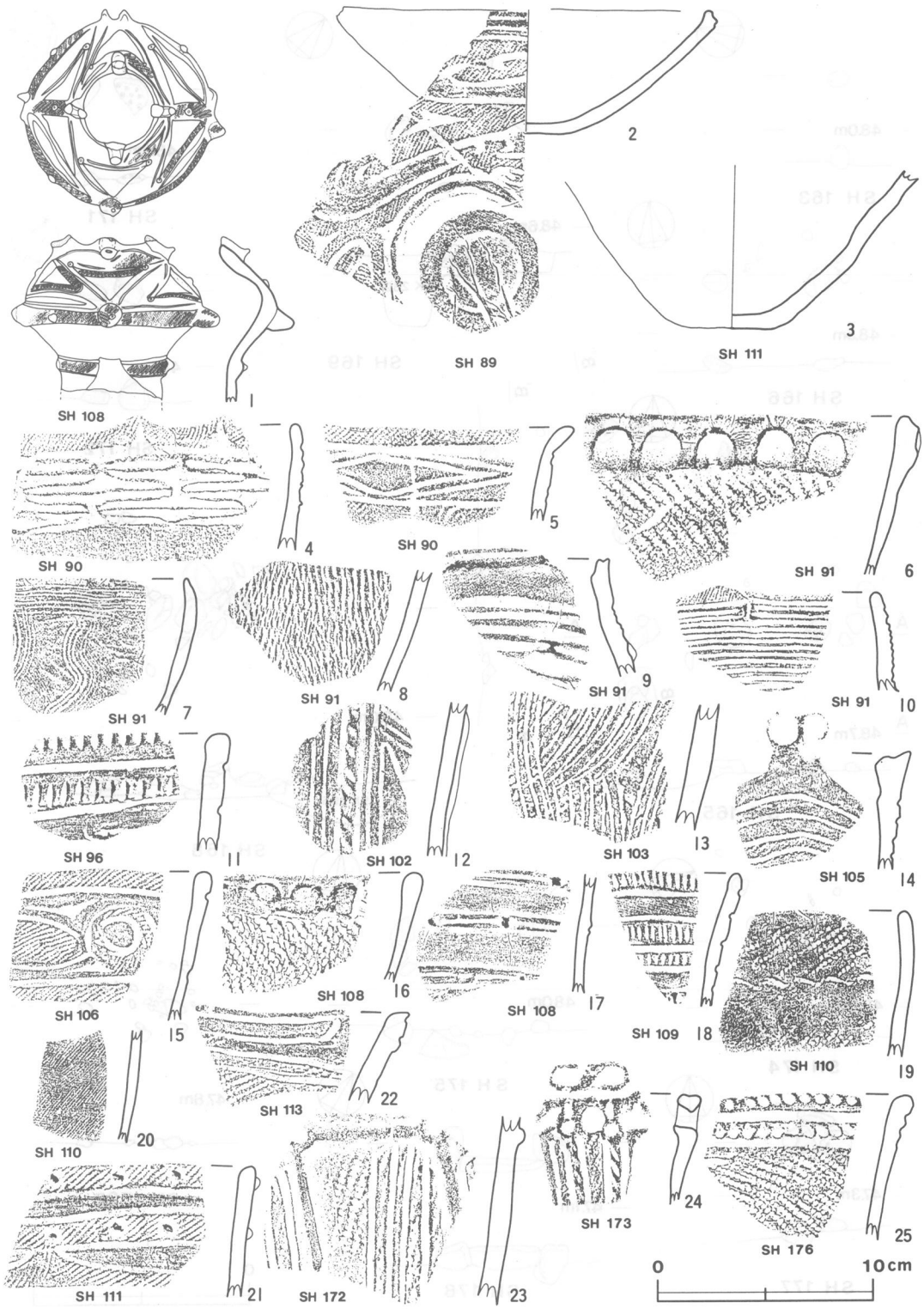
第55図　第二次調査面配石実測図(1)



第56図　第二次調査面配石実測図(2)



第57図　第二次調査面配石実測図(3)



第58図　第二次調査面配石出土土器実測図・拓影図

いる。沈線上に瘤を貼付している。10は，山形突起を有する小波状の口縁部片である。口縁には縄文を施し，以下には縄文地文上に横位の平行沈線文を描いている。11は，口縁部片で，２条の沈線を巡らし，沈線間には，キザミ目を巡らしている。12は，胴部片で，キザミ目を有する隆帯を垂下させ，縦位，斜位の平行沈線を施している。13は，胴部片で縦位の沈線を弧状に描いている。14は，口縁に突起を有する波状口縁部片である。突起上には「Ｓ」字状文を貼付している。内面には，１条の沈線を巡らし，外面には波状に沿って，平行沈線を施している。15は，口縁部片で，２条の沈線を巡らし，沈線間には，縄文地文上に曲線的モチーフを描き，磨り消しを施している。16は，幅の広い隆帯を貼付した複合口縁部片で，隆帯上に指圧による押圧を加えている。17は，胴部片で，２条の隆帯を平行に巡らし，豆粒大の突起を貼付している。18は，口唇部に瘤状突起を貼付した口縁部片である。横位の平行沈線により，区画を施し，無文帯とキザミ目を施した文様帯を作出している。19は，平縁の口縁部片で，単節縄文を施した上に結節縄文を施文している。20は，胴部片で，細かい縄文を施文している。21は，平縁の口縁部片で，縄文地文上に沈線による区画をし，区画内に磨り消しを施している。口縁部の帯状の縄文の上には豆粒大の突起を貼付している。22は，波状口縁部片で，沈線により長楕円区画を施し，口縁と胴部は１条の隆帯によって区分している。隆帯直下に２条の沈線を巡らし，以下に縄文を施文している。23は，胴部片で，隆帯による区画を施し，区画内には縦位の平行沈線を垂下させている。24は，突起を貼付した口縁部片である。突起上には，円形刺突を施し「Ｓ」字状文を貼付している。突起下には，孔を穿ち，キザミ目を有する２条の隆帯を垂下させている。25は，棒状工具によるキザミ目を施している口縁部片である。口縁直下には２条の沈線を巡らし，沈線内には棒状工具による刺突を施している。以下には縄文を施文している。

３ 第三次調査面の配石群（第261図）

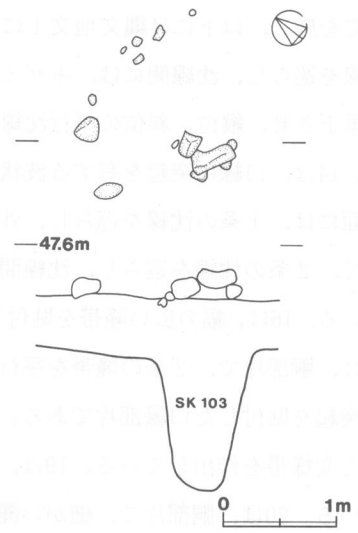
第三次調査面では，中央部第二次調査面下層のＪ配石群の下層にＬ配石群，同じくＫ配石群の下層にＭ配石群を確認した。Ｌ配石群は，南北８ｍ，東西８ｍほどの範囲に広がり，上層のＪ配石群と同じで，第25号住居跡内にすっぽりと入った状態で検出された。Ｍ配石群は，Ｌ配石群の南東６ｍほどに，南北８ｍ，東西６ｍの範囲で検出された。

第三次調査面から検出した個別の配石は，Ｌ配石群７基，Ｍ配石群４基で合計11基である。

第117号配石（第59図）

本配石は，三次調査面の$B4d_8$区に確認され，調査区中央部にある第25号住居跡の中に検出され，Ｌ配石群に属している。

平面形は長径1.9m・短径1.4mの不整楕円形を呈し，長径方向はN—80°—Eを指している。大小14個の石が配されている。南側の配石は，大きい石の下に数個の小さい石を置き，上の石を支えるような状態で配されている。北側には，こぶし大の石が5個配されているが，特に規則性はみられない。配石下には黒色土が数cm堆積しており，その下には第103号土坑が検出された。土坑の規模は，長径1.0m・短径0.84m，深さ120cmの円筒状の土坑である。本配石からは，焼けて崩れやすくなっている獣骨片が多量に出土し，また，第103号土坑の覆土には骨粉が多量に含まれている。配石下の黒色土と第103号土坑の覆土の状態からみて，第103号土坑は，墓壙と考えられ，本配石に伴う土坑であると考えられる。本配石は，第25号住居跡の覆土下層に検出された配石であり，住居跡の廃絶後，配石されたものと考えられる。従って，本配石は，住居跡よりも新しい遺構である。



第59図　第117号配石実測図

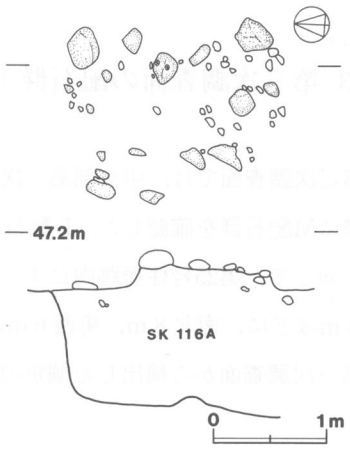
遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部12片，胴部39片，底部3片が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第123号配石（第60図）

本配石は，三次調査面のB5f$_1$区に確認され，調査区中央部にある第15号住居跡の南側3mほどに検出され，M配石群に属している。

平面形は，長径2.1m・短径1.6mの楕円形を呈し，長径方向はN—24°—Wを指している。大10個，小42個の河原石が配石されている。本配石は，楕円形に大きい石を配石し，小さいこぶし大の石を，大きい石の周囲や内側に配石しているが，特に規則性はみられない。中央から東寄りの径30cmの大きな石は，凹石で凹部を上に向けて配石されている。配石の下には，黒色土が20～30cm堆積し，下には第116—A号土坑が検出された。土坑の規模は，長径3.6m・短径3.0m，深さ80cmで鉢形状の土坑である。底部から人頭大の石が出土しており，墓壙と考えられる。土坑の覆土には骨粉が多量に含まれてお



第60図　第123号配石実測図

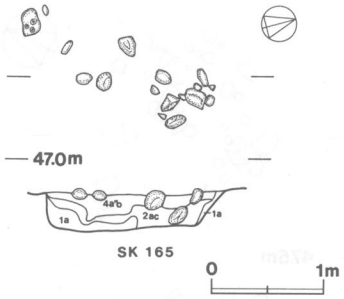
り，また覆土が人為的に埋めもどされた状態を示していることから，第116—A号土坑は本配石に伴う土坑であると考えられる。

遺物は，配石全体に重なり合うように土器の口縁部57片，胴部291片，底部15片と石鏃2点，骨角器（つり針）1点が出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

第161号配石（第61図）

本配石は，三次調査面のB4c_7区に確認され，調査区中央部にある第25号住居跡の中に検出され，L配石群に属している。



第61図　第161号配石実測図

平面形は，長径1.9m・短径0.6mの長楕円形を呈し，長径方向はN—32°—Eを指している。大小17個の石が配石されている。南端に配石されている径25cmほどの石は，本配石の中では最大の石であり，火を受けた上に風化してもろくなった凹石である。配石の下には，黒色土の落ち込みがあり，第165号土坑が確認された。土坑の規模は，長径1.8m・短径1.0m，深さ30cmほどで鉢形状の土坑である。土坑の下には，第25号住居跡の柱穴と思われる深さ1.5mほどの落ち込みがある。従って，第25号住居跡が廃絶後，柱穴の上部に第165号土坑を構築し，その上に本配石遺構が造営されたものと考えられる。本配石の間や土坑の覆土中から獣骨片や骨粉が検出されていることから，第165号土坑は，本配石に伴う土坑であり，墓壙であると考えられる。

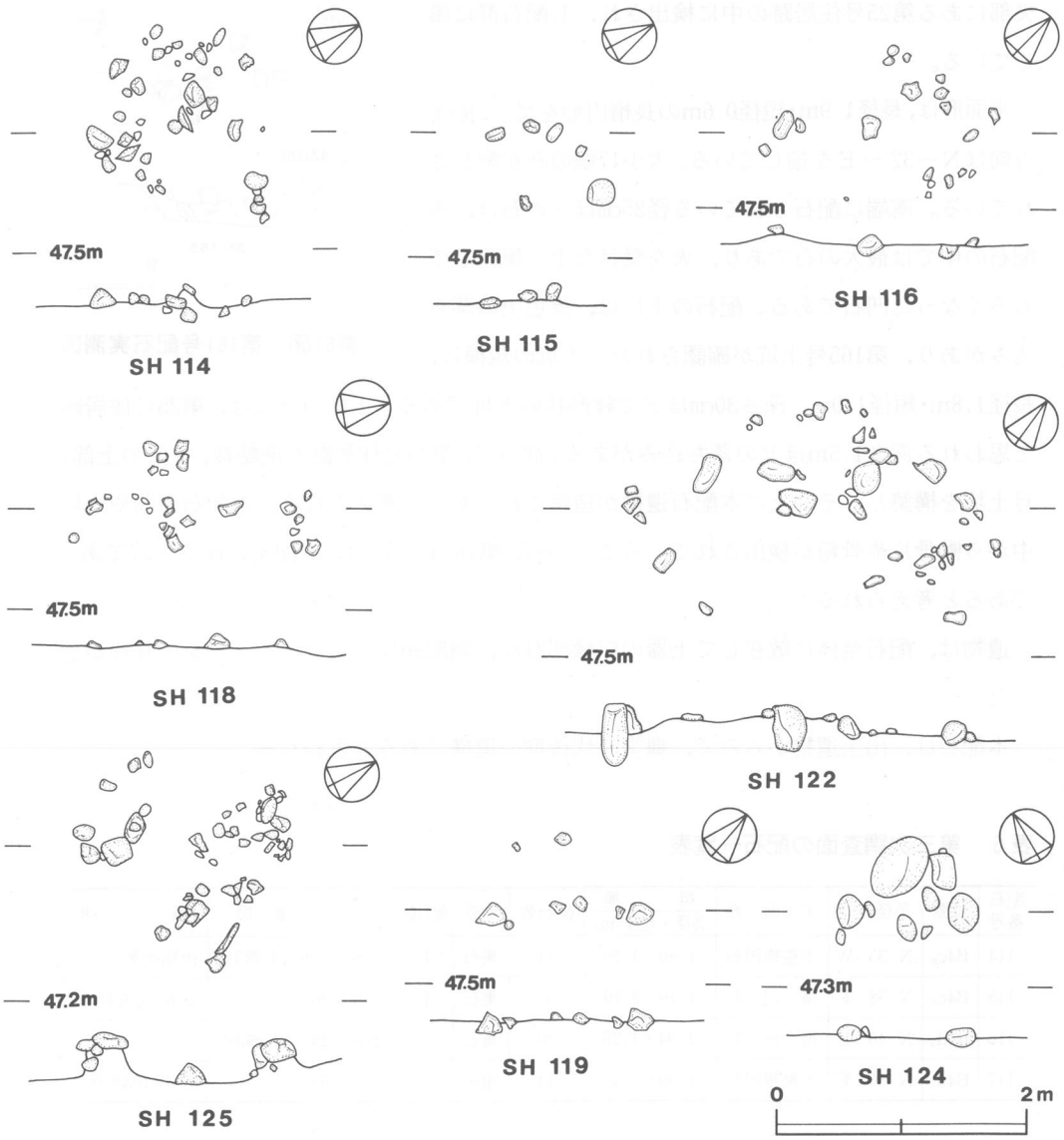
遺物は，配石全体に散在して土器の口縁部21片，胴部96片とシカ・イノシシの骨片が少量出土した。

本配石は，出土遺物からみて，縄文時代後期の遺構であると思われる。

表6　第三次調査面の配石一覧表　（1）

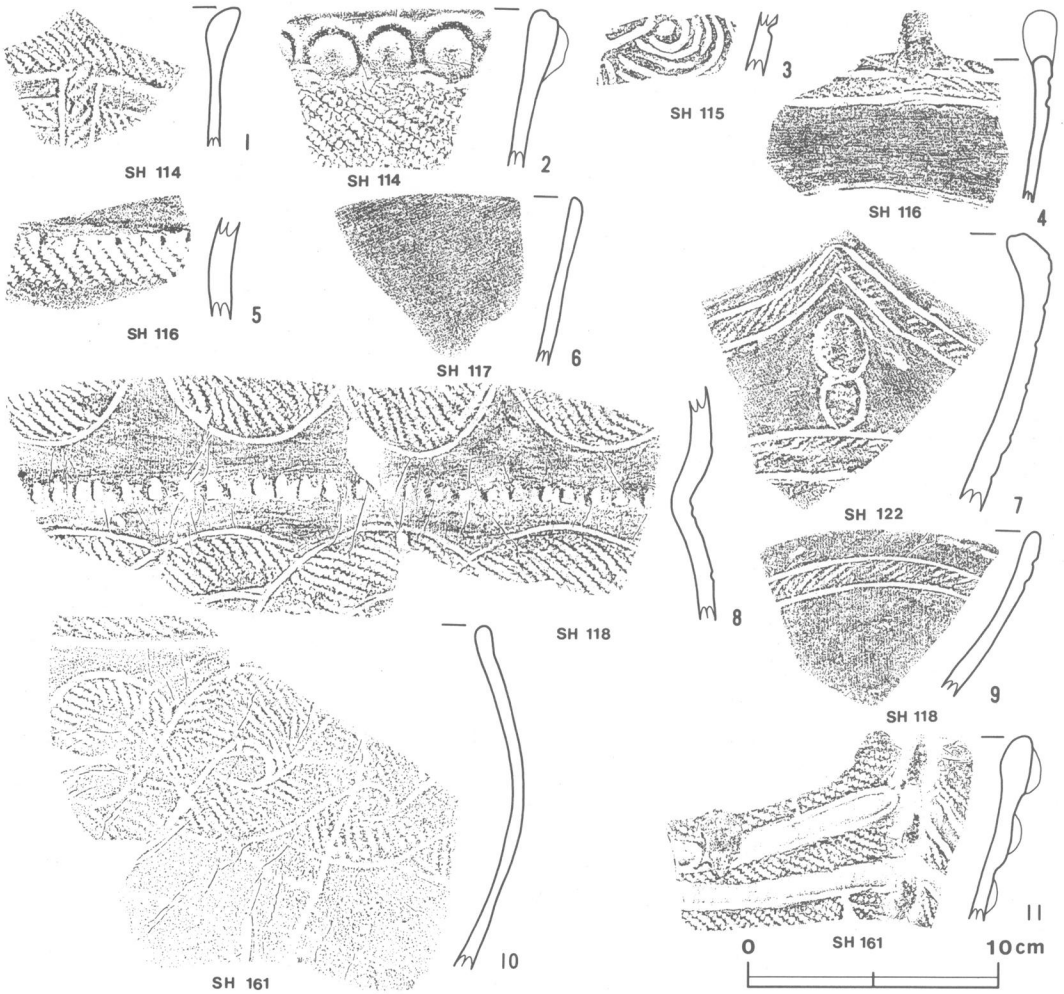
配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号
114	B4c_8	N-35°-W	不整楕円形	1.80×1.20	44	集石	L	土器片210点，石器3点	後期後葉	62
115	B4c_8	N-58°-E	楕円形	1.16×0.70	6	集石	L	土器片26点	SK-92を伴う	62
116	B4d_9	N-40°-E	楕円形	1.94×1.26	20	集石	L	土器片39点，石器3点		62
117	B4d_8	N-80°-E	不整楕円形	1.90×1.40	14	組石	L	土器片54点	SK-103を伴う	59

配石番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	配石数	形態	配石群	出土遺物	備考	図版番号
118	B4d$_8$	N-13°-E	長方形	2.00×0.90	26	集石	L	土器片37点	後期後葉	62
119	B4e$_8$	N-46°-E	三角形	1.44×0.70	8	集石	L	土器片12点	SK-96を伴う	62
122	B5d$_1$	N-73°-E	楕円形	3.10×1.70	44	集石	M	土器片323点,石器1点		62
123	B5f$_1$	N-24°-W	楕円形	2.10×1.60	52	集石	M	土器片363点,石器7点	SK-116-Aを伴う晩期中葉	60
124	B5f$_1$	N-67°-W	三角形	1.16×0.80	10	集石	M	土器片33点		62
125	B5e$_1$	N-57°-E	台形	1.60×1.60	52	集石	M	土器片395点,石器4点	SK-162を伴う	62
161	B4c$_7$	N-32°-E	楕円形	1.90×0.60	17	集石	L	土器片117点,石器4点	SK-162を伴う後期後葉	61



第62図　第三次調査面配石実測図

第63図１～11は，第三次調査面の配石から出土した縄文土器片の拓影図である。１は，瘤状突起を有する波状口縁部片である。縄文地文上に横位・縦位の沈線により区画をし，区画内には磨り消しを施している。２は，口縁に，幅の広い隆帯を貼付し，指圧による押圧を加えた複合口縁部片である。３は，胴部片で，刺突文を中心にして沈線による同心円文を描いている。４は，口唇に突起を有する小波状口縁部片である。口縁部には２条の沈線を巡らし沈線間に帯状に縄文を施している。以下は無文帯である。５は，口縁を欠損している口縁部片である。半截竹管による刺突を施している。６は，無文の口縁部片である。７は，波状口縁部片で，２条の沈線により帯状縄文を区画している。波頂部下の無文帯には，「８」字状文を描いている。８は，「く」の字状に括れを呈する胴部片である。括れ部には棒状工具により刺突文を巡らして，胴部文様帯には沈線により曲線的モチーフを描き，区画内には縄文を施文している。９は，口縁部片で，２条の沈



第63図　第三次調査面配石出土土器拓影図

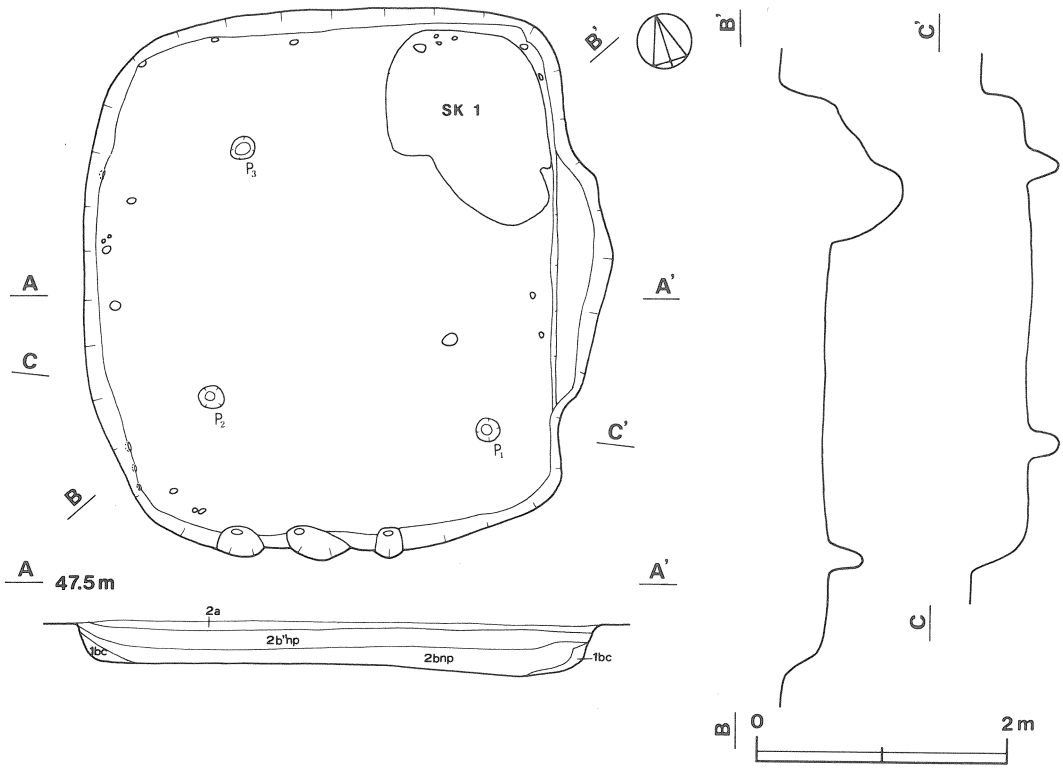
線を巡らし，沈線間に縄文を施文し，以下を無文帯としている。10は，口縁に隆帯を貼付した複合口縁部片で，口縁には，縄文を施文している。胴部文様帯には，2条の沈線により曲線的モチーフを描き，区画内には縄文を施している。11は，双頭突起を貼付した波状口縁部片で，帯状の磨消縄文を施している。波頂部から下へ瘤を貼付している。

第３節　竪穴住居跡

第１号住居跡（第64図）

本跡は，調査区南部のB4f$_7$区を中心に確認された住居跡で，第８号住居跡の南西側約２mに位置している。本跡内の北東コーナー部には，第１号土坑が重複しているが，本跡の床面調査中に確認された土坑であり，本跡は，土坑よりも新しい住居跡と考えられる。

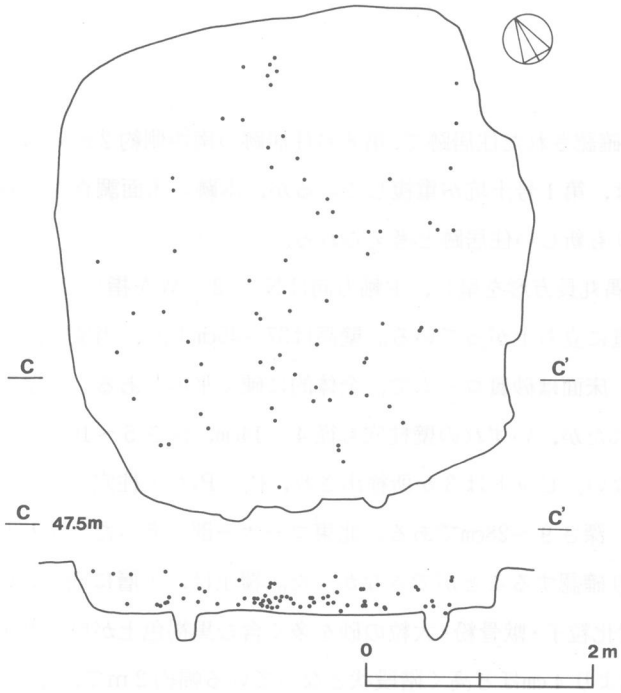
平面形は，長軸4.40m・短軸4.20mの隅丸長方形を呈し，主軸方向はN－72°－Wを指している。壁はざらざらした砂質で硬く，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は37～45cmあり，当遺跡内の同時期の住居跡の中では高い方である。床面は砂質ロームで，全体的に硬く平坦である。東壁を除く壁下には，壁柱穴が16か所検出されたが，いずれの壁柱穴も径４～14cm，深さ５～10cmほどで小規模のものである。炉は検出されない。ピットは３か所検出され，P_1～P_3が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径16～22cm，深さ９～28cmである。北東コーナー部にあったと思われる主柱穴は，第１号土坑と重複しており確認することができなかった。覆土は，上層に細かい砂を多量に含む暗褐色土，中・下層には炭化粒子・獣骨粉・大粒の砂を多く含む黒褐色土が自然堆積している。東壁の中央部に，本跡の床面より４cmほど高く階段状となっている幅約２mで，東側へ



第64図　第１号住居跡実測図

約40cm張り出した部分があり，ここに出入口部の施設があったものと考えられる。

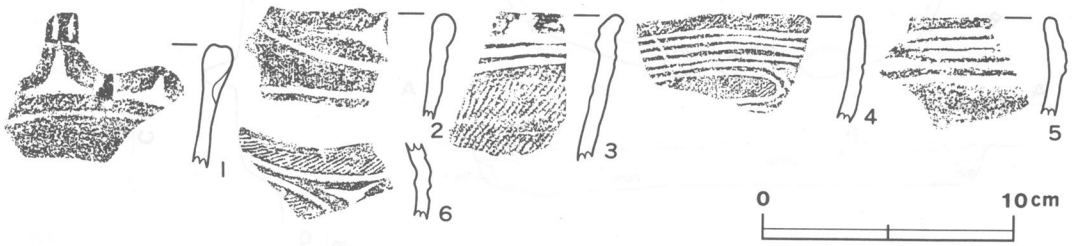
遺物は，住居跡の全域にわたり，覆土から縄文土器の口縁部片151片・胴部片1,087片・底部片63片，石器20点が出土している。本跡の時期は，出土遺物や住居跡の形態から縄文時代晩期の住居跡と思われる。



第65図　第1号住居跡遺物出土状況図

出土土器

第66図1～6は，第1号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～5は口縁部片で，1は，突起を有する小波状口縁を呈し，波頂部にはキザミ目を，波頂部下には三叉文を施し，以下に1条の沈線を巡らしている。2は，三叉文が描かれている破片で，三叉文の下位に2条の沈線が施されている。3は，3条の沈線を巡らし，沈線より下位には縄文を施文し，口縁内面には2条の隆帯を貼付している。4は，縄文地文上に横位に6条の平行沈線を巡らしている。5は，5条の平行沈線を巡らしているが，磨滅が著しく，文様は不明瞭である。6は，胴部片で縄文地文上に沈線による帯状縄文を区画し，区画外には磨り消しを施し，三叉文を描いている。

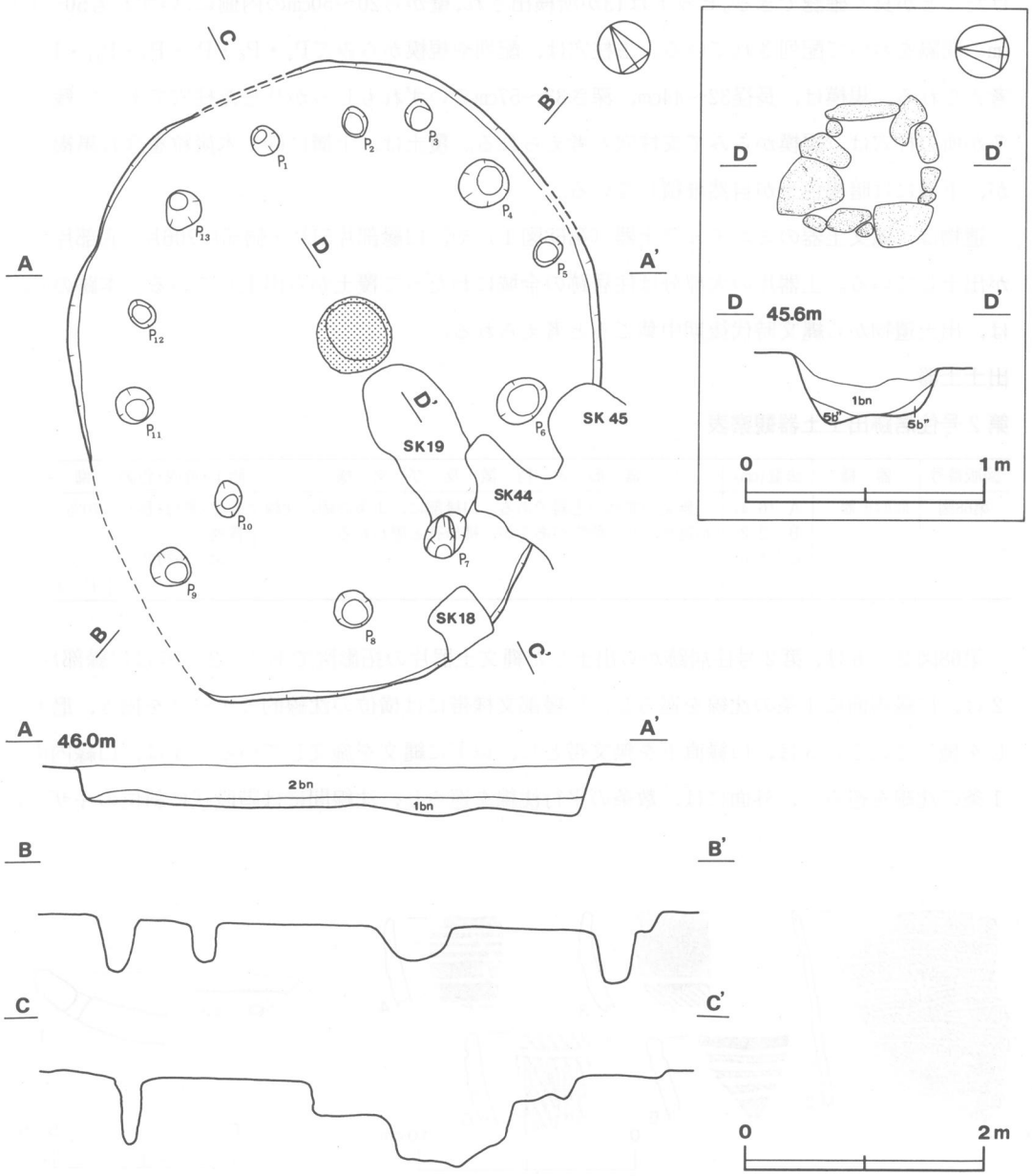


第66図　第1号住居跡出土土器拓影図

第２号住居跡（第67図）

本跡は，調査区北東部のB5c$_8$区を中心に確認された住居跡で，第３号住居跡の北西側１mに位置している。本跡内の南側には，第18・19・20号土坑が重複し，さらに，本跡よりも新しい第44・45号土坑によって，南東壁が切られている。

平面形は，長径5.45m・短径4.33mの楕円形を呈し，長径方向はN－49°－Eを指している。壁は，ローム粒子を多量に含む暗褐色土で遺存状態が悪いが，北西壁は，比較的良好に残存しており，



第67図　第２号住居跡実測図

壁高は10～21cmで，ほぼ垂直に近い状態で立ち上がっている。床面は，砂質ロームで軟弱であるが，全体的に平坦である。炉は中央からやや東寄りに位置し，平面形は一辺が70cmほどの方形を呈する大型の炉で，床面を約30cm皿状に掘り込み，大小12個の石で構築した「石組炉」である。炉石は小さいもので大人のこぶし大，大きいものは長さ約90cmのほぼ長方形の石を使用しており，平らな部分を内側に向けて組み込んでいる。炉内には，砂・木炭粒を含むにぶい褐色土が堆積している。炉床は硬く焼けており，また，組み込まれた石は，部分的に赤味をおびており，火を受けたことが良く確認できる。ピットは13か所検出され，壁から20～50cmの内側に，いずれも50～100cmの間隔をおいて配列されている。主柱穴は，配列や規模からみてP_4・P_6・P_7・P_9・P_{11}・P_{13}と考えられる。規模は，長径32～44cm，深さ33～57cmでいずれもしっかりした柱穴である。残りの7か所の柱穴は，規模からみて支柱穴と考えられる。覆土は，上層に砂や木炭粒を含む黒褐色土が，下層には暗褐色土が自然堆積している。

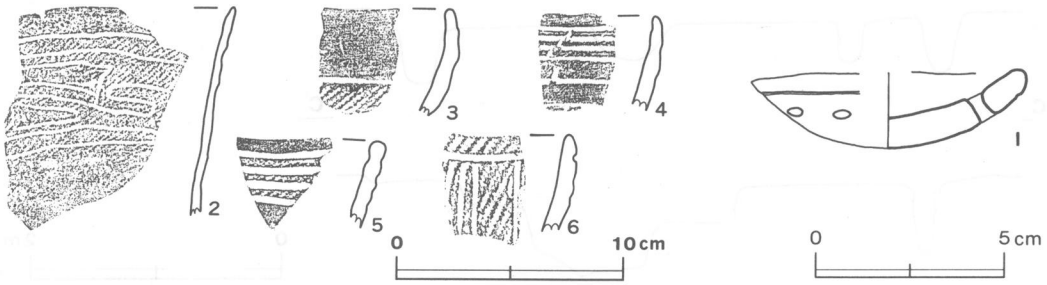
遺物は，縄文土器のミニチュア土器（第68図1）や，口縁部片51片・胴部片206片・底部片15片が出土している。土器片の大部分は住居跡の全域にわたって覆土から出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期中葉ごろと考えられる。

出土土器

第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第68図 1	皿形土器	A (6.4) B 2.2 C 1.0	無文の皿状の土器である。口縁部に，1条の細い沈線が巡り，2か所穴があるが，補修孔と思われる。	砂粒・雲母・長石 普通 にぶい黄橙色	70% P－163

第68図2～6は，第2号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。2～6は口縁部片で，2は，口縁内面に1条の沈線を巡らし，口縁部文様帯には横位の沈線的モチーフを描き，磨り消しを施している。3は，口縁直下を無文帯とし，以下に縄文を施文している。4は，口縁内面に1条の沈線を巡らし，外面には，数条の平行沈線を巡らし，沈線間には階段状に斜位のキザミ目

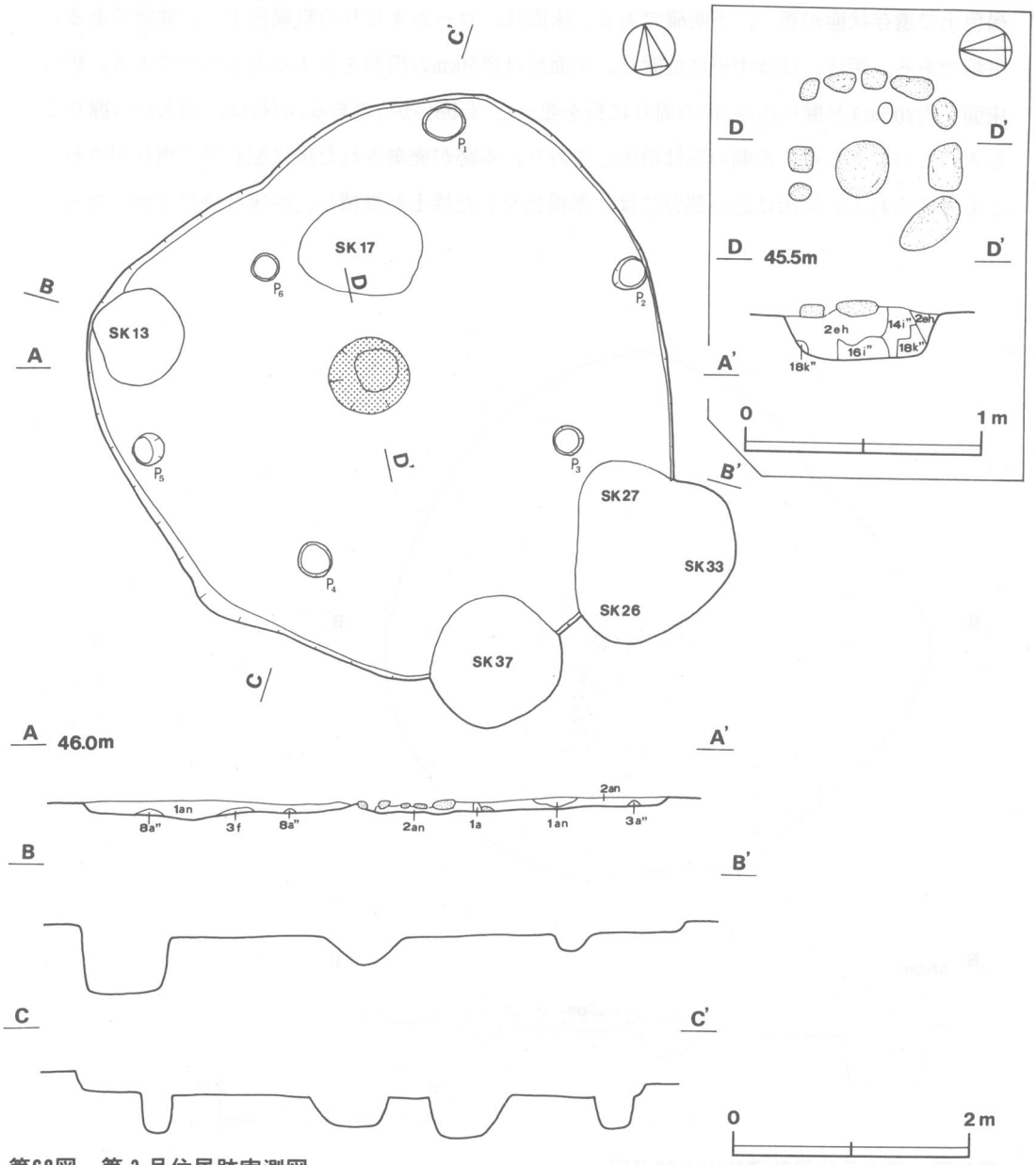


第68図　第2号住居跡出土土器実測図・拓影図

を施している。5は，口縁内面に1条の沈線を巡らし，外面には，縄文地文上に，数条の平行沈線を施している。6は，縄文地文上に，1条の沈線を横位に巡らし，以下に平行沈線を垂下させている。

第3号住居跡（第69図）

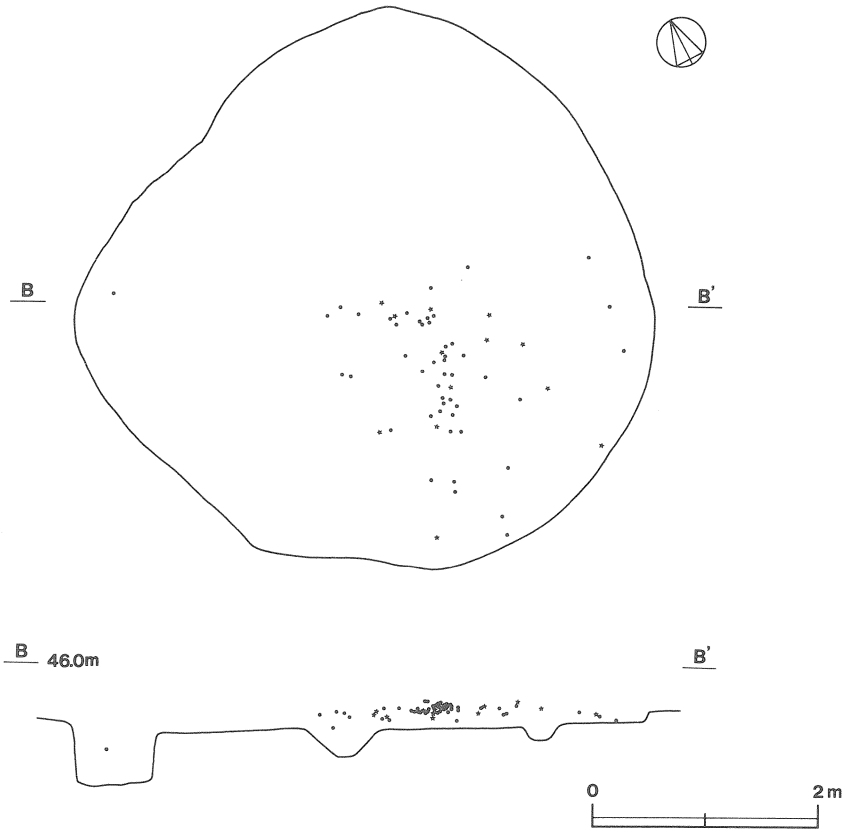
本跡は，調査区北東部のB5d$_9$区を中心に確認された住居跡で，第2号住居跡の東側1mに位置している。本跡内の西壁際に第13号土坑，中央の炉の下に第49号土坑，炉の北50cmに第17号土坑



第69図　第3号住居跡実測図

が重複し，さらに，南側から南東側には第37・26・27・33号土坑が壁を切って重複している。本跡と重複している土坑との新旧関係をみると，炉の下の第49号土坑は，土坑の覆土上部に炉が掘られており，第13・17号土坑は，覆土上面が硬く踏みかためられ，本跡の床として使用した状態が確認されたことから本跡よりも古い遺構であると思われる。また，第37・26・33号土坑は，本跡の壁を切って構築されていることから，本跡よりも新しい遺構であると考えられる。

平面形は，径4.70mの円形を呈している。壁は，北壁から東壁は遺存状態が良く，壁高は12～14cmで，ほぼ垂直に近い状態で立ち上がり，西壁は，やや傾斜して立ち上がっている。南壁は，暗褐色土で遺存状態が悪く，不明確である。床面は，ロームまじりの暗褐色土で，軟弱であるが，平坦である。炉は，ほぼ中央に位置し，平面形は径50cmの円形を呈する大きな炉である。炉は，床面を約20cmほど掘り込み，炉の周りに石を並べた「石囲い炉」である。炉石は，卵大から握りこぶし大のものであるが，西側の石は消失しており，本跡が廃棄された後に配石等に再利用されたことも考えられる。炉床に近い部分には，赤褐色をした焼土が堆積し，炉床は焼けて硬くなってい



第70図　第３号住居跡遺物出土状況図

ることから，かなり使用された炉であることがうかがえる。ピットは，6か所検出され，配列からみていずれも主柱穴と考えられる。規模は，長径24～36cm，深さ12～40cmで，P_5が特に深いが，他はほぼ同じ深さである。覆土は，自然堆積の状態を示し，上層には砂や木炭粒を含む黒褐色土が，下層には暗褐色土が堆積している。

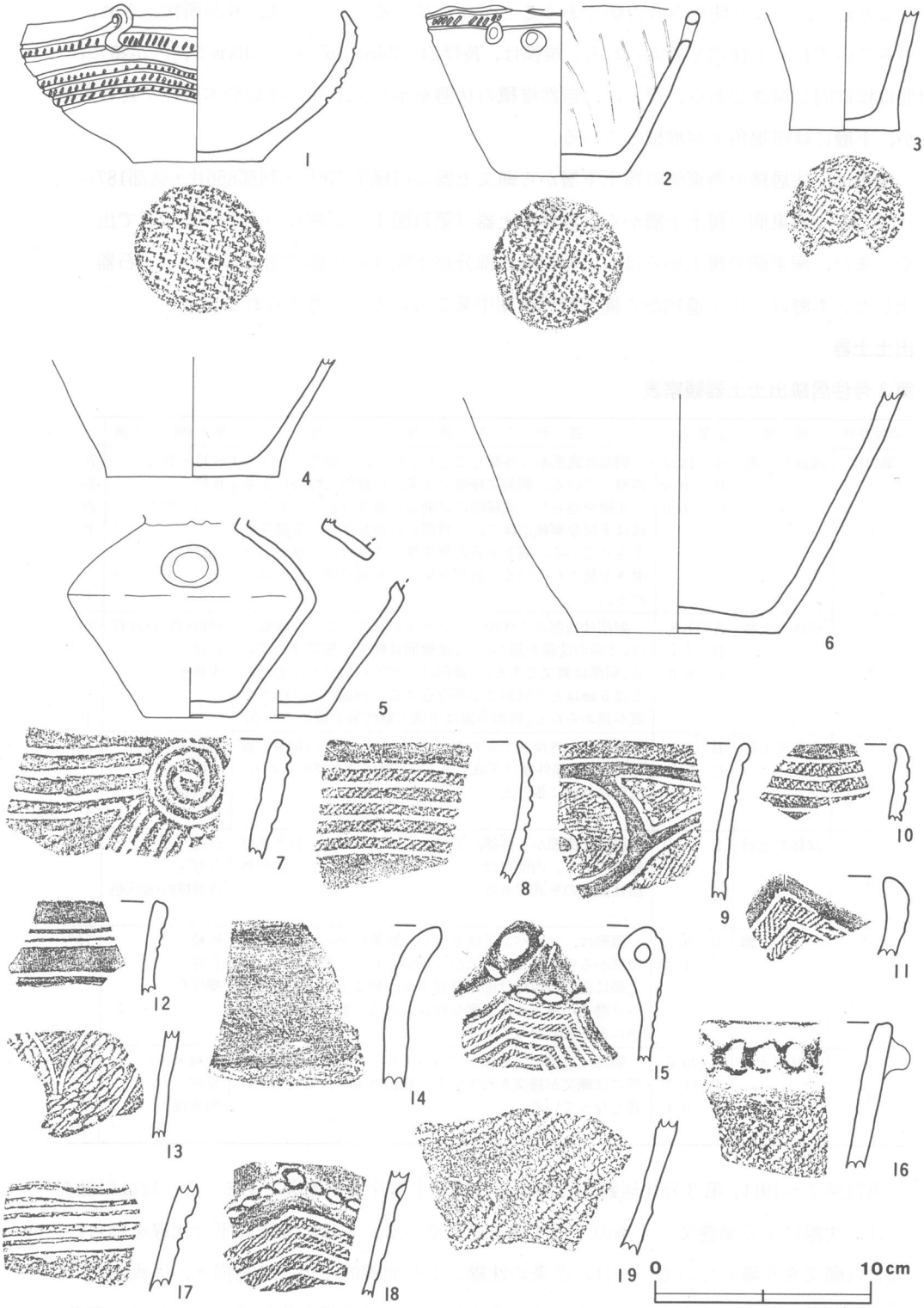
遺物は，住居跡の南東側の覆土下層から縄文土器の口縁部216片・胴部856片・底部187片が出土している。南東側の覆土下層から，浅鉢形土器（第71図1）が押しつぶされた状態で出土している。また，南東側の覆土からは，土偶の顔の部分が下向きの状態で出土している。石器は5点出土した。本跡は，出土遺物から縄文時代後期中葉ごろのものと考えられる。

出土土器

第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第71図 1	浅鉢形土器	A　14.7 B　6.9 C　6.0	胴部は底部から外傾して立ち上がり，口縁部で大きく内彎している。胴部文様帯に4条，口縁部文様帯に2条の沈線を巡らし，沈線間には縄文が施文されている。口縁は平坦な単純口縁で，口唇部から逆S字形の隆帯を垂下させている。胴下半分の無文帯と内側は，丁寧なヘラ磨きが施されている。底部外面は，平底で網代痕がみられる。	砂粒・雲母 良好 にぶい橙色	70% 胴部に一部スス付着 P－112
2	深鉢形土器	A(11.8) B　7.7 C　6.0	胴部は底部から外傾して立ち上がっている。口縁部には，2条の沈線を巡らして，沈線間は縄文が施文されている。胴部は無文である。口縁部に二次的にあけたと思われる径5㎜ほどの穴が2か所存在する。内面にヘラ削りの痕が認められる。底部外面は平底で網代痕が認められる。	砂粒・雲母・長石 良好 浅黄橙色	70% P－144
3	深鉢形土器	B　(5.5) C　5.2	底部から外反して立ち上がっている。無文の粗製土器である。底部外面は平底であるが、網代痕が認められる。底部は外側に張り出している。	砂粒・雲母 良好 褐灰色	30% P－154
4	深鉢形土器	B　(5.6) C　8.0	胴部は底部から外傾して立ち上がっている。胴下部は無文である。内面にはヘラナデが施されている。底部外面は無文の平底である。	砂粒・石英 良好 浅黄橙色・褐灰色	20% P－145
5	注口土器	B　(9.3) C　4.2	器形は，ソロバン玉状を呈し，頸部に至る。口縁部は頸部から外傾して立ち上がっているものと思われる。胴上部に注口の取付け部が存在する。無文土器であるが，ヘラ磨きが施され，丁寧な作りである。底部外面はわずかにあげ底となっている。	砂粒 良好 褐灰色	70% P－28
6	深鉢形土器	A(20.5) B(11.3) C　9.4	胴部は底部から外傾して立ち上がっている。胴部文様帯には縄文が施文されている。底部外面は，無文のあげ底となっている。	砂粒・長石 良好 明赤褐色	30% P－143

第71図7～19は，第3号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。7～12は口縁部片で，7は，沈線による渦巻文と4条の平行沈線を描いている。8は，6条の平行沈線を巡らし，沈線間には縄文を充塡している。9は，2条の沈線により曲線的モチーフを描き，区画内には，竹管による刺突を施し，列点文を描いている。区画外には，磨消帯を施している。10は，数条の平行



第71図　第3号住居跡出土土器実測図・拓影図

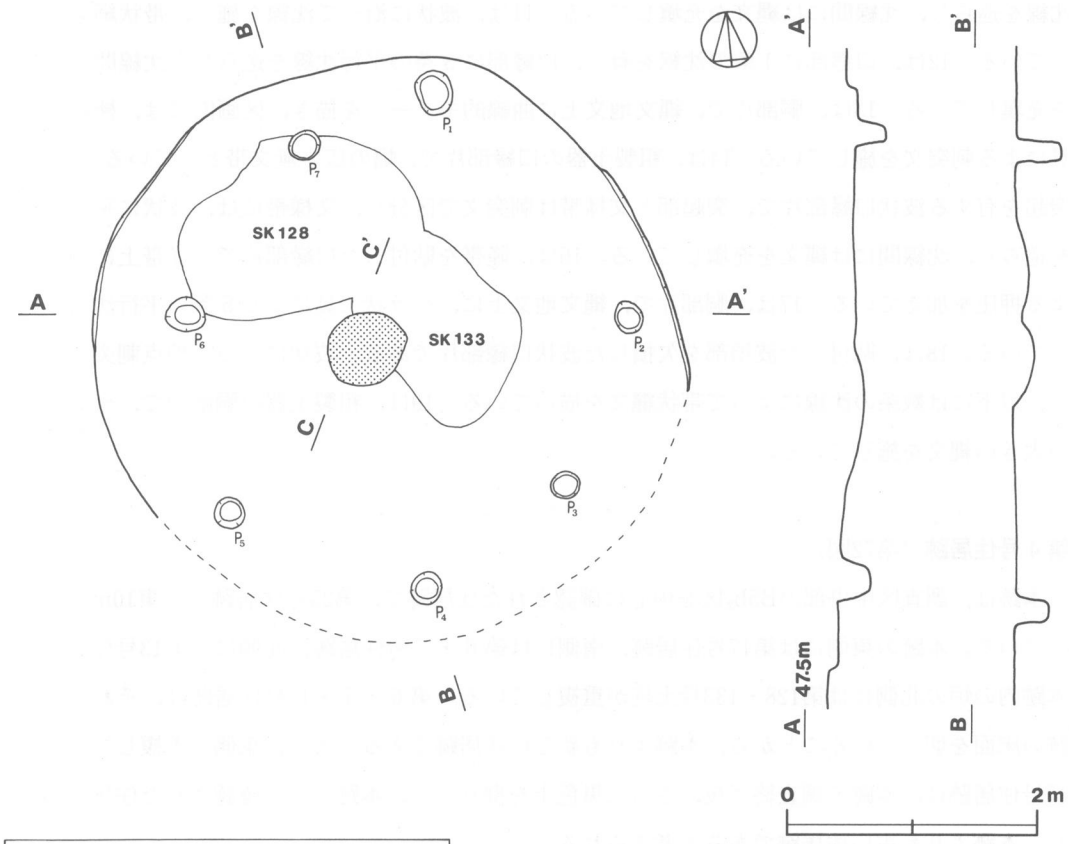
沈線を巡らし，沈線間には縄文を充塡している。11は，波状に沿って沈線を施し，帯状縄文を描いている。12は，口唇部に1条の沈線を有し，口縁部に3条の平行沈線を巡らし，沈線間に縄文を充塡している。13は，胴部片で，縄文地文上に曲線的モチーフを描き，区画内には，棒状施文具による刺突文を施している。14は，粗製土器の口縁部片で，幅の広い無文帯としている。15は，突起を有する波状口縁部片で，突起部と文様帯は刺突文で区分し，文様帯には，波状に平行沈線を巡らし，沈線間には縄文を充塡している。16は，隆帯を貼付した口縁部片で，隆帯上に指圧による押圧を加えている。17は，胴部片で，縄文地文上に，ヘラ状工具により5条の平行沈線を施している。18は，貼付した波頂部を欠損した波状口縁部片である。波状に沿って列点刺突文を施し，以下には数条の沈線によって帯状縄文を描いている。19は，粗製土器の胴部片で，全面に粒の大きい縄文を施している。

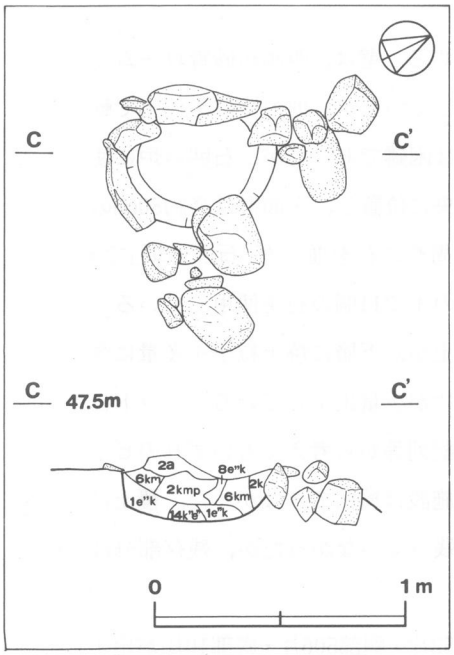
第4号住居跡（第72図）

本跡は，調査区中央部のB5b$_2$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北東10mに位置している。本跡の東側には第17号住居跡，南側には第6・7号住居跡，北側には第13号住居跡，本跡内の炉の北側には第128・133号土坑が重複している。第6・7・13号住居跡は，それぞれ本跡の床面を切っていることから，本跡よりも新しい住居跡である。また，東側に重複している第17号住居跡は，本跡の調査終了後，さらに黒色土を掘り下げ，本跡の下に確認された住居跡であり，本跡よりも古い住居跡であると考えられる。

平面形は，長径4.73m・短径4.45mのほぼ円形を呈している。壁は，西側が砂質ロームを含む暗褐色土で比較的遺存状態が良く，壁高は10～11cmで平均しているが，他の壁は黒色土で軟らかく不明確である。床は，全面が黒色土で軟弱であり，調査は困難であったが，石囲い炉に使用している石を手がかりにして床面の調査を進めた。炉は，中央に位置し，平面形は径約80cmの円形を呈している。炉は，床面を20cmほど皿状に掘り込み，炉の周りに石を並べた「石囲い炉」である。炉石は，こぶし大の小さい石から，径30cmほどの大きなものまで11個の石を使用している。炉内の覆土は，上層には，焼土粒子・炭化粒子を含んだ暗褐色土が，下層に焼土粒子を多量に含んだ暗赤褐色土が堆積している。炉の中央部付近からは，獣骨片が少量出土している。ピットは7か所検出され，規模は長径24～38cm，深さ21～34cmであり，配列等から考えてもいずれのピットが主柱穴か，支柱穴であるかの判断は困難である。出入口の施設は検出できなかった。覆土は，上層の配石遺構の調査の際に，上層が取り除かれ，下層しか残っていなかったが，残存部分は，砂粒や炭化粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，住居跡の南東側を中心に，縄文土器の口縁部53片・胴部506片・底部10片が出土しているが，いずれも床面近くの覆土からの出土である。また，石器は5点出土した。本跡は，出土遺



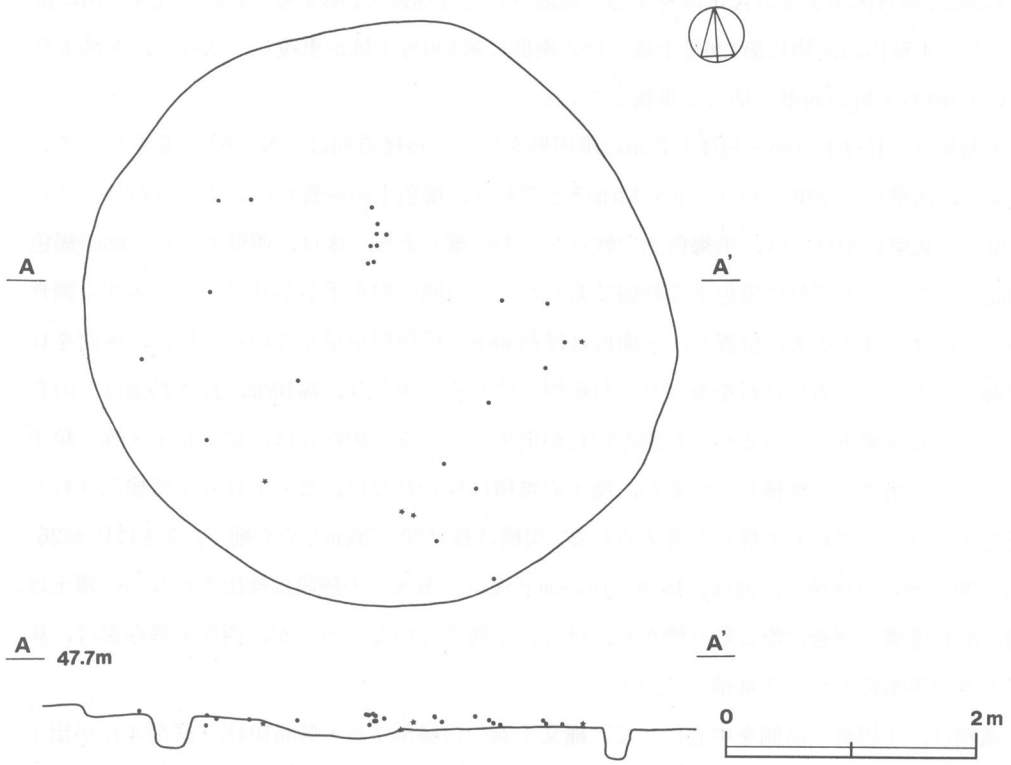


第72図　第4号住居跡実測図

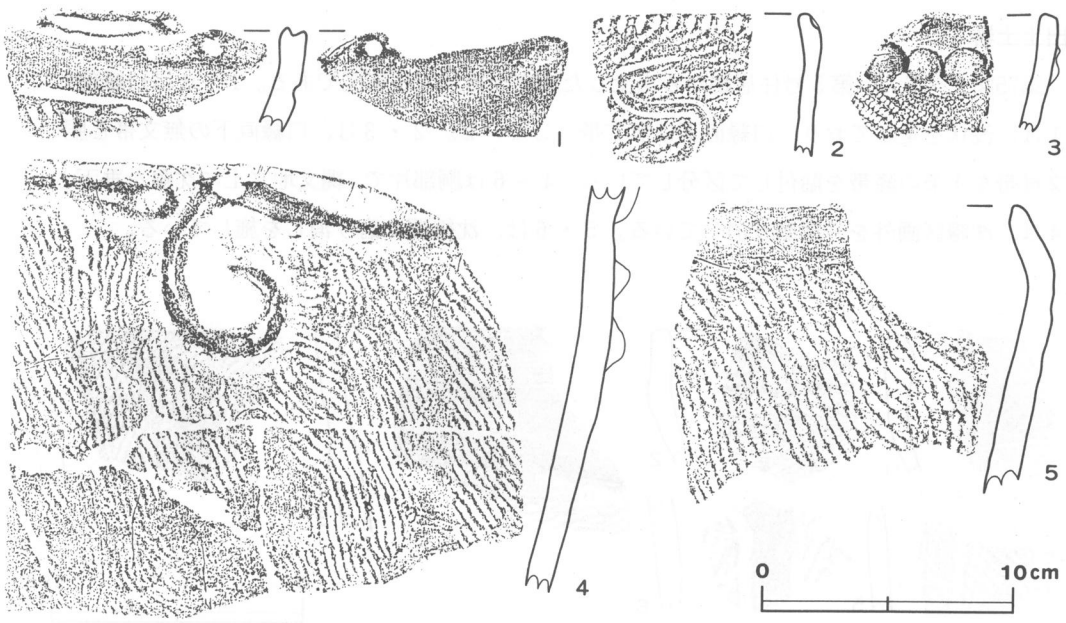
物から縄文時代後期前葉ごろのものと考えられる。

出土土器

第74図1～5は，第4号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3・5は口縁部片で，1は，口唇部に沈線と刺突文を施している波状口縁部片で，小突起を有している。突起部には，内・外面に円形刺突文を施している。2は，口縁直下にキザミ目を施し，縄文地文上に2条の蛇行沈線を描いている。3は，隆帯を貼付し，圧痕文を施している粗製土器の口縁部片である。5は，口縁で内彎し，口縁直下を無文帯とし，以下に粒の大きい縄文を施文している。4は，深鉢形土器の胴部片で，胴部上位に1条の隆帯を貼付して口縁部と区分し，「C」字状の隆帯文を貼付している。



第73図　第４号住居跡遺物出土状況図



第74図　第４号住居跡出土土器拓影図

第５号住居跡（第76図）

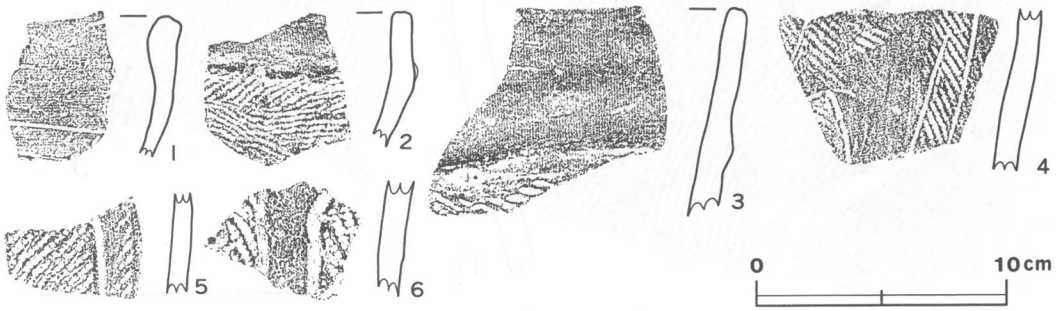
本跡は，調査区中央部のA5j_3区を中心に確認された住居跡で，第４号住居跡の北東２mに位置している。本跡内の北側に第126号土坑，炉の南側に第130号土坑が重複し，さらに，本跡よりも新しい第161号土坑が西壁を切って重複している。

平面形は，長径4.20m・短径3.75mの楕円形を呈し，長径方向は，N－63°－Eを指している。壁高は，西壁から南壁にかけて６～12cmほどであり，褐色土の砂質ロームでしっかりしている。北壁から東壁にかけては，黒褐色土で軟らかく不明確である。床は，西壁近くに一部暗褐色土が確認できたが，大部分は黒色土で軟弱であるため，石囲い炉を手ががりにして，床面の調査を進めた。炉は，ほぼ中央に位置し，平面形は径約50cmの楕円形を呈している。炉は，床面を10cmほど掘り込み，炉の周りに石を並べた「石組炉」である。炉石は，幅10cm，長さ25cmほどの長方形状の石を６個使用しているが，北側の炉石が消失している。炉内には，炭化粒子・焼土粒子を多量に含んだ褐色土が堆積しているが，焼土の堆積は見られない。ピットは６か所検出されたが，配列からみていずれも主柱穴と考えられる。規模は長径20～26cmとやや細く，深さはP_1が26.5cm，P_4が30.5cmでやや深く，他は，15.0～19.5cmと浅い。出入口の施設は検出されない。覆土は，上面の配石遺構の調査の際に取り除かれ，ほとんど残っていなかったが，西側の残存部は，炭化粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。

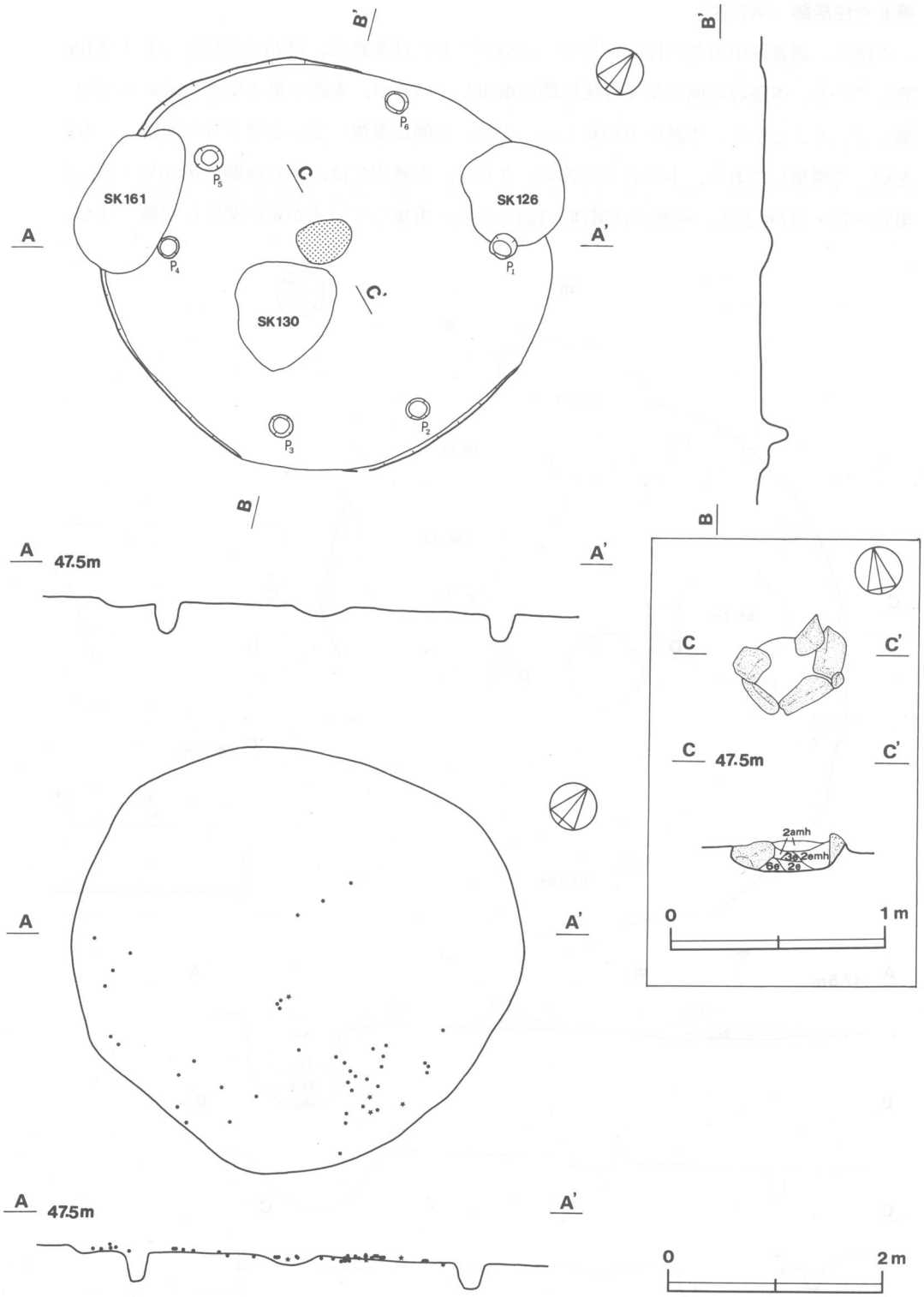
遺物は，住居跡の南側を中心にして，縄文土器の口縁部７片・胴部104片・底部４片が出土し石器は，２点出土している。床面からの出土が多く，土器の大部分は縄文時代後期に比定される。本跡は，出土遺物から縄文時代後期前葉ごろのものと考えられる。

出土土器

第75図１～６は，第５号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～３は口縁部片で，１は，波状を呈しており，口縁直下は無文帯としている。２・３は，口縁直下の無文帯と胴部の文様帯を１条の隆帯を貼付して区分している。４～６は胴部片で，縄文地文上に沈線を垂下させ，４は，沈線区画外を一部磨り消している。５・６は，沈線間に磨り消しを施している。



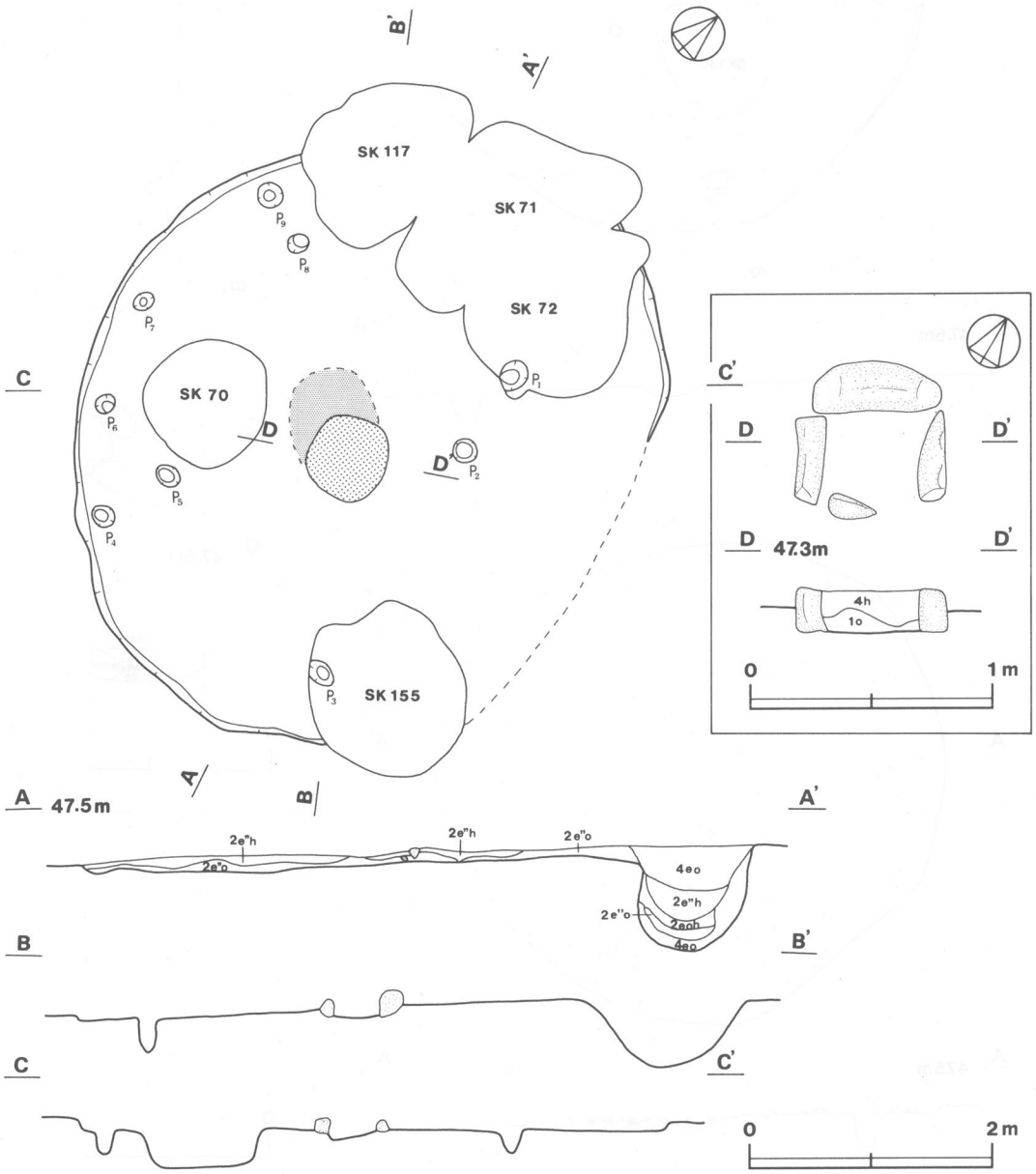
第75図　第５号住居跡出土土器拓影図



第76図　第５号住居跡実測図・遺物出土状況図

第６号住居跡（第77図）

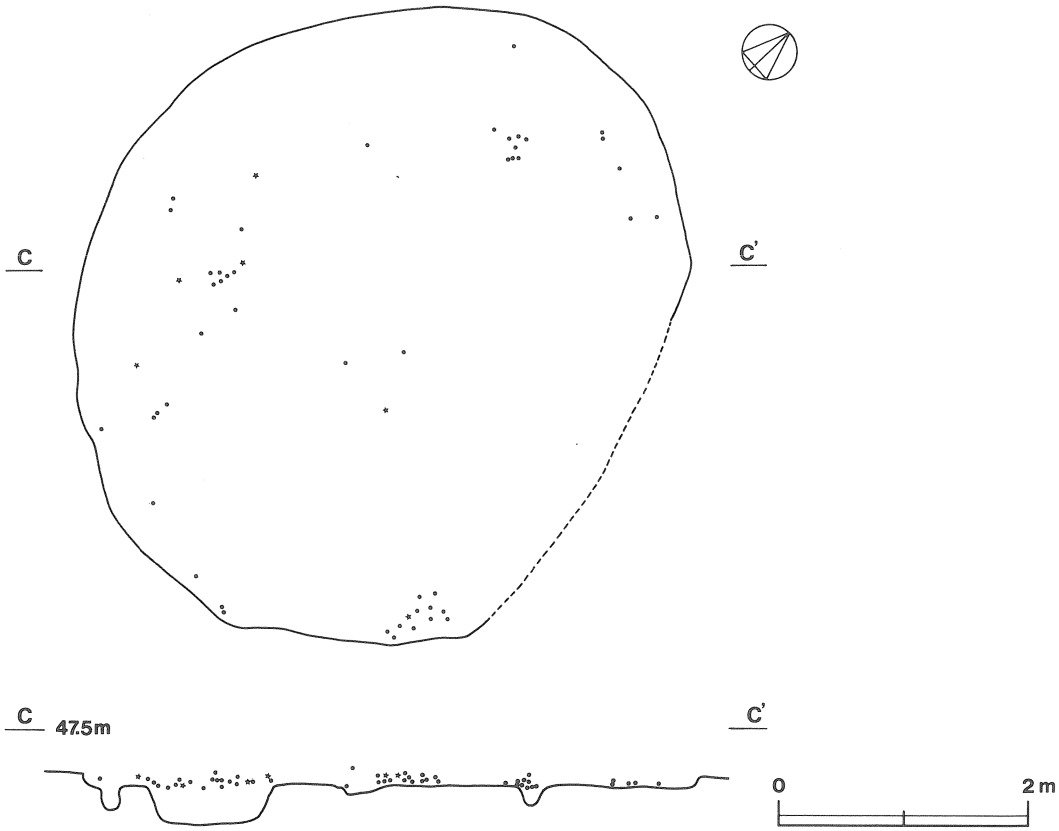
本跡は，調査区中央部のB5c₂区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北東側10mに位置している。本跡の北側に第４号住居跡が重複しているが，本跡が第４号住居跡の床を切って構築していることから，本跡の方が新しい。また，東側に重複している第７号住居跡は，本跡の床を切って構築しており，本跡の方が古い。さらに，本跡内には，炉の西側に第70号土坑，北側に第71・72・117号土坑，南側には第74・155号土坑が重複しているが新旧関係は明確ではない。



第77図　第６号住居跡実測図

平面形は，長径5.41m・短径4.50mの楕円形を呈し，長径方向はN－19°－Wを指している。壁は，西壁から南壁にかけて暗褐色土の砂質ロームで，硬くしっかりしており，壁高は5～10cmほどである。北側から東側にかけては，第4・7号住居跡と重複しており不明確である。床は，全体的に軟弱な黒褐色土で不明確であるが，石組炉を手がかりにして床面の調査をした。炉の西側には，1㎡ほどの範囲で焼土が検出され，床の全面から炭化粒子が検出されているので，本跡は焼失家屋であるとも考えられる。炉は，ほぼ中央に位置しており，平面形は1辺が約50cmの方形を呈し，床面を20cmほど掘り込み，炉の周囲に平坦な石で構築した「石組炉」である。炉石は，長さ25～50cm，幅10～20cmの片面が平坦な石を4個，ほぼ正方形に組み込んでいる。炉内には，焼土粒子を少量含む暗褐色土が堆積しているが，焼土の堆積も見られず，炉床も焼けていないことから，短期間の使用であったものと思われる。ピットは9か所検出されたが，配列からみて，P_1・P_3・P_4・P_8が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径22～28cm，深さ24～35cmである。P_2・P_5～P_7・P_9は，規模や配列からみて支柱穴と考えられる。出入口の施設は検出されない。覆土は，全体的に黒褐色土で，焼土粒子・炭化粒子を少量含み，自然堆積している。

遺物は，本跡の西側・南東側・北側に集中して，縄文土器の口縁部94片・胴部622片・底部36片

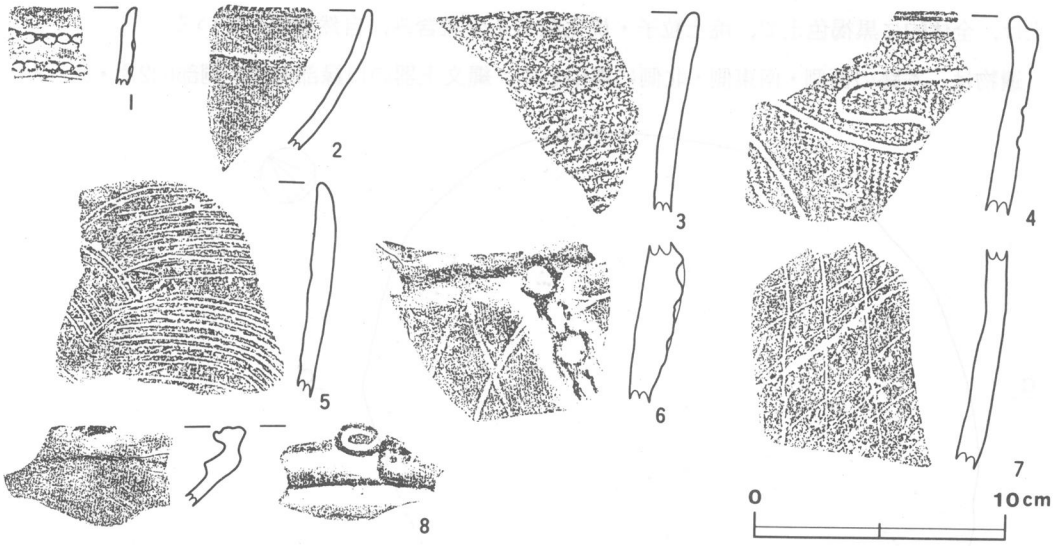


第78図　第6号住居跡遺物出土状況図

が出土し，多くは床面直上から出土している。石器は7点出土し，南東側の床面からはミニチュアの石斧が1点出土している。本跡の時期は，明瞭ではないが，出土遺物から縄文時代後期前葉ごろと考えられる。

出土土器

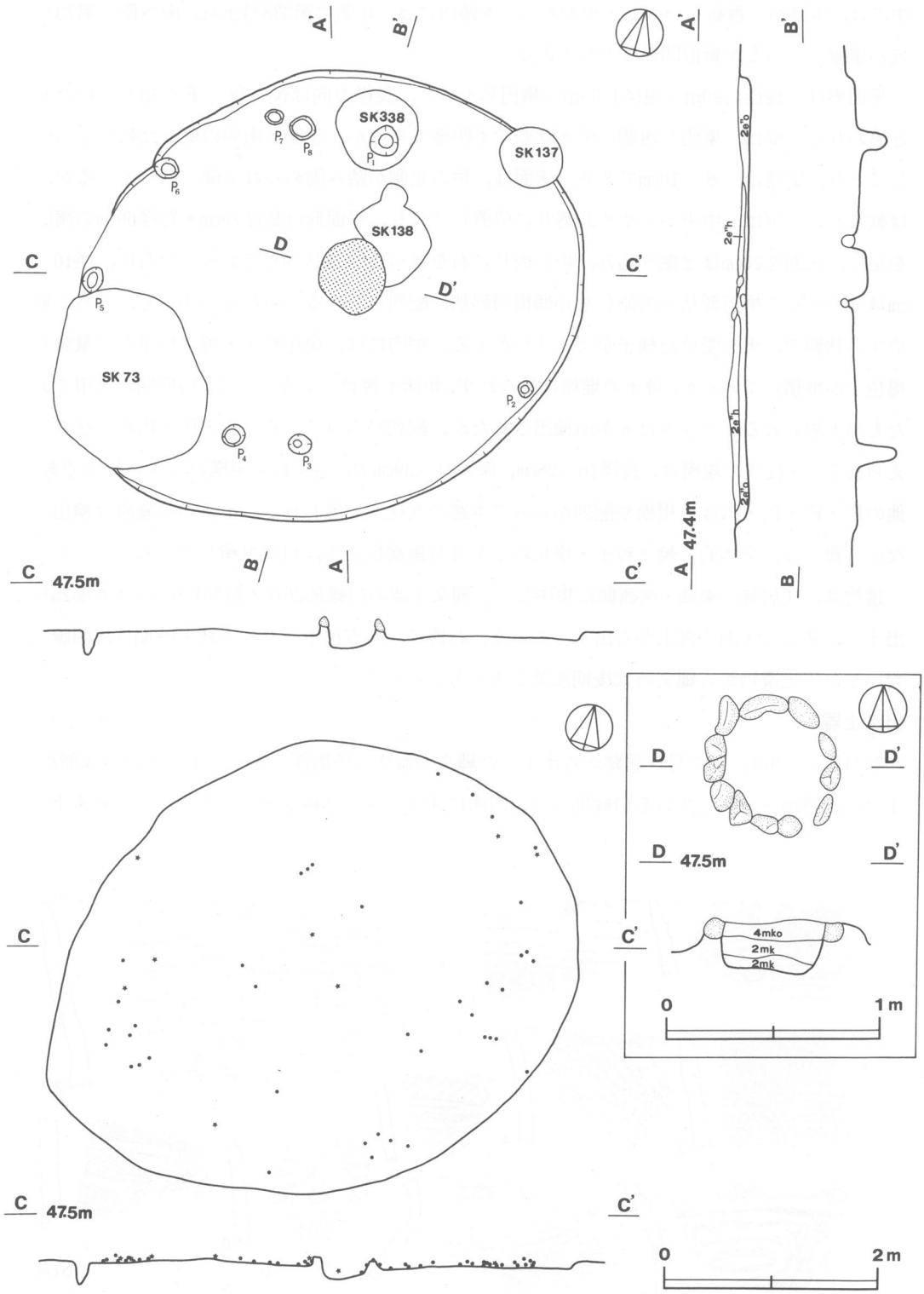
第79図1～8は，第6号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～5は口縁部片で，1は，内面に1条の沈線を巡らし，外面には刺突による2条の平行列点文を施している。2は，口唇部にキザミ目を施し，外面は無文としている。3は，粗製土器の口縁部片で，粒の大きい縄文を施文している。4は，口唇部に沈線を施し，縄文地文上に曲線的モチーフを描いている。5は，櫛歯状施文具により流線文を施文している。6・7は胴部片で，沈線による格子目文を施文し，6は，横位・縦位に隆帯を貼付し，縦位の隆帯には，列点刺突文を施文している。8は，浅鉢形土器の口縁部片で，口唇部に突起を貼付し，突起部の内面に竹管による刺突を施している。



第79図　第6号住居跡出土土器拓影図

第7号住居跡（第80図）

本跡は，調査区中央部のB5b$_3$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北東側14mに位置している。本跡の西側には，第6号住居跡が重複しているが，本跡は，第6号住居跡の床を切って構築していることから，第6号住居跡よりも新しい。また，北側に重複している第4・17号住居跡は，第6号住居跡によって，西側の床面を切られていることから，本跡よりも古い。東側に重複している第10号住居跡と第2号溝は，本跡の調査終了後，黒色土の調査中に本跡の下に確認された遺構であることから，本跡よりも古いものと考えられる。従って，重複している住居跡の



第80図　第７号住居跡実測図・遺物出土状況図

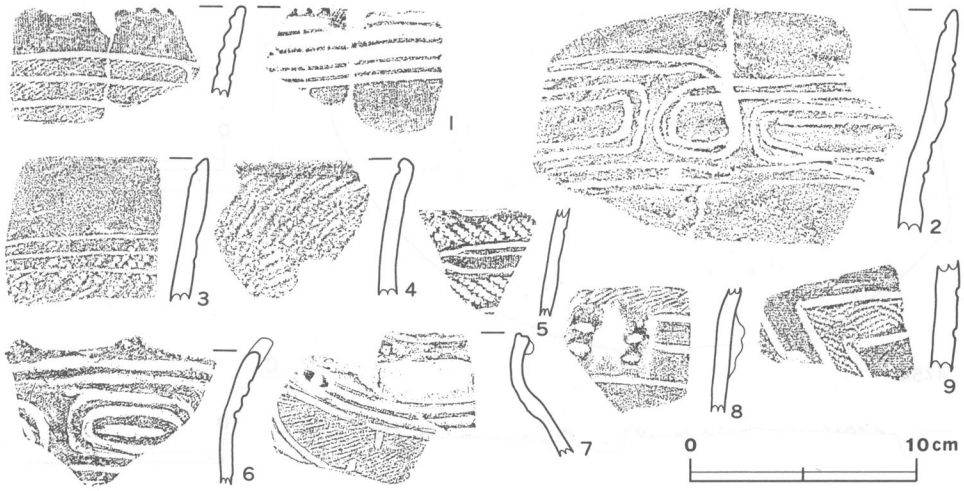
中では，本跡が一番新しいものと思われる。本跡内には，北側に第338号土坑，南西側に第73号土坑が重複しているが新旧関係は不明である。

平面形は，長径4.90m・短径4.05mの楕円形を呈し，長径方向はN－38°－Eを指していたものと思われる。壁は，東側と西側の壁が軟弱で不明確であるが，北側と南側の壁は比較的しっかりしており，壁高は，6～10cmである。床面は，炉の北側が踏み固められて硬く締っているが，他は軟らかい。炉は，中央からやや北寄りに位置しており，平面形は長径70cm・短径60cmの楕円形を呈し，床面を20cmほど掘り込み，炉の周りに石を並べた「石囲い炉」である。炉石は，径10～15cmほどの円形や楕円形状の河原石を15個楕円形状に配列している。炉石はいずれも，もろく崩れやすい状態で，火を受けた様子がよくうかがえる。炉内には，炭化粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色土が堆積しているが，焼土の堆積は見られず，炉床も焼けていないので，短期間の使用であったものと思われる。ピットは8か所検出されたが，配列からみて，P_1・P_2・P_4・P_6が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径16～28cm，深さ21～39cmで，いずれも規模の小さい柱穴である。他のP_3・P_5・P_7・P_8は，規模や配列からみて本跡の支柱穴と思われる。出入口の施設は検出されない。覆土は，全体的に焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土で，自然堆積している。

遺物は，住居跡の東側・南西側に集中して，縄文土器の口縁部26片・胴部1,034片・底部25片が出土し，多くは床面の直上から出土している。石器は，7点出土した。本跡の時期は，明瞭ではないが，出土遺物から縄文時代後期後葉ごろと考えられる。

出土土器

第81図1～9は，第7号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～4は口縁部片で，1は，口唇部を欠損している口縁部片で，内面に4条の平行沈線を施し，外面は，口縁直下を無



第81図　第7号住居跡出土土器拓影図

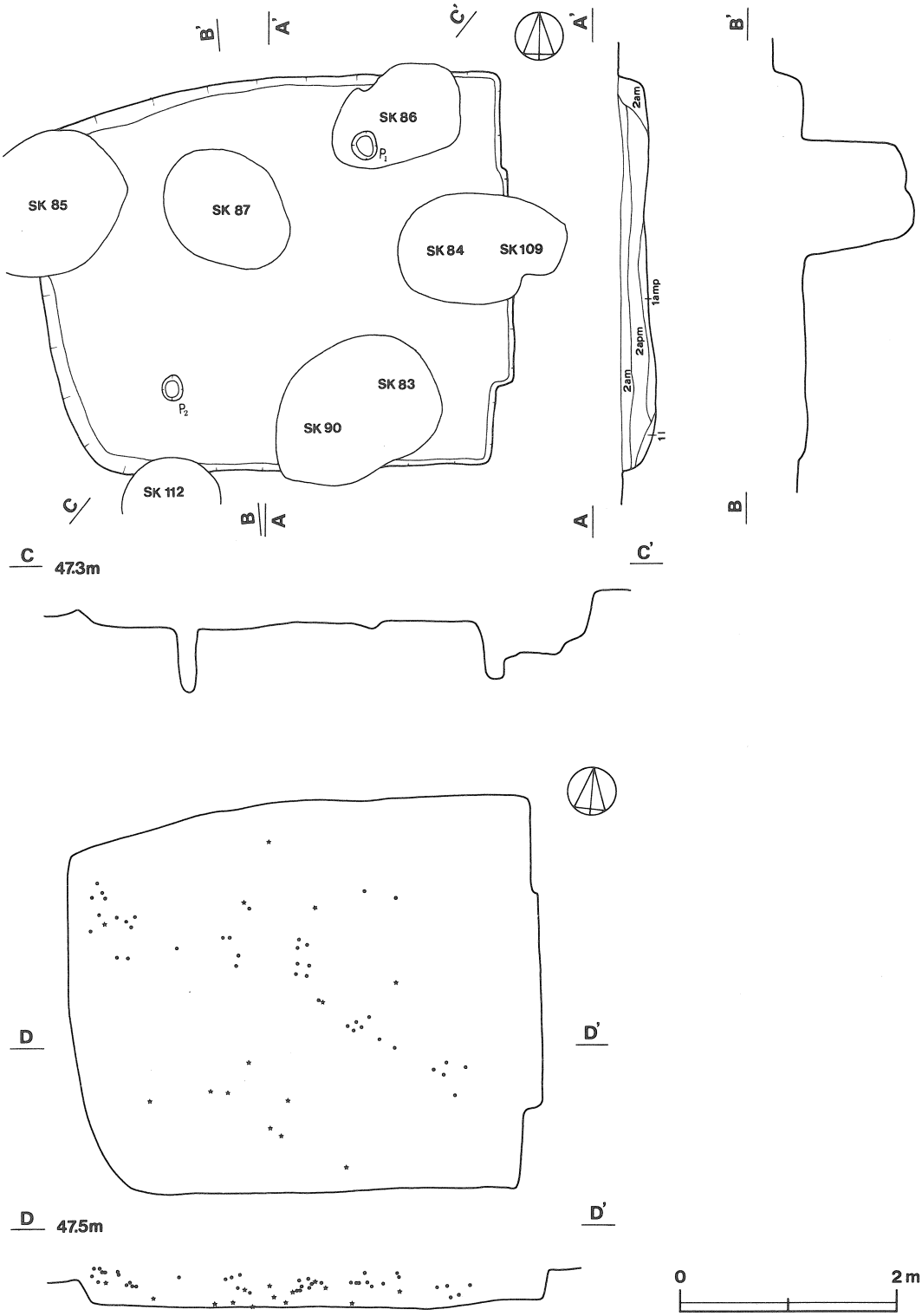
文帯とし，以下は，縄文地文上に平行沈線を施している。2～4は，内面に1条の沈線を巡らし，2は，外面には，2条の沈線により円形・長楕円形を区画している。3は，外面には，幅広い無文帯の下に3条の平行沈線を巡らし，縄文を充塡している。4は，外面には縄文を施文している。5は，胴部片で，縄文地文上に横位の沈線を施し，沈線間を磨り消している。6は，口唇部に瘤状突起を有する波状口縁部片で，楕円形の沈線文を施している。7は，頸部で括れ，口縁部で外反している口縁部から胴部にかけての破片である。胴部上位に3条の沈線を巡らし，一番上の沈線内には刺突を巡らし，さらに，豆粒大の瘤状突起を貼付している。8は，胴部片で，粘土を把手状に2列に貼付し，キザミ目を施している。9は，胴部片で，2条の沈線により「L」字形の区画を施し，区画内には縄文を充塡している。

第8号住居跡（第82図）

本跡は，調査区中央部南側の$B4e_8$区を中心に確認された住居跡で，第1号住居跡の北東側2mに位置している。本跡内には，中央部に第87号土坑，北側に第86号土坑が重複しているが，第86号土坑は，土坑の覆土中にP_1が検出されていることから，本跡よりも古い土坑であると考えられる。さらに，東側に第84・109号土坑，西側に第85号土坑，南側に第83・90・112号土坑が重複しているが，これらの土坑は，それぞれ本跡の壁を切って構築していることから，本跡の方が古いものと考えられる。

平面形は，長軸4.40m・短軸3.72mの隅丸長方形を呈し，主軸方向はN－88°－Eを指している。壁は，砂質ロームで硬くざらざらしており，垂直に近い状態で立ち上がっている。壁高は15～30cmで，北壁から西壁にかけて高く，東壁から南壁が比較的低い。床面は砂質ロームで，全体的に硬く平坦である。炉は検出されない。ピットは2か所検出され，P_1・P_2とも主柱穴と考えられる。P_1は第86号土坑の覆土中に掘り込まれている。主柱穴の規模は，長径20～22cm・深さ52～57cmでしっかりした柱穴である。主柱穴は他に2か所あったものと考えられるが，重複している土坑により削除されたものと思われる。出入口の施設は東壁の中央部に，幅約2mにわたって，東側へ20cmほど張り出し部があることから，この部分に設けられていたものと考えられる。覆土は，上層に炭化粒子を含む黒褐色土，下層に炭化粒子・骨粉を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，本跡の北西側から中央部にかけて覆土の上層から集中して出土している。粗製土器（第83図1）や，縄文土器の口縁部202片・胴部1,415片・底部55片が出土し，石器は，25点出土している。本跡は，出土遺物から縄文時代晩期の住居跡と考えられる。



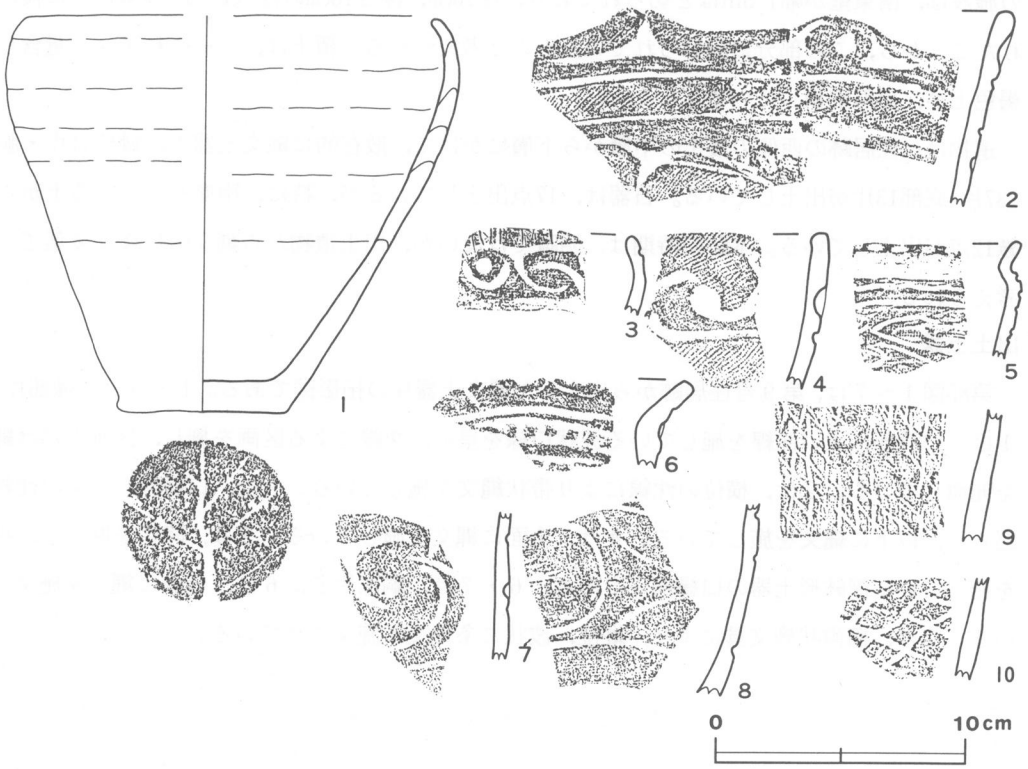
第82図　第8号住居跡実測図・遺物出土状況図

出土土器

第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第83図 1	深鉢形土器	A (16.5) B 15.7 C 6.8	胴部は内彎して立ち上がり，口唇部にはキザミ目を有する。粗製の無文土器であるが，多数の輪積み痕を残している。底部外面は平底で木葉痕がみられる。	砂粒・長石・石英 不良 にぶい橙色・にぶい黄橙色	60% P－49

第83図2～10は，第8号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。2は，口唇部に双頭状の突起を有する波状口縁部片で，突起下には玉抱き三叉文を施している。3は，壺の口縁部片で，沈線による入組三叉文を描いている。4は，口縁部片で，縄文地文上に沈線により玉抱き三叉文をを施している。5・6は，小波状口縁部片で，5は，口唇部に瘤状突起を有し，文様帯には横位の沈線文を施している。6は，口唇部に双頭突起を有し，頸部にキザミ目を施し，上・下に沈線を巡らしている。7は，胴部片で，縄文地文上に沈線により玉抱き三叉文を施している。磨滅が著しい。8は，胴下位部片で，曲線的モチーフを描いている。9・10は，撚糸による網目状文が施されている胴部片である。



第83図　第8号住居跡出土土器実測図・拓影図

第９号住居跡（第84図）

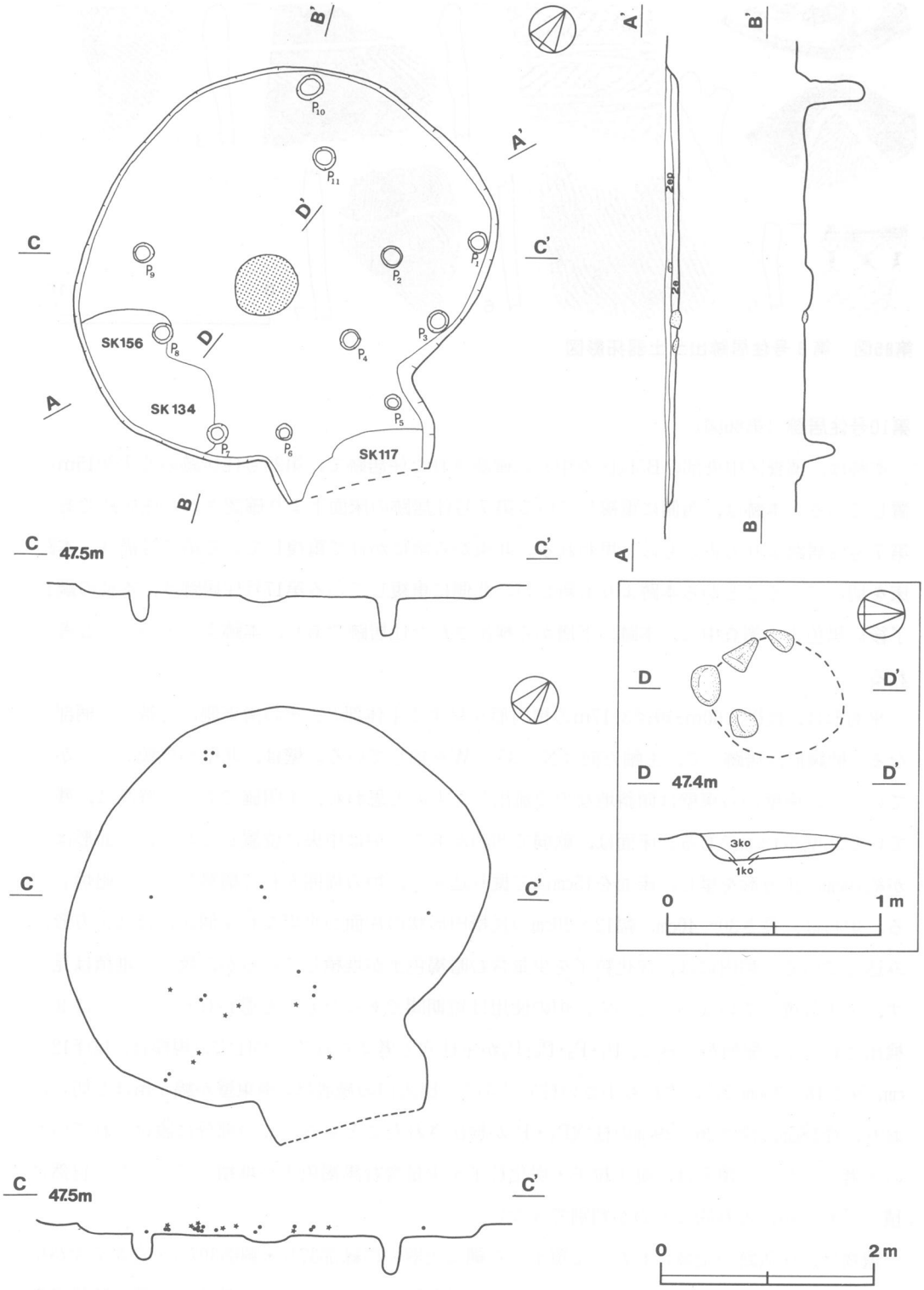
本跡は，調査区中央部のB5b$_1$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北東側８ｍに位置している。本跡の南東側には第６号住居跡が隣接している。また，本跡の南壁を切って，第134－Ａ号・156号土坑が重複しており，本跡よりも新しい遺構と思われる。

平面形は，長径4.07m・短径3.90mのほぼ円形を呈する主体部と，その南東側に付帯する柄部からなる「柄鏡形住居跡」で，主軸方向はＮ－61°－Ｗを指している。壁は，北壁が硬い砂質のロームで外傾して立ち上がっている。壁高は，北壁が12cmで，西壁から南壁にかけては６cmほどである。床面は平坦で，硬く踏み固められて締っている。炉は，中央に位置しており，平面形は径50cmほどの円形を呈し，床面を10cmほど掘り込み，炉の周囲に石を並べた「石囲い炉」である。炉石は，径10～15cmの河原石が５個出土しているが，４個は炉の南側に配列されている。あとの１個は炉の北側から20cmほどの位置に離れて出土している。炉の北から東側にかけては，炉石が消失しており，配石等に再利用されたことも考えられる。炉内には，焼土粒子を少量含む暗褐色土が堆積しているが，焼土の堆積は見られず，炉床も焼けていないことから，短期間の使用であったものと思われる。ピットは11か所検出されたが，配列からみて，P_3・P_7・P_9・P_{11}が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径18～22cm，深さ25～40cmでいずれも小さい柱穴である。出入口の施設は，南東壁が幅1.5mほど切られており，径16cm，深さ18cmの柱穴P_5・P_6が壁近くに検出されたことから，この部分に設けられていたものと考えられる。覆土は，ローム粒子を少量含む黒褐色土が，自然堆積している。

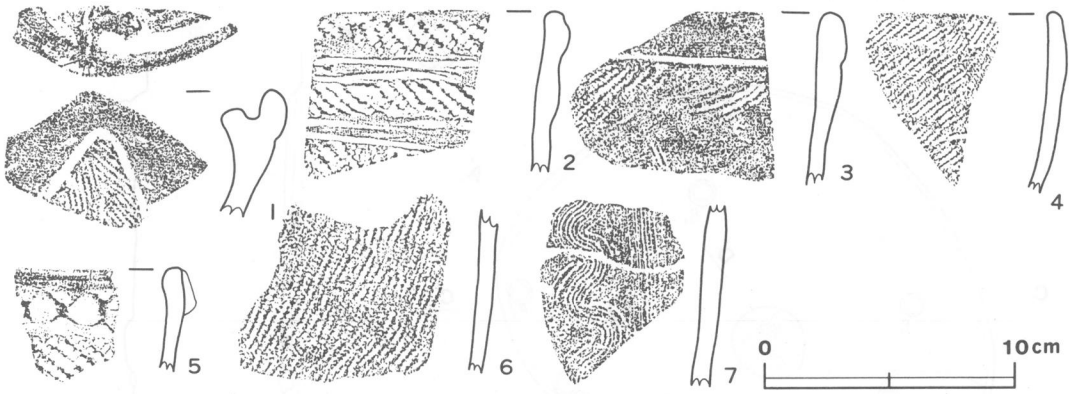
遺物は，住居跡の西側の覆土の中層から下層にかけて，散在的に縄文土器の口縁部51片・胴部237片・底部13片が出土している。石器は，17点出土しているが，特に，南側を中心に覆土から石鏃12点が出土している。本跡の時期は，明瞭ではないが，出土遺物から縄文時代後期後葉ごろと考えられる。

出土土器

第85図１～７は，第９号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～５は口縁部片で，１は，口唇部に太い沈線を施している波状口縁を呈し，沈線による区画を施し，区画内には縄文を充填している。２は，横位の沈線により帯状縄文を施している。３は，口縁部に１条の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。４は，全面に縄文を施している。５は，隆帯を貼付し，押圧を施している深鉢形土器の口縁部片である。６・７は，胴部片で，６は，全面に縄文を施文している。７は，櫛歯状施文具により，縦位，波状に条線文が施文されている。



第84図　第9号住居跡実測図・遺物出土状況図



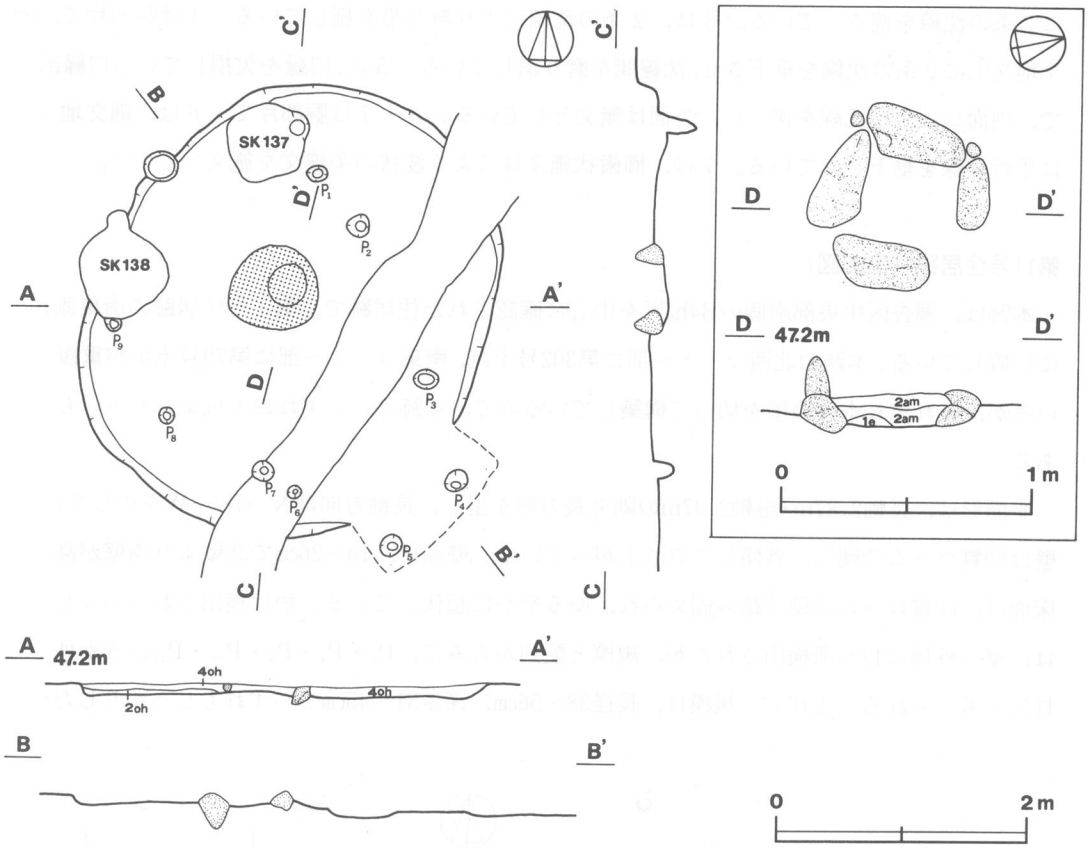
第85図　第９号住居跡出土土器拓影図

第10号住居跡（第86図）

本跡は，調査区中央部のB5b$_3$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北東側15mに位置している。本跡は，西側に重複している第７号住居跡の床面下より確認された住居跡であり，第７号住居跡よりも古いものと思われる。北東から南にかけて重複している第２号溝は，本跡の床を切っていることから本跡よりも新しい。北側に重複している第17号住居跡は，本跡の調査終了後の黒色土の調査中に，本跡の下層から検出された住居跡であり，本跡より古いものと考えられる。

平面形は，長径3.60m・短径3.17mの楕円形を呈する主体部と，その南東側に付帯する柄部からなる「柄鏡形住居跡」で，主軸方向はN－35°－Wを指している。壁は，北壁が比較的しっかりしているが，南壁から東壁は傾斜地なので流出したものと思われ，不明確である。壁高は，残存している北壁が12cmである。床面は，軟弱で凹凸がある。炉は中央に位置しており，平面形は一辺が約70cmの正方形を呈し，床面を15cmほど掘り込んで，炉の周囲を石で構築した「石組炉」である。炉石は，長さ30～40cm，幅12～20cmの長楕円形状の片面が平坦な石４個を，ほぼ正方形に組み込んでいる。炉内には，炭化粒子を少量含む暗褐色土が堆積しているが，焼土の堆積は見られず，炉床も焼けていないことから，炉の使用は短期間であったものと思われる。ピットは９か所検出されたが，配列からみて，P_1・P_3・P_6・P_9が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径12～18cm，深さ18～33cmで，いずれも小さい柱穴である。出入口の施設は，南東壁が幅１mほど切られており，径18cm，深さ26～29cmの柱穴P_4・P_5が検出されたことから，この部分に設けられていたものと考えられる。覆土は，焼土粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土が堆積しているが，自然に堆積したものか，人為的なものか判別できない。

遺物は，住居跡の全域にわたって覆土から縄文土器の口縁部37片・胴部307片・底部７片が出土し，石器は，３点出土している。本跡の時期は，明瞭ではないが，出土遺物から縄文時代後期中

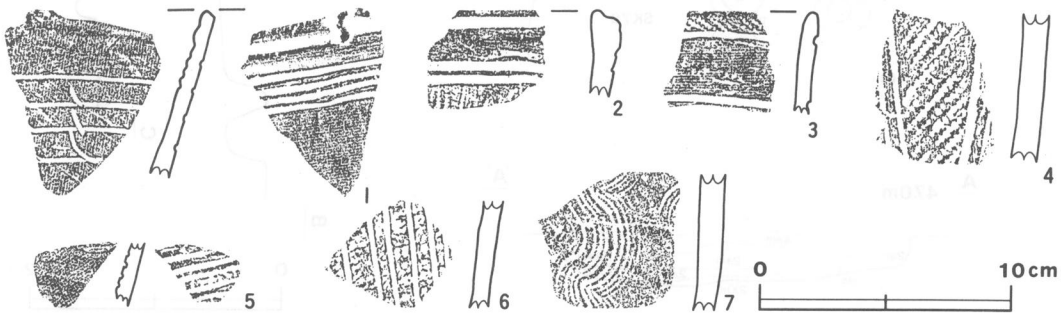


第86図　第10号住居跡実測図

葉ごろと考えられる。

出土土器

第87図1～7は，第10号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で，1は，口唇部にキザミ目を施し，小突起を貼付している。内・外面ともに平行沈線を巡らし，外面には沈線間にキザミ目を施している。2は，口唇部に1条の沈線を巡らし，口縁部には，横位



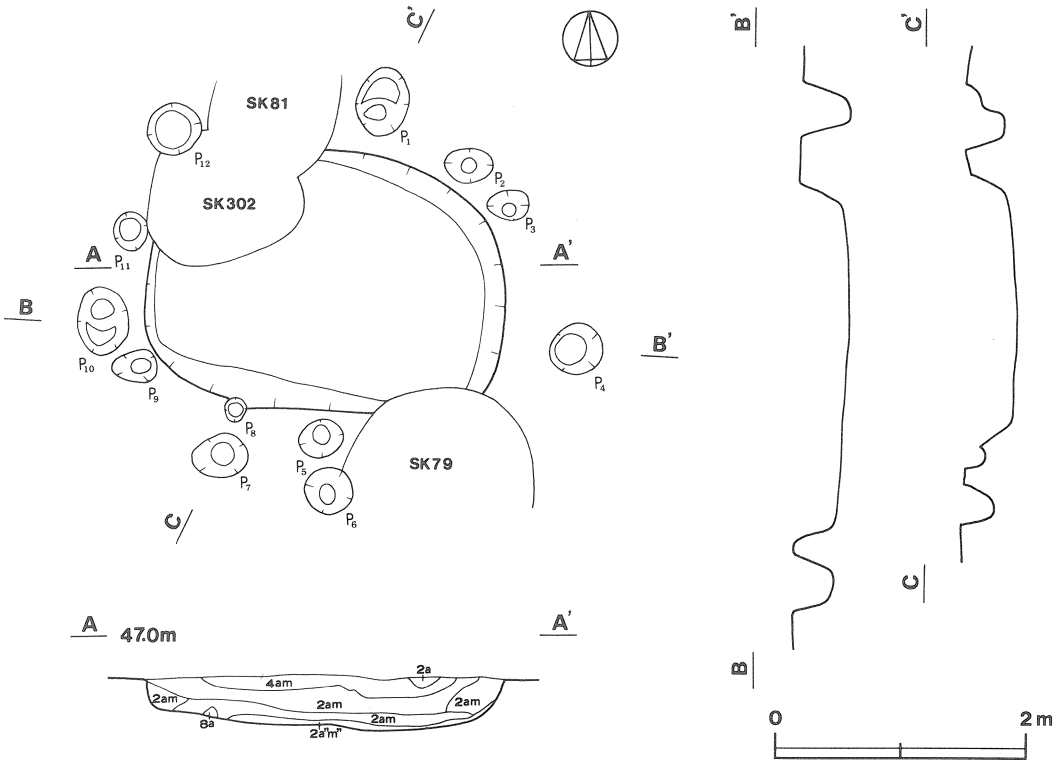
第87図　第10号住居跡出土土器拓影図

に２条の沈線を巡らしている。３は，２条の沈線により無文帯を施している。４は胴部片で，縄文地文上に２条の沈線を垂下させ，沈線間を磨り消している。５は，口縁を欠損している口縁部片で，内面には平行沈線を巡らし，外面は無文としている。６・７は胴部片で，６は，縄文地文上に平行沈線を垂下させている。７は，櫛歯状施文具により波状の条線文を施文している。

第11号住居跡（第88図）

本跡は，調査区中央部南側のB4h_9区を中心に確認された住居跡で，第１号住居跡の南東側10mに位置している。本跡の北西コーナー部に第302号土坑，南東コーナー部に第79号土坑が重複しているが，それぞれ本跡の壁を切って構築しているので，本跡は，いずれの土坑よりも古いものである。

平面形は，長軸2.87m・短軸2.07mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－78°－Wを指している。壁は砂質ロームで硬く，外傾して立ち上がっている。壁高は，10～26cmで北壁より南壁が高い。床面は，砂質ロームで硬く踏み固められ，ゆるやかに起伏している。炉は検出されない。ピットは，壁の外周に12か所検出されたが，規模と配列からみて，P_1・P_4・P_5・P_{10}・P_{12}の５か所が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径38～56cm，深さ31～45cmでいずれもしっかりした柱穴



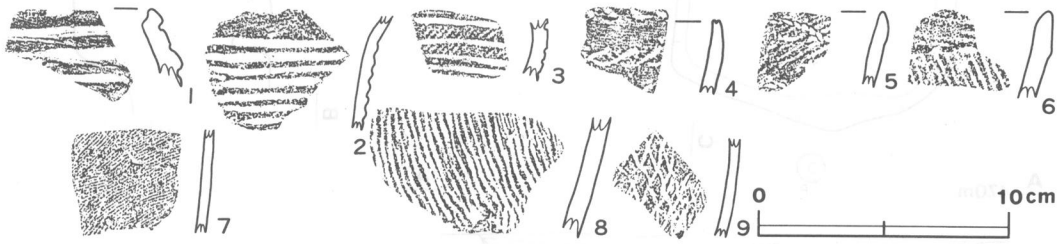
第88図　第11号住居跡実測図

である。残りのP_2・P_3・P_6～P_9・P_{11}も本跡に関係する支柱穴として使用されたものと思われる。出入口の施設は検出されない。覆土は上層に炭化粒子を少量含む黒色土，中層・下層には，炭化粒子を少量と砂質ロームを多量に含んだ黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，住居跡の全域にわたって散在して，覆土の上層から下層にかけて，縄文土器の口縁部24片・胴部106片・底部7片が出土している。土器片の多くは縄文時代晩期に比定される。石器は，3点出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代晩期と考えられる。

出土土器

第89図1～9は，第11号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は，口唇部に1条の沈線を巡らしている口縁部片で，口縁部に凹帯を施している。外面には朱が付着している。2は，胴部から口縁部にかけての破片で，数条の平行沈線を巡らしている。3は，胴部片で，数条の沈線を巡らし，沈線間に縄文を充塡している。4～6は口縁部片で，4は，口唇部に斜位のキザミ目を施し，縄文を施しているが磨滅が著しい。5は，結節縄文を施している薄手の破片である。6は，複合口縁部片で，斜位に条線文が施されている。7～9は胴部片で，7は，薄手で，細かい縄文を施している。8は，撚糸文を施している。9は，撚糸による網目状文が施されている。



第89図　第11号住居跡出土土器拓影図

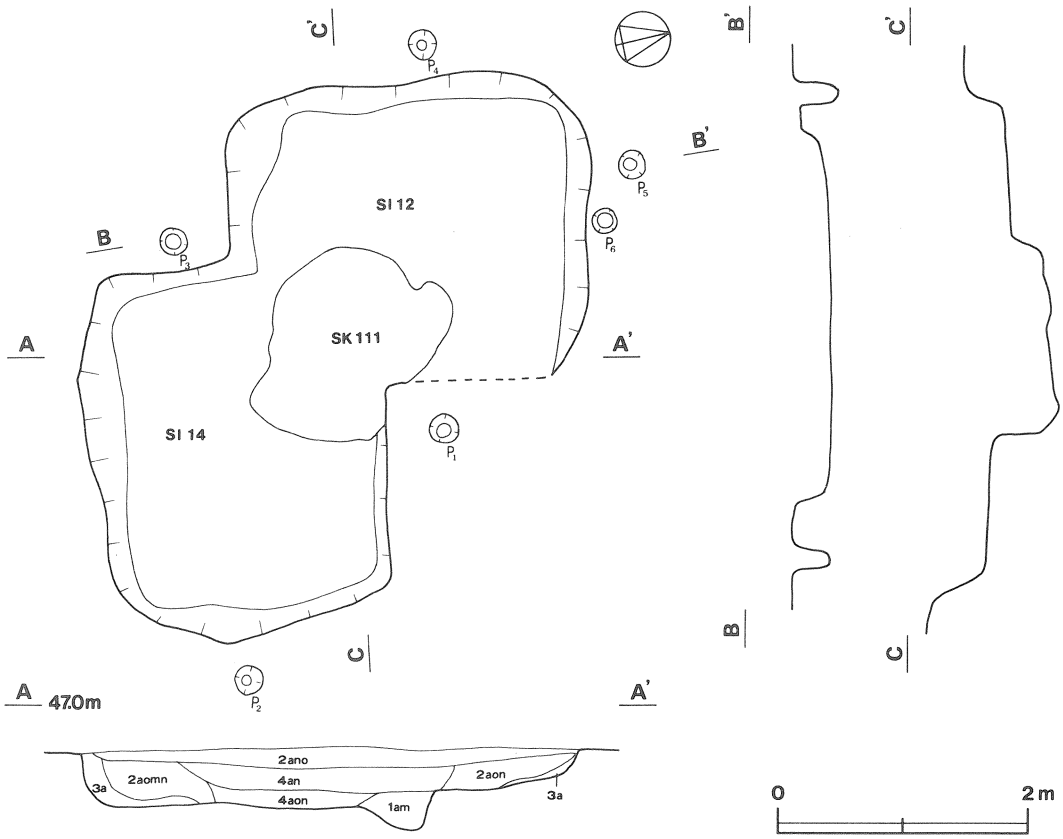
第12号住居跡（第90図）

本跡は，調査区中央部南側の$B4g_0$区を中心に確認された住居跡で，第1号住居跡の東側10mに位置している。本跡の南東部に重複している第14号住居跡は，本跡の床を切って構築しているので，本跡の方が古い住居跡である。

平面形は，長軸2.83m・短軸2.40mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－11°－Eを指している。壁は砂質ロームで硬く，外傾して立ち上がり，壁高は18～22cmである。床面は砂質ロームで硬く踏み固められ，全体的に平坦である。炉は検出されない。ピットは，壁の外周に5か所検出されたが，配列からみると，P_1～P_4の4か所が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径23～24cm，深さ30～40cmでいずれもしっかりした柱穴である。出入口の施設は検出されない。覆土は上層に炭化粒子・骨粉を少量含む黒褐色土，下層に炭化粒子・骨粉・砂質ロームを含む黒褐色土が自然

堆積している。

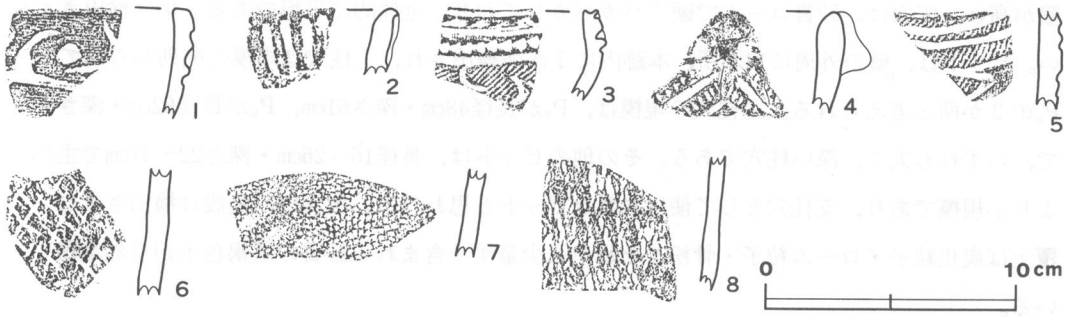
遺物は，住居跡の北側を中心に，覆土の上層から下層にかけて，縄文土器の口縁部46片・胴部319片・底部19片が出土している。また，北側の床面から木の実の炭化物が出土している。石器は，6点出土した。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代晩期と考えられる。



第90図　第12・14号住居跡実測図

出土土器

第91図1～8は，第12・14号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～4は口縁部片で，1は，沈線により玉抱き三叉文を施している。2は，縦位に沈線を施している。3は，口唇部に1条の沈線を巡らし，口縁部に2条の沈線を巡らして，沈線間には半載竹管による刺突文を巡らしている。4は，突起を有する波状口縁部片で，突起部外面には瘤状突起を貼付し，突起下には，波状に沿って2条の沈線を施し，沈線間にはキザミ目文を施している。5は，胴部片で，縄文地文上に沈線により曲線的モチーフを描いている。6～8は粗製土器の胴部片で，6は，網目撚糸文を施している。7は，櫛歯状工具による刺突文を施している。8は，縦位の撚糸文を施文している。

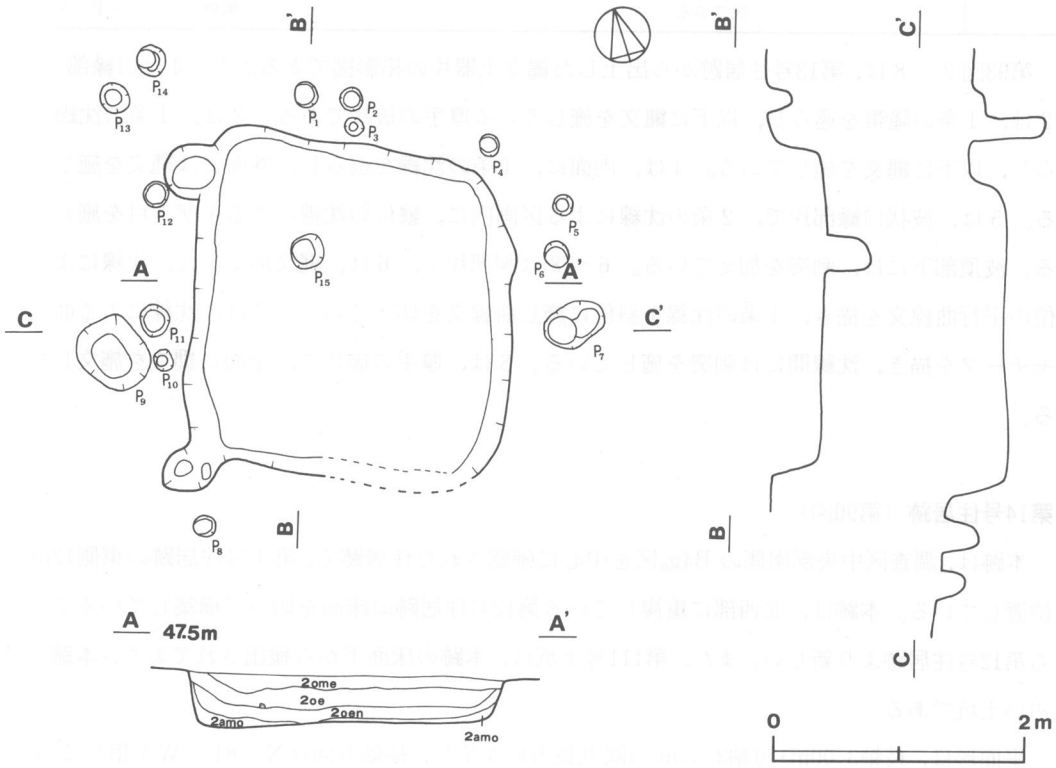


第91図　第12・14号住居跡出土土器拓影図

第13号住居跡（第92図）

本跡は，調査区中央部の B5a₂区を中心に確認された住居跡で，第８号住居跡の北東側20m に位置している。本跡は，南側に重複している後期前葉の第４号住居跡の壁を切って構築されており，主に後期後半の土器片が出土していることから，第４号住居跡よりも新しい。

平面形は，長軸2.65m・短軸2.57m の隅丸方形を呈し，長軸方向はN－27°－Eを指している。壁は砂質ロームで硬く締っており，垂直に近い状態で立ち上がっている。壁高は，30～40cmで北



第92図　第13号住居跡実測図

壁が高い。床面は，砂質ロームで硬くパカパカしており，全体的に平坦である。炉は検出されない。ピットは，壁の外周に14か所，本跡内に１か所検出され，主柱穴は規模と配列からみてP_7・P_9の２か所と考えられる。主柱穴の規模は，P_7が長径48cm・深さ61cm，P_9が長径62cm・深さ80cmで，いずれも太く，深い柱穴である。その他のピットは，長径16～26cm・深さ22～47cmで主柱穴より小規模であり，支柱穴として使用されたピットと思われる。出入口の施設は検出されない。覆土は炭化粒子・ローム粒子・骨粉がそれぞれ少量ずつ含まれる砂質の黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，住居跡の全域にわたって散在的に，覆土の上層から中層にかけて出土している。北側の覆土から深鉢形土器（第93図１）や，縄文土器の口縁部208片・胴部756片・底部32片が出土している。また，東壁近くの覆土からは，土偶の左脚が出土している。本跡の時期は，明瞭ではないが，出土遺物から縄文時代後期後葉ごろと考えられる。

出土土器

第13号住居跡出土土器観察表

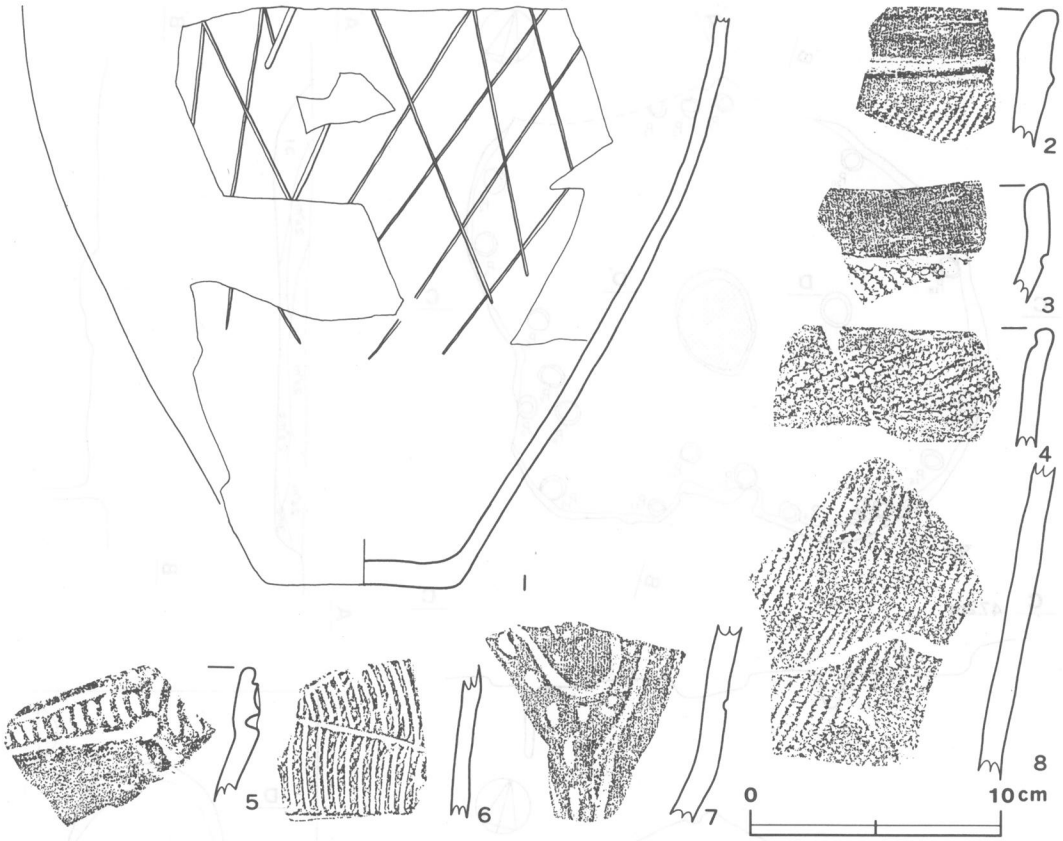
図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第93図 1	深鉢形土器	B(23.0)	底部から外傾して立ち上がり，胴中部から上は内彎して口縁部に至る。胴部文様帯には，斜行沈線を交互に施し，網目状の文様を構成している。底部外面は無文の平底である。	砂粒・長石・石英 普通 にぶい黄橙色・ 黒褐色	40% P－53

第93図２～８は，第13号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２～４は口縁部片で，２は，１条の隆帯を巡らし，以下に縄文を施している厚手の破片である。３は，１条の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。４は，内面に，１条の沈線を巡らし，外面には縄文を施している。５は，波状口縁部片で，２条の沈線による区画内に，縦位の沈線によるキザミ目を施している。波頂部下には，刺突を加えている。６～８は胴部片で，６は，縄文地文上に，沈線による縦位の平行曲線文を描き，１条の沈線を斜位に施し曲線文を切っている。７は，沈線による曲線的モチーフを描き，沈線間には刺突を施している。８は，厚手の破片で，全面に縄文を施文している。

第14号住居跡（第90図）

本跡は，調査区中央部南側の$B4g_0$区を中心に確認された住居跡で，第１号住居跡の東側12mに位置している。本跡は，北西部に重複している第12号住居跡の床面を切って構築していることから第12号住居跡より新しい。また，第111号土坑は，本跡の床面下から検出されており，本跡より古い土坑である。

平面形は，長軸3.00m・短軸2.37mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－81°－Wを指している。



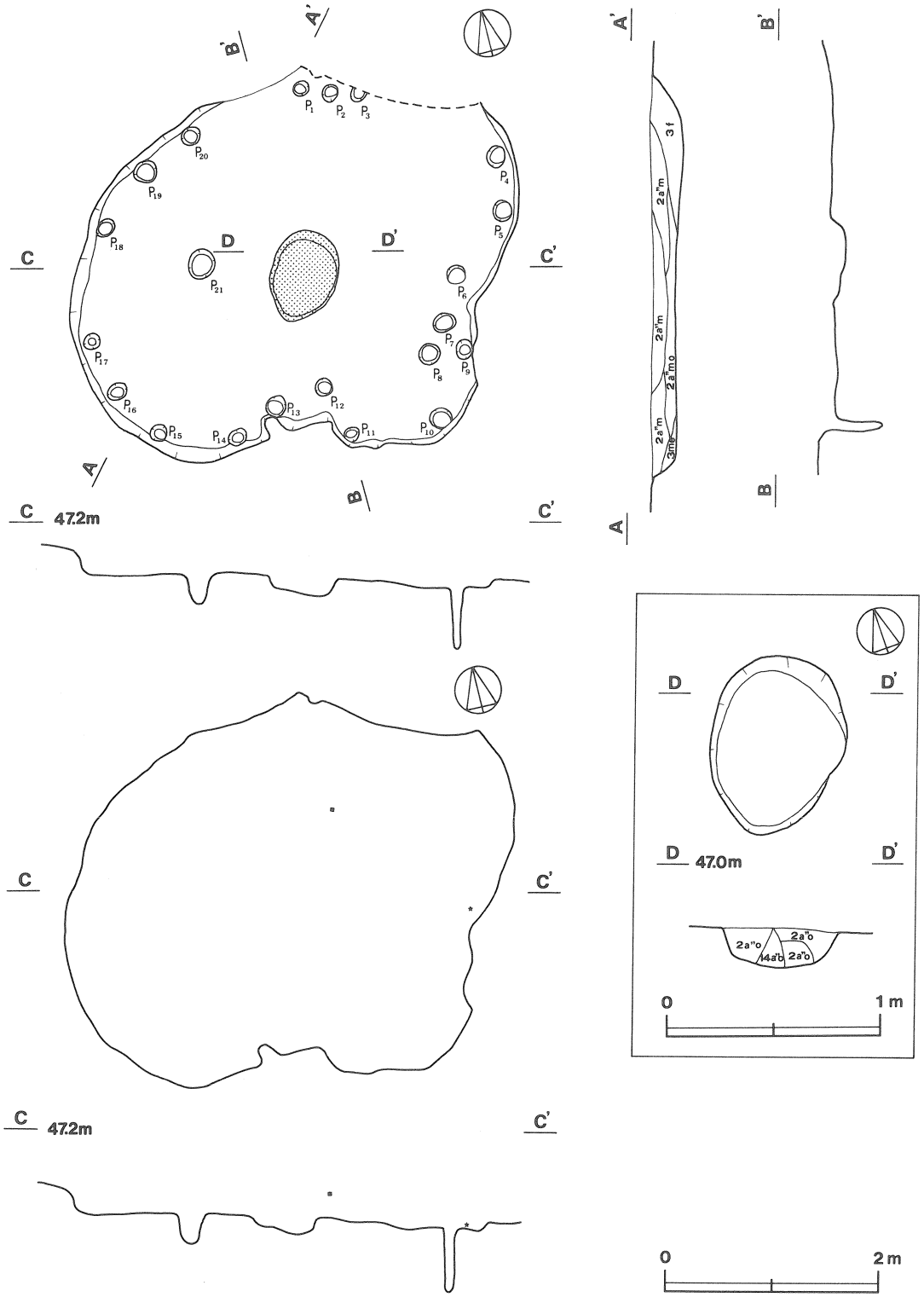
第93図　第13号住居跡出土土器実測図・拓影図

壁は砂質ロームで硬く，壁高は30～34cmで，外傾して立ち上がっている。床面は，砂質ロームで硬く踏み固められて締っており，壁際が高く中心部が低い。北西部に重複している第12号住居跡の床面との差は12～16cmほどあり，本跡の床面が低い。炉は検出されない。ピットは壁の外周に3か所検出されたが，配列からみて3か所とも主柱穴と考えられる。本跡の南側にも1か所存在したものと思われる柱穴は，第80号土坑によって消失したものと考えられる。主柱穴の規模は，長径24cm・深さ28～31cmでしっかりした柱穴である。出入口の施設は検出されない。覆土は炭化粒子・骨粉を多量に含む黒色土が自然堆積している。

遺物は，住居跡の南側を中心に覆土の上層から下層にかけて，縄文土器の口縁部15片・胴部67片・底部5片が出土し，石器は，1点出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代晩期と考えられる。

第15号住居跡（第94図）

本跡は，調査区中央部の B4d_0区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の東側4 mに位置



第94図　第15号住居跡実測図・遺物出土状況図

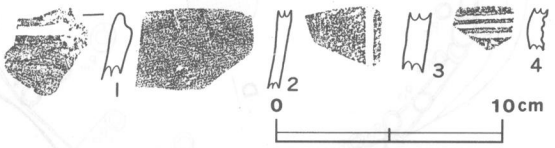
している。本跡は，北東側に重複している第16号住居跡に床を切られており，第16号住居跡よりも古いものと考えられる。

平面形は，長径4.45m・短径3.80mの楕円形を呈する主体部と，その南東側に付帯する柄部からなる「柄鏡形住居跡」で，主軸方向はN—25°—Wを指している。壁は，西壁が砂質ロームで外傾して立ち上がり，硬くしっかりしているが，南壁から東壁にかけては黒色土で軟弱である。壁高は，西壁が15cmほどあり，南壁から東壁は2～5cmである。床面は，軟らかい暗褐色土で凹凸があり，西から東へ緩やかに傾斜している。炉は中央に位置しており，平面形は長径80cm・短径60cmの楕円形を呈し，床面を10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には，焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土が堆積している。ピットは，壁際にほぼ等間隔に21か所検出された。配列と規模から見てP_2・P_4・P_6・P_{13}・P_{16}・P_{18}が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径16～20cm，深さ32～59cmで，同時期の住居跡の主柱穴と比較して細く深いものが多い。出入口の施設は，本跡の南東側にあり，幅1.5mほどで，南東側へ60cmほど張り出して検出された。P_9～P_{11}は，径16～20cm，深さ32～42cmで出入口の施設の柱穴と考えられる。覆土は，上層に炭化粒子を少量含む黒褐色土，下層に，炭化粒子・小ブロック状の砂質ロームを少量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物は，住居跡の全域にわたって，覆土下層から散在的に，縄文土器の口縁部4片・胴部24片が出土している。また，床面中央部北側の覆土上層から土偶の脚部が出土しているが，左脚か右脚かは不明である。石器は，2点出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期前葉ごろと考えられる。

出土土器

第95図1～4は，第15号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は，口唇部に1条の沈線を施している波状口縁部片で，外面は無文である。2・3は胴部片で，2は，無文である。3は，沈線を垂下させている。4は，口唇部を欠損している口縁部片で，3条の沈線を巡らしている。



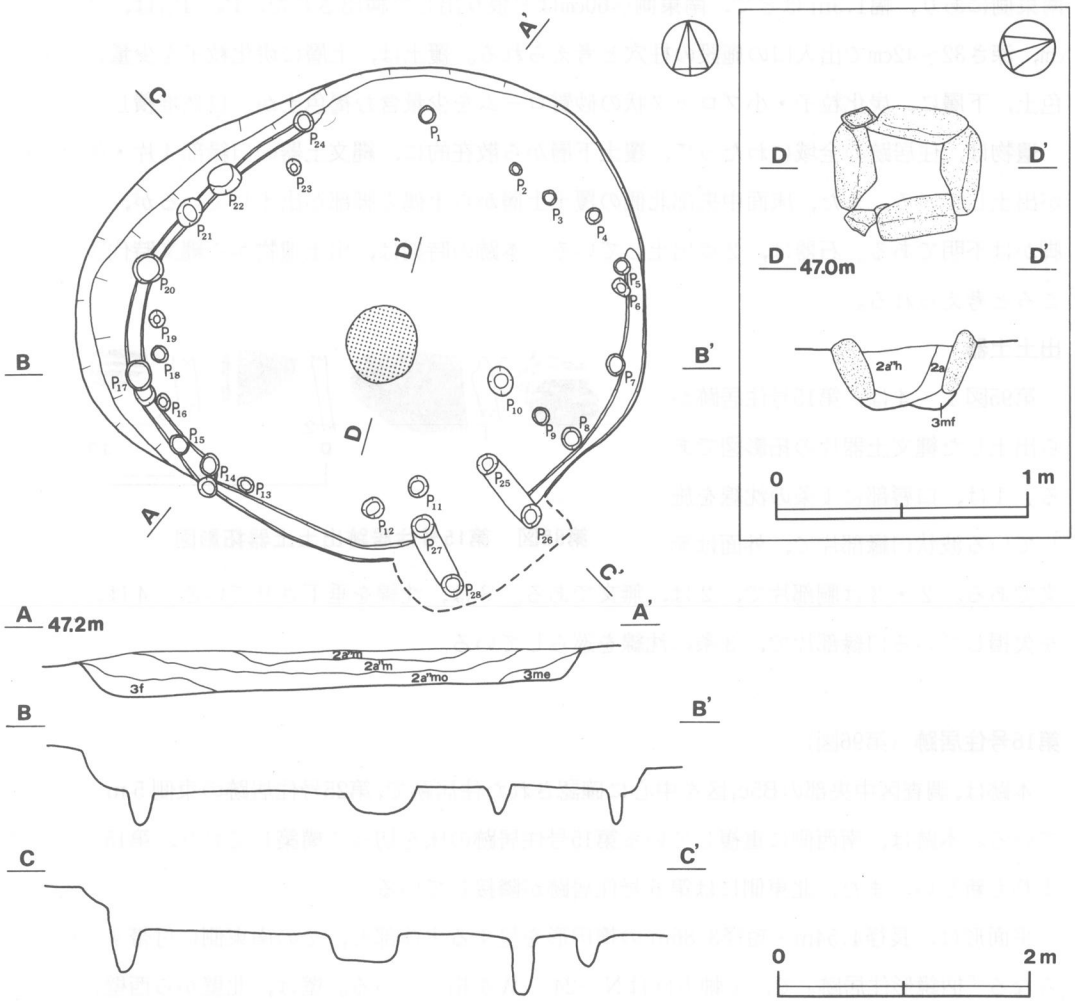
第95図　第15号住居跡出土土器拓影図

第16号住居跡（第96図）

本跡は，調査区中央部の$B5c_1$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の東側5mに位置している。本跡は，南西側に重複している第15号住居跡の床を切って構築しており，第15号住居跡よりも新しい。また，北東側には第6号住居跡が隣接している。

平面形は，長径4.54m・短径3.86mの楕円形を呈する主体部と，その南東側に付帯する柄部からなる「柄鏡形住居跡」で，主軸方向はN—24°—Wを指している。壁は，北壁から西壁にかけて

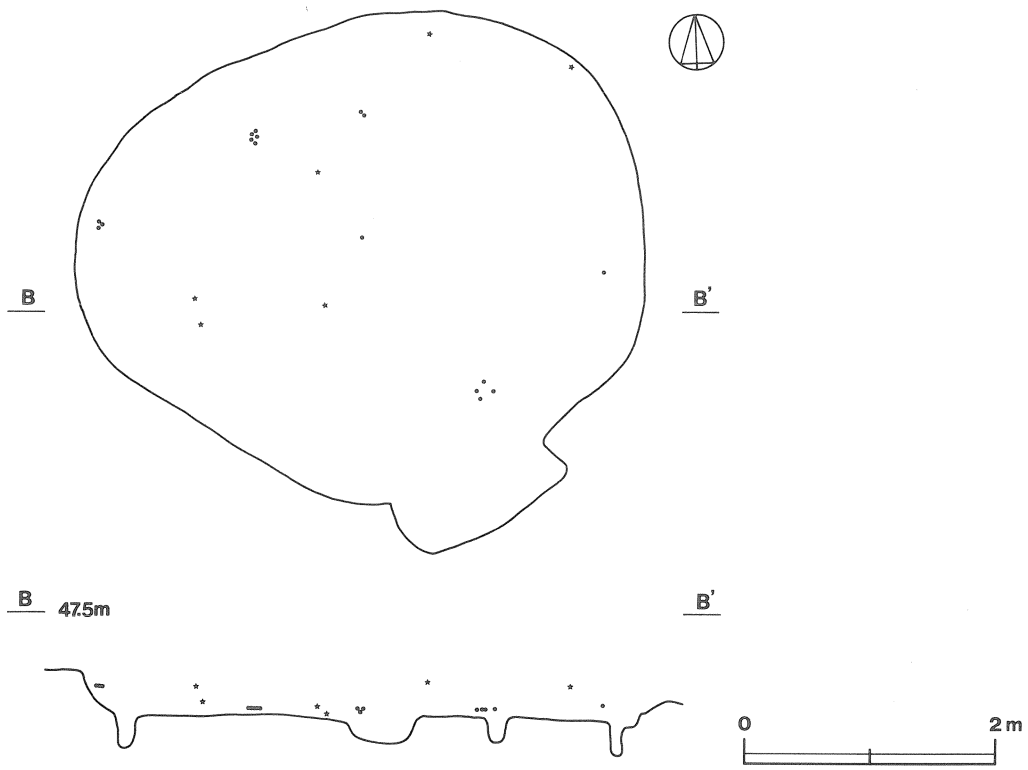
は硬いロームで遺存状態が良く，緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，北壁から西壁にかけて30cmと高く，南壁から東壁は遺存状態が悪く，ほとんど壁を残していない。床面は，炉の北側は硬く踏み固められたローム土で，南側は粘土を含む砂質ロームである。また，全体的に平坦で，北側から南側へ緩やかに傾斜している。壁下には，北東側を除いて壁溝が周っている。壁溝の規模は，上幅8～14cm・深さ4～6cmである。炉は，中央部に位置しており，平面形は長辺60cm・短辺50cmの長方形を呈し，床面を20cmほど掘り込んで，炉の周囲を石で構築した「石組炉」である。炉石は，長さ35cm，幅15cmほどの長方形状の石を4個，長方形に組み込み，角の部分にこぶし大の石2個を配して補強している。炉内には，上層に焼土粒子を少量含む黒褐色土，下層に炭化粒子・焼土粒子を少量含む褐色土が堆積している。ピットは壁際に28か所検出され，そのうち8か所は壁溝上に検出された。配列と規模からP_1・P_4・P_9・P_{12}・P_{14}・P_{22}が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径14～28cm・深さ25～37cmで，小規模のものが多い。出入口の施設は，



第96図　第16号住居跡実測図

南東側にあり，幅1.2m・長さ60cmほど南東方向に張り出して検出された。P_{25}～P_{28}は，径18cm・深さ22～47cmで，出入口の施設の柱穴と考えられる。覆土は，上層に多量の砂粒・少量の炭化粒子を含む黒褐色土が，下層には，炭化粒子・獣骨粉を少量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物は，住居跡の西側の覆土下層を中心に散在的に，縄文土器の口縁部47片・胴部338片・底部12片が出土している。また，西側の覆土下層から深鉢形土器（第98図１）が出土している。石器は，３点出土している。出土土器は，加曽利Ｂ式期のものであり，本跡の時期は，加曽利Ｂ式期と考えられる。



第97図　第16号住居跡遺物出土状況図

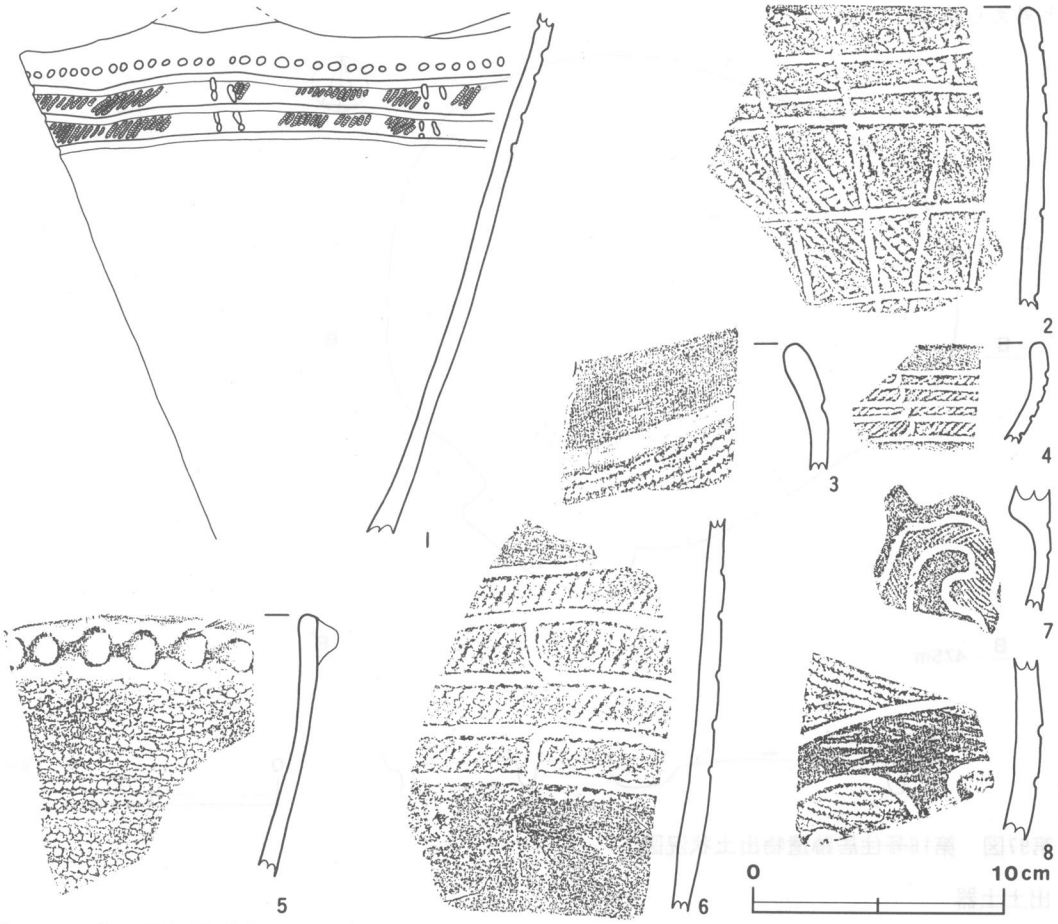
出土土器

第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第98図 1	深鉢形土器	A 21.3 B (20.0) C (7.0)	底部から外傾して立ち上がり，口縁は三つの大きな波頂部を有し，口唇部内側には１条の沈線を巡らしている。口縁部文様帯は，３条の沈線をほぼ平行に巡らせ，その内側に縄文を施している。沈線の上部には，円形刺突文が一巡している。	砂粒・長石・石英 普通 褐灰色	80% P－50

第98図２～８は，第16号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２～５は口縁部片で，２は，縄文地文上に，横位，縦位の沈線を施し，格子目文を施している。３は，波状を呈し，口

縁部に幅の広い沈線を巡らし，口縁部の無文帯と胴部の縄文文様帯を区分している。4は，5条の平行沈線により帯状縄文を施し，沈線間はキザミ目により連結している。5は，口縁に隆帯を貼付し，圧痕文を施している。6は，胴部片で，縄文地文上に横位の沈線により，帯状縄文を施し，沈線間は沈線によるキザミ目を入れ連結している。7は，突起を有する波状口縁部片で，沈線により曲線的モチーフを描き，沈線間に縄文を充塡している。8は，胴部片で，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフを描き，磨消縄文を施している。



第98図　第16号住居跡出土土器実測図・拓影図

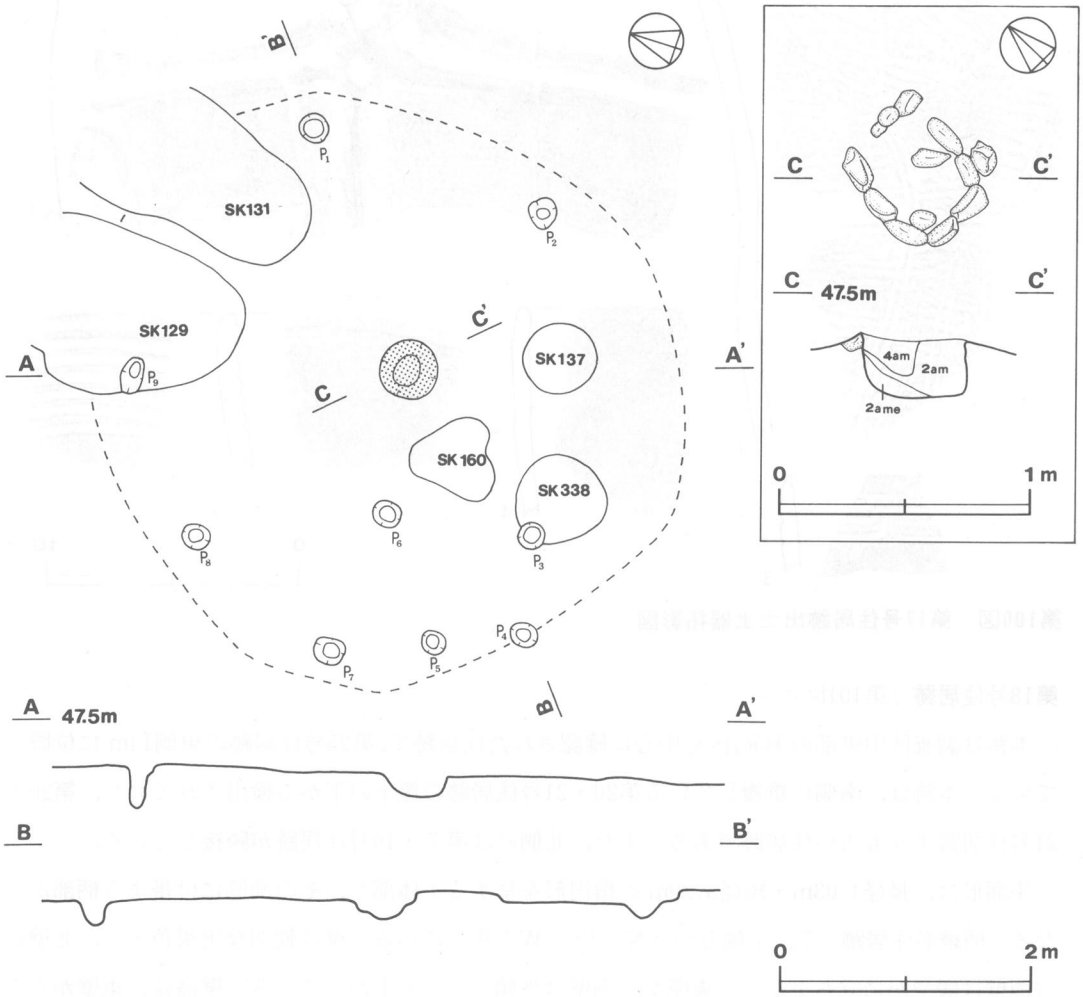
第17号住居跡（第99図）

本跡は，調査区中央部の B5b$_3$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北東側15m に位置している。本跡は，南側に重複している第7・10号住居跡，西側に重複している第4号住居跡の床面下から検出された住居跡であり，それらの中では最も古い住居跡であるといえる。また，本跡の北側には本跡よりも新しいと思われる第129・131号土坑が床を切って重複している。

本跡は，第4・7・10号住居跡の下部から検出された住居跡で，黒色土中の石囲い炉や柱穴を

手がかりに，床面や壁の調査をしたが，壁の遺存状態が悪く，床面の広がりも明確にとらえることができなかった。従って，平面形は，炉やピットの位置から推定すると，長径4.70m・短径4.60mのほぼ円形と思われる。床面は黒褐色で軟弱である。炉は中央に位置しており，平面形は，長径55cm・短径45cmの楕円形を呈し，床面を16cmほど掘り込み，炉の周りに石を並べた「石囲い炉」である。炉石は，こぶし大から径15cmほどの河原石を12個楕円形状に配列している。炉石はもろく崩れやすい状態で，火を受けた様子がよくうかがえる。炉内には，炭化粒子を少量含む黒褐色土が堆積しているが，焼土の堆積はみられない。ピットは9か所検出されたが，配列からみて，P_1～P_3・P_7・P_9が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径22～30cm，深さ23～47cmで，いずれも小規模の柱穴である。出入口の施設は検出されない。覆土の堆積状態は，把握することができなかった。

遺物は，住居跡の東側に一部残存している覆土の下層から集中して，縄文土器の口縁部65片・

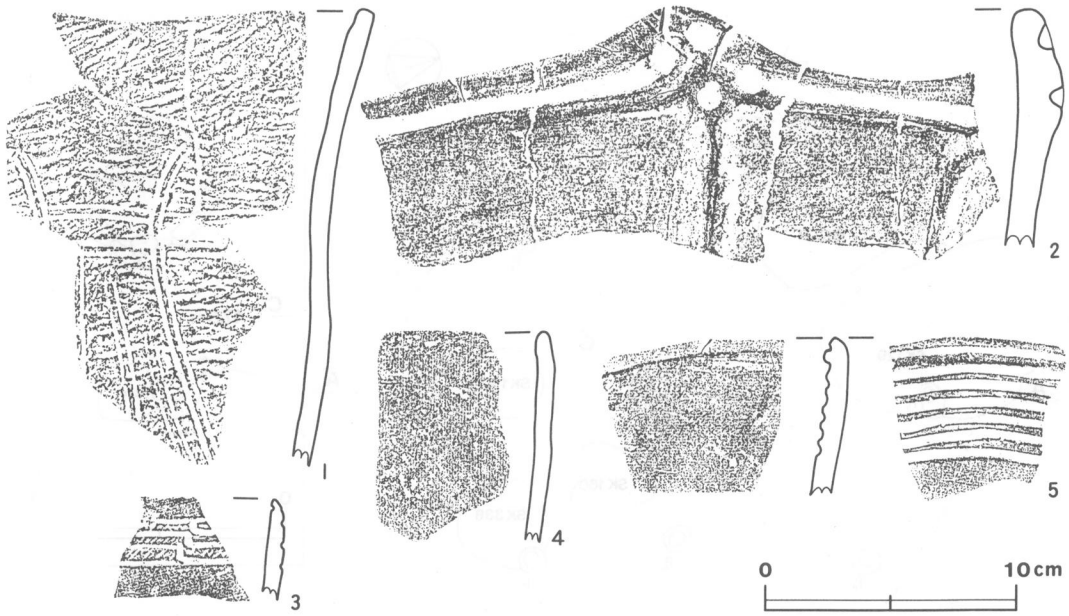


第99図　第17号住居跡実測図

胴部457片・底部18片が出土している。土器片の多くは，縄文時代後期に比定される。石器は２点出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期後葉ごろと考えられる。

出土土器

第100図１～５は，第17号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１は，内面に１条の沈線を巡らしている口縁部から胴部にかけての土器片である。胴部文様帯には，無節縄文の上に沈線による曲線的モチーフを描いている。２は，沈線を巡らしている波状口縁部片で，波頂部外面には棒状工具による３つの刺突文を施し，１つの孔を穿っている。波頂部下からは１条の隆帯を垂下させている。３～５は口縁部片で，３は，内面に１条の沈線を巡らし，外面には，４条の沈線を巡らしキザミ目により区分している。４は，無文で，内面に１条の沈線を巡らしている。５は，浅鉢形土器の口縁部片で，内面に７条の平行沈線を巡らし，外面は無文としている。



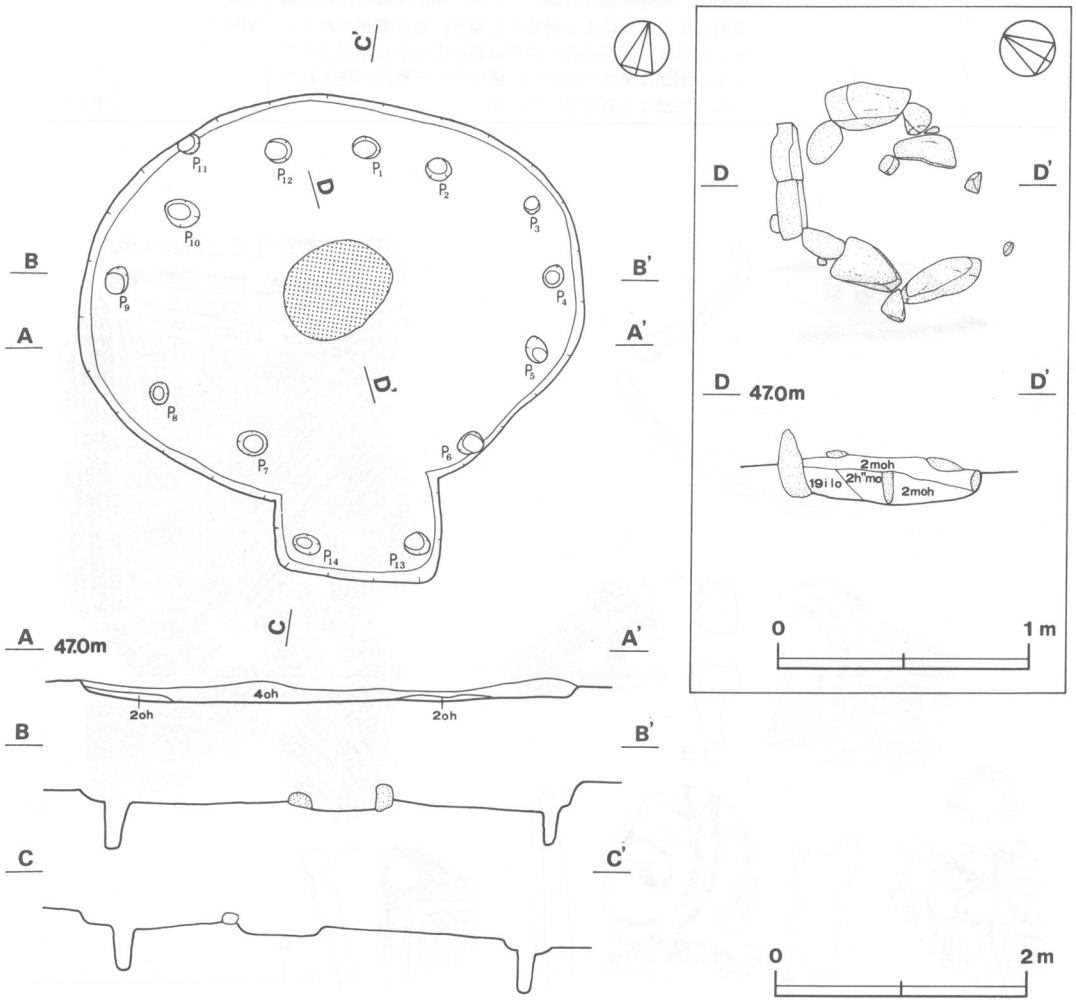
第100図　第17号住居跡出土土器拓影図

第18号住居跡（第101図）

本跡は調査区中央部の B5c$_3$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の東側14m に位置している。本跡は，南側に重複している第20・21号住居跡の覆土の下から検出されており，第20・21号住居跡よりも古い住居跡である。また，北側には第７・10号住居跡が隣接している。

平面形は，長径4.03m・短径3.20m の楕円形を呈する主体部と，その南側に付帯する柄部からなる「柄鏡形住居跡」で，主軸方向はN－19°－Wを指している。壁は軟弱な黒褐色土で，北壁から西壁は緩やかに立ち上がり，東壁から南壁は外傾して立ち上がっている。壁高は，東壁から南

壁にかけて20cm，他は10cmほどである。床面は，硬く踏み固められており，緩やかな起伏があるが，全体的には，南東側に緩やかに傾斜している。炉は，中央に位置しており，平面形は，長径90cm・短径70cmの不整楕円形を呈し，床面を20cmほど掘り込み，炉の周囲に石で構築した「石組炉」である。幅20cm・長さ30cmほどの大きい石を楕円形状に組み込み，大きい石の継ぎ目に卵大ほどの小さい石を組みこんで補強している。炉内には，上層に炭化粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色土，下層に焼土粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土が堆積している。炉内の北側底部には赤褐色の焼土が堆積し，炉床は焼けて硬くなっていることから，長期間使用されたものと思われる。ピットは，壁際に等間隔で12か所，南東側の出入口部に2か所検出された。配列からみて，P_2・P_6・P_7・P_{10}が主柱穴と考えられ規模は，長径20～28cm，深さ22～36cmで，いずれも小規模のものである。P_{13}・P_{14}を除く他のピットは本跡に関係ある支柱穴と思われる。出入口の施設は，本跡の南東部に幅1.3m，長さ60～80cmほど南東に張り出しを有して検出された。P_{13}・P_{14}は，径22cm・



第101図　第18号住居跡実測図

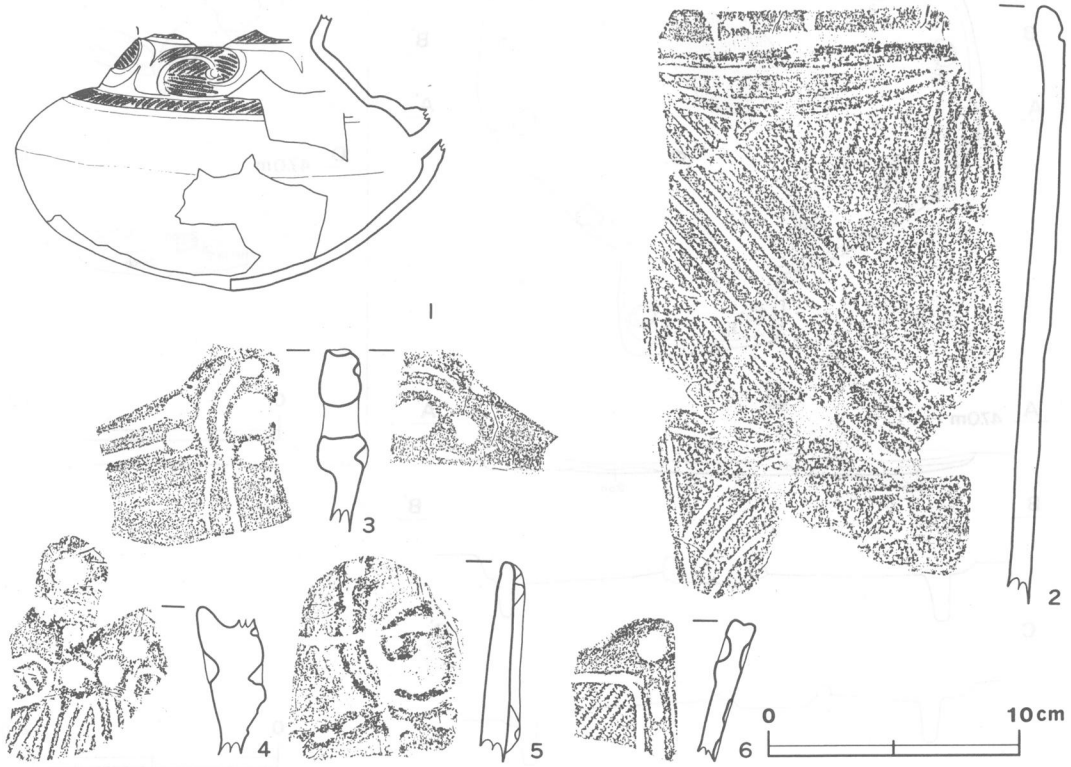
深さ30～32cmで出入口の施設の柱穴と考えられる。覆土は，焼土粒子を少量含む黒褐色土が，自然堆積している。

遺物は，住居跡北側の下層から主に縄文土器の口縁部114片・胴部654片・底部27片が出土している。石器は，6点出土している。また，西側上層から晩期の注口土器（第102図1）が出土しているが，出土土器の多くは，後期の堀之内式期のものが含まれており，本跡の時期は堀之内式期と考えられる。本跡の上層には，晩期の土器が出土しているE配石群が検出されていることから，晩期の注口土器は，撹乱により流れ込んだものと思われる。

出土土器

第18号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第102図 1	注口土器	B(11.0) C　丸底	口縁部・注口部を欠損している。胴部は丸味をもって立ち上がり，胴中位で内彎し，頸部で内傾している。口縁部の一部残存部は外傾している。頸部文様帯には，縄文地文上に沈線による渦巻文を描き，他は磨消されている。注口は，胴部の膨らみ部に斜め上向きに貼付されている。胴部は無文であるが，横位のナデ整形が施されている。底部は丸底を呈している。	砂粒・長石・石英 雲母 普通 褐灰色	60% P－191



第102図　第18号住居跡出土土器実測図・拓影図

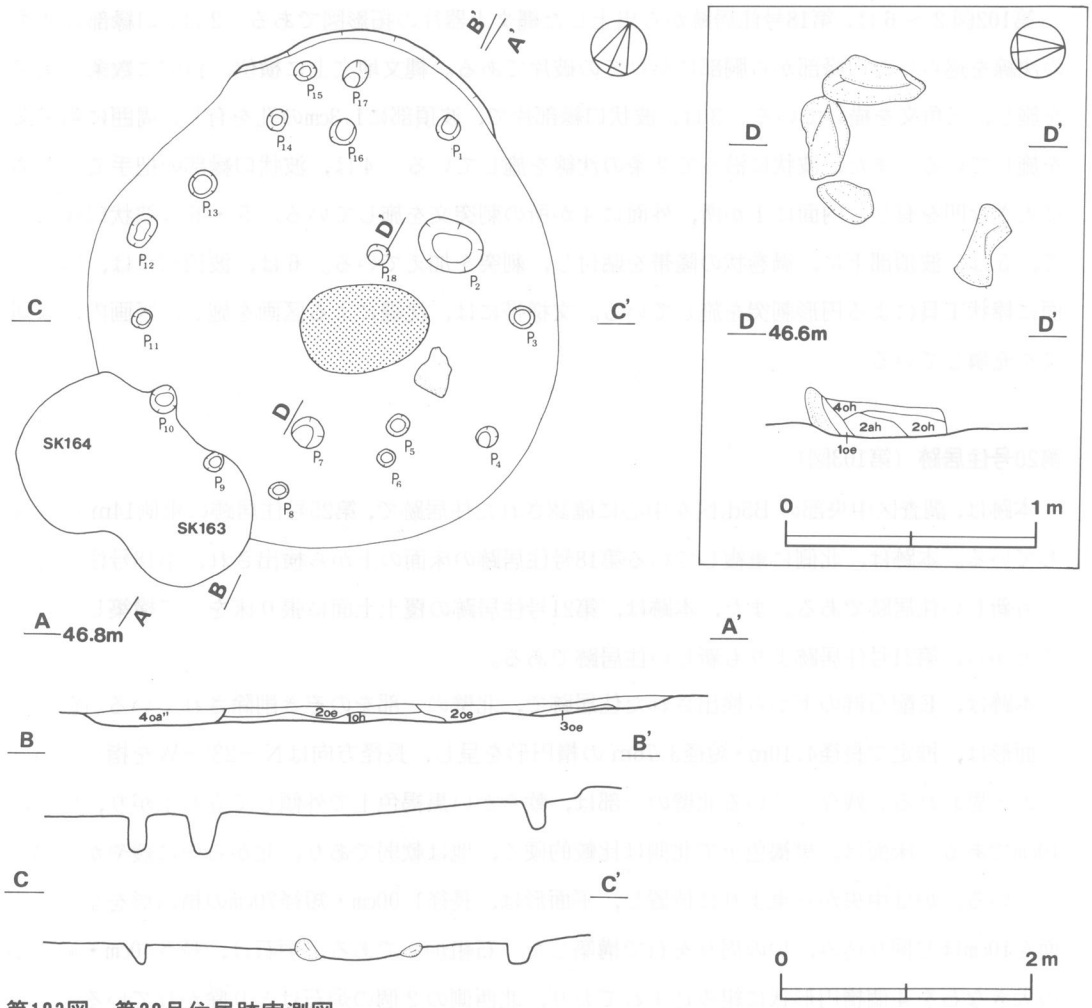
第102図２～６は，第18号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２は，口縁部に２条の沈線を巡らした口縁部から胴部にかけての破片である。縄文地文上に横位，斜位に数条の沈線を施し，三角文を描いている。３は，波状口縁部片で，波頂部に1.3cmの孔を有し，周囲に刺突文を施している。また，波状に沿って２条の沈線を施している。４は，波状口縁部の把手で，上部に大きな凹を有し，内面に１か所，外面に４か所の刺突文を施している。５・６は波状口縁部片で，５は，波頂部下に，渦巻状の隆帯を貼付し，刺突を加えている。６は，波頂部には，内・外面に棒状工具による円形刺突を施している。文様帯には，沈線による区画を施し，区画内には縄文を充塡している。

第20号住居跡（第103図）

本跡は，調査区中央部の $B5d_3$ 区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の東側14m に位置している。本跡は，北側に重複している第18号住居跡の床面の上から検出され，第18号住居跡よりも新しい住居跡である。また，本跡は，第21号住居跡の覆土上面に張り床をして構築していることから，第21号住居跡よりも新しい住居跡である。

本跡は，Ｅ配石群の下から検出された住居跡で，北壁の一部をのぞき削除されている。従って，平面形は，推定で長径4.10m・短径3.76m の楕円形を呈し，長径方向はＮ―23°―Ｗを指しているものと思われる。残存している北壁の一部は，軟らかい黒褐色土で外傾して立ち上がり，壁高は10cmである。床面は，黒褐色土で北側は比較的硬く，他は軟弱であり，北から南に緩やかに傾斜している。炉は中央から東よりに位置し，平面形は，長径1.00cm・短径70cmの楕円形を呈し，床面を10cmほど掘り込み，炉の周りを石で構築した「石組炉」である。炉石は，長さ40cm・幅20cmの大きな石を４個楕円形状に組み込まれており，北西側の２個の炉石はとり除かれている。炉内には，焼土粒子を少量含む黒褐色土が堆積している。炉床は，焼土がうすく堆積し，焼けて硬くなっていることから，長期間使用したものと考えられる。ピットは18か所検出され，配列からみて P_1・P_3・P_4・P_8・P_{10}・P_{12}・P_{14}が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径18～28cm・深さ11～32cmで，小規模のものが多い。出入口の施設は検出されない。覆土は，焼土粒子を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，住居跡の全域にわたって覆土の下層から散在的に，縄文土器の口縁部23片・胴部245片・底部12片が出土している。石器は，２点出土している。また，炉の20cmほど東側には，長さ35cm，幅30cmほどの表面の扁平な石が出土している。扁平な面は，本跡の床面と同一レベルであることから，炉を使用した際に物を置く台石として使用したものと考えられる。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期中葉ごろと考えられる。



第103図　第20号住居跡実測図

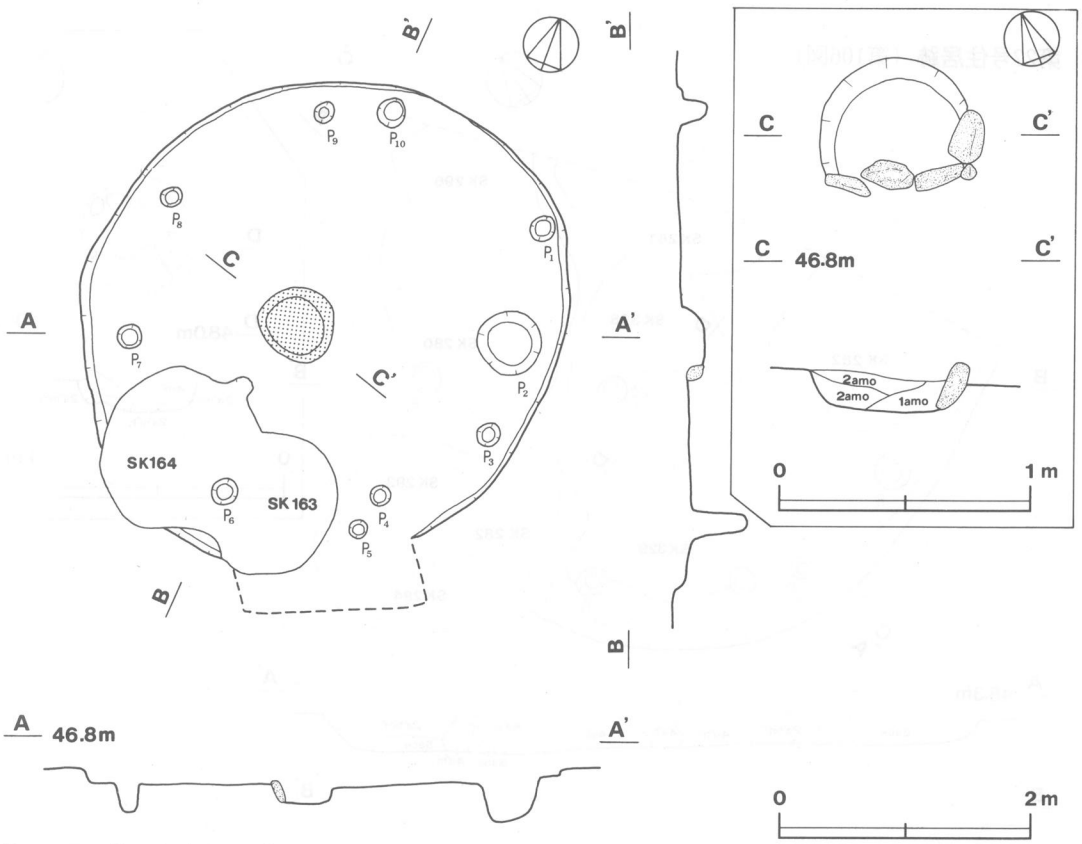
第21号住居跡（第104図）

本跡は，調査区中央部の B5d$_3$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の東側14m に位置している。本跡は，本跡にほぼ重なり合っている第20号住居跡の下から検出された住居跡であり，第20号住居跡よりも古い住居跡と思われる。また本跡の南壁を切って本跡よりも新しいと思われる第163・164号土坑と重複している。

平面形は，長径4.10m・短径3.75m の楕円形を呈し，長径方向はN－23°－Wを指している。壁は，北壁の一部と，南東壁の一部を除いて明確に残存し，外傾して立ち上がっている。壁高は，西壁が18cm，東壁は 6 cmほどである。床面は，硬く平坦であるが，北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。炉は中央に位置し，平面形は，長径70cm・短径60cmの楕円形を呈し床面を20cmほど掘り込み，炉の周囲を石で構築した「石組炉」である。炉は，長さ20cm，幅15cmほどの石を

5個組み込んであり，北側の石は消失している。炉内には，焼土粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土が堆積している。ピットは10か所検出されたが，いずれも壁際にほぼ等間隔でまわっており，また，規模も同じ程度であることから，いずれのピットも柱穴として使用されたものと思われる。ピットの規模は，長径16～24cm，深さ13～34cmで，P_6だけは深さ51cmと深い。出入口の施設は検出されない。覆土は，第20号住居跡の掘り込みと張り床によって，ほとんど削平されているが，重複からはずれたわずかな部分の覆土は，自然堆積の状態を呈している。

遺物は，重複をまぬがれた西壁近くの覆土下層から，縄文土器の口縁部8片・胴部63片・底部3片が出土し，石器は，1点出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期中葉ごろと考えられる。

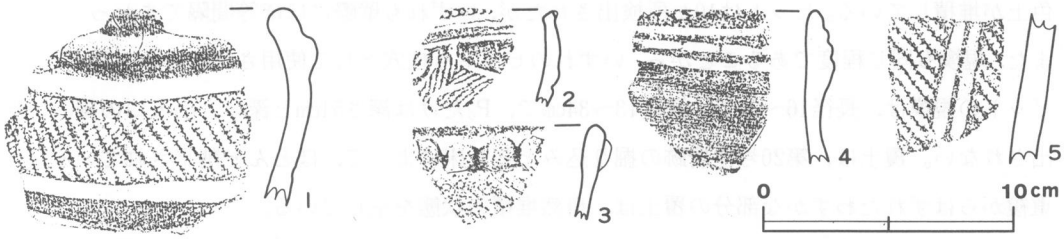


第104図　第21号住居跡実測図

出土土器

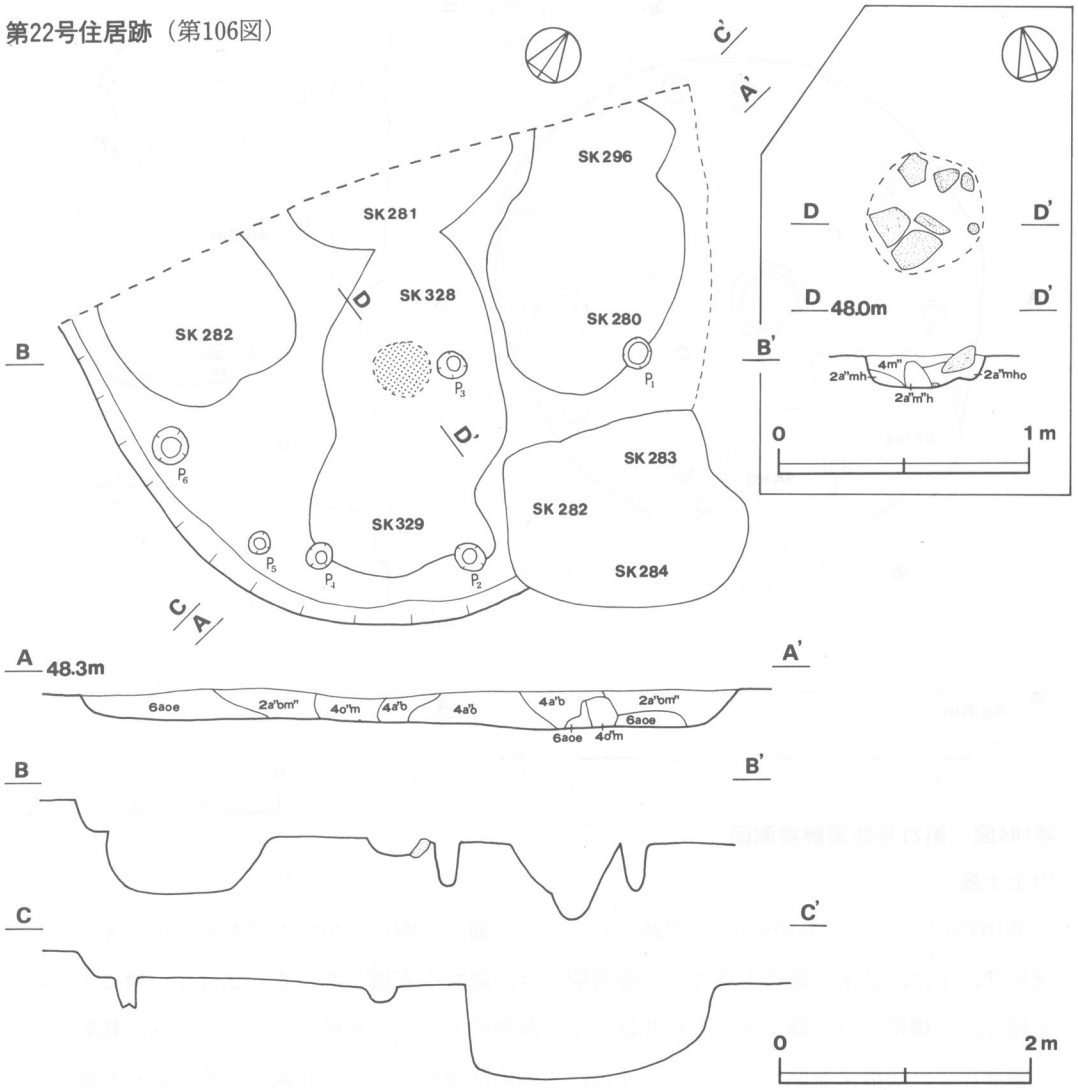
第105図1～5は，第20•21号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～4は，口縁部片で，1は，2条の隆帯を巡らし，隆帯間には，縄文を充塡している。2は，口唇にキザミ目を施し，文様帯には，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフを描いている。3は，粗製土器の口縁部片で，圧痕文を貼付している。4は，3条の沈線を巡らし，沈線による区切りを施してい

る。5は，胴部片で，縄文地文上に2条の平行沈線を垂下させている。



第105図　第20・21号住居跡出土土器拓影図

第22号住居跡（第106図）



第106図　第22号住居跡実測図

本跡は，調査区西側部の B4c₂区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の西側16m に位置している。本跡の西側は調査エリア外へ延びており，調査はできなかった。本跡内には，本跡の床面下から検出された，本跡よりも古いと思われる第280・281・296・282・393号土坑が重複し，また，本跡よりも新しい第283・284・292号土坑が，東壁を切って重複している。

平面形は，径5.42m の円形を呈しているものと推定される。壁は暗褐色土で軟らかく，外傾して立ち上がっている。壁高は15～20cmである。床面は炉の南側部分が硬く踏み固められているが，他は土坑の重複が多く軟弱である。炉は中央に位置し，平面形は径50cmほどの円形を呈し，床面を15cmほど掘り込み，炉の周囲に石を並べた「石囲い炉」である。炉石は，こぶし大から径20cmほどの石を７個使用しているが，南東側は，こぶし大の石１個を残して消失している。炉内の下層には，炭化粒子・焼土粒子を含む黒褐色土が堆積している。ピットは６か所検出されたが，配列や規模から P_1・P_2・P_6が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径20～32cmで，深さは，P_1が39cm・P_2が71cm・P_6が86cmで，P_2・P_6が特に深い。出入口の施設は検出されない。覆土は全体的に黒色土で，炭化粒子を含んでおり，自然堆積の状態を呈している。炉の付近の覆土は骨粉を特に多く含んでいる。

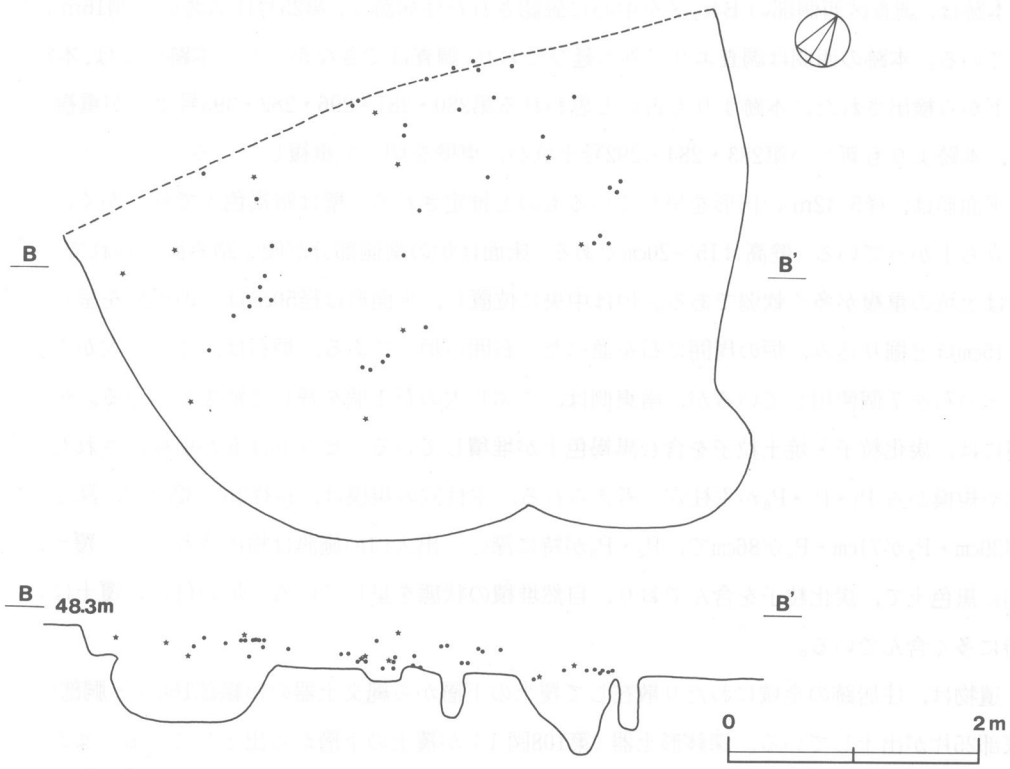
遺物は，住居跡の全域にわたり散在して覆土の下層から縄文土器の口縁部160片・胴部616片・底部25片が出土している。深鉢形土器（第108図１）が覆土の下層から出土している。また，注口土器の注口部が，中央から西寄りの覆土から出土し，南西壁近くの床面直上から，折れた石剣の柄部（第256図373）が西の方向を向いて出土している。炉の南側覆土からは，半分に折れた独鈷石（第358図387）が出土している。その他石器は，７点出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期後葉ごろと考えられる。

出土土器

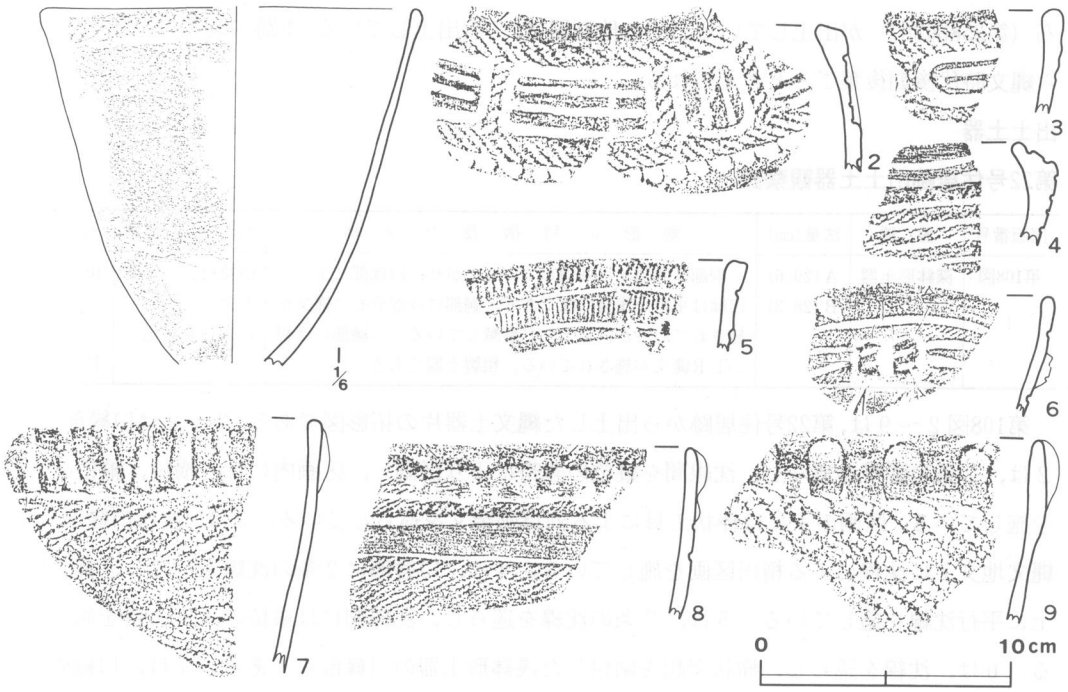
第22号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第108図 1	深鉢形土器	A(29.6) B(28.3)	胴部は底部から外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁は平坦な複合口縁である。胴部には部分的に縄文が施されているが，ほとんど磨滅している。口縁部には粗いＬＲ縄文が施されている。粗製土器である。	砂粒・長石・石英 不良 にぶい黄橙色	40% P－55

第108図２～９は，第22号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２～９は口縁部片で，２は，２条の隆帯を巡らし，沈線間を縦位の隆帯により区画し，区画内には，横位，縦位の沈線を施している。区画の下には棒状工具による列点刺突文を巡らしている。３は，波状口縁部片で，縄文地文上に沈線による楕円区画を施している。４は，口唇部に２条の沈線を巡らし，縄文地文上に平行沈線を施している。５は，２条の沈線を巡らし，沈線間には縦位のキザミ目を施している。６は，沈線を巡らし，瘤状突起を貼付した浅鉢形土器の口縁部片である。７は，口縁直下に



第107図　第22図号住居跡遺物出土状況図

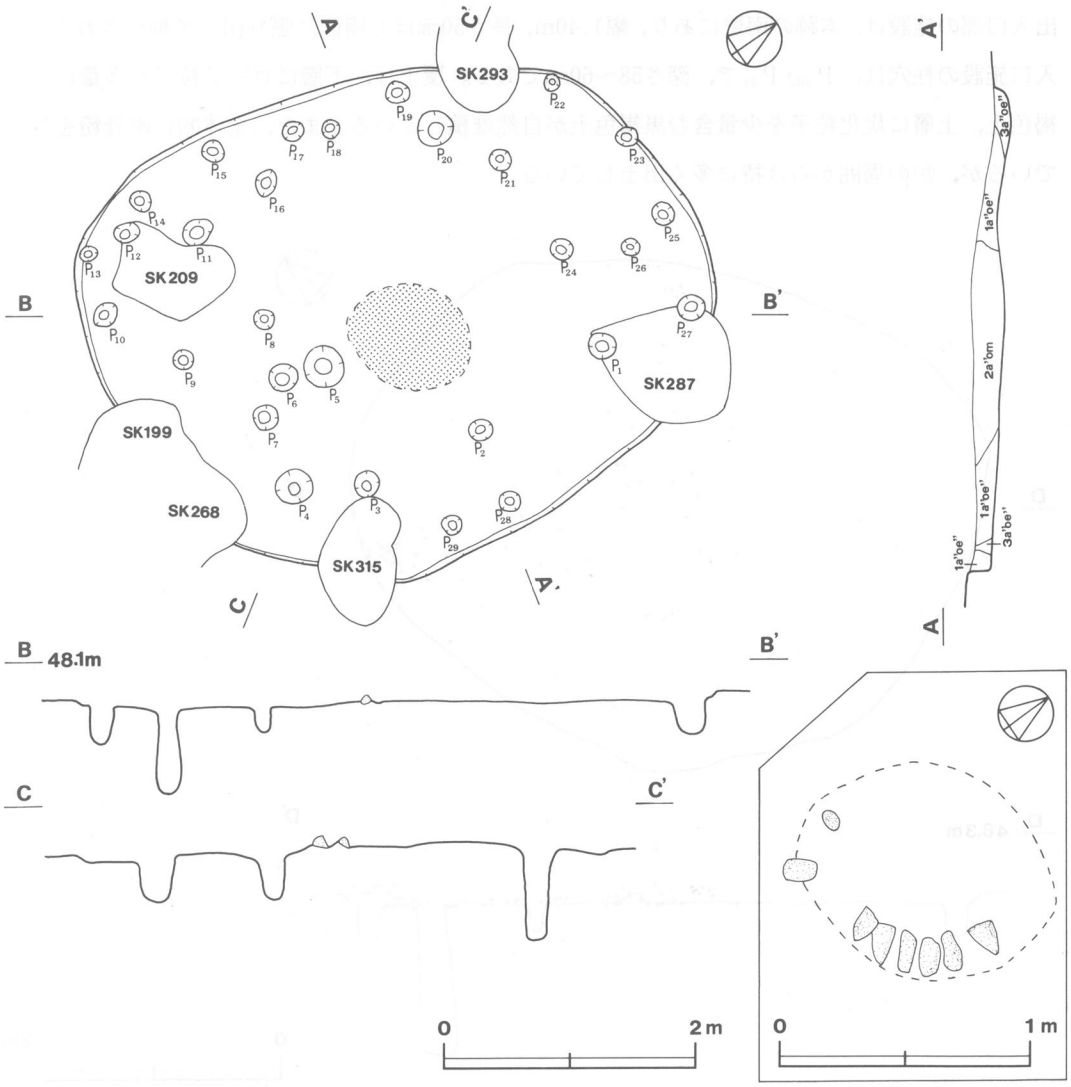


第108図　第22号住居跡出土土器実測図・拓影図

棒状工具による圧痕文を施し，以下には粒の大きい縄文を施文している。8は，口縁直下に圧痕文を施し，縄文地文上に2条の沈線を巡らし，沈線間を磨り消している。9は，口縁直下に圧痕文を施し，以下には粒の大きい縄文を施文している。

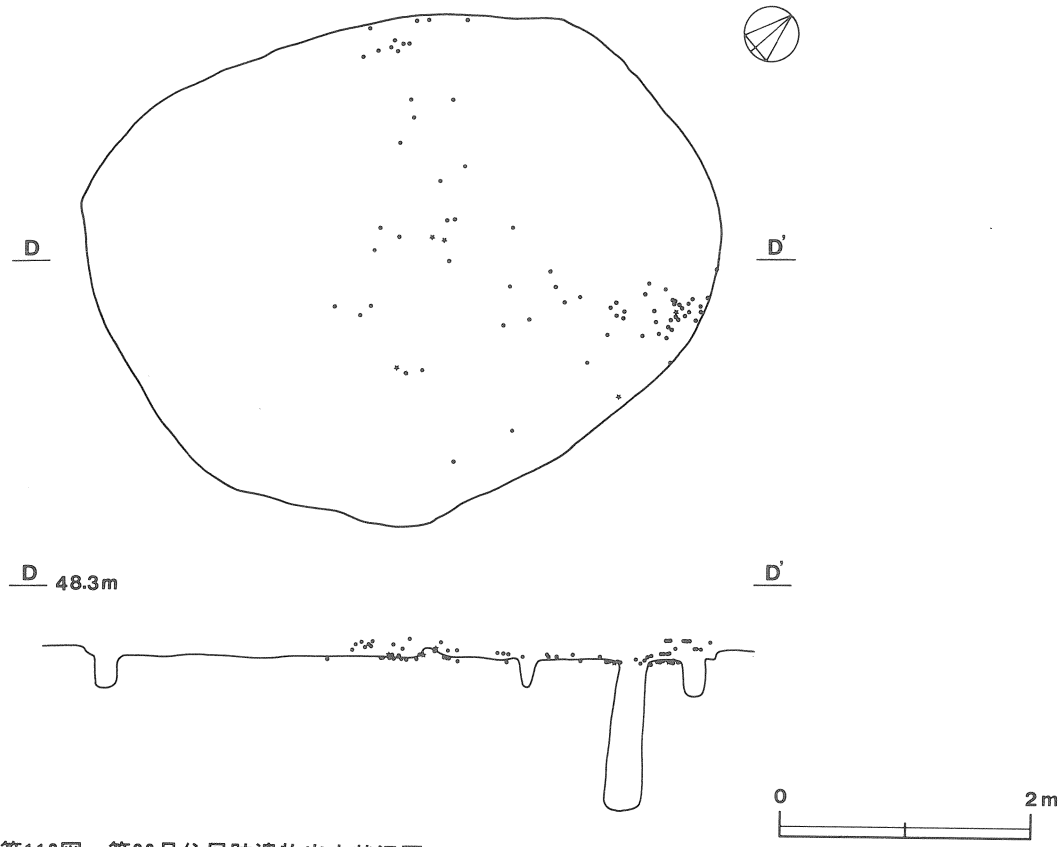
第23号住居跡（第109図）

本跡は，調査区西側部のB4a$_5$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北西側8 mに位置している。本跡内には，炉の南西側に本跡の床面下から検出された本跡よりも古いと思われる第209号土坑が重複している。また，南東側には本跡よりも新しい第315号土坑，北東側に第287号土坑，北西側に第293号土坑がそれぞれ壁を切って重複している。



第109図　第23号住居跡実測図

平面形は，長径5.01m・短径4.02mの楕円形を呈する主体部と，その南側に付帯する柄部からなる「柄鏡形住居跡」で，主軸方向はN－4°－Eを指している。壁は全体的に壁高5～6cmで，砂粒を多く含んだ暗褐色土で軟弱であり，立ち上がりは不明確な部分が多い。床面は，砂質のロームで硬く踏み固められており，北から南へ向かって緩やかに傾斜している。炉は中央に位置しており，平面形は，長径100cm・短径80cmの楕円形を呈しており，床面をわずかに掘り込み，炉の周りに石を並べた「石囲い炉」である。石は握りこぶし大のもの8個が炉の南東側に残っているが，他の部分は消失している。炉内には，炭化粒子・焼土粒子を含む暗褐色土が堆積し，炉床には焼土がわずかに残っている。炉石は焼けてもろくなっており，長期間使用されたものと思われる。ピットは，壁際から31か所検出されたが，配列からみるとP_1・P_3・P_{11}・P_{20}が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は長径22～30cm，深さ52～78cmで，いずれも深くしっかりした柱穴である。出入口部の施設は，本跡の南壁にあり，幅1.40m，長さ50cmほど南側に張り出して検出された。出入口施設の柱穴は，P_{30}・P_{31}で，深さ58～60cmである。覆土は，下層にローム粒子を多量に含む褐色土，上層に炭化粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。また，全体的に獣骨粉を含んでいるが，炉の周囲からは特に多く出土している。

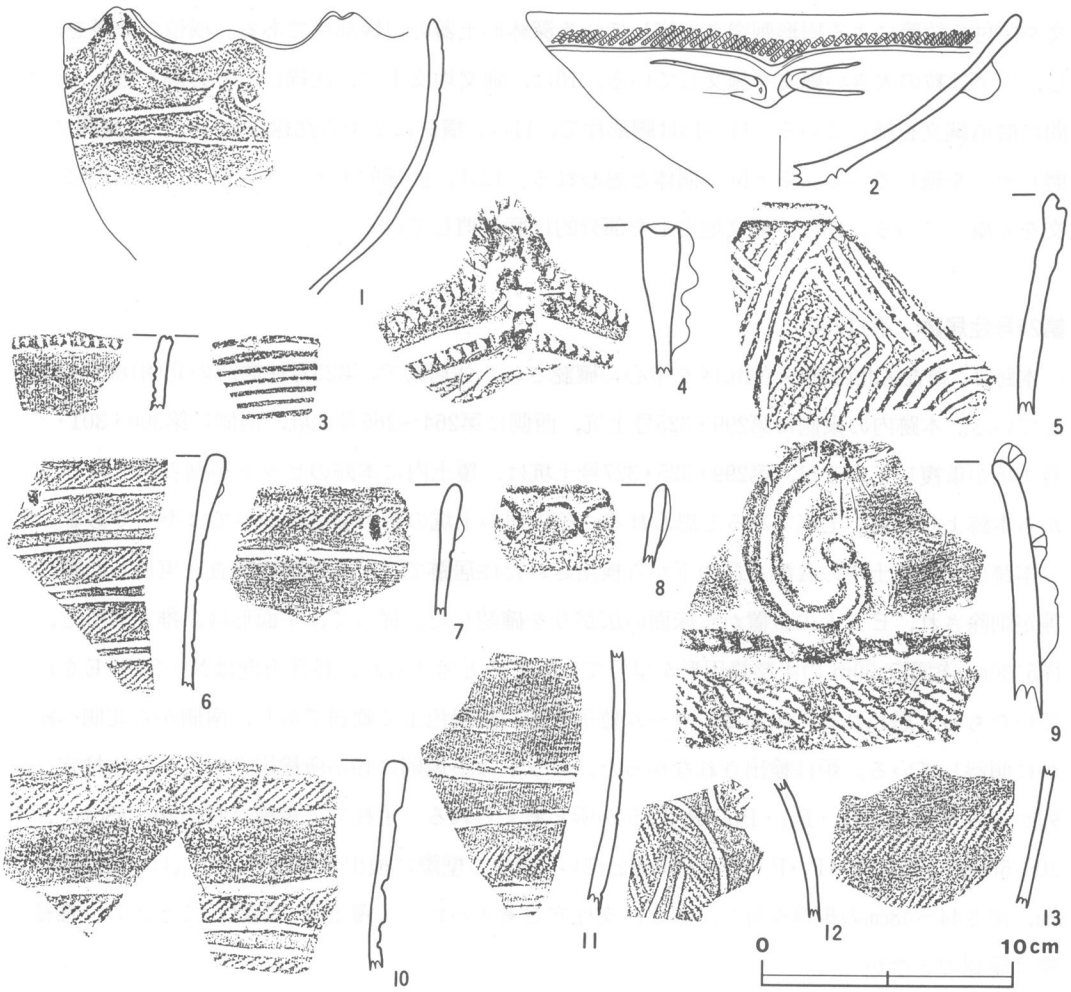


第110図　第23号住居跡遺物出土状況図

遺物は，住居跡の北東部の下層から床面直上にかけて縄文土器の口縁部138片・胴部852片・底部30片が出土している。炉のすぐ南側からは，注口土器の注口部が，その南側から台付鉢(第111図２）が伏せた状態で出土している。また，北東側の覆土から深鉢形土器（第111図１）が出土している。石器は，６点出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期後葉ごろと考えられる。深鉢形土器は，晩期の大洞式期のものと思われるが，本跡よりも新しい第287号土坑の撹乱により流れ込んだものと考えられる。

出土土器

第111図３～13は，第23号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。３は，口唇部に１条の沈線を巡らしている口縁部片で，内面には，平行沈線を巡らし，外面の口縁直下にはキザミ目を施している。４は，瘤状突起を有する波状口縁部片で，突起上部には凹を施し，外面には隆帯を貼付している。口縁部には隆帯を貼付し，キザミ目を巡らしている。５は，口唇部に１条の沈



第111図　第23号住居跡出土土器実測図・拓影図

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第111図 1	深鉢形土器	A(15.0) B(11.6)	胴部は底部から内彎して立ち上がり口縁部に至る。口縁部文様帯は，口縁が波状を呈し，波頂部には，山形突起と双頭突起を交互に配している。また縄文地文上に3条の沈線を巡らし，玉抱き三叉文や単独の三叉文を配している。	砂粒 普通 赤褐色	30% P－120
2	台付鉢形土器	A 20.0 B(6.7) C(5.5)	底部から内彎して立ち上がっている。口縁は平坦な単純口縁である。口縁部文様帯には，1条の沈線を巡らし，沈線から上部には縄文を施している。沈線の下には瘤状の突起を付し，さらに，沈線を配している。胴部は無文である。底部外面は脚付き底である。	砂粒 良好 橙色	60% P－72

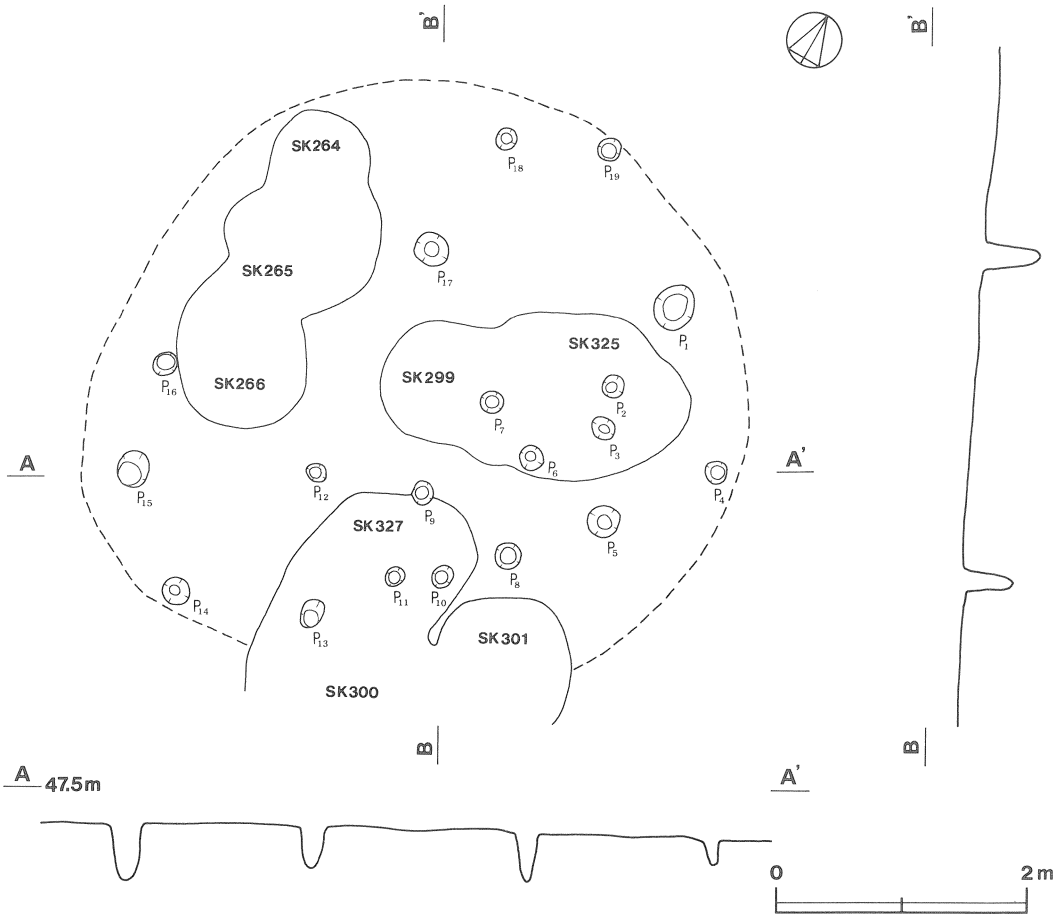
線を施している口縁部片で，縄文地文上に，沈線による曲線的モチーフを描いている。6は，口縁部から胴部にかけての土器片で，縄文地文上に2条の沈線を横位に巡らし，沈線間には磨り消しを施し，口縁部には瘤を貼付している。7～10は，口縁部片で，7は，瘤を貼付し，1条の沈線を横位に施している。8は，隆帯上に押圧を施している。9は，幅の広い口縁部に「C」字状文を貼付し竹管による円形刺突文を施している深鉢形土器の口縁部片である。横位に隆帯を貼付し，以下は粒の大きい縄文を施文している。10は，縄文地文上に，沈線による区画を施し，沈線間に磨消縄文を施している。11～13は胴部片で，11は，横位に2条の沈線を巡らし，沈線間には，磨り消しを施している。7と同一個体と思われる。12は，曲線的モチーフを描き，区画内には縄文を充塡している。13は，縄文地文上を部分的に磨り消している。

第24号住居跡（第112図）

本跡は，調査区北西部の $A4h_8$ 区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北側18m に位置している。本跡内の東側に第299・325号土坑，西側に第264～266号土坑，南側に第300・301・327号土坑が重複しているが，第299・325・327号土坑は，覆土内に本跡のピットが掘られていることから本跡よりも古い土坑であると思われる。その他の土坑の新旧関係については不明である。

本跡は，黒色土中のA配石群の下から検出された住居跡で，配石遺構の調査を実施した際に壁等が削除され，ピットの位置から床面の広がりを確認した。従って，平面形は，推定すると，長径5.30m・短径5.00m の不整楕円形を呈していたものと考えられ，長径方向はN－33°－Eを指していたものと思われる。床面は，ローム粒子を含む暗褐色土で軟弱であり，南側から北側へ緩やかに傾斜している。炉は検出されなかった。ピットは不規則に19か所検出されたが，主柱穴は配列からみると P_1・P_5・P_{13}・P_{16}・P_{17}の5か所と考えられる。主柱穴の規模は長径20～38cm，深さ20～50cmで，特に P_1・P_5・P_{17}は42～50cmと深い。南側の壁際に検出された P_{14}・P_{15}は，長径22～30cm，深さ44～48cmの規模を有しており，支柱穴と考えられる。覆土は，削除してしまい，堆積状態は確認できなかった。

遺物は，住居跡北側の床面から深鉢形土器（第113図１）と，縄文土器の口縁部８片・胴部57片・底部１片が出土している。深鉢形土器は，縄文時代中期に比定され，本跡の時期は，明瞭ではないが中期の加曽利Ｅ式期と考えられる。

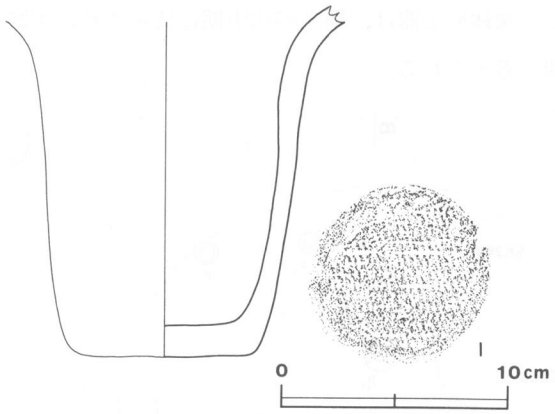


第112図　第24号住居跡実測図

出土土器

第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第113図 1	深鉢形土器	B (14.8) C　7.8	無文の土器で，胴部は直立の状態でやや膨らみをもって立ち上がっている。頸部で「く」の字状に外反している。全体にヘラナデが施され，丁寧な作りである。底部は平底で，外面には網代痕がみられる。	砂粒・長石・雲母 石英 良好 灰褐色	50% P—30

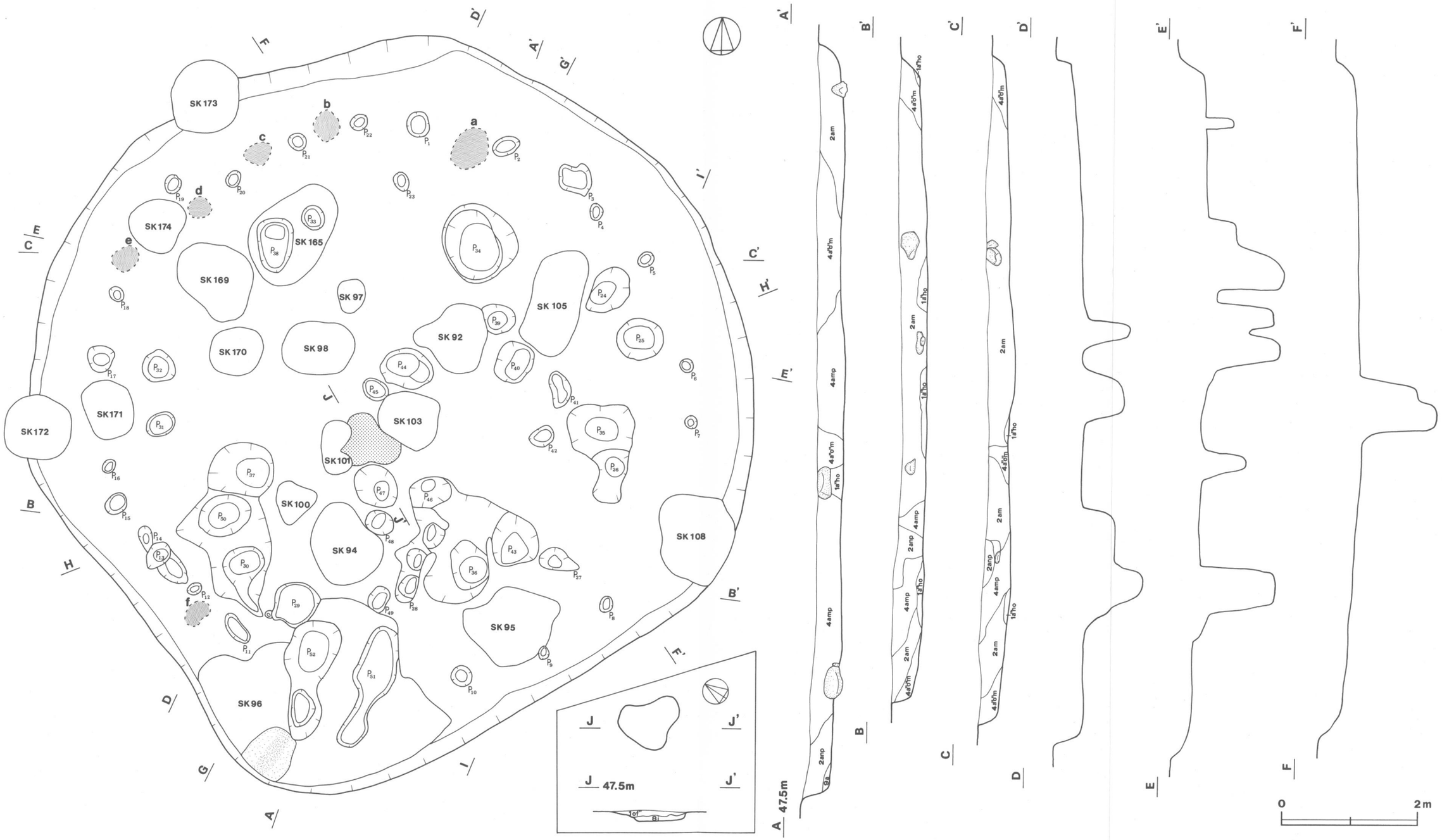


第113図　第24号住居跡出土土器実測図

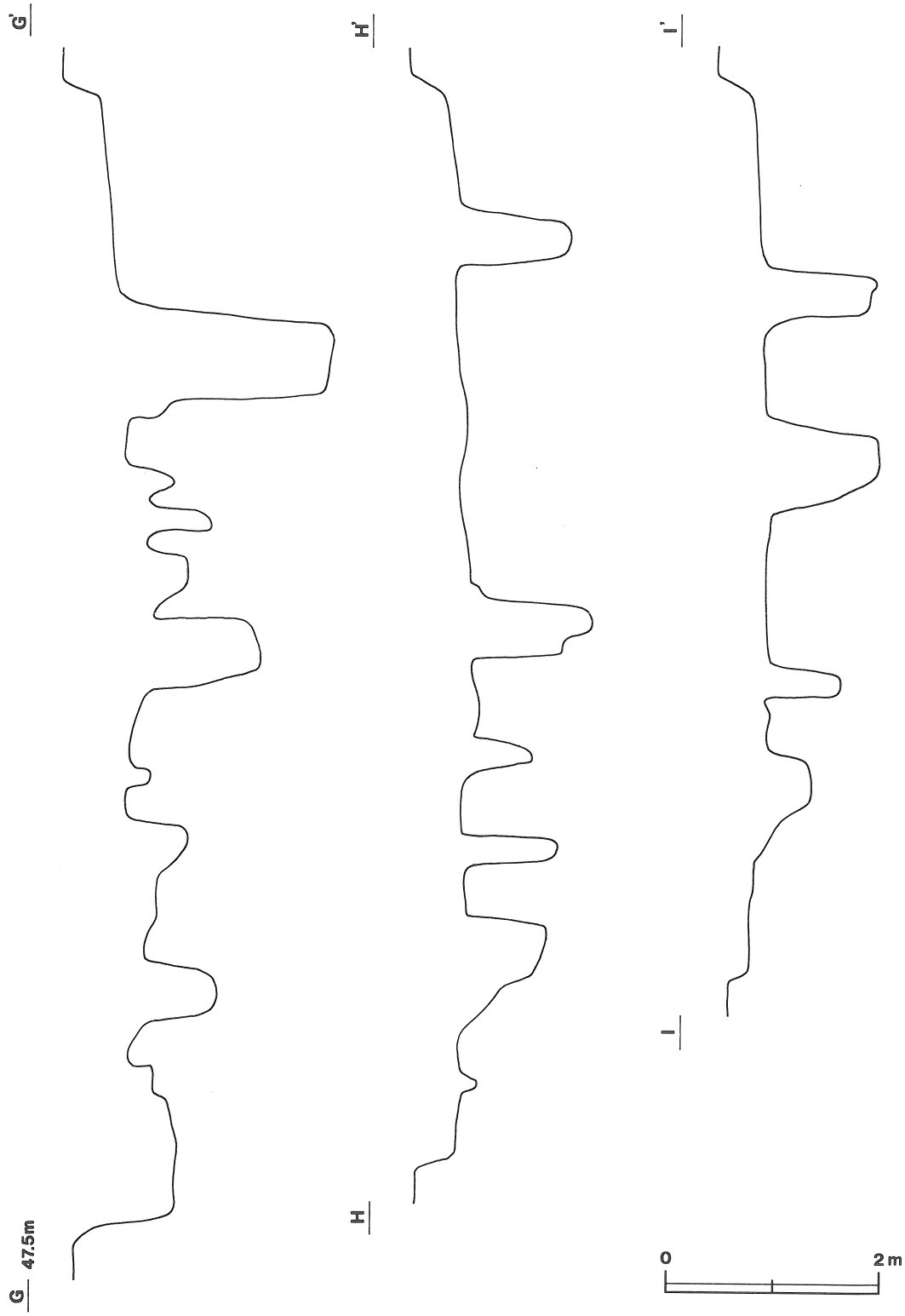
第25号住居跡（第114図）

本跡は，調査区中央部南側の $B4d_8$ 区を中心に確認された住居跡で，本跡の西側4 mには，第15号住居跡が位置している。本跡の南側には，晩期の第8号住居跡が隣接している。本跡はD配石群の下部から検出され，本跡内の上層には，J配石群，中層からはL配石群が検出されているが，いずれも本跡より新しい遺構である。また，本跡の床面等からは，18基の土坑が検出されているが，第101・103号土坑は，本跡の炉の西側や北東側の一部を切って構築しており，第108・172・173号土坑は，本跡の東壁や西壁を切って構築されていることから，本跡よりも新しいものと考えられる。他の重複している土坑についても，覆土の堆積状態などからみて，本跡より新しいものと思われる。従って，本跡の廃絶後にまず，土坑が構築され，次いでL・J配石群が構築され，さらに，本跡が埋没した後に，D配石群が構築されたものと考えられる。

平面形は，長径11.6m・短形10.8mのほぼ円形を呈する主体部と，南側には，付帯する柄部と思われる1 mほどの張り出し部を有する「柄鏡型住居跡」と考えられ，主軸方向は，N－5°－Eを指している。壁は砂質ロームで硬く，北壁から東壁にかけては垂直ぎみに，西壁から南壁にかけては外傾して立ち上がっている。壁高は北壁から東壁にかけては44cm，南壁は22cmである。床面は，重複している土坑によって切られているが，残存面についてみると，砂質ロームで硬く，壁際から中央部に向けて緩やかに傾斜している。炉は中央部に位置し，第101・103号土坑により，西側と北東側の一部が切られているが，平面形は，ほぼ円形を呈していたものと思われる。残存部の長径は約1 mあり，床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，2～3cmの厚さに焼土が堆積し，炉床は焼けて硬く，カチカチの状態となっており，かなり使用された様子がうかがえる。中央の炉の他に，北西側の壁にそって5か所（a～e），南西側の壁近くに1か



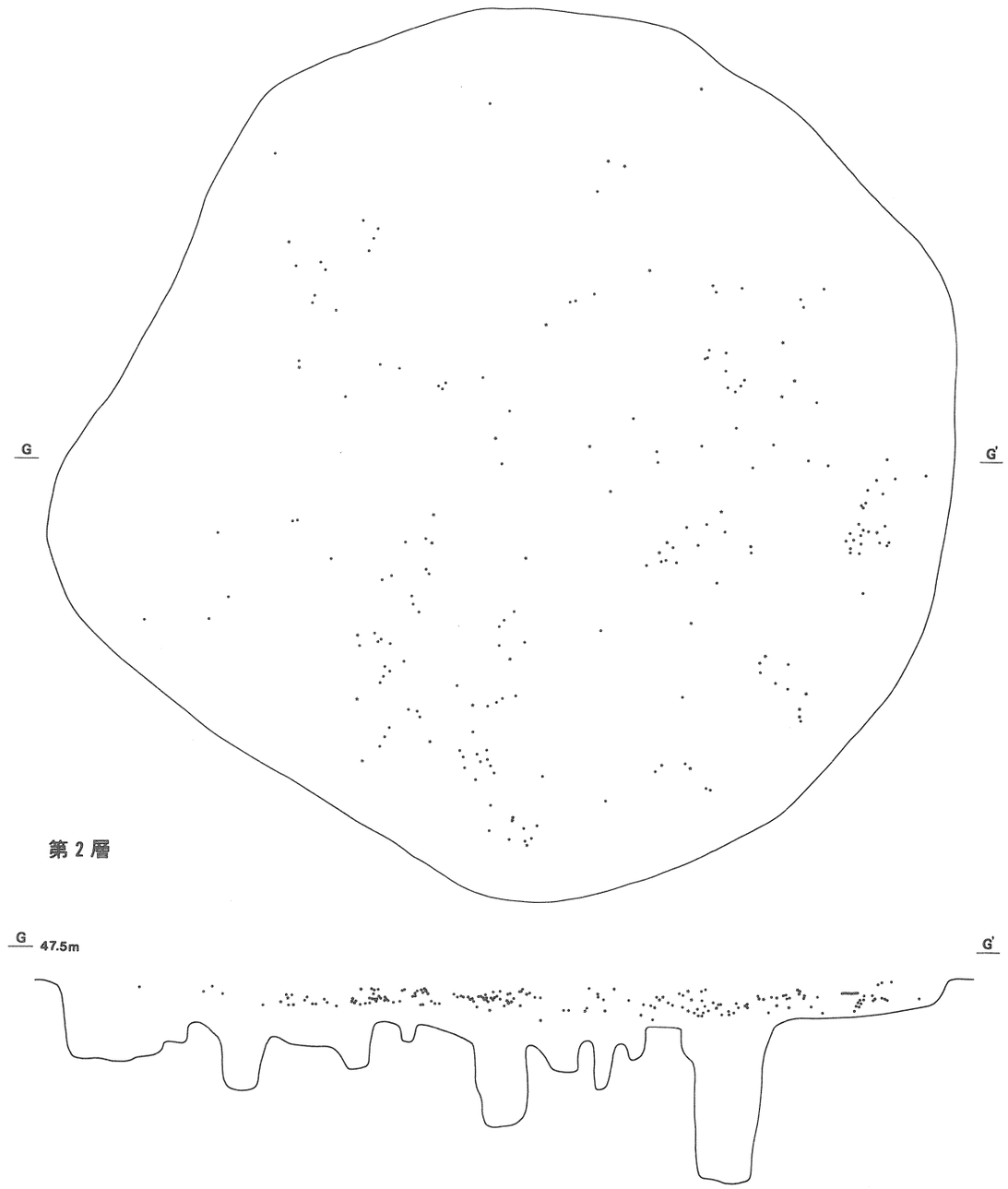
第114図　第25号住居跡実測図(1)

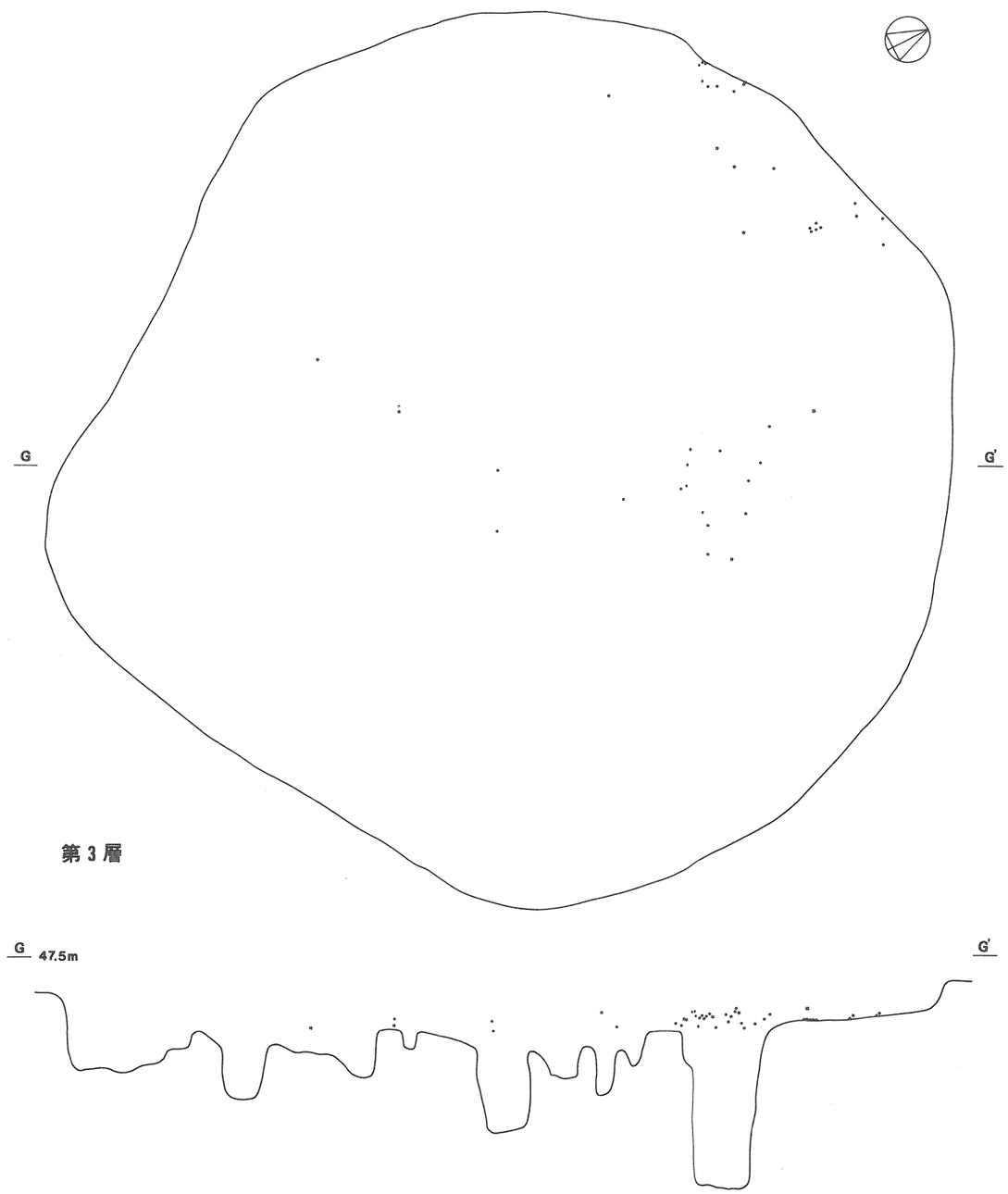


第115図　第25号住居跡実測図(2)

所(ｆ)，計６か所に焼土の範囲が検出されている。いずれも平面形は，円形または楕円形を呈しており，規模は長径36～62cm・短径28～50cmほどである。またｂ～ｆは砂質ロームが焼けて赤褐色に変色した砂が１cmほど堆積しているが，ａだけは焼土の範囲も広く，焼けた砂が３～４cmほど厚く堆積している。ａ～ｆは，ほぼ１ｍほどの間隔で壁際に検出されており，祭祀的なことで火を焚いたことも考えられるが，確かなことは不明である。ピットは52か所検出されたが，主柱穴は，配列と規模からみてP_{34}～P_{38}の５か所と思われる。主柱穴の規模は，長径80～120cmで，平均101cm，深さ104～200cmで平均139cmあり，いずれもほぼ円形を呈し，深くしっかりした柱穴である。主柱穴の外側には12か所の柱穴(P_{23}～P_{33}・P_{49})が検出されており，規模は，長径26～80cmで平均55cm，深さ22～160cm，平均75cmで，主柱穴よりも小規模であり，支柱穴と思われる。さらに，壁から50～100cm内側に，24か所のピットが１～２ｍの間隔で検出され，規模は長径20～56cmで平均32cm，深さ19～49cmで平均33cmと小規模のものであり，一番外側の支柱穴と思われる。主体部南側には，主軸方向にそって２列のP_{51}・P_{52}のピット群からなる柄部が付帯している。P_{51}は長径100cm・深さ74cm，P_{52}は長径84cm・深さ86cmで，出入口の施設に伴う柱穴と考えられる。この柄部の床面は，第96号土坑の調査時に削除されているが，この２列のピット群の間の床面は黒褐色で，良く踏み固められており，主体部と柄部との床面は段差がなく平坦に接続していた。覆土は，掘り込み面から配石によって，三層に分けられ，上層は，砂粒と骨粉を含む黒色土で，Ｊ配石群が確認され，中層は砂粒・炭化粒子・骨粉を含む黒褐色土で，Ｌ配石群が確認されている。下層には，砂粒・炭化粒子・骨粉を含む黒褐色土が，自然堆積している。

遺物は，本跡の掘り込み面から三層に分れて出土し，上層・中層から出土した土器片を含めた縄文土器片の総数は，口縁部1,918片・胴部9,150片・底部349片で計11,417片を数えた。また，石器は78点出土したが，特に石鏃は各層から42点出土している。本跡の本来の覆土と思われる三層目（下層）からは，北東部の床面直上から，土偶の下半身（第216図38）が上向きの状態で，東壁から２ｍほどの内側からは，サメの歯の化石（第259図401）が，また，深鉢形土器（第117図５）が出土し，さらに，土製円板が覆土から散在的に106個出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期後葉ごろと考えられる。





第116図　第25号住居跡遺物出土状況図

出土土器

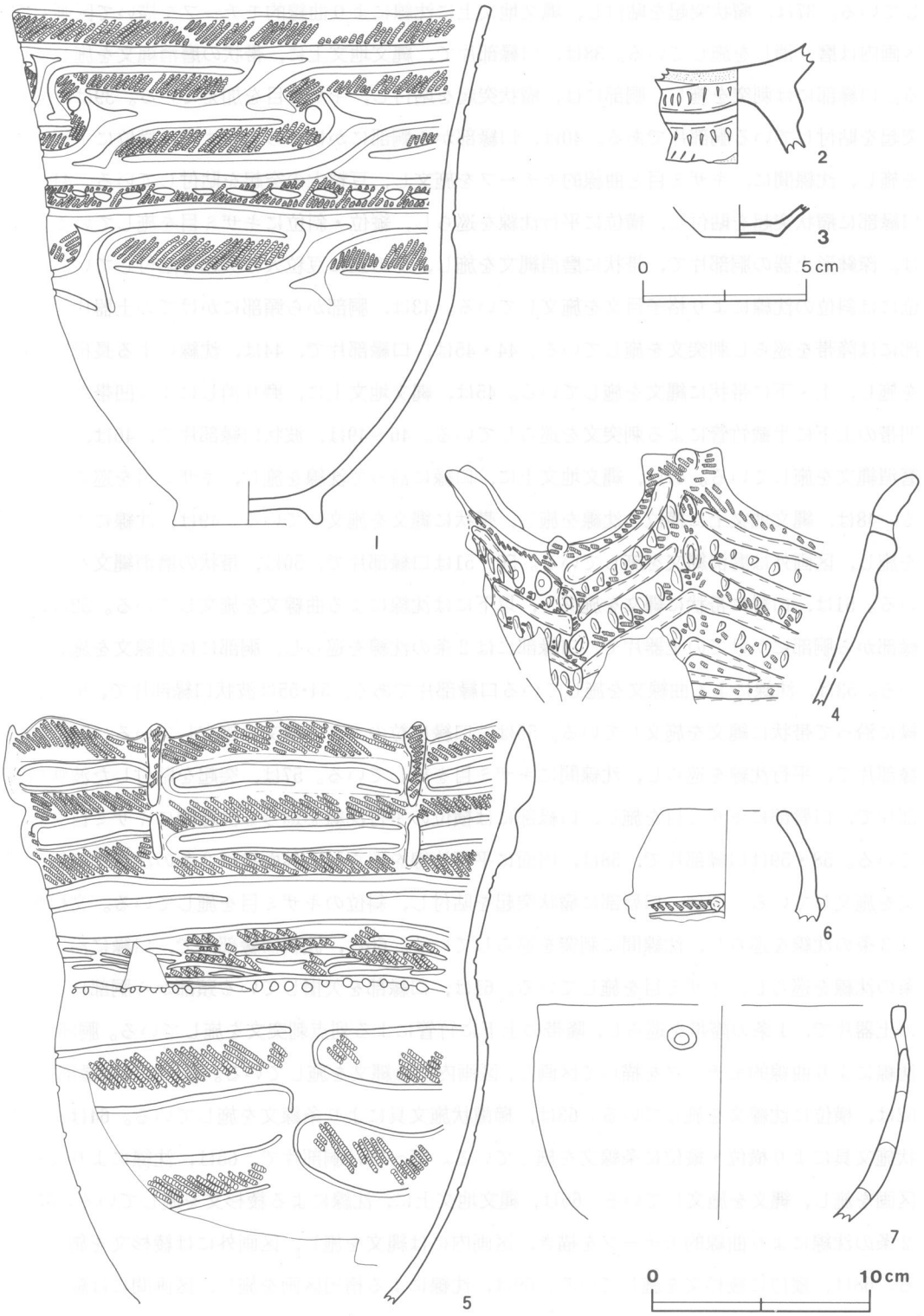
第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第117図 1	深鉢形土器	A 21.3 B 23.7 C 7.0	胴部は内彎して立ち上がり，頸部から緩やかに外傾して口縁部に続いている。口縁は平坦な単純口縁を呈している。口縁部文様帯は縄文施文上に入組み玉抱き三叉文が5単位施され，胴部文様帯には頸部に刺突文が巡る三叉文が5単位施されている。底部は台付き底を呈している。	砂粒・長石・石英 良好 褐灰色	80% P－47
2	台付土器	B(3.7)	台付土器の脚部分と思われる。脚の膨らみの上部と下部に竹串状の施文具で付けたと思われる刺突文が巡っている。粗製の土器と思われる。	砂粒・石英・長石 雲母 普通 灰白色	10% P－158
3	ミニチュア土器	B(0.9) C 2.3	胴部は底部から外傾して立ち上がっている。薄手の無文土器で，胴部はヘラ磨きが施されている。底部はあげ底である。	砂粒 良好 黒褐色	90% P－20
4	深鉢形土器	A(20.2) B(11.8)	4単位の扇状把手をもつ外反する大型波状口縁を呈している。口縁部文様帯は，太い隆起帯縄文を口縁に沿って3段に巡らせ，隆帯には棒状の施文具を使用したと思われる刺突文が施されている。波状の頂部と底部の下には，小さい瘤状の突起が3個ずつ付いている。	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	10% P－803
5	深鉢形土器	A 23.5 B(26.7)	胴部は底部から内彎して立ち上がり，中位で緩やかに括れている。括れから上は外傾して立ち上がっている。口縁部は6つの波状口縁を呈し，波底部には突起が付いている。口縁部文様帯には3条の隆起帯縄文が施文され，波底部から棒状の隆帯が垂下している。括れ部には，刺突文が一巡している。胴部文様帯には沈線による長楕円区画が施され，区画内には縄文が施文され，他は磨消されている。	砂粒・長石・石英 普通 にぶい褐色・褐灰色	70% P－52
6	壺形土器 (口縁部)	A(5.4) B (5.1)	口縁部は内彎して立ち上がっている。口縁は平坦な単純口縁である。頸部に1条の隆帯を巡らせ，隆帯には縄文が施文されている。また隆帯上には瘤が貼付けてあり，推定するところ瘤は5か所あるものと思われる。口縁部は無文であるが，ヘラ磨きが施されている。	砂粒・雲母・長石 良好 にぶい黄橙色	10% P－128
7	鉢形土器	A(15.6) B(10.0)	胴部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁は平坦な単純口縁である。口縁近くに補修孔と思われる穴が1か所あけられている。粗製の無文土器である。	砂粒・雲母・長石 普通 にぶい橙色	20% P－798
第118図 8	注口土器	B(14.0)	胴部中位で大きく膨らみ，ソロバン玉状を呈している。頸部と胴部は，沈線による縦位と横位の区画を施し，区画内には縄文を施文して区分し，区画外は磨消している。さらに，横位の帯状区画内には瘤状の突起を付している。胴上半部には，帯状の無文帯があり，胴上半部の区画沈線の上部と頸部には刺突文が巡っている。注口部は欠損している。	砂粒・石英・雲母 普通 にぶい橙色	50% P－112
9	深鉢形土器	A(15.8) B(4.6)	口縁部は内彎して立ち上がっている。口縁は平坦な単純口縁である。口縁部には1条の沈線が巡っている。胴部には沈線による楕円区画が施され，区画内には縄文が施文されている。	砂粒・雲母 普通 浅黄橙色	5％ P－155
10	壺形土器 (口縁部)	A(16.8) B(6.1)	壺形土器の口縁部で，大きく外傾して立ち上がっている。口縁は平坦な単純口縁である。無文土器であるが，内側は丁寧にヘラ磨きが施されている。	砂粒・長石・石英 雲母 良好 灰黄褐色	20% P－185
11	深鉢形土器	A(18.2) B(12.4)	口縁は波状口縁を呈し，波底部には突起が付いている。口縁部文様帯には縄文地文上に5条の沈線を巡らし，口縁に近い2条の沈線間は磨消縄文が施されている。胴部文様帯にも縄文地文上に沈線を巡らし，上向き弧状の区画があり縄文が充填されている。	砂粒・雲母 良好 にぶい褐色	20% P－793
12	台付土器	B(6.1) C(12.0)	台付土器の脚部で内彎して立ち上がっている。粗製の無文土器であるが，輪積痕が認められる。脚部の下位は厚手であるが，基部近くは薄手である。	砂粒・長石・雲母 普通 浅黄橙色	5％ P－116

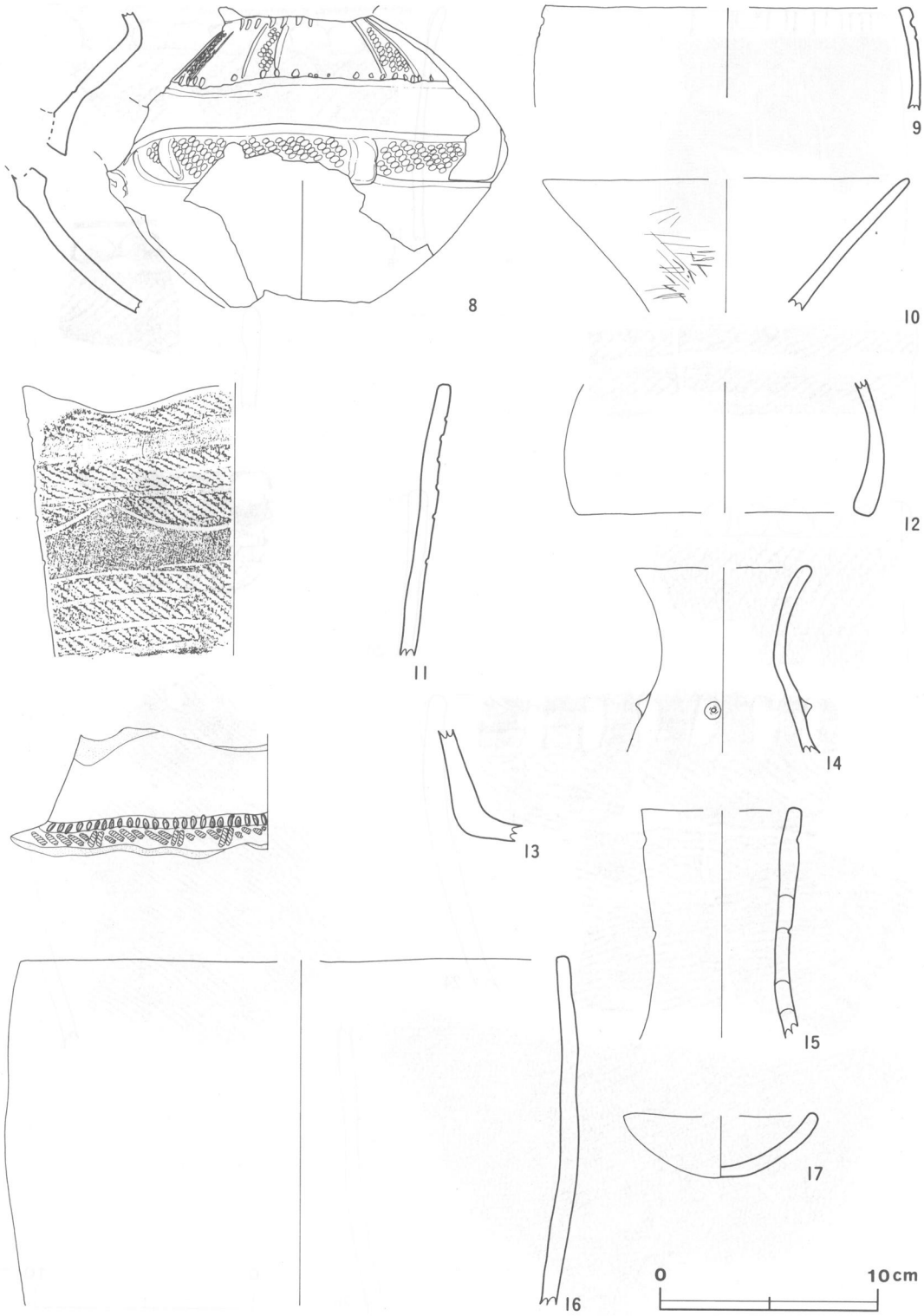
図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第118図 13	壺形土器	A(15.4) B(6.0)	頸部から口縁部にかけては，内傾して立ち上がっている。口縁部は無文で，頸部には竹管状の施文具で付けたと思われる円形刺突が一巡している。胴部には縄文が施されている。	砂粒・長石 良好 にぶい橙色	5％ P－811
14	壺形土器	A(7.2) B(8.5)	頸部で大きく括れ，口縁部は外反して立ち上がっている。頸部下の胴部には4か所に瘤が貼付けてある。無文土器であるが，ヘラ磨きが施され，丁寧な作りである。	砂粒 良好 にぶい黄橙色	20％ 瘤付き P－126
15	壺形土器	A(6.0) B(10.5)	胴部から口縁部にかけては，わずかに外傾して立ち上がっている。口縁部文様帯は縄文地文上に磨消縄文が施されている。口縁部・胴部にそれぞれ1条の沈線を巡らせている。内側には多数の輪積痕がみられる粗製土器である。	砂粒・雲母・長石 良好 にぶい褐色	30％ P－799
16	深鉢形土器	A(23.2) B(16.0)	胴部はほぼ直立して立ち上がり口縁部に至る。口縁は平坦な単純口縁である。粗製の無文土器であるが，内側には輪積痕が認められる。	砂粒・雲母・長石 普通 橙色	20％ P－794
17	ミニチュア土器	A(8.0) B　2.8 C　3.0	口縁に緩やかに波状を呈している。無文の皿形土器であるが，全体にヘラ磨きが施されている。底部は丸味をおびている。	砂粒・雲母 良好 灰褐色	80％ P－800
第119図 18	深鉢形土器	A(39.8) B(21.4)	胴部は内彎して口縁部に至る。口縁は貼付けによる複合口縁である。貼付け部にはヘラ状工具により付けたと思われる短沈線を垂下させている。胴部には縄文が施文されている。粗製土器である。	砂粒・雲母 普通 にぶい褐色	10％ P－795
19	深鉢形土器 (口縁部)	A(30.4) B(4.8)	現存部から推定すると緩やかに内傾して立ち上がってきたものと思われる。口縁は平坦な口縁である。口縁直下に太い1条の沈線が巡り，胴部には縄文が施文されている。	砂粒・雲母・長石 普通 明褐灰色	5％ P－796
20	深鉢形土器 (口縁部)	A(21.0) B(7.5)	胴部は，現存部から推定するところ内彎して立ち上がったものと思われる。口縁部は貼付けによる平坦な複合口縁で，貼付部には指頭押圧が施されている。胴部は粗い縄文が施文されている。	砂粒・雲母 良好 にぶい褐色	10％ P－797

第119図21～第121図70は，第25号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。21～24は，口縁部片で，21は，口縁部に圧痕文を施し，以下には粒の大きい縄文を施している。22・23は，隆帯を貼付し，押圧を加えている。24は，棒状工具による押圧を加えている粗製土器の口縁部片である。25・26は胴部片で，25は，全面に縄文を施文し，補修孔が穿たれている。26は，粗製の深鉢形土器の胴部片で，全面に縄文を施している。27～31は，波状口縁部片で，27・28は，波頂部上位に突起を貼付し，波頂部に孔を穿ち，縦位に3点の瘤状突起を貼付している。文様帯には，帯状に磨消縄文を施している。29は，双頭突起を貼付し，突起部には縦位に3点の瘤状突起を貼付し，波状に沿って帯状に磨消縄文を施している。30・31は，波頂部に突起を貼付し，波頂部下には，瘤状突起を貼付し，文様帯には，帯状に磨消縄文を施している。32～37は口縁部片で，32は，口縁にキザミ目を巡らし，沈線による入組文を施し，横位に列点刺突文を施している。33は，口縁部に瘤状突起を貼付し，横位に沈線文を施している。34は，口縁部に瘤状突起を貼付し，横位に平行沈線を巡らし，キザミ目を施している。35は，浅鉢形土器の口縁部片で，「S」字状文を貼付している。36は，双頭突起を貼付し，突起部に孔を穿ち，孔の下部に瘤状突起を縦位に貼付

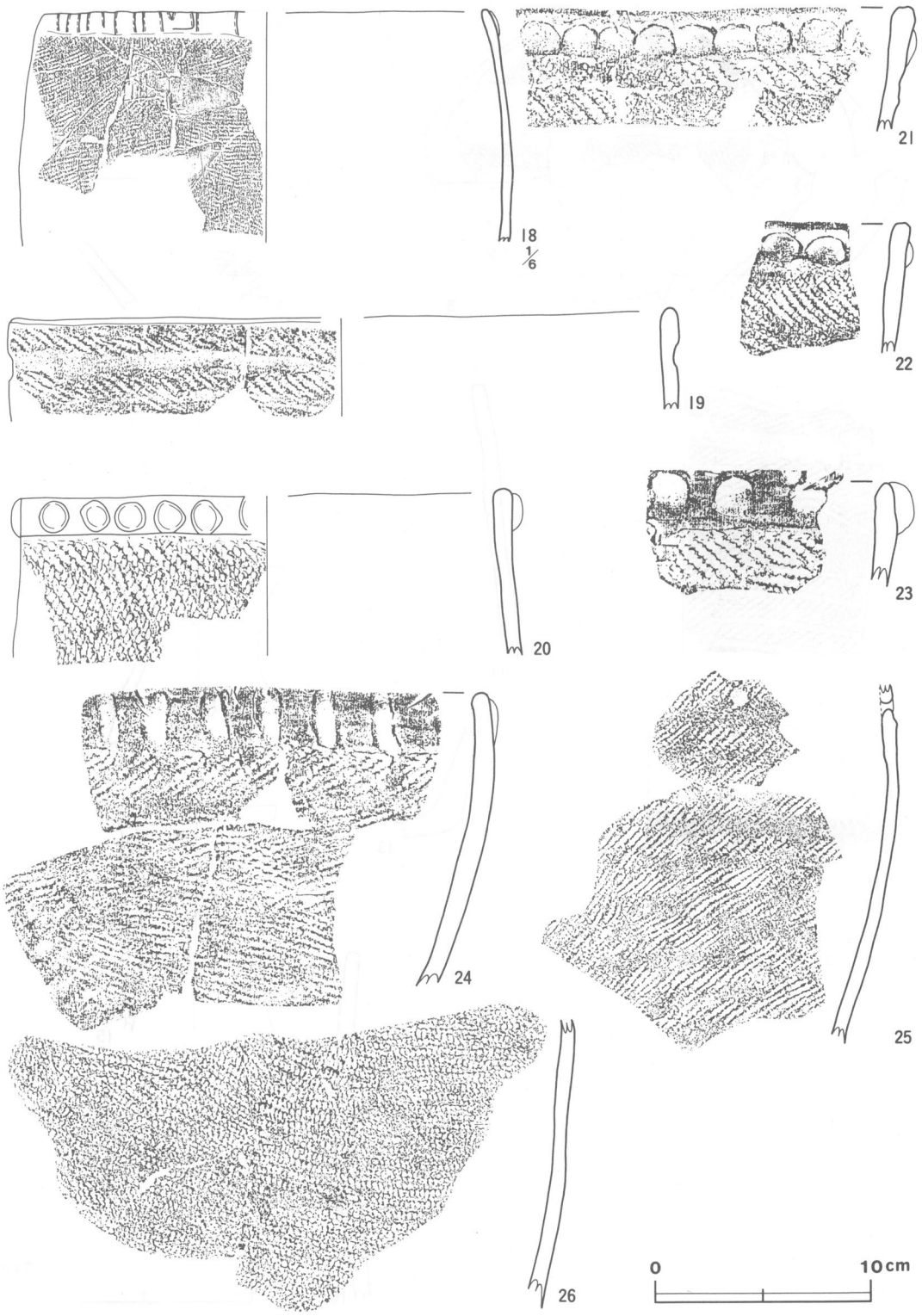
している。37は，瘤状突起を貼付し，縄文地文上に沈線により曲線的モチーフを描いて区画し，区画内は磨り消しを施している。38は，口縁部片で，縄文地文上に，帯状の磨消縄文を施している。口縁部には刺突を施し，胴部には，瘤状突起を貼付し，キザミ目を加えている。39は，瘤状突起を貼付している胴部片である。40は，口縁部から胴部にかけての土器片で，横位に平行沈線を施し，沈線間に，キザミ目と曲線的モチーフを施文し，豆粒大の突起を貼付している。41は，口縁部に瘤状突起を貼付し，横位に平行沈線を巡らし，縦位・斜位にキザミ目を施している。42は，深鉢形土器の胴部片で，帯状に磨消縄文を施し，その上に豆粒大の突起を貼付している。下位には斜位の沈線により格子目文を施文している。43は，胴部から頸部にかけての土器片で，頸部には隆帯を巡らし刺突文を施している。44・45は，口縁部片で，44は，沈線による長楕円区画を施し，上・下に帯状に縄文を施している。45は，縄文地文上に，磨り消しにより凹帯を施し，凹帯の上下に半截竹管による刺突文を巡らしている。46〜49は，波状口縁部片で，46は，帯状に磨消縄文を施している。47は，縄文地文上に，口縁に沿って沈線を施し，キザミ目を巡らしている。48は，縄文地文上に横位の沈線を施し，帯状に縄文を施文している。49は，沈線により区画を施し，区画外は磨消縄文を施している。50・51は口縁部片で，50は，帯状の磨消縄文を施している。51は，口縁に帯状に縄文を施文し，以下には沈線による曲線文を施文している。52は，口縁部から胴部にかけての土器片で，口縁部には2条の沈線を巡らし，胴部には沈線文を施文している。53は，沈線による曲線文を施している口縁部片である。54・55は波状口縁部片で，54は，口縁に沿って帯状に縄文を施文している。55は，口縁に粒の大きい縄文を施文している。56は，口縁部片で，平行沈線を巡らし，沈線間にキザミ目を施している。57は，突起を貼付した波状口縁部片で，口唇部にキザミ目を施し，口縁部には横位の平行沈線を巡らし沈線間にキザミ目を施している。58・59は口縁部片で，58は，内面に平行沈線を巡らし，外面には2条の沈線を施し，縄文を施文している。59は，口唇部に瘤状突起を貼付し，斜位のキザミ目を施している。文様帯には3条の沈線を巡らし，沈線間に刺突を巡らしている。60は，波状口縁部片で，口縁に沿って2条の沈線を巡らし，キザミ目を施している。61は，口縁部を欠損している頸部から胴部にかけての土器片で，1条の隆帯を巡らし，隆帯の上下に竹管による列点刺突文を施している。胴部には，沈線により曲線的モチーフを描いて区画し，区画内には縄文を施している。62〜64は口縁部片で，62は，横位に沈線文を施している。63は，櫛歯状施文具により条線文を施している。64は，櫛歯状施文具により横位・縦位に条線文を施している。65〜70は胴部片で，65は，沈線により長楕円区画を施し，縄文を施文している。66は，縄文地文上に，沈線による綾杉文を施している。67は，2条の沈線により曲線的モチーフを描き，区画内には縄文を施し，区画外には綾杉文を施している。68は，縦位に綾杉文を施している。69は，沈線による楕円区画を施し，区画間には縦位に列点刺突文を施している。70は，縄文地文上に，横位に磨り消しを施している。



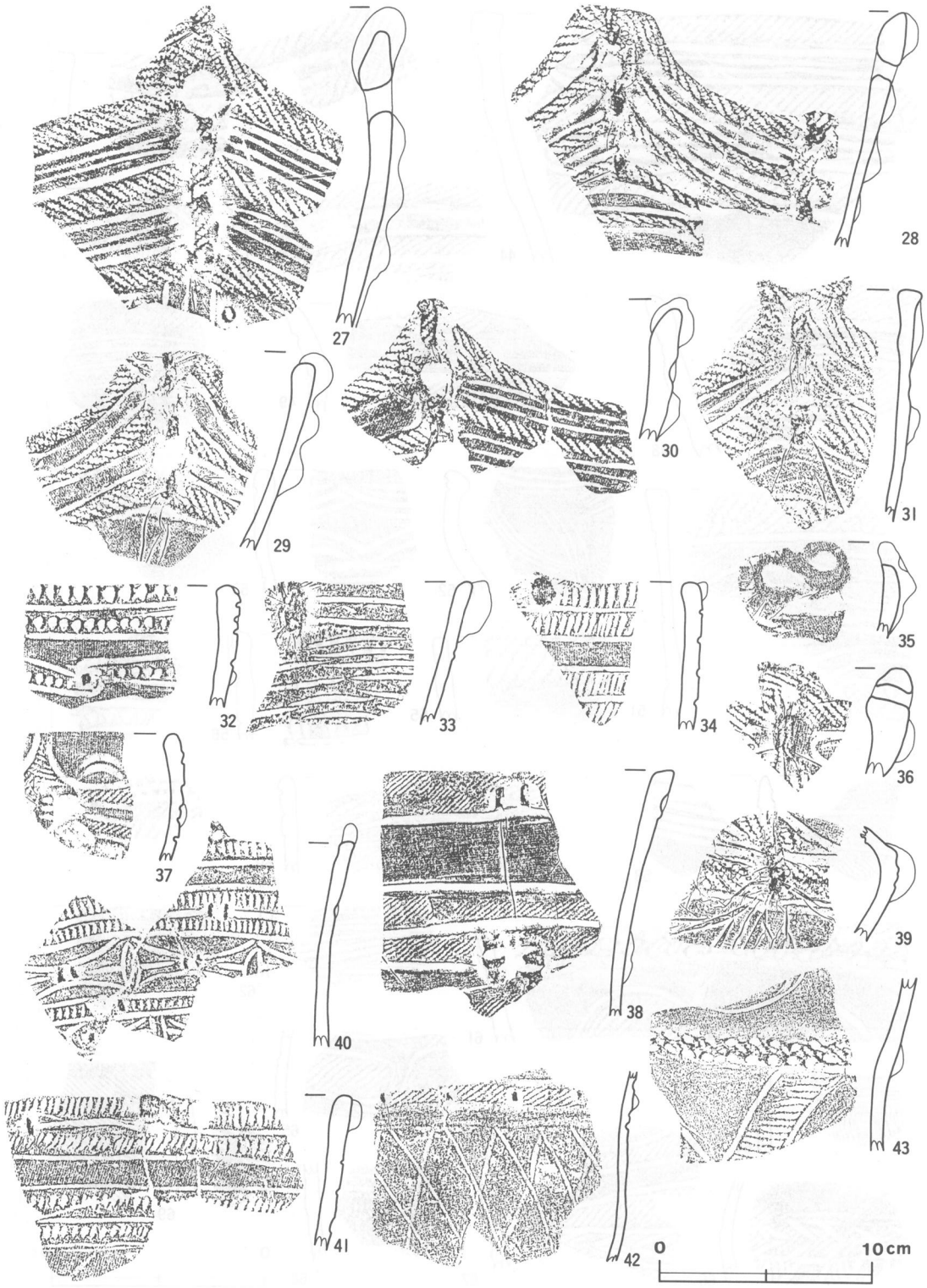
第117図　第25号住居跡出土土器実測図(1)



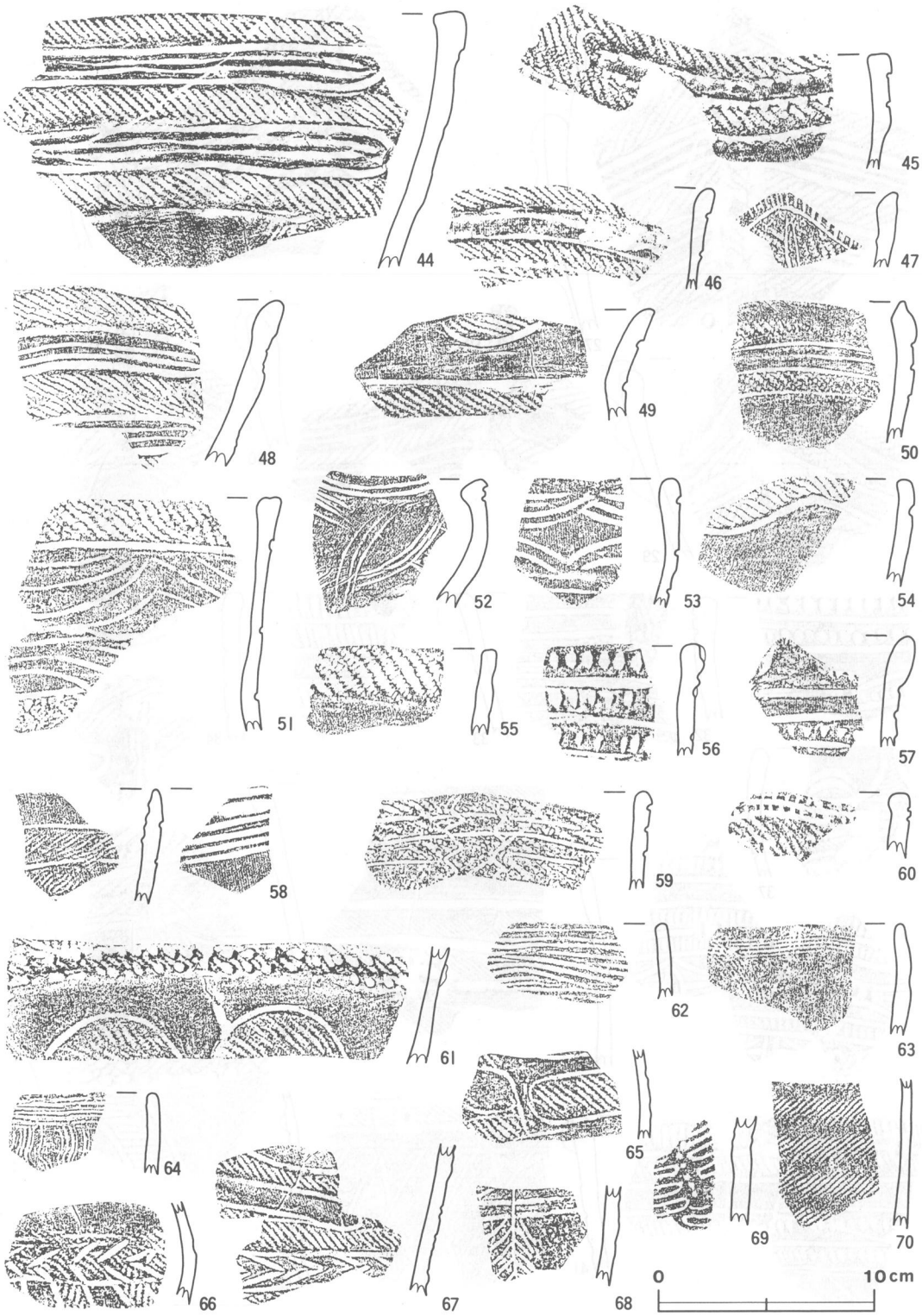
第118図　第25号住居跡出土土器実測図(2)



第119図　第25号住居跡出土土器実測図・拓影図(3)



第120図　第25号住居跡出土土器拓影図(4)

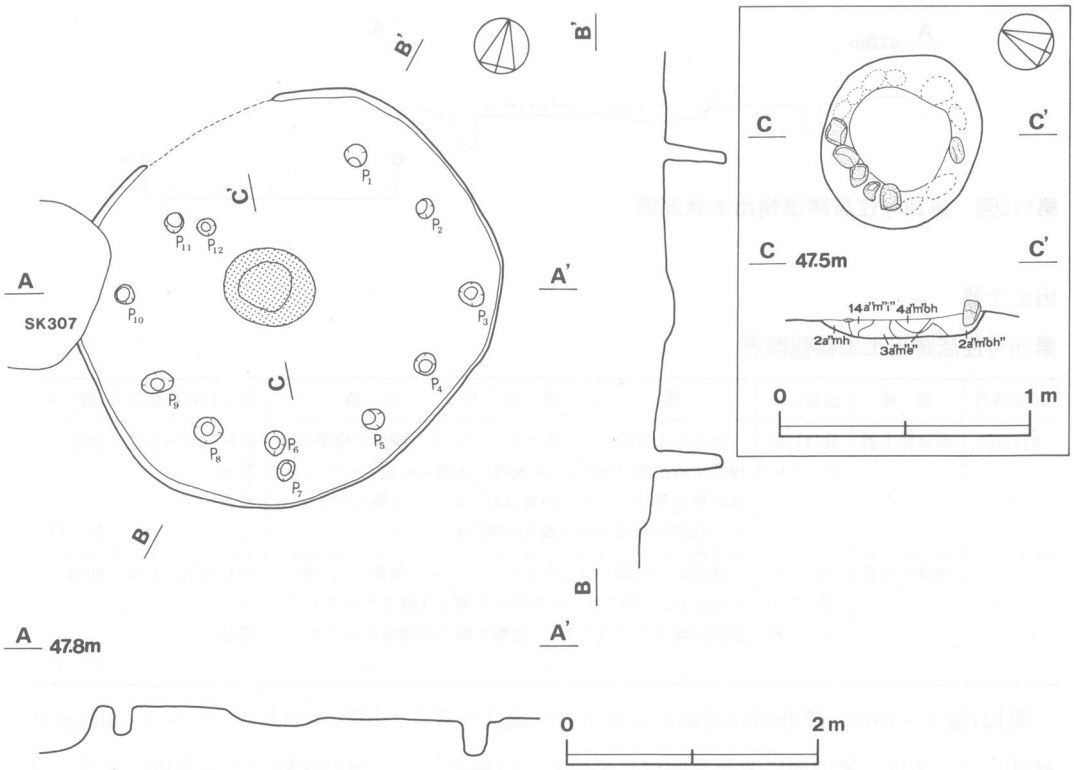


第121図　第25号住居跡出土土器拓影図(5)

第26号住居跡（第122図）

本跡は，調査区北西部の A4g_6区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北側22m に位置している。本跡は，北西側に重複している第27号住居跡の南東壁を切って構築しており，第27号住居跡よりも新しい住居跡である。また，第307号土坑は，本跡の，西壁を切って構築されているので本跡よりも新しいものと思われる。

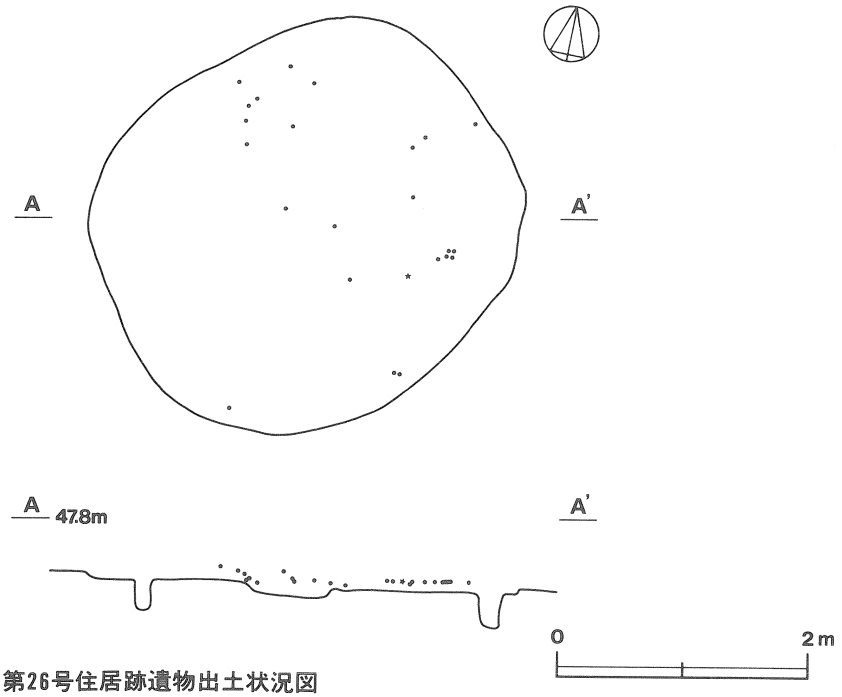
平面形は，長径3.45m・短径3.10m の不整円形を呈している。北壁は比較的明確で壁高が 7 cm ほどあり，外傾して立ち上がっている。他の壁は 2 ～ 5 cmほどであり判然としない。床面は，平坦で軟かく，南西側から北東側へ緩やかに傾斜している。炉はほぼ中央に位置し，平面形は，径70cmの円形を呈し，床面を10cmほど掘り込み，炉の周りに石を並べた「石囲い炉」である。炉石は，こぶし大の石が西側に 5 個，南側に 1 個配置されており，他はすべて消失している。石の置かれた位置は，わずかに窪んでおり，石が配置されていたことは明らかである。炉内には，炭化粒子・焼土粒子を多量に含む褐色土が堆積し，炉床の南側から暗赤褐色の焼土が多量に検出されたことから，長期間使用されたものと考えられる。ピットは壁から20～30cm内側の位置にほぼ等間隔で13か所検出された。配列と規模からみて主柱穴は P_1・P_3・P_5・P_8・P_{12}の 5 か所と考えられ，規模は，長径16～24cm・深さ29～56cmで，P_1・P_8が特に深い。覆土は，ローム粒子・炭化粒



第122図　第26号住居跡実測図

子を多量に含む暗褐色土が，自然堆積している。

遺物は，住居跡東側の床面直上から散在的に，縄文土器の口縁部92片・胴部351片・底部17片が出土している。また，炉の北側１ｍの床面からは，ほぼ完形の粗製の浅鉢（第124図２）が正位の状態で出土し，深鉢形土器の底部（第124図１）が出土している。石器は，２点出土している。深鉢形土器は，加曽利Ｂ式期のものであり，本跡の時期は，加曽利Ｂ式期と考えられる。



第123図　第26号住居跡遺物出土状況図

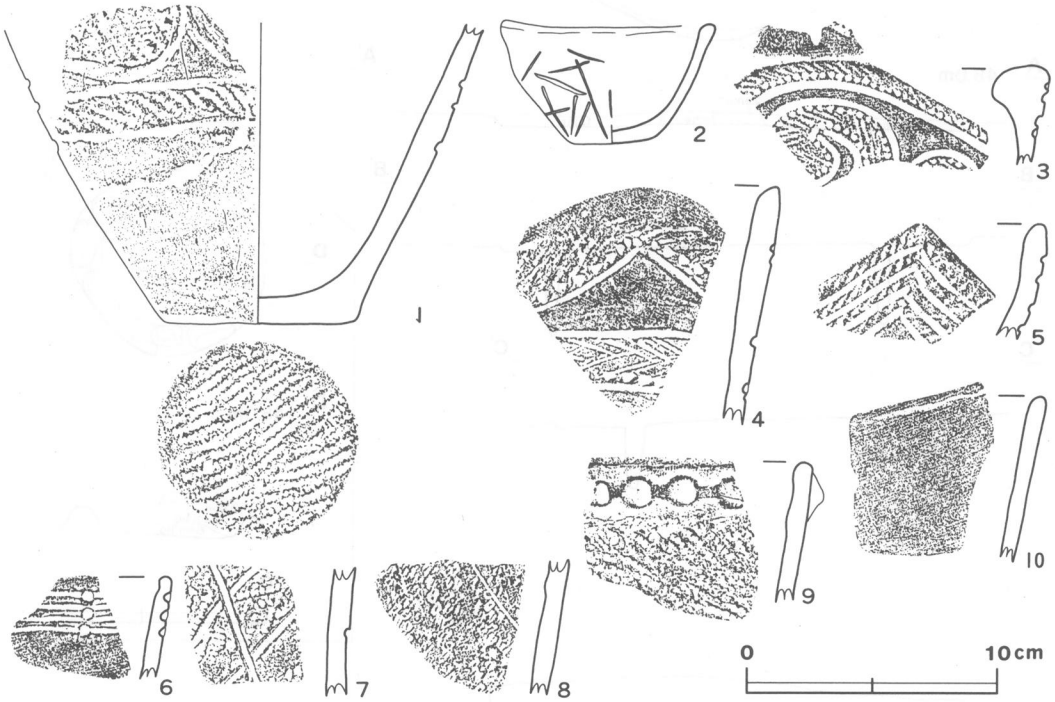
出土土器

第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第124図 1	深鉢形土器	B(11.8) C　7.6	底部から外傾して立ち上がっている。胴部文様帯は曲線的沈線区画が施され，区画内には縄文が施されている。底部無文帯はヘラナデが施されており，丁寧な作りである。底部外面は平底で縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 普通 橙色	20% P－41
2	浅鉢形土器	A　8.6 B　5.1 C　3.0	底部から内彎して立ち上がっている。胴部にヘラ削りが施され，一部に引っかき痕状の雑な沈線文がみられる。底部は無文の平底である。粗製土器で輪積痕がみられる。	砂粒・長石・石英 良好 橙色	90% P－43

第124図３～10は，第26号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。３～５・10は波状口縁部片で，３は，波頂部に突起を貼付している。口縁部には２条の沈線により曲線的モチーフを

描き，区画内には縄文を充塡し，沈線に沿って列点刺突文を施している。4は，沈線により区画し，磨り消しと綾杉文を施し，口縁に沿って列点刺突文を施している。5は，縄文地文上に，口縁に沿って平行沈線を施している。10は，1条の沈線を施している。6は，口縁内面に1条の沈線を巡らしている口縁部片で，4条の平行沈線を施し，縦位に刺突文を施している。7は，胴部片で，縄文地文上に，斜位の沈線を施している。8は，粗製土器の胴部片で，縄文地文上に斜位の沈線を施している。9は，圧痕文を施している口縁部片である。

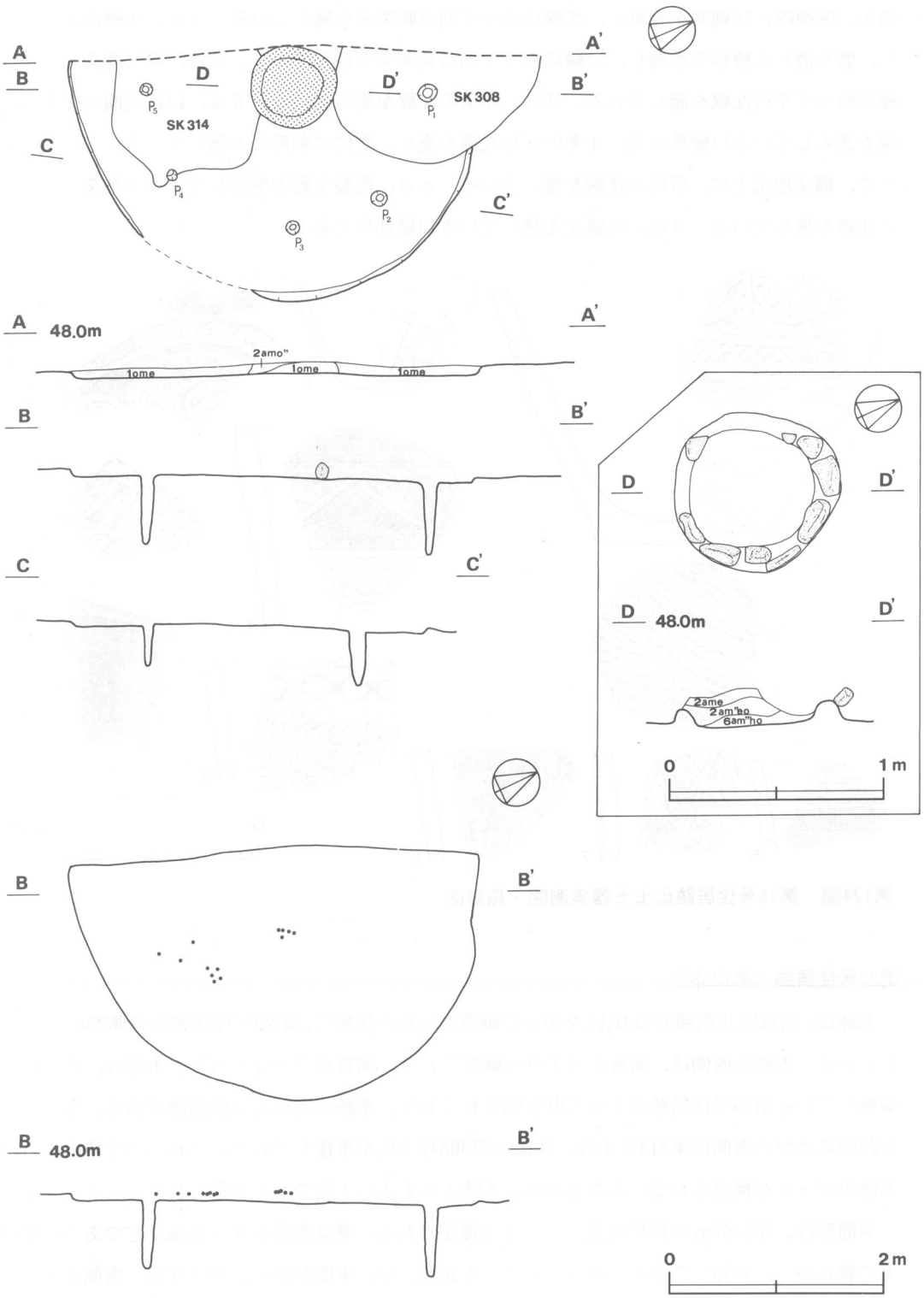


第124図　第26号住居跡出土土器実測図・拓影図

第27号住居跡（第125図）

本跡は，調査区北西部のA4f_6区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北側25mに位置している。本跡の西側は，調査エリア外へ延びており，調査ができなかった。本跡は，南東側に重複している第26号住居跡によって壁を切られており，本跡の方が古い住居跡である。さらに，本跡内には炉の南側に第314号土坑，北側に第308号土坑が重複しており，これらの土坑内からは本跡のピットが検出されていることから，本跡よりも古い土坑であると思われる。

平面形は，径3.67mの円形を呈していると推定される。壁は壁高が4～6cmほどであり暗褐色土で軟らかく，外傾して立ち上がっている。床面は，炉の東側が硬く，炉の北側と南側は土坑が重複しており軟弱である。炉は推定するところ，ほぼ中央に位置しているものと思われ平面形は，



第125図　第27号住居跡実測図・遺物出土状況図

径80cmの円形を呈している。炉床の掘り込みがほとんどなく，炉の周囲に石を並べた「石囲い炉」である。炉石はこぶし大から，径20cmほどの石を9個使用しているが，西側の石は消失している。これらの炉石は熱でもろく崩れやすくなっている。炉内には，上層に炭化粒子・焼土粒子を含む暗褐色土が堆積しており，下層には明赤褐色の焼土が堆積している。ピットは，壁から40～50cm内側にほぼ等間隔で5か所検出されたが，P_1～P_5は主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径10～18cm，深さ30～72cmで，細く深い柱穴である。出入口の施設は検出されない。覆土は，全体的に炭化粒子・骨粉を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

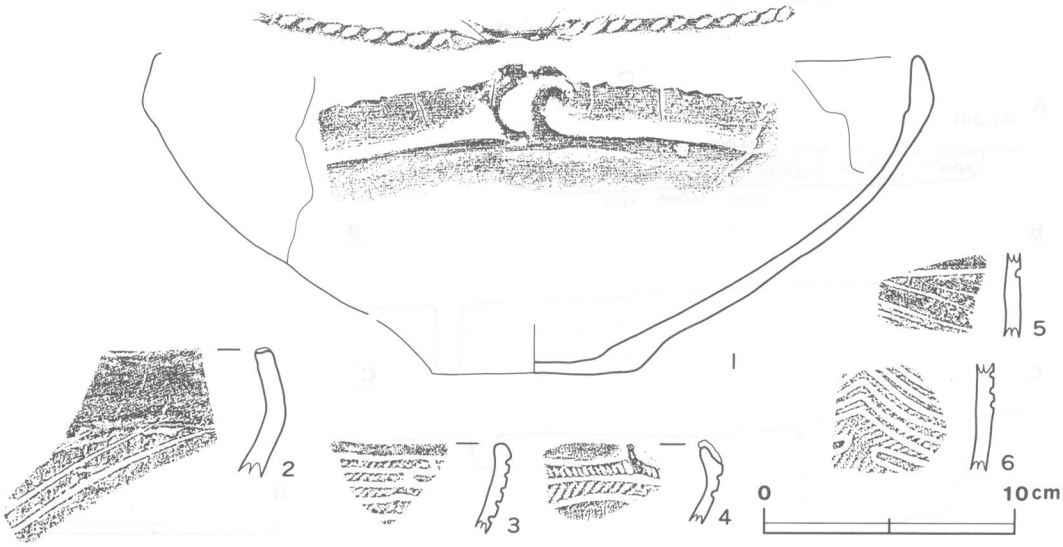
遺物は，住居跡南側の床面から散在的に，縄文土器の口縁部43片・胴部195片・底部9片が出土している。また，炉の南側1mの床面から鉢形土器（第126図1）が伏せた状態で出土している。石器は，1点出土している。鉢形土器は，加曽利B式期のものであり，本跡の時期は，加曽利B式期と考えられる。

出土土器

第27号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第126図 1	鉢形土器	A(30.6) B 12.5 C 8.1	胴部は底部から内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内彎し，口唇部には斜位にキザミ目が施されている。また口縁部から口唇部にかけては双頭突起状の貼付文を加えている。口縁部内側には1条の沈線を巡らしている。無文の土器であるが，丁寧にヘラ磨きが施されている。底部は無文の平底である。	砂粒・長石・石英 良好 褐灰色	40% P－54

第126図2～6は，第27号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。2～4は口縁部片で，2は，口唇部にキザミ目を施し，口縁直下を無文とし，以下には斜位の沈線を施している。3は，

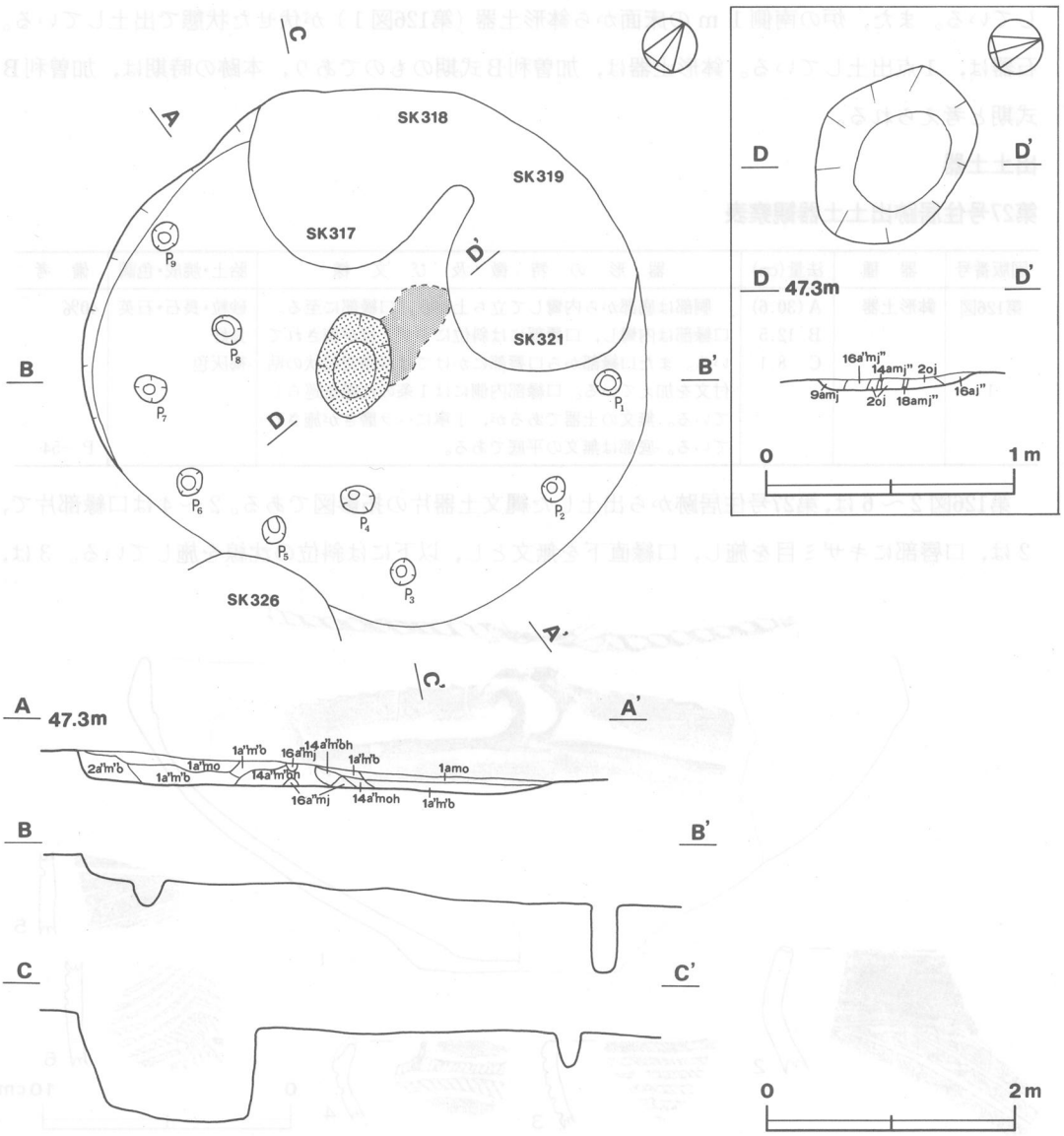


第126図　第27号住居跡出土土器実測図・拓影図

口縁部に平行沈線を巡らし，沈線間に縄文を充填している。4は口縁部に，キザミ目を施した隆帯を貼付し，隆帯下には2条の沈線を巡らし，沈線間には縄文を充填している。5・6は胴部片で，5は，斜位の沈線を施文している。6は，平行沈線を曲線的に描き，沈線間には縄文を充填している。

第28号住居跡（第127図）

本跡は，調査区北西部のA4f$_7$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北側25mに位置している。本跡の西側に第27号住居跡，南西側に第26号住居跡，北東側に第29・30号住居跡が隣

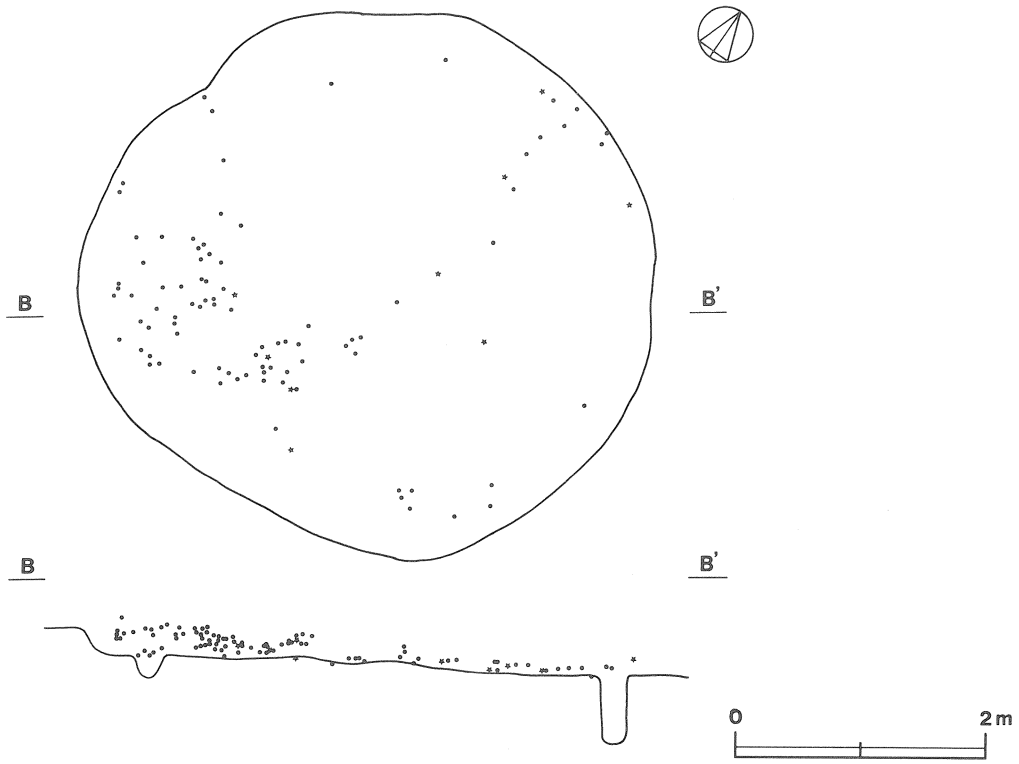


第127図　第28号住居跡実測図

接している。さらに，本跡の炉の北側に第317・318・319・321号土坑が重複しているが，本跡の柱穴を消滅させていることから本跡よりも新しい土坑であると思われる。

本跡は，黒色土をグリッドごとに掘り下げて調査を実施したところ，炉が検出され，住居跡として確認された遺構であり，東側半分の覆土は削除され，東壁は検出できなかった。

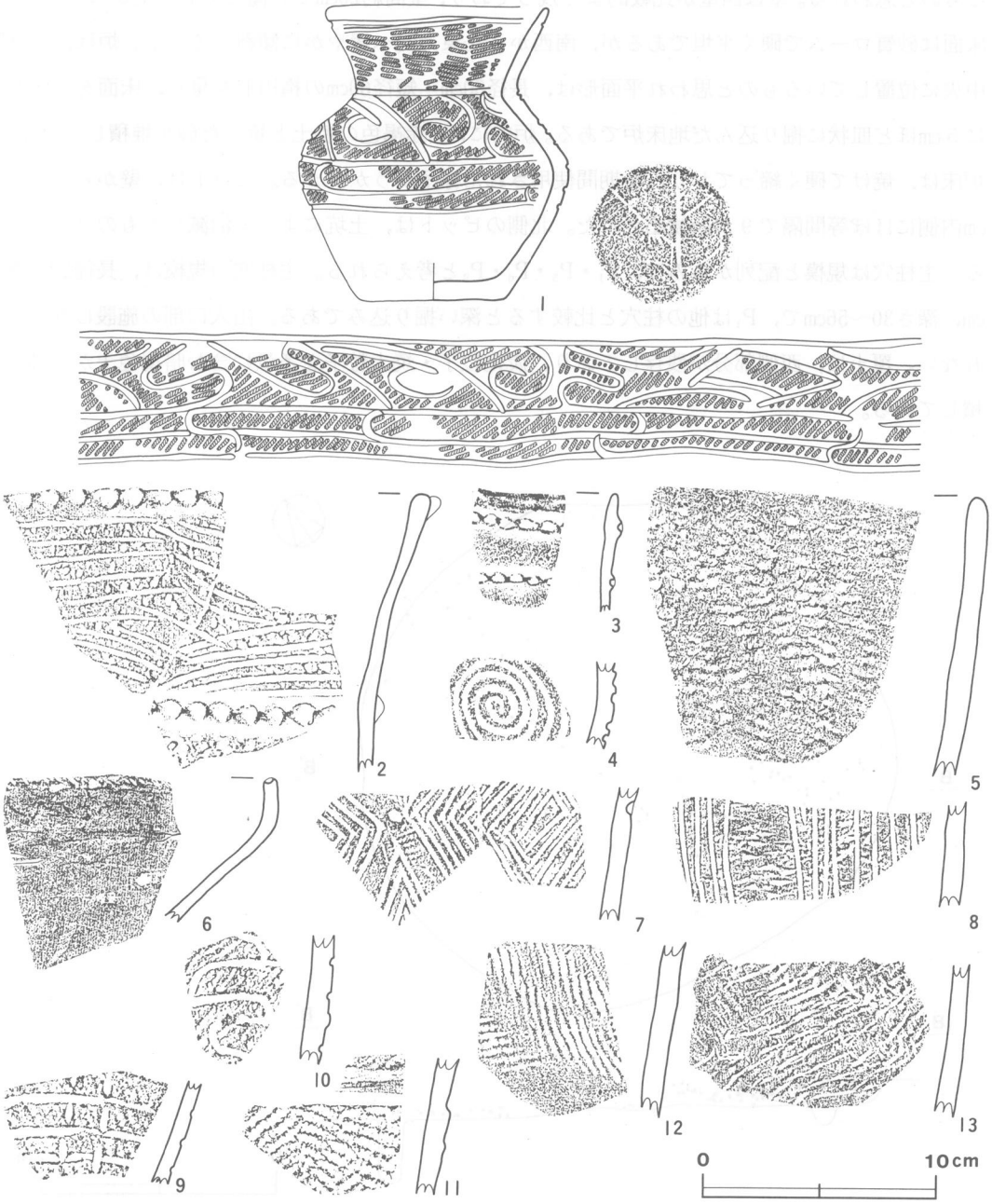
平面形は，炉やピットの位置から推定すると，長径4.55m・短径4.40mのほぼ円形を呈しているものと思われる。壁は西壁が比較的よく残っており，壁高約20cmで外傾して立ち上がっている。床面は砂質ロームで硬く平坦であるが，南西から北東方向へ緩やかに傾斜している。炉は，ほぼ中央に位置しているものと思われ平面形は，長径80cm・短径60cmの楕円形を呈し，床面をわずかに5cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。炉内には，赤褐色の焼土と焼けた砂が堆積している。炉床は，焼けて硬く締っており，長期間使用された様子がうかがえる。ピットは，壁から30～40cm内側にほぼ等間隔で9か所検出された。北側のピットは，土坑によって消滅したものと思われる。主柱穴は規模と配列からみて，P_1・P_3・P_6・P_9と考えられる。主柱穴の規模は，長径22～26cm，深さ30～56cmで，P_1は他の柱穴と比較すると深い掘り込みである。出入口部の施設は検出されない。覆土は，西側部分が残存しており，炭化粒子・焼土粒子を多量に含む暗褐色土が自然堆積している。



第128図　第28号住居跡遺物出土状況図

遺物は，住居跡南側の覆土中・下層から，縄文土器の口縁部118片・胴部750片・底部32片が出土している。また，西側の壁際からほぼ完形の小形の壺形土器（第129図１）が出土し，炉の東側からは小型の石棒が南北方向を向いて出土している。石器は，６点出土している。壺形土器は，加曽利Ｂ式期のものであり，本跡の時期は，加曽利Ｂ式期と考えられる。

出土土器



第129図　第28号住居跡出土土器実測図・拓影図

第28号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第129 1	壺形土器	A　9.6 B　12.7 C　6.1	底部から外傾して立ち上がり，胴部で大きく膨らんでいる。頸部で大きく括れ口縁部は外傾して立ち上がっている。口縁は平坦な単純口縁である。口縁部文様帯は口唇部近くに1条の沈線を巡らし，その下は縄文を施文している。胴部文様帯上半部には，縄文地文上に，S字文，渦巻文，弧状の菱形文状に沈線を配している。下半部には，横位の沈線が3条巡り(　)状に区画されている。底部外面は平底で，木葉痕が認められる。	砂粒 良好 にぶい橙色	100% P－8

第129図2～13は，第28号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。2・3は口縁部片で，2は，押圧を加えた2条の隆帯を貼付し，隆帯間には，粒の大きい縄文地文上に，横位，斜位の沈線文を施している。3は，2条の隆帯を貼付し，隆帯上に刺突を施している。4～13は胴部片で，4は，縄文地文上に，沈線による渦巻文を施文している。5は，粒の大きい縄文を施している口縁部から胴部にかけての土器片である。6は，口唇部に斜位のキザミ目を施している。外面は無文である。7は，縄文地文上に，沈線による菱形文を描いている。8は，平行沈線を垂下させ，刺突を施している。9は，縄文地文上に，横位の平行沈線を巡らせ，沈線間をキザミ目により区分している。10は，縄文地文上に，蛇行沈線を垂下させている。11は，口縁に近い胴部片で，凹帯を施し，以下に粒の大きい縄文を施している。12は，全面に縄文を施文している。13は，粗製土器の胴部片で，無節縄文を施文している。

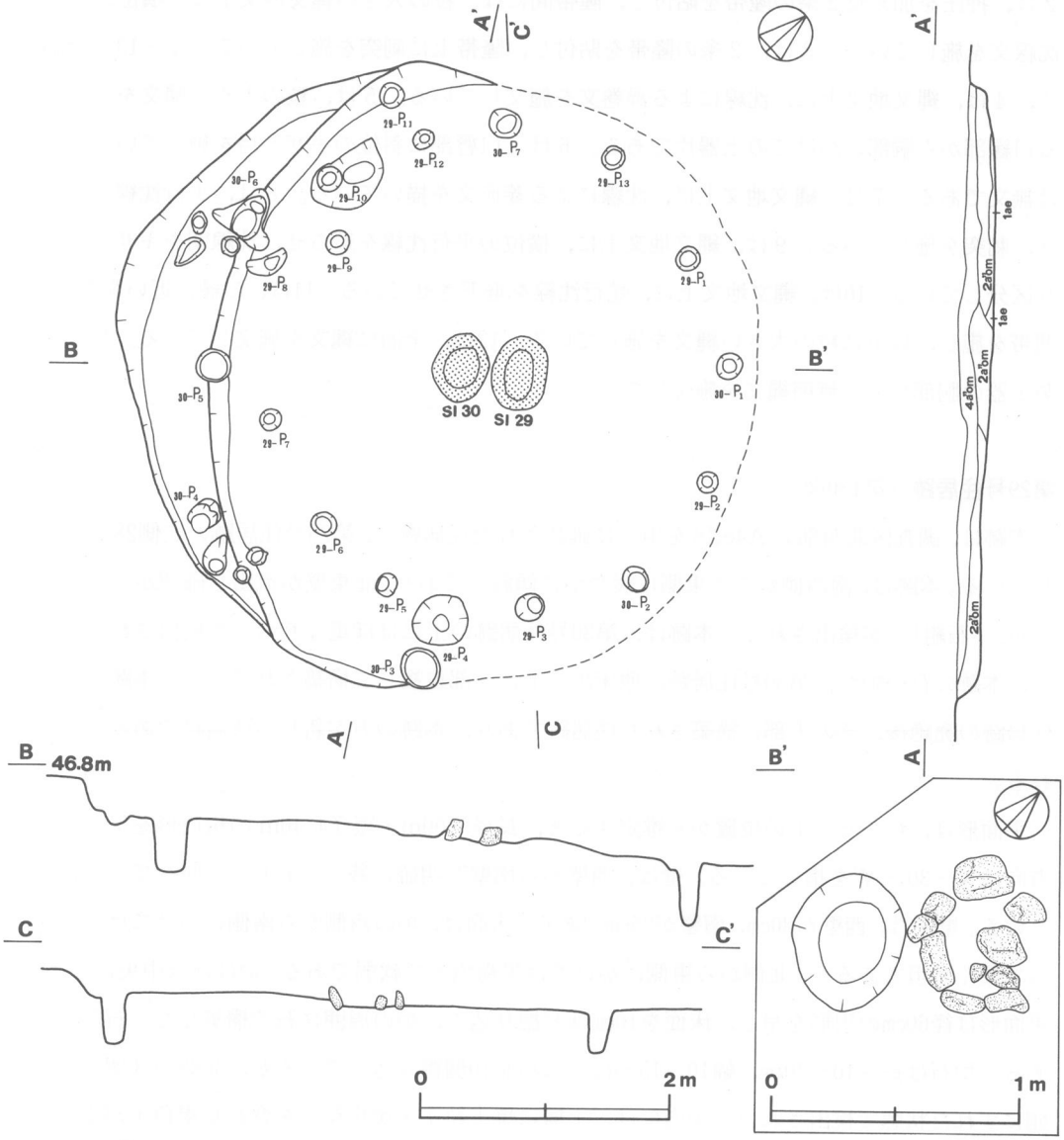
第29号住居跡（第130図）

本跡は，調査区北西部の A4e_8区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北側28m に位置している。本跡は，南西側から北東側に緩やかに傾斜しており，北東壁が流出し確認ができなかったが，「石組炉」が検出された。本跡は，第30号住居跡の上にほぼ重なり合って検出された住居跡で，本跡の石組炉が，第30号住居跡の地床炉の上に一部重複して構築されている。本跡は第30号住居跡の廃絶後，その上部に構築された住居跡であり，本跡の方が新しい住居跡であると考えられる。

平面形は，炉やピットの位置から推定すると，長径5.00m・短径4.40m の楕円形を呈し，長径方向はN－30°－Wを指している。壁は，西壁から南壁が明確に残っており，外傾して立ち上がっている。壁高は，西壁が30cm，南壁が25cmである。床面は，炉の西側から南側にかけては砂質ロームで硬く平坦であるが，北側から東側にかけては黒褐色土で軟弱である。炉はほぼ中央に位置し，平面形は径60cmの円形を呈し，床面を10cmほど掘り込み，炉の周囲に石で構築した「石組炉」である。炉石は長さ10～20cm，幅10～15cmほどの石を10個組み込んでいるが，北側の3個は炉の内側にずれた状態で検出された。炉内には，上層に焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土が堆積し，

下層には焼土が堆積しており，かなり長期間使用されたことがうかがえる。ピットは，壁にそって13か所検出された。主柱穴は規模と配列からみて，P_1～P_3・P_6・P_9の５か所と考えられる。主柱穴の規模は，長径18～22cm，深さ24.5～62.5cmで，P_6・P_9は他の柱穴に比較すると特に深い掘り込みである。出入口の施設は検出されない。覆土は，南側部分が残存しており，上層に炭化粒子・骨粉を少量含む黒褐色土，下層に炭化粒子・骨粉を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，主に住居跡南側の覆土下層から，縄文土器の口縁部207片・胴部812片・底部32片が出土している。炉の南側1.5m の床面直上からは，香炉形土器（第132図１）が出土し，炉の南西側の床面からは，土偶の胴部が出土している。また，南西壁近くの覆土からは，長さ18cmの山形を



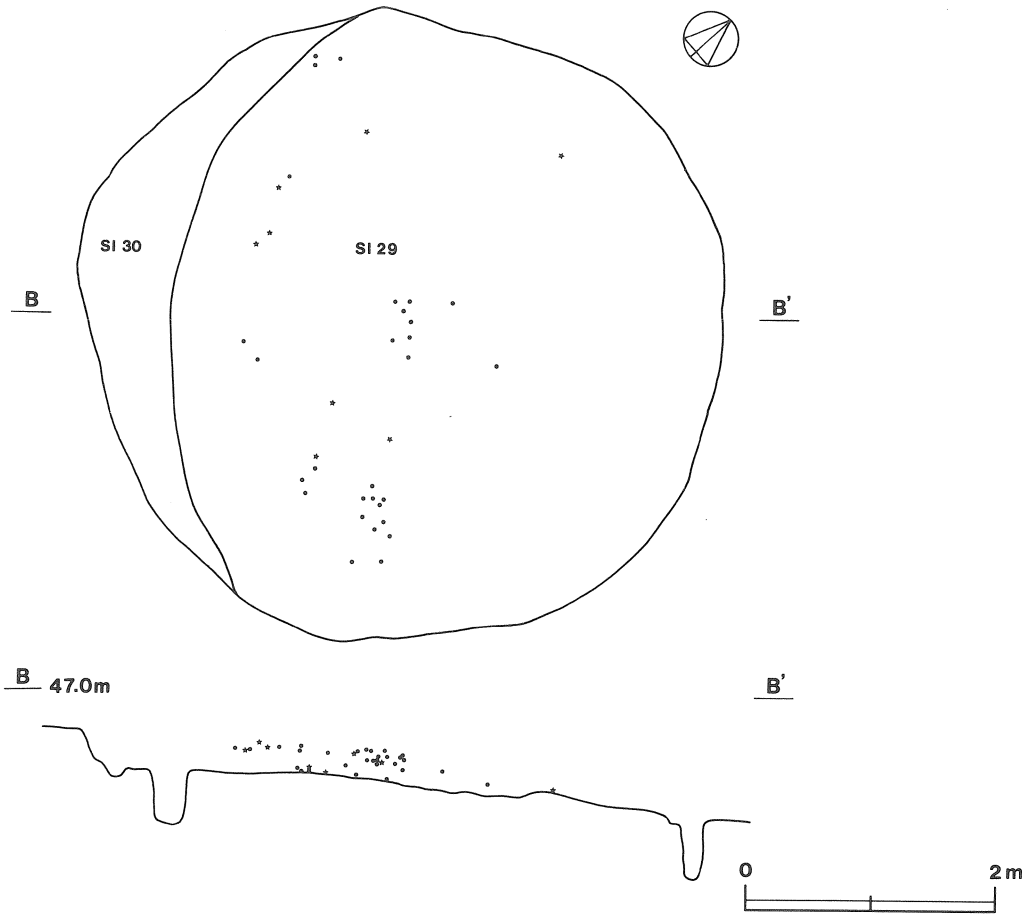
第130図　第29・30号住居跡実測図

した石冠状の石製品（第258図390）が出土している。その他，石器が4点出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期中葉ごろと考えられる。

第30号住居跡（第130図）

本跡は，調査区北西部のA4e$_8$区を中心に確認された住居跡で，第25号住居跡の北側28mに位置している。本跡は，第29号住居跡と同様に，南西側から北東側は緩やかに傾斜しており，北東壁が流出して確認ができなかったが，第29号住居跡の石組炉の南西側に本跡の地床炉を確認し，調査した遺構である。本跡は，第29号住居跡の下に検出された住居跡で，本跡の地床炉の北東側に，第29号住居跡の石組炉の一部が重複して構築されていることから，本跡の廃絶後に第29号住居跡が構築されたものと思われる。

平面形は，炉やピットの位置から推定すると，長径5.20m・短径5.00mのほぼ円形を呈している。壁は西壁が明確に残っており，外傾して立ち上がっている。壁高は，西壁が33cmで，北壁か



第131図　第29・30号住居跡遺物出土状況図

ら東壁は確認できない。床面は，第29号住居跡の床面とほぼ同一レベルにあり，炉の西側から南側にかけては平坦で硬く，北側から東側にかけては軟弱な黒褐色土で不明瞭である。炉はほぼ中央部に位置し，平面形は長径55cm・短径45cmの楕円形を呈し，床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には焼土が1cmほどの厚さに堆積し，炉床は焼けて硬くブロック状となっており，長期間使用したものと思われる。ピットは，壁にそってほぼ等間隔に7か所検出され，主柱穴は配列からみてP_1～P_4・P_6・P_7の6か所と考えられる。主柱穴の規模は，長径20～38cm・深さ31～63cmで，P_6は他の柱穴より深い掘り込みである。出入口部の施設は検出されない。覆土は，第29号住居跡によってほとんど削平されているが，一部南西側の残存部は，炭化粒子・骨粉を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，西壁近くの覆土から，縄文土器の口縁部84片・胴部456片・底部13片が出土している。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期中葉ごろと考えられる。

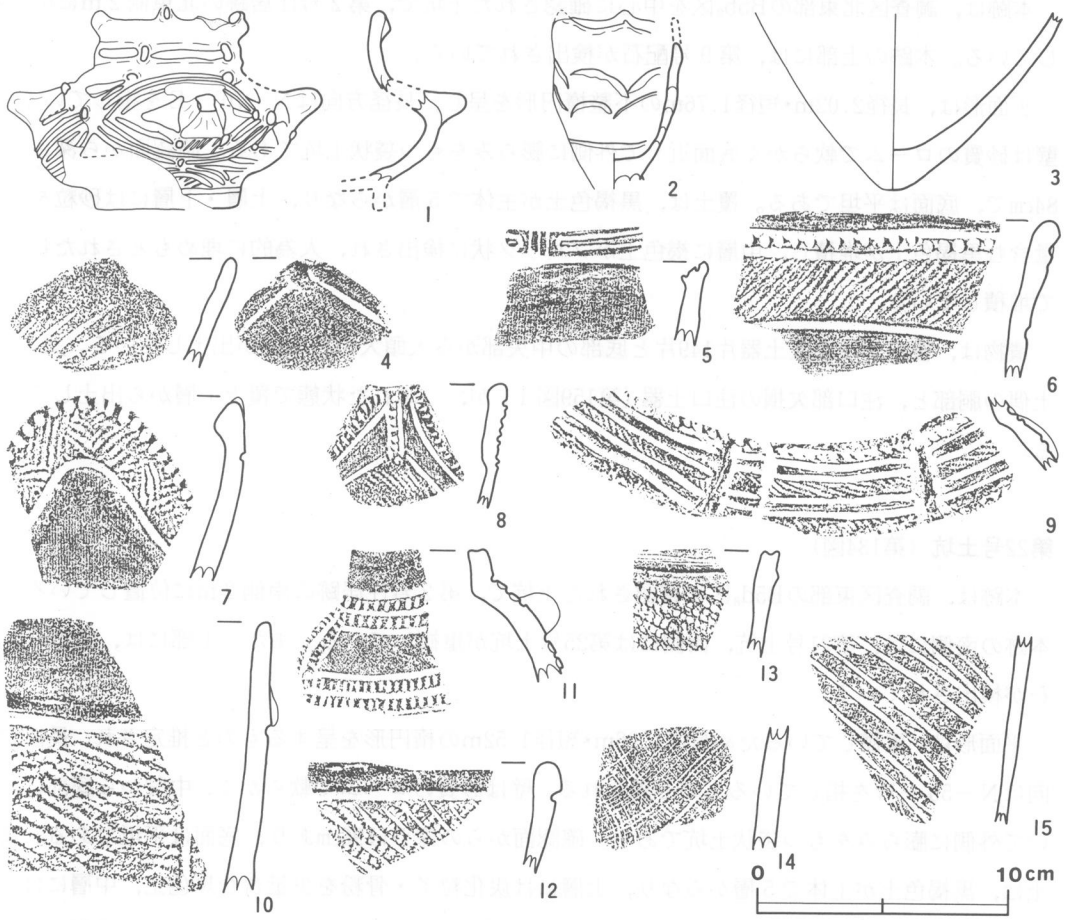
出土土器

第29・30号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第132図 1	香炉形土器	A 5.8 B 8.0 C (5.8)	胴部が大きく膨らみ，頸部から口縁にかけてほぼ直立に立ち上がっている。胴部には，大きな突起状の瘤が4か所配され，その中間に小突起状の瘤が配されている。小突起の周囲には，三角形の切り込み孔が4か所ずつ配されている。孔の周囲にも小突起が配され，隆帯を弧状に貼付して，文様帯をつないでいる。また頸部に7か所，口唇部に8か所の突起を配している。底部は脚付き底である。	砂粒・長石・石英 良好 褐灰色	40% P－66
2	ミニチュア土器	A 4.8 B (6.15)	底部から内彎して立ち上がっている。口縁は不規則な波状口縁を呈し，突起を有している。胴部文様帯には，弧状の沈線が施されている。粗製土器で，内面には，輪積痕が多数認められる。胴部外面に一部朱が付着している。	砂粒・長石・石英 普通 にぶい褐色	80% P－59
3	深鉢形土器	B (7.0) C 0.8	無文の尖底土器である。尖底部から内彎して立ち上がっている。粗製土器である。	砂粒・雲母・長石 石英 普通 褐灰色	10% P－42

第132図4～15は，第29・30号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。4は，波状口縁部片で，内面には波状に沿って1条の沈線を施し，外面には斜位の沈線を施している。5は，口唇部に2条の沈線を施している浅鉢形土器の口縁部片である。6は，口唇部に瘤状突起を有する口縁部片で，横位に沈線を巡らし，列点刺突文，帯状縄文を施している。7は，波状口縁部片で，波頂口唇部にキザミ目を施し，1条の沈線を波状に区画し，区画内には磨り消しを施している。8は，波状口縁部片で，口縁にはキザミ目を施し，波頂部から列点刺突文を垂下させている。9

は，壺形土器の胴部から頸部にかけての土器片で，頸部には列点刺突文を施している。胴部には横位の平行沈線を巡らし，縦位の隆帯を貼付して沈線を区切っている。10は，隆帯と沈線を巡らしている口縁部片で，口縁直下を無文帯とし，以下に縄文を施文している。11は，口縁部から胴部にかけての土器片で，横位の沈線を施し，沈線間にキザミ目を巡らしている。胴部には瘤状突起を貼付し，キザミ目を施している。12・13は口縁部片で，12は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下には，縄文地文上に斜位の沈線を施している。13は，口唇部に1条の沈線を施し，口縁直下に細い隆帯を施している。以下には粒の大きい縄文を施している。14・15は胴部片で，14は，櫛歯状施文具により斜位の条線文を描いている。15は，斜位の平行沈線を施している。



第132図　第29・30号住居跡出土土器実測図・拓影図

第4節　土　　坑

当遺跡において，番号を付して調査した土坑の数は340基である。これらの土坑の内，調査中に1基として調査した土坑が，整理の段階で遺構の状況等を詳細に検討した結果，重複していることが判明したりしたため，最終的に土坑として整理した数は344基である。その内，主な土坑について概要を記述し，他は一覧表にして掲載した。

第9号土坑（第133図）

本跡は，調査区北東部のB5b_9区を中心に確認された土坑で，第2号住居跡の北東側2mに位置している。本跡の上部には，第9号配石が検出されている。

平面形は，長径2.02m・短径1.76mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－70°－Eを指している。壁は砂質のロームで軟らかく底面近くで外側に膨らみをもつ袋状土坑である。確認面から深さは84cmで，底面は平坦である。覆土は，黒褐色土が主体で5層からなり，上層・下層には砂粒を少量含む黒褐色土が堆積し，中層に褐色土がブロック状に検出され，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片149片と底部の中央部から人頭大の石1個が出土している。また，土偶の胴部と，注口部欠損の注口土器（第159図1）が，つぶれた状態で覆土上層から出土している。

第22号土坑（第134図）

本跡は，調査区東部のB5d_8区に確認された土坑で，第2号住居跡の南側2mに位置している。本跡の南側には，第21号土坑，西側には第25号土坑が重複している。また，上部には，第22号配石が検出されている。

平面形は，重複しているため長径1.96m・短径1.52mの楕円形を呈するものと推定され，長径方向はN－55°－Wを指しているものと思われる。壁は砂質のロームで軟らかく，中段から底部にかけて外側に膨らみをもつ袋状土坑である。確認面からの深さは96cmあり，底面は平坦である。覆土は，黒褐色土が主体で5層からなり，上層には炭化粒子・骨粉を少量含む黒色土，中層には炭化粒子・骨粉を少量含む黒褐色土，下層は褐色土が，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片1332片が出土したが，西側の壁近くから朱塗りの小型蓋（第160図9），覆土下層から土偶の右脚部，東側壁際から小型の壺形土器（第160図11）と石鏃2点が出土している。また，底部から長さ50cm，幅30cmほどの石が出土している。

第31号土坑（第135図）

本跡は，調査区東部のB5e_9区に確認された土坑で，第３号住居跡の南西側約３mに位置している。本跡の確認面から３mほど南側には，半径２mほどの範囲で，鹿角の細片が多量に出土している。

平面形は，長径1.11m・短径1.06mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは約94cmあるが，水が湧き出して調査は困難をきわめた。覆土は８層からなり，壁に近い部分は暗褐色を呈しているが，中心部に黒褐色土の層がブロック状に入り込んで，明らかに人為的に埋めもどされた状態を呈している。遺物は，覆土全体に炭化物，獣骨片を含んでいたので，覆土の水洗いをしたところ，多量の堅果類の炭化物と鹿角片・獣骨片を採集することができた。また，覆土から縄文土器片223片が出土しているが，底面から20cmほど上部の覆土から土偶の腰部が上向きの状態で１点出土している。

第66号土坑（第138図）

本跡は，調査区中央部南側のB4g_9区に確認された土坑で，第12号住居跡の西側２mに位置している。

平面形は，長径1.05m・短径0.90mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは120cmあり底面は皿状を呈している。底部からは径20cmほどの河原石が数個出土している。覆土は６層からなっているが，中央部に炭化物を多量に含む黒色土が，下層には炭化粒子と細かい骨片を含む褐灰色土が，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，底部から人頭大の石が３個寄せた状態で出土しただけで，土器片は出土しなかった。

第76号土坑（第138図）

本跡は，調査区中央部南側のB4f_9区に確認された土坑で，第８号住居跡の東側１mに位置している。

平面形は，長径1.48m・短径1.42mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，ほぼ垂直に近い状態で立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは140cmほどあり，底面は平坦である。覆土は８層からなっているが，黒褐色土が底部まで堆積しており，中層に一部褐色土の堆積がみられ，明らかに人為的に埋めもどされた状態で堆積していることがわかる。また，覆土には全体的に炭化粒子が多量に含まれており，底面から50cmほど上位には，径20cmほどの河原石が２個出土している。

遺物は，覆土から深鉢形土器の底部（第161図14）と縄文土器片45片が出土している。

第77号土坑（第138図）

本跡は，調査区中央部南側のB4f_9区に確認された土坑で，第76号土坑の南側１mほどに位置している。本跡の南側には，第78号土坑が重複している。

平面形は，長径1.20m・短径0.95mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは110cmほどあり，底面は皿状を呈している。覆土は６層からなり，上層から下層まで黒褐色土が堆積しているが，中層に一部暗褐色土の堆積がみられ，人為的に埋めもどされた状態で複雑に堆積している。また，覆土には全体的に炭化粒子・骨粉が少量含まれている。

遺物は，覆土中から粗製の鉢形土器（第161図16）がつぶれた状態で出土し，縄文土器片56片と，底面から径20cmほどの河原石が１個出土している。

第78号土坑（第138図）

本跡は，調査区中央部南側のB4f_9区を中心に確認された土坑で，第12号住居跡の西側１mに位置している。本跡の北側には，第77号土坑が重複している。

平面形は，長径1.37m・短径0.95mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは122cmあり，底面は皿状を呈している。覆土は６層からなり，下層に炭化粒子を含む黒褐色土，中層に炭化粒子・骨粉を含む暗褐色土，上層に炭化粒子を含む砂質の黒色土がそれぞれ堆積している。覆土の堆積状態は，層ごとに段状に重なっており，自然に堆積したものとは考えられない。

遺物は，覆土から縄文土器片57片と，石錐１点が出土し，また，底面からは，径15cmほどの丸い河原石が１個出土している。

第81号土坑（第139図）

本跡は，調査区中央部南側のB4g_9区を中心に確認された土坑で，第14号住居跡の西側２mに位置している。本跡の南側には，第11号住居跡が重複している。

平面形は，長径1.32m・短径0.97mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは90cmあり，底面は皿状を呈している。底面には，握りこぶし大の石から径20cmほどの石が９個敷きつめてある。覆土は７層からなり，下層には炭化粒子を含む灰褐色土，中層から上層に炭化粒子を多量に含む黒色土が，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片41片が出土している。

第84号土坑（第139図）

本跡は，調査区中央部南側の$B4e_9$区に確認された土坑で，第25号住居跡の南側３mに位置している。本跡は，第８号住居跡の東側に重複しており，本跡の東側には第109号土坑が重複している。

平面形は，長径1.60m・短径1.0mの楕円形を呈し，長径方向はN－73°－Eを指している。壁は砂質のロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは約100cmあり，底面は皿状を呈している。覆土は５層からなり，中層から下層にかけて炭化粒子・骨粉を含む暗褐色土，上層には炭化粒子・骨粉を含む黒褐色土が堆積している。堆積の状態は，人為的に埋めもどしたものと考えられる。

遺物は，覆土上層から縄文土器片63片が出土している。

第112号土坑（第141図）

本跡は，調査区中央部南側の$B4f_8$区に確認された土坑で，第25号住居跡の南側４mに位置している。本跡は，第８号住居跡の南側に重複している。

平面形は，長径1.28m・短径0.93mの楕円形を呈し，長径方向はN－16°－Wを指している。壁は砂質のロームで硬く，垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。深さは約98cmあり，底面は平坦である。覆土は８層からなり，中層と下層は炭化粒子を含む黒褐色土，上層の下部は炭化粒子を含む暗褐色土，上部には同じく黒褐色土が堆積している。堆積の状態は複雑で，明らかに人為的に埋めもどされた状態を呈している。

遺物は，覆土中から縄文土器片53片と石鏃２点が出土している。

第114号土坑（第141図）

本跡は，調査区中央部南側の$B5g_1$区に確認された土坑で，第14号住居跡の東側１mに位置している。

平面形は，長径1.30m・短径1.0mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－47°－Wを指している。壁は砂質のロームで硬く，外傾して立ち上がっている。確認面からの深さは約80cmあり，底面は凹凸がはげしく，握りこぶし大から人頭大の石を18個敷きつめている。覆土は６層からなり，炭化粒子を含む黒褐色土が主に堆積しているが，中層の一部に褐色土がブロック状に，人為的に埋めもどされた状態を呈している。

遺物は，覆土上層から縄文土器片75片と，中層から堅果類の炭化物が出土している。

第130号土坑（第143図）

本跡は，調査区中央部北側のA5j_3区に確認された土坑で，第５号住居跡内に重複している。

平面形は，長径1.10m・短径0.97mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，底面近くで外側に膨らんでおり，いわゆる袋状土坑となっている。確認面からの深さは80cmあり，底面からは，握りこぶし大から人頭大の石が13個出土している。大きい石は，平坦な面を上にして出土している。覆土は，上層に炭化粒子・骨粉を少量含む黒褐色土が堆積し，中層・下層には，炭化粒子を少量含む褐色土・暗褐色土が複雑に堆積し，人為的に埋めもどされた状態を呈している。

遺物は，覆土上層から縄文土器片44片が出土している。

第139号土坑（第143図）

本跡は，調査区中央部北側のA5j_5区に確認された土坑で，第130号土坑の東側９ｍほどの緩やかな傾斜地に位置している。

平面形は，長径1.08m・短径1.05mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，形状は中程で外側に膨らみを有するいわゆる袋状土坑である。確認面からの深さは100cmで，底面は平坦である。覆土は，黒褐色土と暗褐色土が中心で９層からなっている。上層には炭化粒子を含む黒褐色土，中層には炭化粒子を多量に含み，砂質ロームの小ブロックを含む黒褐色土，下層には，炭化粒子を多量に含み，砂質ロームがまだらに入っている暗褐色土が，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片306片が出土し，底部から深鉢形土器（第162図33）が出土している。

第158号土坑（第144図）

本跡は，調査区中央部のA4j_0区を中心に確認された土坑で，第25号住居跡の北東側８ｍに位置している。

平面形は，長径2.20m・短径2.0mの不整円形を呈し，当遺跡の土坑の中でも最大のものである。壁は砂質のロームで硬く，断面形状は，中程で大きく括れ，しかも底部近くで外側に膨らみを有するいわゆる袋状土坑である。確認面からの深さは160cmで，底面は平坦である。覆土は，黒褐色土と暗褐色土が中心で８層からなっている。上層には，炭化粒子・骨粉を多量に含む黒褐色土，中層には炭化粒子少量，骨粉を多量に含む暗褐色土，下層には骨粉を多量に含む黒褐色土が人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，底部から縄文土器片80片と，握りこぶし大の石６個，人頭大の石１個が出土している。

第170号土坑（第145図）

本跡は，調査区中央部西側の$B4c_7$区を中心に確認された土坑で，第25号住居跡の中に重複している。

平面形は，長径0.82m・短径0.77mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで軟らかく，外傾して立ち上がっている。確認面からの深さは84cmで，底面は皿状を呈している。覆土は，全体に骨粉を多量に含む黒色土が堆積し，壁際にはローム粒子を含む褐色土が堆積している。覆土の状態は，埋めもどしによる堆積と思われる。

遺物は，覆土から縄文土器片が4片出土し，底部から握りこぶし大の石が1個出土している。

第178号土坑（第145図）

本跡は，調査区南西部の$B4d_3$区を中心に確認された土坑で，第25号住居跡の西側12mに位置している。本跡の南側には第239号土坑が重複している。

平面形は，長径1.65m・短径1.22mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで，遺跡中央部の土坑の壁に比較していくらか軟らかく，壁の中程で外側に膨らみを有する袋状土坑である。確認面からの深さは116cmで，底面は平坦である。覆土は，上層に炭化粒子・骨粉を少量含む黒褐色土が，中・下層には，炭化粒子・骨粉を少量含む暗褐色土が，人為的に埋めもどされた状態で複雑に堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片405片が出土し，底部から握りこぶし大から人頭大の石が45個重なり合うようにして出土している。また，石の間から，ミニチュア土器の壺（第163図38）と，ミニチュアの浅鉢形土器（第163図37）が出土している。

第184号土坑（第146図）

本跡は，調査区南西部の$B4c_4$区を中心に確認された土坑で，第25号住居跡の西側10mに位置している。

平面形は，長径2.02m・短径1.30mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－37°－Eを指している。壁は砂質のロームで，軟らかく，形状は中程で括れ，底面近くで外側に膨らみを有するいわゆる袋状土坑である。確認面からの深さは114cmほどで，底面は皿状である。覆土は，黒褐色土が主体で4層からなっており，上層・中層に，炭化粒子・骨粉を少量含む黒褐色土，下層に，炭化粒子・骨粉を少量含む暗褐色土が人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，底部から握りこぶし大の石3個，人頭大の石2個と縄文土器片55片が出土している。

第185号土坑（第146図）

本跡は，調査区南西部の$B4b_3$区に確認された土坑で，第22号住居跡の北東側２mに位置している。

平面形は，長径1.15m・短径1.06mのほぼ円形を呈している。壁は，砂質のロームで比較的軟らかい。形状は底面近くで外側に膨らみを有するいわゆる袋状土坑で，確認面からの深さは84cmあり，底面は皿状を呈している。覆土は，黒褐色土が主体で３層からなり，上層には骨粉を少量含む黒褐色土，下層には炭化粒子を含む黒褐色土が人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，底部から握りこぶし大の石６個と，縄文土器片10片を出土している。

第190号土坑（第146図）

本跡は，調査区中央部南側の$B4d_6$区を中心に確認された土坑で，第25号住居跡の西側２mに位置している。

平面形は，長径2.07m・短径1.90mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで硬く，外傾して立ち上がっている。確認面からの深さは88cmほどを有し，底面は平坦である。覆土は暗褐色土が主体で４層からなり，南側上層にローム粒子を多量に含む褐色土が，それ以外の各層には炭化粒子を少量含む暗褐色土・極暗褐色土が人為的に埋めもどされた状態で複雑に堆積している。

遺物は，底部から磨石１個，卵大の石２個，人頭大の石１個と縄文土器片14片が出土している。土坑の性格等については不明である。

第195号土坑（第147図）

本跡は，調査区南西部の$B4b_5$区を中心に確認された土坑で，第25号住居跡の西側６mに位置している。

平面形は，長径1.25m・短径1.10mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで，比較的軟らかく，底面近くで外側に膨らみを有するいわゆる袋状土坑である。確認面からの深さは108cmほどで，底面は平坦である。

覆土は，暗褐色土を主体として５層からなり，炭化粒子・ローム粒子を少量含む黒褐色土が上層から中層まで入り込んでいる。また，中層の一部と下層に炭化粒子を少量含む暗褐色土が人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，底部から握りこぶし大の石が１個出土し，覆土中から縄文土器片が23片出土している。

第196号土坑（第146図）

本跡は，調査区南西部の$B4b_6$区に確認された土坑で，第25号住居跡の北西側４mに位置してい

る。本跡の南側には，本跡によって壁を切られた第236号土坑が重複している。

平面形は，長径1.25m・短径1.20mの円形を呈している。壁は砂質のロームで，軟らかく，断面形状は底面から50cmほど垂直に立ち上がり，さらに外傾して立ち上がっている。確認面からの深さは90cmほどで，底面は平坦である。覆土は，黒褐色土を主体として8層からなり，上層には，骨粉・炭化粒子を少量含む黒褐色土，中層には，骨粉・炭化粒子を少量含む暗褐色土が堆積し，暗褐色土の西側には黒褐色土が入り込んでいる。下層には，骨粉を少量含む暗褐色土が堆積している。いずれも人為的に埋めもどされた状態を呈している。

遺物は，覆土から縄文土器片が24片出土している。

第197号土坑（第147図）

本跡は，調査区西部の$B4b_6$区に確認された土坑で，第25号住居跡の北西側4mに位置している。本跡の南側には，第235号土坑が重複している。

平面形は，長径1.20m・短径1.10mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで比較的軟らかく，底面近くで外側に膨らみを有する袋状土坑である。確認面からの深さは60cmで，底面は平坦である。覆土は暗褐色土を主体にして4層からなり，上層・中層にはローム粒子を多量，骨粉を少量含む暗褐色土が堆積し，上層と中層の間に褐色土が複雑に入り込んでいる。下層には，炭化粒子を少量，骨粉を少量含む黒色土が堆積している。全体的な堆積の状態は，人為的に埋めもどされた複雑な状態を呈している。

遺物は，覆土から縄文土器片10片と，底部から握りこぶし大の石が2個出土している。

第202号土坑（第155図）

本跡は，調査区中央部西側の$B4a_7$区に確認された土坑で，第25号住居跡の北側4mに位置している。本跡の南東側には，本跡によって覆土を削除された本跡よりも古い，第294号土坑が重複している。

平面形は，長径1.35m・短径1.0mの不整円形を呈している。壁は，砂質のロームで軟らかく，垂直に立ち上がっている。確認面からの深さは96cmで，底面は平坦である。覆土は，上層に炭化粒子を少量含む黒褐色土，中層には炭化粒子・骨粉を少量含む極暗褐色土，下層には炭化粒子を多量に含む黒褐色土が階段状に堆積しており，人為的に埋めもどされたものと考えられる。

遺物は，覆土から縄文土器片11片が出土している。

第211号土坑（第148図）

本跡は，調査区西部の$A4j_4$区に確認された土坑で，第23号住居跡の北西側4mに位置している。

平面形は，長径1.40m・短径1.25mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで，比較的軟らかく，ほぼ垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは110cmで，底面は平坦である。覆土は4層からなっており，上層と下層に炭化粒子を少量，骨粉を多量に含む暗褐色土，中層に炭化粒子を少量，骨粉を多量に含む黒褐色土が，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，底部から卵大から握りこぶし大の石7個が出土し，覆土から縄文土器片が22片出土している。

第219号土坑（第149図）

本跡は，調査区西部のA4j_6区を中心に確認された土坑で，第23号住居跡の北東側3mに位置している。

平面形は，長径1.10m・短径1.0mの円形を呈している。壁は，砂質のロームで比較的軟らかく，垂直に立ち上がり，円筒形状を呈している。確認面からの深さは110cmで，底面は平坦である。覆土は黒褐色土を主体に5層からなり，上層・中層には，炭化粒子を少量含む黒褐色土が，下層には，炭化粒子を含む極暗褐色土が人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片3片と，底部から卵大の石4個，人頭大の石4個が平坦に並べた状態で出土した。

本跡は，上部に第153号配石遺構が検出されており，配石と関係のある土坑と考えられる。

第222号土坑（第150図）

本跡は，調査区西部のA4j_7区に確認された土坑で，第25号住居跡の北側10mに位置している。本跡の東側には第241号土坑が重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，長径1.70m・短径1.50mの不整円形を呈している。壁は砂質ロームで軟らかく，底面近くで外側に膨らみを有する袋状土坑である。確認面からの深さは90cmで，底面は平坦である。覆土は上層に炭化粒子を多量，骨粉を少量含む暗褐色土，中層に炭化粒子を多量，骨粉を少量含む黒褐色土，下層には，炭化粒子を含む褐色土に，ローム土がまだらに入り込んで複雑に堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片87片が出土し，底部からは卵大から握りこぶし大の石が10個出土している。

第224号土坑（第150図）

本跡は，調査区中央部西側のA4j_8区を中心に確認された土坑で，第25号住居跡の北側9mに位置

している。

平面形は，長径1.60m・短径1.35mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで比較的軟らかく，南側の一部が底面近くで外側に膨らみ袋状を呈しているが，他はほぼ垂直に立ち上がっている。確認面からの深さは80cmで，底面は平坦である。覆土は黒褐色土を主体に4層からなり，壁際にローム粒子を多量に含む褐色土，他は，骨粉・炭化粒子を少量含む黒褐色土が，ほぼ全体に自然堆積の状態を呈している。

遺物は，底部から卵大から握りこぶし大の石21個と，覆土からつぶれた深鉢形土器(第168図62)と縄文土器片267片が出土している。

第229号土坑（第150図）

本跡は，調査区西部のA4i_6区に確認された土坑で，第23号住居跡の北東側7mに位置している。

平面形は，長径1.60m・短径1.55mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで比較的軟らかく，底面近くで外側に膨らみを有し，わずかに袋状を呈している。確認面からの深さは90cmで底面は平坦である。覆土は暗褐色土が主体で7層からなり，上層には炭化粒子・骨粉を多量に含む黒褐色土，中層には炭化粒子・骨粉・ローム粒子を多量に含む暗褐色土，下層には炭化粒子・ローム粒子を少量含む暗褐色土が複雑に入り込み，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，東壁際の底部から握りこぶし大の石1個，覆土上層から縄文土器片32片が出土している。

第230号土坑（第150図）

本跡は，調査区西部のA4i_6区を中心に確認された土坑で，第23号住居跡の北東側8mに位置している。本跡の東側半分には第306号土坑が重複している。

平面形は，径1.50mの円形を呈している。壁は砂質のロームで比較的軟らかく，外傾して立ち上がっている。確認面からの深さは50cmで，底面は第306号土坑によって半分以上が切られているが，残存部分は平坦である。覆土は，黒褐色土を主体に5層からなり，上層・中層に骨粉を少量含む黒褐色土，下層にローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積の状態で堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片が35片出土している。

第232号土坑（第151図）

本跡は，調査区西部のA4h_6区を中心に確認された土坑で，第26号住居跡の南側3mに位置している。本跡の東側には第231号土坑が重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，長径1.75m・短径1.70mのほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで比較的軟らか

く，底面からほぼ垂直に立ち上がり，中程から上は外傾して立ち上がっている。確認面からの深さは96cmで，底面は平坦である。覆土は，黒褐色土を主体として6層からなり，上層・中層は，炭化粒子を多量・骨粉を少量含む黒褐色土，下層には炭化粒子を少量含む黒褐色土が堆積し，その上部にローム粒子を多量に含む褐色土が入り込み，人為的に埋めもどされた状態で複雑に堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片39片が出土している。

第255号土坑（第153図）

本跡は，調査区北西部のA4h_7区に確認された土坑で，第26号住居跡の南東側3mに位置している。本跡の東側には第256号土坑が重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，径1.05mの円形を呈している。壁は砂質のロームで比較的軟らかく，ほぼ垂直に立ち上がり円筒形状を呈している。確認面からの深さは106cmで，底面は平坦である。覆土は黒褐色土を主体に5層からなり，上層・中層には炭化粒子・骨粉を多量に含む黒褐色土，下層には炭化粒子を多量に含む褐色土が段状に堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片が189片，底部から卵大の石2個，人頭大の石2個が出土している。

第257号土坑（第153図）

本跡は，調査区中央部北側のA4i_0区に確認された土坑で，第25号住居跡の北東側13mに位置している。

平面形は，長径1.55m・短径1.40mにほぼ円形を呈している。壁は砂質のロームで軟らかく，中程で括れ，底面近くで外側に膨らみを有する袋状土坑である。確認面からの深さは160cmで，底面は皿状を呈している。覆土は黒褐色土が主体であり，上層には，炭化粒子・骨粉を少量含む黒褐色土，中層には炭化粒子を少量含む暗褐色土，下層には炭化粒子を少量含む黒褐色土が人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，底部から縄文土器片13片と，底部の中央部から，人頭大の石が1個出土している。

第271号土坑（第154図）

本跡は，調査区北西部のA4i_7区を中心に確認された土坑で，第25号住居跡の北側14mに位置している。本跡の南西側には第227号土坑が重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，長径1.52m・短径1.15mの楕円形を呈し，長径方向はN－80°－Wを指している。壁は砂質のロームで比較的軟らかく，外傾して立ち上がっている。確認面からの深さは100cmで，底面は平坦である。覆土は黒褐色土を主体として，上・中層には骨粉を少量含む黒褐色土，下層に

はローム粒子を少量含む暗褐色土が，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片402片と底部から握りこぶし大の石が散在的に８個出土している。

第321号土坑（第158図）

本跡は，調査区北西部のA4f_7区を中心に確認された土坑で，第28号住居跡内に重複している。また，本跡の西側には第319号土坑が重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，長径1.82m・短径1.45mの不整円形を呈している。壁は砂質のロームで軟らかく，垂直に立ち上がっているが，西壁は，底面近くで外側に膨らみを有する袋状を呈している。確認面からの深さは96cmで，底面は平坦である。覆土は黒褐色土を主体にして７層からなっており，上層に炭化粒子・骨粉を少量含む黒褐色土，中層に砂粒を多量に含む褐色土，下層に炭化粒子を多量に含む極暗褐色土が，人為的に埋めもどされた状態で複雑に堆積している。

遺物は，覆土から縄文土器片75片が出土している。

第336号土坑（第158図）

本跡は，調査区西部のA4i_5区に確認された土坑で，第23号住居跡の北側７mに位置している。

平面形は，径0.5mの円形を呈している。壁は砂質のロームで軟らかく，開口部近くで括れ，底面近くで外側に膨らみを有する袋状土坑である。確認面からの深さは84cmで，底面は平坦である。覆土は暗褐色土を主体にして５層からなり，上層に炭化粒子を少量含む褐色土，中層に炭化粒子・骨粉を少量含む暗褐色土，下層に砂粒を少量含む暗褐色土が，人為的に埋めもどされた状態で堆積している。

遺物は，底部から握りこぶし大の石１個が出土しただけである。

表7　土坑一覧表

(1)

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-1	B4f7	N－23°－W	不整楕円形	1.74×1.16	58	ゆるやかに立ち上がる	凹凸	人為	AⅡb	土器片,39点	SI1と重複	133
2	A5j7		円形	1.16×1.03	48	外傾	平坦	自然	AⅡa	土器片66点,石器5点	底部に石	133
3	B5b9	N－45°－W	不整楕円形	1.79×1.03	36	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片86点,石器1点	底部に石	133
4	B5b9	N－53°－W	楕円形	1.37×1.07	32	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片42点,(堀之内)		133
5	B5b8		円形	1.52×1.25	44	垂直	ゆるい起伏	自然	BⅡa	(堀之内)土器片60点,石器2点	底部に石	133
6	B5b8		円形	1.17×0.98	24	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡa	土器片391点,(堀之内)		133
7	B5b8		円形	1.05×0.94	54	垂直	平坦	自然	BⅡb	土器片107点,(堀之内)		133
8	B5b8		円形	1.02×0,96	44	外傾	平坦	人為	AⅡa	土器片29点,石器2点	底部に石	133
9	B5b9	N－70°－E	不整楕円形	2.02×1.76	84	袋状	平坦	人為	CⅢb	(堀之内)土器片144点,石器6点	底部に石	133
10	B5b8		不整円形	0.65×0.52	56	外傾	皿状	人為	AⅠb	土器片12点,(堀之内)	底部に石	133
11	B5c9		不整円形	1.32×0.94	34	垂直	平坦	人為	BⅡa	(大木)土器片66点,石器1点		134
12	B5d8		円形	0.50×0.45	66	垂直	平坦	人為	BⅠb	土器片4点,(加曽利B)		133
13	B5c9		円形	0.86×0.73	60	垂直	ゆるい起伏	自然	BⅠb	(堀之内)土器片80点,石器1点	SI3と重複	133
14	B5c9		円形	0.47×0.43	60	垂直	平坦	人為	BⅠb			134
15	B5c9	N－38°－E	不整楕円形	0.88×0.52	50	外傾	皿状	自然	BⅠb	(称名寺)土器片20点,石器1点		134
16	B5c9		円形	1.03×0.90	80	垂直	ゆるい起伏	自然	BⅡb	土器片72点,石器1点	底部に石	134
17	B5d0	N－90°	楕円形	1.10×0.84	36	外傾	平坦	自然	AⅡa	土器片26点,石器1点	SI3と重複	134
18	B5d8		円形	0.56×0.53	66	外傾	皿状	自然	AⅠb	石器1点		134
19	B5c8	N－15°－W	楕円形	0.90×0.74	90	垂直	ゆるい起伏	人為	BⅠb	土器片42点,石器1点	SI2と重複 底部に石	134
20	B5c8	N－76°－E	隅丸長方形	2.98×2.20	26	外傾	平坦	自然	DⅢa	(堀之内)土器片161点,石器1点	SI2と重複 底部に石	134
21	B5e8	N－77°－E	楕円形	1.56×1.33	92	袋状	平坦	人為	CⅡb	石器2点	底部に石	134
22	B5d8	N－55°－W	楕円形	1.96×1.52	96	袋状	平坦	人為	CⅡb	(大洞A)土器片5点,石器19点	底部に石	134
23	B5d8	N－28°－W	不整楕円形	1.46×1.07	48	外傾	平坦	人為	AⅡa	(堀之内)土器片194点,石器6点		136
24	B5c7	N－64°－E	隅丸正方形	2.83×2.56	26	外傾	平坦	人為	DⅢa	土器片587点,石器2点	SI2と重複	135
25	B5d8	N－48°－E	楕円形	1.63×1.42	96	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片499点,石器8点	底部に石	134
26	B5d0		円形	0.88×0.73	28	外傾	平坦	自然	AⅠa	土器片140点,(堀之内)	SI3と重複	135
27	B5d0		円形	0.80×0.78	28	外傾	平坦	自然	AⅠa	土器片97点,(加曽利B)	SI3と重複	135
28	B5e8	N－49°－E	楕円形	0.86×0.67	56	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅠb	(堀之内)土器片34点,石器1点		135
29	B5e8	N－68°－E	楕円形	1.64×1.26	40	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡa	(加曽利B)土器片22点,石器2点		135
30	B5e8	N－33°－W	楕円形	1.30×0.84	40	垂直	平坦	自然	BⅡa			135
31	B5e9		円形	1.11×1.06	94	垂直	平坦	人為	BⅡb	土器片219点,石器6点		135
32	B5e9	N－62°－W	不整楕円形	1.24×0.79	40	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片95点,石器3点		136
33	B5d0		円形	0.80×0.76	50	外傾	平坦	自然	AⅠb	土器片4点,(加曽利B)	SI3と重複	135
34	B5d9	N－57°－E	楕円形	1.39×0.75	70	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片157点		136
35	B5d9	N－22°－E	不整楕円形	1.33×1.04	36	外傾	平坦	自然	AⅡa	土器片53点		136

(2)

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-36	$B5d_8$		円形	0.63×0.75	52	垂直	平坦	人為	BⅠb	土器片68点		136
37	$B4d_9$		円形	1.08×1.03	24	外傾	皿状	自然	AⅡa	土器片35点	SI3と重複 底部に石	135
38	$B5e_8$	N−33°−W	楕円形	1.06×0.69	54	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片135点		135
39	$B5d_7$	N−58°−W	不整楕円形	0.64×0.35	50	外傾	皿状	自然	AⅠb			135
40	$B5d_7$	N−74°−E	不整楕円形	0.76×0.52	44	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅠa	土器片45点		135
41	$B5d_7$	N−11°−W	不整楕円形	0.92×0.50	46	外傾	皿状	自然	AⅠa	(堀之内) 土器片21点, 石器1点		135
42	$B5e_7$	N−14°−W	不整楕円形	0.82×0.64	54	外傾	皿状	自然	AⅠb	(加曽利B) 土器片37点, 石器2点		135
43	$B5e_7$	N−84°−E	不整楕円形	1.07×0.64	50	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片38点		135
44	$B5d_8$	N−22°−W	不整長方形	1.42×0.43	36	外傾	皿状	人為	DⅡa	土器片8点, (堀之内)	SI2と重複	136
45	$B5c_8$	N−39°−W	不整楕円形	1.21×0.62	36	外傾	平坦	人為	AⅡa	土器片12点		136
46	$B5d_9$		不整円形	0.51×0.52	56	垂直	平坦	人為	BⅠb	土器片4点		136
47	$B5e_7$	N−60°−W	楕円形	1.12×0.91	70	袋状	凹凸	人為	CⅡb	(加曽利B) 土器片75点, 石器7点	底部に石	136
48	$B5d_9$	N−57°−E	不整楕円形	0.94×0.44	68	垂直	平坦	人為	BⅠb	(堀之内) 土器片18点, 石器1点	底部に石	136
49	$B5e_7$	N−45°−W	不整楕円形	1.30×0.70	80	垂直	皿状	人為	BⅡb		底部に石	136
50	$B5d_7$	N−36°−E	不定形	1.42×0.82	60	垂直	皿状	人為	EⅡb			136
51	$B4f_6$	N−37°−E	楕円形	1.86×1.10	36	外傾	平坦	自然	AⅡa	土器片215点, (大洞C_2)		136
52	$B4h_7$	N−52°−W	楕円形	1.35×0.93	60	外傾	皿状	自然	AⅡb		底部に石	136
53	$B4h_8$		不整円形	2.18×1.72	50	外傾	皿状	自然	AⅢb	土器片229点, 石器6点	底部に石	137
54	$B4g_7$		円形	1.54×1.00	50	外傾	皿状	人為	AⅡb	土器片108点, 石器1点		137
55	$B4g_8$		不整円形	2.61×2.40	44	外傾	皿状	自然	AⅢa	土器片107点, (大洞C_2)	底部に石	137
56	$B4g_9$		円形	1.48×1.16	94	外傾	皿状	自然	AⅡb	(大洞C_2) 土器片106点, 石器2点	底部に石	137
57	$B4g_8$	N−54°−E	不整楕円形	2.19×1.50	54	外傾	凹凸	自然	AⅢb	(大洞C_2) 土器片313点, 石器2点		137
58	$B4g_8$		円形	1.23×1.12	134	垂直	平坦	人為	BⅡC	(大洞C_1) 土器片173点, 石器1点		137
59	$B4f_7$	N−53°−W	楕円形	1.42×1.14	148	垂直	凹凸	人為	BⅡc	(大洞C_2) 土器片150点, 石器2点	底部に石	137
60	$B4f_9$		円形	1.02×0.92	130	垂直	皿状	人為	BⅡc		底部に石	137
61	$B4g_8$	N−78°−W	楕円形	0.95×0.65	44	外傾	皿状	自然	AⅠa		底部に石	137
62	$B4g_8$	N−31°−E	楕円形	1.25×0.82	34	外傾	皿状	人為	AⅡa		底部に石	137
63	$B4g_7$		円形	1.54×1.00	46	外傾	皿状	人為	AⅡa			137
64	$B4g_7$		円形	1.00×0.80	74	垂直	皿状	人為	BⅡb		底部に石	138
65	$B4g_7$		円形	0.95×0.85	100	垂直	皿状	人為	BⅠc			138
66	$B4g_9$		円形	1.05×0.90	120	垂直	皿状	人為	BⅡc	石器1点	底部に石	138
67	$B4e_7$		不整円形	1.25×1.00	26	外傾	皿状	自然	AⅡa			138
68	$B4f_8$		円形	0.85×0.74	116	垂直	皿状	人為	BⅠc			137
69	$B4g_8$		円形	0.65×0.55	100	垂直	平坦	自然	BⅠc			137
70	$B5c_1$		円形	1.05×1.00	34	外傾	平坦	自然	AⅡa	土器片15点, (加曽利B)	SI6と重複	138

(3)

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-71	$B5b_2$	N－25°－E	不定形	2.16×0.92	70	外傾	凹凸	自然	EⅢb	土器片110点,(堀之内)	SI6と重複	138
72	$B5b_2$	N－35°－W	不整楕円形	1.72×1.17	90	外傾	平坦	人為	AⅡb	(加曽利B) 土器片416点,石器3点	SI6と重複 底部に石	138
73	$B5c_2$	N－45°－W	楕円形	1.85×1.25	90	垂直	皿状	人為	BⅡb	(堀之内) 土器片424点,石器4点	SI7と重複 底部に石	138
74	$B5c_2$		円形	1.03×0.99	66	外傾	皿状	人為	AⅡb	(加曽利B) 土器片166点,石器4点	SI6と重複	138
75	$B4c_0$		円形	1.35×1.25	50	外傾	平坦	人為	AⅡb			
76	$B4f_9$		不整円形	1.48×1.42	140	垂直	平坦	人為	AⅡc	(大洞BC) 土器片42点,石器1点	底部に石	138
77	$B4f_9$		不整円形	1.20×0.95	110	垂直	皿状	人為	BⅡc	(大洞B) 土器片53点,石器1点	底部に石	138
78	$B4f_9$	N－20°－W	楕円形	1.37×0.95	122	垂直	皿状	人為	BⅡc	土器片55点,石器1点	底部に石	138
79	$B4h_0$		円形	1.70×1.55	60	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片27点	SI11と重複	138
80	$B4h_0$	N－40°－E	楕円形	1.65×1.10	96	外傾	皿状	人為	AⅡb	土器片6点	SI14と重複 底部に石	138
81	$B4g_9$	N－32°－W	楕円形	1.32×0.97	90	垂直	皿状	人為	BⅡb	土器片44点,(加曽利B)	底部に石	139
82	$B4g_9$	N－69°－W	不定形	1.70×1.25	36	ゆるやかに立ち上がる	ゆるい起伏	自然	EⅡa	(加曽利E) 土器片51点,石器1点		139
83	$B4f_8$	N－24°－W	楕円形	1.20×0.95	100	垂直	皿状	人為	BⅡc	(大洞BC) 土器片63点,石器2点	SI8と重複	139
84	$B4e_9$	N－73°－E	楕円形	1.60×1.00	100	垂直	皿状	人為	BⅡc	土器片61点	SI8と重複 底部に石	139
85	$B4e_8$	N－62°－E	楕円形	1.46×1.25	120	外傾	皿状	自然	AⅡc	(堀之内) 土器片106点,石器3点	SI8と重複	139
86	$B4e_8$	N－55°－E	不整楕円形	1.32×0.75	50	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片93点,石器2点	SI8と重複	139
87	$B4e_8$	N－42°－W	楕円形	1.27×1.04	104	垂直	平坦	自然	BⅡc	(堀之内) 土器片299点,石器1点	SI8と重複	139
88	$B4g_8$		円形	0.92×0.78	80	垂直	平坦	人為	BⅠb	(安行Ⅰ) 土器片152点,石器1点		139
89	$B4g_8$		不整円形	1.35×1.09	34	外傾	凹凸	人為	AⅡa	土器片90点,石器1点	底部に石	139
90	$B4f_8$	N－30°－E	楕円形	1.49×1.10	86	垂直	皿状	人為	BⅡb	土器片31点,石器1点	SI8と重複	139
92	$B4c_8$	N－72°－E	不整楕円形	1.55×0.78	104	垂直	皿状	人為	BⅡc	土器片178点,(安行Ⅰ)	SI25と重複	139
94	$B4d_8$	N－21°－E	不整楕円形	1.88×1.10	140	垂直	平坦	人為	BⅡc	土器片45点,	SI25と重複 底部に石	140
95	$B4e_8$	N－68°－E	不定形	1.40×1.15	40	外傾	ゆるい起伏	自然	EⅡa	深鉢形土器(大洞B) 土器片178点,石器1点	SI25と重複 埋甕	179
96	$B4e_8$	N－80°－W	不定形	3.85×2.85	100	外傾	平坦	人為	EⅢc	(堀之内) 土器片286点,石器4点	SI25と重複 底部に石	140
97	$B4c_8$		円形	0.54×0.46	70	垂直	皿状	人為	BⅠb	土器片19点	SI25と重複	140
98	$B4c_8$	N－67°－E	楕円形	1.12×0.86	60	外傾	皿状	人為	AⅡb	土器片59点	SI25と重複	140
100	$B4d_7$		不整円形	0.65×0.55	90	垂直	皿状	人為	BⅠb	(加曽利B) 土器片78点,石器2点	SI25と重複	140
101	$B4d_8$	N－0°	不定形	0.80×0.40	62	垂直	凹凸	人為	EⅠb	土器片3点	SI25と重複	140
103	$B4d_8$		不整円形	1.00×0.84	120	垂直	皿状	人為	BⅡc	土器片11点,(安行Ⅰ)	SI25と重複 底部に石	140
105	$B4c_8$	N－32°－E	長楕円形	2.24×0.80	120	垂直	凹凸	人為	BⅢc	(安行Ⅰ) 土器片78点,石器6点	SI25と重複	140
106	$B4h_8$		不整円形	0.92×0.62	64	外傾	皿状	自然	AⅠb	土器片14点,石器1点		140
107	$B4g_8$		不整円形	0.84×0.78	64	外傾	皿状	自然	AⅠb	土器片2点,(安行Ⅰ)		140
108	$B4d_9$		不整円形	1.43×1.10	100	垂直	平坦	人為	BⅡc	土器片110点,(堀之内)	SI25と重複 底部に石	140
109	$B4e_9$	N－30°－W	楕円形	0.77×0.70	60	外傾	皿状	人為	AⅠb	土器片2点	SI8と重複	139
110	$B4g_8$	N－27°－E	不定形	2.47×1.02	70	外傾	凹凸	人為	EⅢb	土器片45点,(加曽利B)	底部に石	140

(4)

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-111	$B4g_0$	N－16°－W	不定形	1.83×1.14	70	外傾	凹凸	人為	EⅡb	土器片4点	SI12と重複	141
112	$B4f_8$	N－16°－W	楕円形	1.28×0.93	98	垂直	平坦	人為	BⅡb	土器片52点，石器3点	SI8と重複 底部に石	141
113	$B5c_1$		円形	1.45×1.35	50	外傾	平坦	人為	AⅡb		底部に石	141
114	$B5g_1$	N－12°－W	不整楕円形	1.30×1.00	80	外傾	凹凸	人為	AⅡb	土器片73点	底部に石	141
115-A	$B4f_0$		不整円形	3.60×3.40	40	外傾	平坦	人為	AⅢa	(安行Ⅲb) 土器片35点，石器5点	底部に石	141
115-B	$B4f_0$	N－38°－E	楕円形	1.40×1.10	70	外傾	皿状	人為	AⅡb		底部に石	141
115-C	$B4f_0$	N－18°－W	楕円形	1.30×1.00	44	外傾	皿状	人為	AⅡa		底部に石	141
115-D	$B4f_0$	N－20°－W	不定形	4.00×3.40	50	外傾	平坦	人為	EⅢb		底部に石	141
116-A	$B5f_1$	N－35°－W	不定形	3.60×3.00	80	外傾	凹凸	人為	EⅢb	土器片744点，石器9点	底部に石	141
116-B	$B5f_1$	N－90°	不整楕円形	1.50×1.00	80	外傾	凹凸	人為	AⅡb		底部に石	141
116-C	$B5f_2$		円形	1.40×1.30	70	外傾	凹凸	人為	AⅡb		底部に石	141
116-D	$B5f_1$	N－55°－E	不定形	2.30×1.60	80	外傾	凹凸	人為	EⅢb		底部に石	141
117	$B5b_1$	N－0°	不整楕円形	1.56×1.06	60	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	AⅡb	土器片6点	SI6と重複	142
118	$A4j_0$		円形	0.84×0.77	50	垂直	平坦	自然	BⅠb	土器片55点，(新地)		142
119	$A4j_0$		円形	1.33×1.22	30	ゆるやかに立ち上がる	皿状	人為	AⅡa	土器片49点，(堀之内)		142
120	$B5a_1$	N－41°－W	不整楕円形	1.02×0.65	74	外傾	凹凸	人為	AⅡb	土器片28点，(堀之内)		142
121	$A5i_1$	N－13°－E	不整楕円形	1.78×1.40	50	外傾	凹凸	人為	AⅡb	土器片233点，(堀之内)		142
122	$B4a_0$		不整円形	1.56×1.34	66	外傾	凹凸	自然	AⅡb	土器片49点，(称名寺)		142
123	$B4a_0$	N－83°－E	不整楕円形	1.45×1.10	30	外傾	凹凸	自然	AⅡa	(加曽利B) 土器片178点，石器4点	底部に石	142
124	$B4b_9$		円形	1.05×0.98	60	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片8点，(加曽利B)		142
125	$B4a_9$	N－50°－E	不整楕円形	1.80×1.20	80	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片19点，(称名寺)		142
126	$A5j_3$		円形	1.00×0.92	30	外傾	凹凸	自然	AⅡa		SI5と重複	142
127	$B4i_8$		不整円形	0.69×0.60	74	外傾	皿状	人為	AⅠb	土器片7点	底部に石	142
128	$B5a_2$	N－58°－E	不整楕円形	1.94×1.27	40	外傾	凹凸	人為	AⅡa		SI4と重複	142
129	$B5a_3$	N－17°－W	不整楕円形	1.95×1.25	50	ゆるやかに立ち上がる	皿状	人為	AⅡb	土器片66点，石器1点	SI17と重複	142
130	$A5j_3$		円形	1.10×0.97	80	袋状	平坦	人為	CⅡb	(称名寺) 土器片41点，石器2点	SI5と重複 底部に石	143
131	$B5a_3$	N－17°－E	不整楕円形	2.13×0.92	34	外傾	皿状	自然	AⅢa		SI17と重複	143
132	$A5j_1$	N－4°－E	不定形	1.40×0.65	70	外傾	皿状	人為	EⅡb	土器片48点		142
133	$B5b_2$	N－9°－W	不整楕円形	1.55×1.12	60	外傾	凹凸	人為	AⅡb	土器片148点	SI4と重複	143
134	$B5b_1$	N－27°－E	不整楕円形	1.62×1.00	40	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片9点，石器2点		143
135	$B5c_1$		不整円形	0.95×0.75	58	外傾	皿状	自然	AⅠb	土器片6点		143
136	$B5d_2$		不整円形	1.30×1.14	56	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	AⅡb	土器片99点，石器2点		143
137	$B5b_3$		円形	0.64×0.60	54	外傾	皿状	自然	AⅠb	土器片20点	SI7と重複	143
138	$B5b_3$	N－10°－W	不整楕円形	1.00×0.76	30	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片17点	SI7と重複 底部に石	143
139	$A5j_5$		不整円形	1.08×1.05	100	袋状	平坦	人為	CⅡc	(称名寺) 土器片296点，石器2点	底部に石	143

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-140	$B5c_1$		(円形)	(0.95×0.95)	35	外傾	平坦	人為	AⅠa	深鉢形土器(加EⅢ) 土器片50点,石器1点	埋甕	180
141	$B4c_9$	N−17°−W	不定形	1.94×1.07	54	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	EⅡb	土器片131点,石器3点	底部に石	143
142	$B4c_9$	N−37°−W	楕円形	2.10×1.50	50	外傾	皿状	自然	AⅢb	(堀之内) 土器片227点,石器1点	底部に石	143
143	$B4e_9$	N−15°−E	不整楕円形	1.80×1.65	124	外傾	凹凸	自然	AⅡc	土器片143点,石器1点	底部に石	144
144	$B4e_9$		円形	0.85×0.65	104	垂直	平坦	人為	BⅠc	土器片81点,(堀之内)	底部に石	144
145-A	$B4e_0$		円形	0.50×0.48	94	垂直	皿状	人為	BⅠb	土器片403点,(加曽利B)	底部に石	144
145-B	$B4e_0$		円形	1.00×0.98	140	垂直	凹凸	人為	BⅡc		底部に石	144
146	$B4e_9$	N−51°−E	不整楕円形	1.50×1.04	40	外傾	平坦	自然	AⅡa	(大洞C_1) 土器片41点, 石器2点	底部に石	143
147-A	$B4e_0$		不整円形	2.00×1.80	40	外傾	平坦	自然	AⅢa	土器片32点,(大洞C_2)		144
147-B	$B4e_0$		不整円形	0.90×0.80	52	外傾	皿状	自然	AⅠb			144
148-A	$B5f_2$	N−45°−E	不整楕円形	0.70×0.60	50	垂直	凹凸	自然	BⅠb	土器片35点	底部に石	144
148-B	$B5f_2$	N−20°−E	不整楕円形	1.20×1.00	66	外傾	凹凸	自然	AⅡb		底部に石	144
149	$B5g_1$	N−36°−E	楕円形	1.40×1.15	40	外傾	凹凸	人為	AⅡa	(加曽利B) 土器片104点,石器1点	底部に石	143
150	$B4f_0$	N−44°−E	不整楕円形	1.10×0.85	60	外傾	凹凸	人為	AⅡb	土器片31点,石器1点	底部に石	143
151	$B5d_2$	N−77°−E	不整楕円形	1.85×1.20	70	外傾	凹凸	自然	AⅡb	土器片120点, 石器2点	底部に石	144
152	$B5d_2$	N−16°−W	楕円形	1.55×0.95	76	外傾	皿状	人為	AⅡb	土器片31点,石器1点	底部に石	144
153	$B4e_9$		不整円形	1.00×0.90	118	垂直	皿状	人為	BⅡc	土器片69点	底部に石	144
154	$A5j_2$	N−20°−E	楕円形	1.00×0.79	48	外傾	平坦	自然	AⅡa	土器片13点		144
155	$B5c_2$		不整円形	1.50×1.25	30	外傾	平坦	自然	AⅡa	土器片50点,(称名寺)	SI6と重複 底部に石	144
156	$B5b_1$	N−25°−E	不整楕円形	1.05×0.56	40	外傾	皿状	自然	AⅡa		SI9と重複	143
157	$B4e_9$	N−28°−E	不定形	1.07×0.55	70	袋状	凹凸	人為	EⅡb	土器片7点		144
158	$A4j_0$		不整円形	2.20×2.00	160	袋状	平坦	人為	CⅢc	(阿玉台ⅠB) 土器片80点,石器1点	底部に石	144
159	$B4e_9$	N−32°−W	楕円形	1.00×0.80	30	外傾	平坦	人為	AⅡa	深鉢形土器(称名寺) 土器片2点	埋甕	180
160	$B5b_3$	N−46°−W	不定形	0.77×0.65	45	外傾	平坦	人為	EⅠa	深鉢形土器(称名寺)	埋甕	180
161	$B5a_2$	N−19°−W	不整楕円形	1.45×0.82	45	外傾	平坦	人為	AⅡa	深鉢形土器(称名寺)	SI5と重複 埋甕	179
162	$B5e_1$	N−35°−E	不整楕円形	2.17×1.45	50	外傾	皿状	人為	AⅢb			145
163	$B5d_3$		不整円形	1.17×0.92	48	外傾	平坦	自然	AⅡa	(堀之内) 土器片129点,石器2点	SI21と重複 底部に石	145
164	$B5d_3$		不整円形	1.49×1.10	66	外傾	平坦	自然	AⅡb		SI21と重複 底部に石	145
165	$B4c_7$	N−17°−E	不整楕円形	1.80×1.00	30	外傾	平坦	人為	AⅡa	土器1点	SI25と重複	145
166	$A4f_6$		円形	0.91×0.82	20	外傾	平坦	自然	AⅠa	鉢形土器(加BⅡ) 土器片8点	埋甕	180
167	$A4i_6$		円形	0.88×0.70	28	外傾	平坦	自然	AⅠa	深鉢形土器(大木8A)	埋甕	180
168	$A4g_8$	N−67°−E	楕円形	0.90×0.80	25	外傾	平坦	人為	AⅠa	浅鉢形土器(加BⅡ)	埋甕	180
169	$B4c_7$	N−37°−W	楕円形	1.35×0.92	126	垂直	平坦	人為	BⅡc	土器片33点	SI25と重複	145
170	$B4c_7$		円形	0.82×0.77	84	外傾	皿状	人為	AⅠb	土器片3点	SI25と重複 底部に石	145
171	$B4d_7$	N−60°−W	不整楕円形	0.94×0.66	56	外傾	凹凸	人為	AⅠb	土器片9点	SI25と重複	145

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-172	B4d$_7$		円形	1.08×0.95	60	外傾	凹凸	自然	AⅡb	土器片100点,(加曽利B)	SI25と重複 底部に石	145
173	B4c$_7$		円形	1.15×1.07	46	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片4点	SI25と重複	145
174	B4c$_7$		不整円形	0.87×0.80	40	外傾	凹凸	自然	AⅠa		SI25と重複	145
175	B4b$_3$	N−71°−W	不定形	1.42×1.17	20	外傾	凹凸	人為	EⅡa	(称名寺) 土器片64点,石器1点	埋甕	180
176	A4j$_9$	N−64°−E	楕円形	1.35×0.80	40	外傾	平坦	自然	AⅡa			145
177	B4d$_4$	N−11°−W	楕円形	1.40×1.15	80	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片49点,		145
178	B4d$_3$		不整円形	1.40×1.22	116	袋状	平坦	人為	CⅡc	土器片399点,(堀之内)	底部に石	145
179	B4c$_3$	N−35°−W	楕円形	1.72×0.85	48	外傾	凹凸	人為	AⅡa	土器片22点		145
180	B4c$_3$	N−36°−E	不整楕円形	1.50×1.10	54	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片50点	底部に石	146
181	B4c$_3$		不整円形	1.25×1.20	40	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片32点,石器1点		146
182	B4c$_3$		円形	1.55×1.45	44	外傾	平坦	自然	AⅢa	土器片11点	底部に石	146
183	B4c$_3$		円形	1.43×1.30	78	外傾	皿状	人為	AⅡb	土器片10点	底部に石	146
184	B4c$_4$	N−37°−E	不整楕円形	2.02×1.30	114	袋状	皿状	人為	CⅢc	土器片51点,(加曽利B)	底部に石	146
185	B4b$_3$		円形	1.15×1.06	84	袋状	皿状	人為	CⅡb	土器片9点	底部に石	146
186	B4c$_3$		円形	1.20×1.10	80	外傾	平坦	自然	AⅡb	石器1点	底部に石	146
187	B4b$_4$		不整円形	0.85×0.75	60	外傾	凹凸	自然	AⅠb	土器片12点		146
188	B4b$_4$		円形	1.40×1.34	66	外傾	平坦	人為	AⅡb		底部に石	147
189	B4c$_5$	N−49°−W	楕円形	1.71×1.37	50	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片41点	底部に石	147
190	B4d$_6$		不整円形	2.07×1.90	88	外傾	平坦	人為	AⅢb	土器片9点	底部に石	146
191	B4c$_7$		不整円形	1.47×1.42	54	外傾	ゆるい起伏	人為	AⅡb	土器片17点		147
192	B4b$_7$	N−61°−W	不整楕円形	1.35×1.10	130	垂直	平坦	人為	BⅡc	土器片234点,(加曽利B)	底部に石	147
193	B4a$_6$		不整円形	1.75×1.57	74	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片17点,(安行Ⅰ)	底部に石	147
194	B4b$_7$		不整円形	1.52×1.35	100	外傾	平坦	人為	AⅡc	土器片15点	底部に石	147
195	B4b$_5$		不整円形	1.25×1.10	108	袋状	平坦	人為	CⅡc	土器片22点	底部に石	147
196	B4b$_6$		円形	1.25×1.20	90	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片22点	底部に石	146
197	B4b$_6$		円形	1.20×1.10	60	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片8点	底部に石	147
198	B4b$_6$	N−33°−E	不整楕円形	1.50×1.00	66	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片5点,石器1点		148
199	B4b$_5$	N−20°−W	不定形	0.90×0.60	60	外傾	凹凸	自然	EⅠb	土器片254点	SI23と重複	147
200	B4a$_6$	N−42°−W	楕円形	1.43×1.15	98	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片6点,石器1点		147
201	B4a$_6$		円形	1.15×0.95	80	袋状	平坦	人為	CⅡb			148
202	B4a$_7$		不整円形	1.35×1.00	96	垂直	平坦	人為	BⅡb	土器片10点,(加曽利E)	底部に石	155
203	B4a$_7$		円形	1.36×1.15	96	外傾	平坦	自然	AⅡb	(称名寺) 土器片6点,石器1点	底部に石	148
204	A4j$_6$		円形	1.25×1.12	90	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片214点,石器6点	底部に石	148
205	B4a$_6$	N−13°−E	不整楕円形	1.80×1.40	90	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片102点,(加曽利B)	底部に石	148
206	B5a$_6$	N−31°−W	楕円形	1.62×1.25	60	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片4点		148

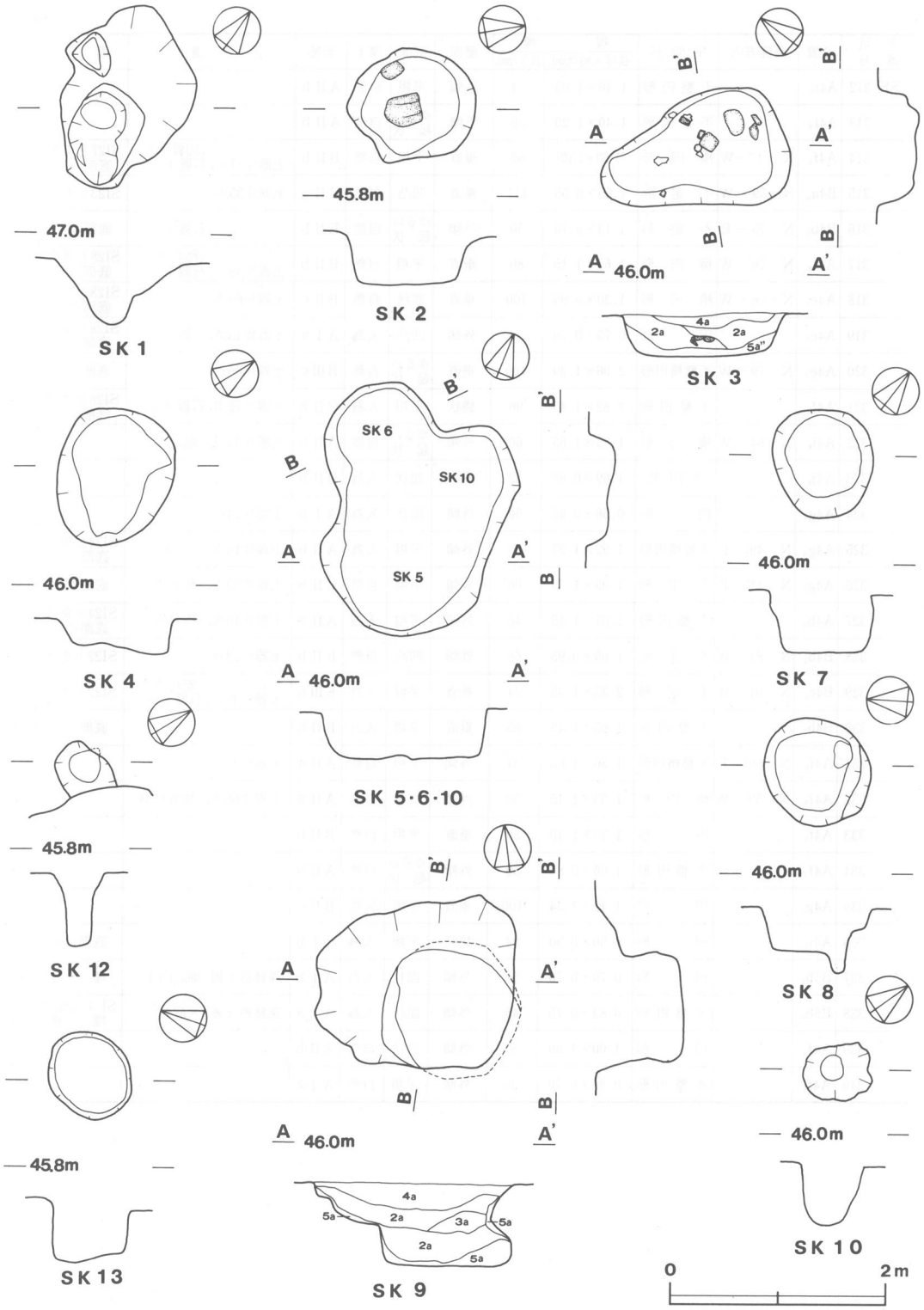
土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-207	A4j$_4$	N－6°－E	不整楕円形	1.35×1.03	44	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片21点	底部に石	148
208	B4j$_4$	N－16°－E	楕円形	1.50×1.10	100	袋状	平坦	人為	CⅡc	土器片116点,(称名寺)	底部に石	148
209	B4a$_4$	N－31°－E	不定形	1.03×0.55	70	外傾	凹凸	人為	EⅡb	土器片1点,石器1点	SI23と重複	149
210	B4c$_4$	N－61°－E	不定形	1.65×1.05	50	外傾	平坦	人為	EⅡb	土器片164点,石器2点	底部に石	150
211	A4j$_4$		円形	1.40×1.25	110	垂直	平坦	人為	BⅡc	(加曽利B)土器片21点,石器1点	底部に石	148
212	A4i$_4$	N－26°－W	楕円形	1.65×1.20	80	外傾	ゆるい起伏	人為	AⅡb	土器片52点	底部に石	148
213	A4i$_4$	N－14°－E	楕円形	1.90×0.65	120	外傾	平坦	自然	AⅡc	土器片3点	底部に石	149
214	A4j$_5$	N－66°－W	楕円形	1.35×1.05	70	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片42点,(堀之内)	底部に石	149
215	A4j$_5$		円形	1.50×1.35	56	外傾	凹凸	自然	AⅡb	土器片34点,石器1点	底部に石	149
216	A4j$_5$		不整円形	1.85×1.45	70	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片61点,(称名寺)	底部に石	149
217	A4j$_5$		円形	1.18×1.00	50	外傾	平坦	自然	AⅡb			148
218	B4a$_3$		不整円形	1.70×1.30	50	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡb	(加曽利B)土器片247点,石器2点	底部に石	149
219	A4j$_6$		円形	1.10×1.00	110	垂直	平坦	人為	BⅡc	土器片2点,石器1点	底部に石	149
220	A4i$_6$	N－46°－W	楕円形	1.20×1.00	80	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片1点		149
221	A4j$_6$		円形	1.45×1.30	90	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片22点	底部に石	149
222	A4j$_7$		不整円形	1.70×1.50	90	袋状	平坦	人為	CⅡb	(称名寺)土器片85点,石器1点	底部に石	150
223	A4j$_7$	N－9°－W	不整楕円形	1.60×1.25	40	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡa	土器片17点,(堀之内)		149
224	A4j$_8$		円形	1.60×1.35	80	袋状	平坦	自然	CⅡb	(称名寺)土器片236点,石器1点	底部に石	150
225	A4i$_7$		円形	1.36×1.30	70	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片86点		149
226	A4i$_7$		円形	0.76×0.72	44	外傾	平坦	自然	AⅠa	土器片8点,(加曽利B)		149
227	A4i$_7$		不整円形	1.65×1.30	66	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片28点,(称名寺)		150
228	A4i$_6$		円形	1.76×1.45	110	外傾	平坦	人為	AⅡc	(加曽利B)土器片92点,石器1点	底部に石	150
229	A4i$_6$		円形	1.60×1.55	90	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片31点	底部に石	150
230	A4i$_6$		円形	1.50×1.50	50	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片33点		150
231	A4h$_6$		円形	0.78×0.63	50	外傾	平坦	人為	AⅠb	土器片37点,(加曽利B)		151
232	A4h$_6$		円形	1.75×1.70	96	垂直	平坦	人為	BⅡb	土器片37点	底部に石	151
233	A4i$_7$		円形	2.05×2.02	120	垂直	平坦	自然	BⅢc	土器片35点,(堀之内)	底部に石	151
234	B4h$_6$	N－42°－W	楕円形	1.37×1.25	90	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片216点,石器2点	底部に石	151
235	B4b$_6$		不整円形	1.15×1.00	30	外傾	平坦	人為	AⅡa			147
236	B4b$_6$	N－21°－W	不整楕円形	1.55×1.34	40	外傾	平坦	人為	AⅡa	土器片7点	底部に石	146
237	B4c$_5$	N－30°－E	不整楕円形	1.60×1.45	48	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片4点	底部に石	147
238	A4j$_7$		円形	1.65×1.30	110	袋状	皿状	人為	CⅡc	土器片15点	底部に石	151
239	B4d$_3$		不整円形	1.22×0.82	60	外傾	平坦	人為	AⅡb			145
240	B4c$_4$		円形	1.70×1.20	90	垂直	平坦	人為	BⅡb	土器片44点,(加曽利B)	底部に石	150
241	A4j$_7$		円形	1.14×0.95	80	外傾	皿状	人為	AⅡb	土器片1点		151

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-242	$B4b_4$		不整円形	2.30×1.90	76	外傾	皿状	自然	AⅢb	土器片278点,(堀之内)	底部に石	152
243	$B4c_4$	N−57°−E	不整楕円形	1.90×1.70	70	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片141点,(堀之内)	底部に石	150
244	$B4c_5$	N−10°−E	楕円形	2.45×2.00	66	外傾	平坦	人為	AⅢb	土器片243点,(称名寺)	底部に石	151
245	$B4e_5$	N−68°−E	楕円形	1.30×1.10	28	外傾	凹凸	人為	AⅡa	土器片114点	底部に石	151
246	$B4a_4$		不整円形	1.40×1.30	40	外傾	凹凸	自然	AⅡa	土器片112点,(加曽利B)		151
247	$B4b_5$		不整円形	1.52×1.15	44	外傾	皿状	自然	AⅡa	土器片91点,(加曽利B)		152
248	$B4b_3$		円形	1.47×1.40	80	袋状	皿状	人為	CⅡb	土器片65点,(堀之内)	底部に石	152
249	$B4a_3$		円形	1.73×1.50	106	袋状	皿状	人為	CⅡc	土器片1点,石器1点	底部に石	152
250	$A4j_3$	N−14°−E	楕円形	1.50×1.20	84	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片193点,(堀之内)	底部に石	152
251	$B4c_5$	N−34°−W	楕円形	0.70×0.45	74	垂直	皿状	自然	BⅠb	土器片56点,(加曽利E)		151
252	$A4j_5$		円形	1.45×1.30	80	垂直	平坦	人為	BⅡb	土器片17点,(加曽利B)		152
253	$A4g_5$		円形	1.05×0.95	80	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片556点,(加曽利B)	底部に石	152
254	$A4g_7$	N−80°−W	楕円形	1.25×0.72	80	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片157点,(堀之内)	底部に石	152
255	$A4h_7$		円形	1.05×1.05	106	垂直	平坦	人為	BⅡc	土器片180点,(堀之内)	底部に石	153
256	$A4h_7$		円形	1.12×1.10	58	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡb	(称名寺) 土器片54点,石器1点	底部に石	153
257	$A4i_0$		円形	1.55×1.40	160	袋状	皿状	人為	CⅡc	(阿玉台ⅠB) 土器片12点,石器1点	底部に石	153
258	$A4i_0$		不整円形	1.35×1.15	68	垂直	平坦	人為	BⅡb	土器片18点	底部に石	152
259	$A4g_9$		円形	1.49×1.30	80	垂直	平坦	自然	BⅡb	土器片46点,(加曽利B)	底部に石	153
260	$A4g_9$	N−61°−W	楕円形	1.30×1.03	86	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片252点,(称名寺)	底部に石	153
261	$A4f_9$	N−26°−W	楕円形	1.60×1.32	90	袋状	皿状	人為	CⅡb	土器片125点,(加曽利B)	底部に石	153
262	$A4g_7$		円形	1.60×1.55	100	垂直	平坦	自然	BⅡc	土器片63点,(加曽利B)		153
263	$A4h_4$	N−61°−E	不定形	1.65×0.70	100	外傾	平坦	人為	EⅡc	(加曽利B) 土器片62点,石器1点		153
264	$A4g_8$		半円形	0.80×0.70	50	外傾	皿状	自然	AⅠb	土器片40点,(堀之内)	SI24と重複 底部に石	154
265	$A4g_8$		円形	1.20×1.15	50	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片89点,(称名寺)	SI24と重複 底部に石	154
266	$A4h_8$	N−36°−W	不整楕円形	1.37×1.32	60	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片7点	SI24と重複 底部に石	154
267	$B4c_4$	N−43°−W	不整楕円形	1.70×1.10	130	垂直	ゆるい起伏	自然	BⅡc	(加曽利E) 土器片1点,石器1点	底部に石	150
268	$B4b_5$	N−13°−E	不定形	0.90×0.40	60	垂直	ゆるい起伏	人為	EⅠb	土器片140点,石器1点	SI23と重複 底部に石	153
269	$A4j_8$		不整円形	1.45×1.20	70	垂直	平坦	人為	BⅡb	土器片94点,(堀之内)	底部に石	153
270	$A4i_8$		不整円形	1.55×1.30	70	垂直	平坦	自然	BⅡb	土器片1点,(堀之内)	底部に石	154
271	$A4i_7$	N−80°−W	楕円形	1.52×1.15	100	外傾	平坦	人為	AⅡc	(称名寺) 土器片386点,石器1点	底部に石	154
272	$B4a_9$	N−56°−E	不整楕円形	1.55×1.30	54	外傾	平坦	自然	AⅡb	(称名寺) 土器片14点,石器1点		154
273	$B4a_9$		円形	1.42×1.17	24	外傾	皿状	自然	AⅡa	土器片3点,(称名寺)		154
274	$B4a_8$	N−56°−W	楕円形	2.40×1.45	34	外傾	平坦	自然	AⅢa	(称名寺) 土器片119点,石器2点		154
275	$B4a_9$	N−21°−E	楕円形	1.40×0.75	74	外傾	皿状	人為	AⅡb			154
276	$A4j_8$		不整円形	3.45×3.03	106	外傾	平坦	自然	AⅢc	土器片1056点,石器8点	底部に石	154

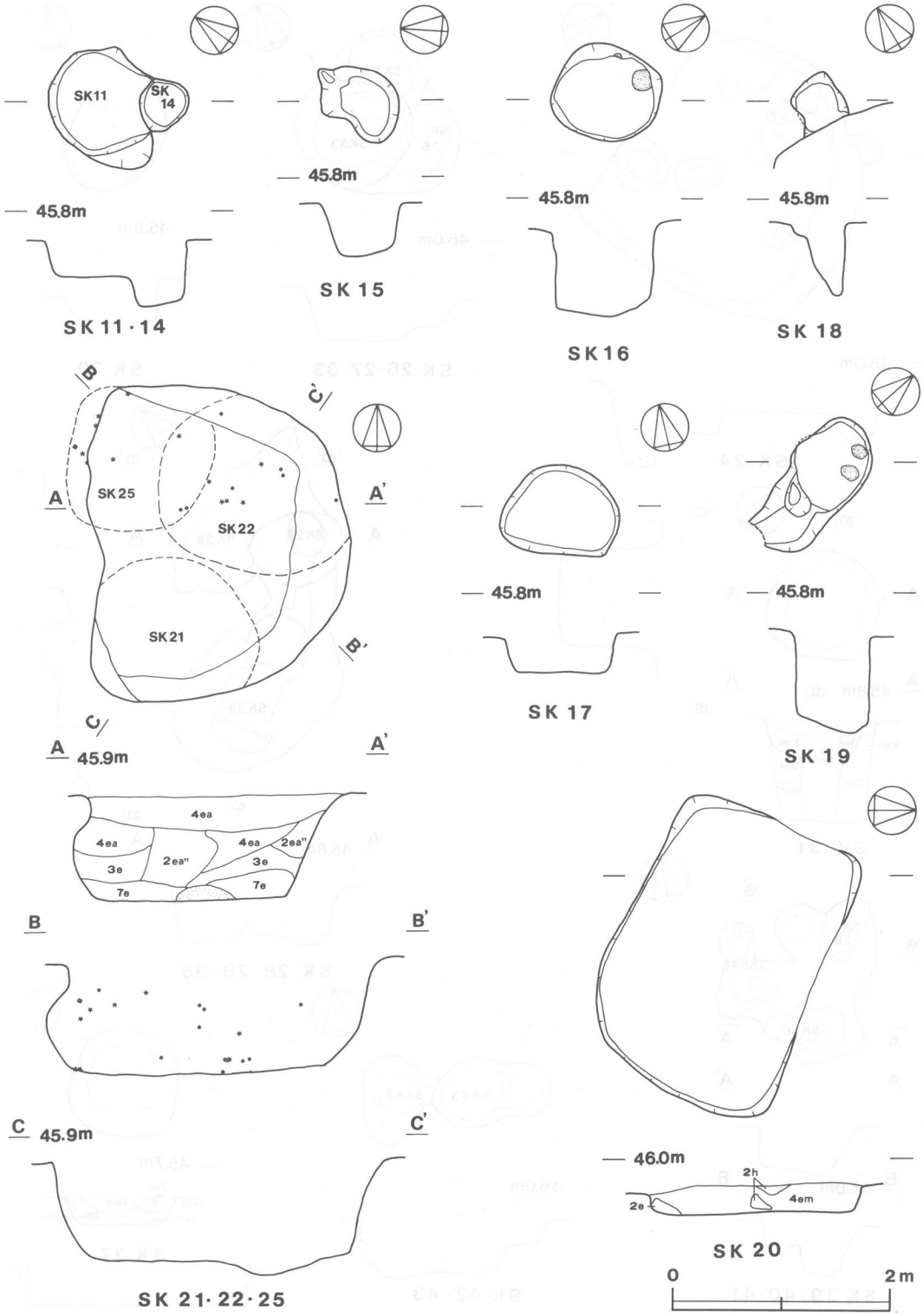
土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-277	$A4f_9$		円形	1.25×1.15	88	外傾	平坦	自然	AⅡb		底部に石	154
278	$B4b_3$		円形	1.45×1.30	70	袋状	凹凸	人為	CⅡb			152
279	$B4b_3$	N－9°－E	楕円形	2.14×1.40	70	外傾	平坦	人為	AⅢb			152
280	$B4b_2$	N－16°－W	楕円形	1.85×1.45	70	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片9点	SI22と重複 底部に石	155
281	$B4b_2$		半円形	1.85×0.57	80	外傾	凹凸	人為	AⅡb	土器片71点,(安行Ⅰ)	SI22と重複	155
282	$B4c_2$		半円形	1.62×1.45	50	外傾	皿状	人為	AⅡb	土器片15点	SI22と重複 底部に石	155
283	$B4b_3$		不整円形	0.90×0.65	66	外傾	平坦	人為	AⅠb	土器片4点	SI22と重複	155
284	$B4c_3$		円形	1.20×1.05	60	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片9点	SI22と重複	155
285	$A4j_9$	N－22°－E	不定形	1.62×1.00	40	外傾	平坦	自然	EⅡa	土器片10点		145
286	$A4i_8$		円形	1.10×1.00	60	垂直	平坦	自然	BⅡb	土器片2点,石器1点	底部に石	154
287	$B4a_5$	N－65°－E	不整楕円形	1.25×0.95	100	垂直	凹凸	人為	BⅡc	(安行Ⅰ) 土器片137点,石器1点	SI23と重複 底部に石	155
288	$B4b_5$		不整円形	0.90×0.80	80	外傾	皿状	人為	AⅠb		底部に石	153
289	$B4e_6$	N－8°－E	不定形	2.15×1.50	30	外傾	皿状	自然	EⅢa	土器片450点,(加曽利B)		155
290	$A4e_6$	N－16°－W	楕円形	1.40×1.10	70	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片8点	底部に石	155
291	$A4h_7$	N－11°－E	不整楕円形	1.05×0.55	66	外傾	皿状	自然	AⅡb	(堀之内) 土器片872点,石器3点		155
292	$B4c_2$		円形	0.65×0.60	100	外傾	皿状	人為	AⅠc		SI22と重複	155
293	$B4a_4$	N－57°－E	不整楕円形	1.07×0.55	120	垂直	凹凸	人為	BⅡc	土器片30点,(安行Ⅰ)	SI23と重複 底部に石	155
294	$B4b_7$	N－28°－E	楕円形	1.25×0.85	40	外傾	平坦	人為	AⅡa	土器片5点		155
295	$A4i_7$		不整円形	1.57×1.25	90	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片6点	底部に石	155
296	$B4b_2$	N－34°－E	不定形	1.30×0.70	74	垂直	平坦	人為	EⅡb		SI22と重複	155
297	$A4h_7$	N－29°－W	不整楕円形	1.60×1.25	70	外傾	ゆるい起伏	人為	AⅡb	(加曽利B) 土器片1137点,石器4点	底部に石	156
298	$A4h_6$	N－46°－W	楕円形	1.50×1.15	74	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片16点	底部に石	151
299	$A4g_8$	N－15°－E	楕円形	1.10×0.85	60	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片12点	SI24と重複	156
300	$A4h_8$		不整円形	2.00×1.35	66	外傾	平坦	自然	AⅢb	土器片20点	SI24と重複 底部に石	156
301	$A4h_9$		不整円形	1.40×1.10	48	外傾	凹凸	人為	AⅡa	土器片42点	SI24と重複	156
302	$B4h_9$	N－52°－E	楕円形	1.30×1.15	80	袋状	平坦	人為	CⅡb		SI11と重複 底部に石	156
303	$A4g_9$	N－32°－E	楕円形	1.65×1.25	60	外傾	皿状	自然	AⅡb	土器片50点,(加曽利E)		156
304	$A4g_9$		不整円形	2.25×1.95	90	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅢb	(称名寺) 土器片14点,石器1点	底部に石	156
305	$A4h_0$		円形	1.15×1.05	62	垂直	平坦	自然	BⅡb	土器片35点		157
306	$A4i_6$		円形	1.10×0.92	110	袋状	平坦	人為	CⅡc			150
307	$A4g_6$	N－19°－W	楕円形	1.37×1.23	50	垂直	ゆるい起伏	人為	BⅡb	土器片13点,(堀之内)	SI26と重複 底部に石	156
308	$A4f_6$	N－9°－E	楕円形	(1.95×0.95)	100	垂直	平坦	人為	BⅡc	土器片107点,(加曽利B)	SI27と重複 底部に石	156
309	$A4h_7$	N－25°－E	不定形	0.95×0.65	60	外傾	凹凸	人為	EⅠb	土器片48点,(堀之内)	底部に石	156
310	$A4h_7$	N－40°－W	楕円形	1.50×1.15	66	外傾	平坦	自然	AⅡb	土器片30点,(堀之内)		155
311	$A4h_0$		円形	1.37×1.30	74	垂直	平坦	自然	BⅡb	土器片1点		157

(10)

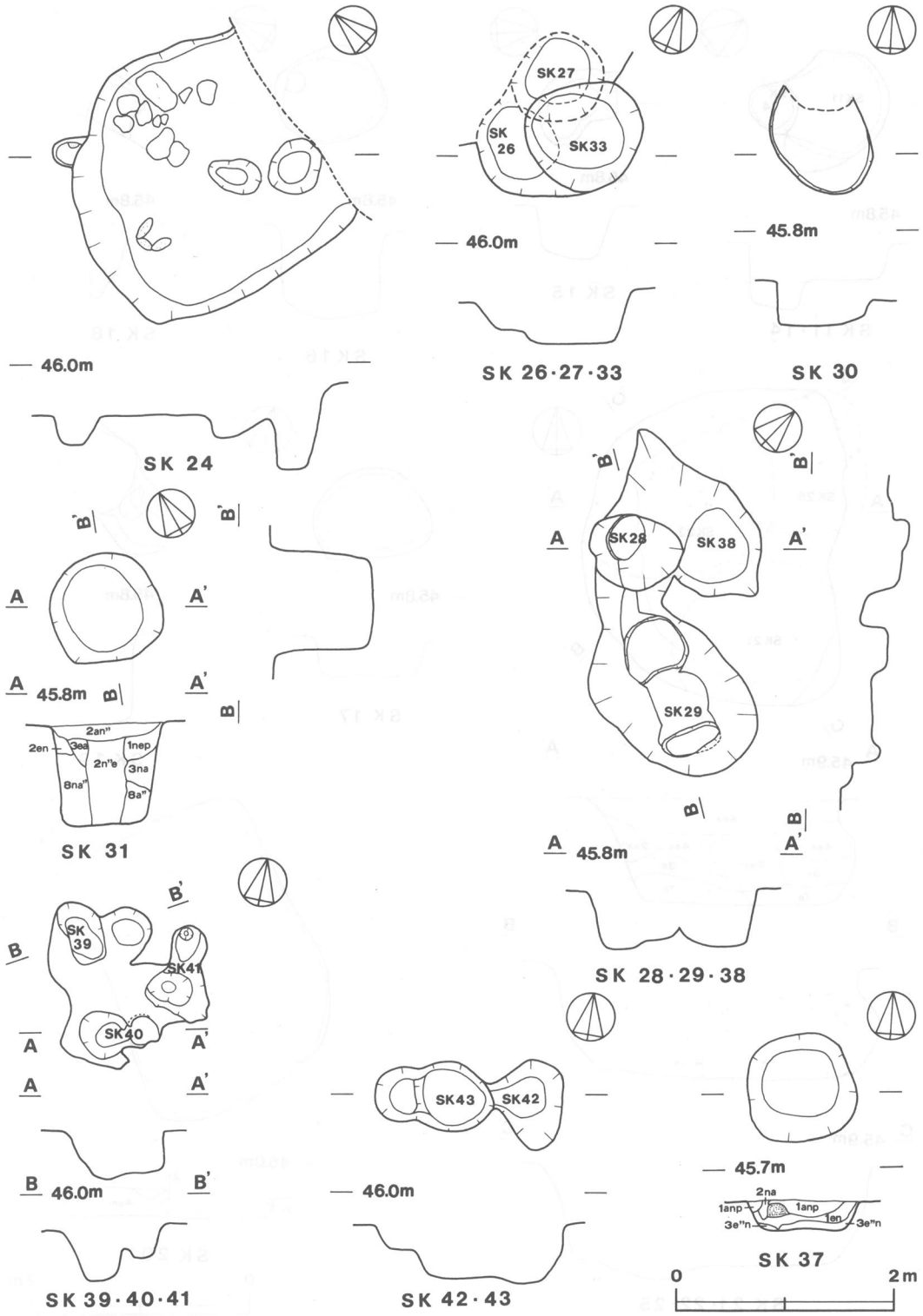
土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-312	$A4i_8$		不整円形	1.40×1.05	74	外傾	平坦	自然	AⅡb			157
313	$A4f_8$		不整円形	1.40×1.20	56	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡb			157
314	$A4f_6$	N－1°－W	楕円形	(1.50×1.02)	60	垂直	平坦	自然	BⅡb	(加曽利B) 土器片77点,石器1点	SI27と重複 底部に石	157
315	$B4a_5$	N－59°－W	不定形	1.05×0.55	112	垂直	凹凸	自然	EⅡc	土器片35点	SI23と重複	157
316	$B4b_5$	N－75°－E	不定形	1.13×0.70	50	外傾	ゆるい起伏	自然	EⅡb	石器1点	底部に石	151
317	$A4f_6$	N－70°－W	楕円形	1.65×1.15	86	垂直	平坦	自然	BⅡb	(称名寺) 土器片59点,石器1点	SI28と重複 底部に石	157
318	$A4e_7$	N－26°－W	楕円形	1.30×0.95	100	垂直	皿状	自然	BⅡc	土器片69点	SI28と重複 底部に石	157
319	$A4e_7$		円形	0.75×0.70	34	外傾	凹凸	人為	AⅠa	土器片13点,石器1点	SI28と重複 底部に石	158
320	$A4e_7$	N－79°－W	不整楕円形	2.06×1.30	100	垂直	ゆるい起伏	自然	BⅢc	土器片66点	底部に石	157
321	$A4f_7$		不整円形	1.82×1.45	96	袋状	平坦	人為	CⅡb	土器片72点,石器2点	SI28と重複 底部に石	158
322	$A4i_8$	N－64°－W	楕円形	1.85×1.65	60	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡb	土器片65点,(堀之内)		157
323	$A4j_8$		(半円形)	1.09×0.80	52	垂直	皿状	人為	BⅡb			158
324	$A4g_7$		円形	0.56×0.45	50	外傾	皿状	人為	AⅠb	土器片14点		153
325	$A4g_8$	N－49°－E	不整楕円形	1.92×1.27	60	外傾	平坦	人為	AⅡb	土器片16点	SI24と重複 底部に石	156
326	$A4g_7$	N－41°－E	不定形	1.95×1.35	66	外傾	平坦	自然	EⅡb	土器片33点,(称名寺)	底部に石	158
327	$A4b_8$		不整円形	1.65×1.15	40	外傾	平坦	人為	AⅡa	土器片10点,(称名寺)	SI24と重複 底部に石	156
328	$B4b_2$	N－84°－W	不定形	1.05×0.95	66	外傾	凹凸	自然	EⅡb	土器片23点	SI22と重複	158
329	$B4c_2$	N－61°－W	不定形	2.35×1.35	74	垂直	平坦	人為	EⅢb	(安行Ⅰ) 土器片39点,石器2点	SI22と重複	158
330	$B4b_7$		不整円形	1.95×1.45	65	垂直	平坦	人為	BⅡb		底部に石	158
331	$A4f_8$	N－50°－E	不整楕円形	1.36×1.00	34	外傾	平坦	自然	AⅡa	土器片9点		157
332	$A4f_8$	N－59°－W	楕円形	1.53×1.15	30	外傾	皿状	自然	AⅡa	土器片66点,(加曽利B)		158
333	$A4f_8$		円形	1.23×1.10	50	垂直	平坦	自然	BⅡb			158
334	$A4f_7$		不整円形	1.00×0.80	50	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡb			158
335	$A4g_0$		円形	1.42×1.34	100	垂直	平坦	自然	BⅡc			158
336	$A4i_5$		円形	0.50×0.50	84	袋状	平坦	人為	CⅠb		底部に石	158
337	$B5b_4$		円形	0.70×0.70	50	外傾	皿状	人為	AⅠb	深鉢形土器(堀之内Ⅰ)	埋甕	180
338	$B5b_3$		不整円形	0.83×0.75	45	外傾	皿状	人為	AⅠa	深鉢形土器(大洞B)	SI 7と重複 埋甕	180
339	$A4f_8$		円形	1.00×1.00	50	外傾	皿状	自然	AⅡb			157
340	$A4f_8$		不整円形	0.80×0.70	25	外傾	平坦	自然	AⅠa			157



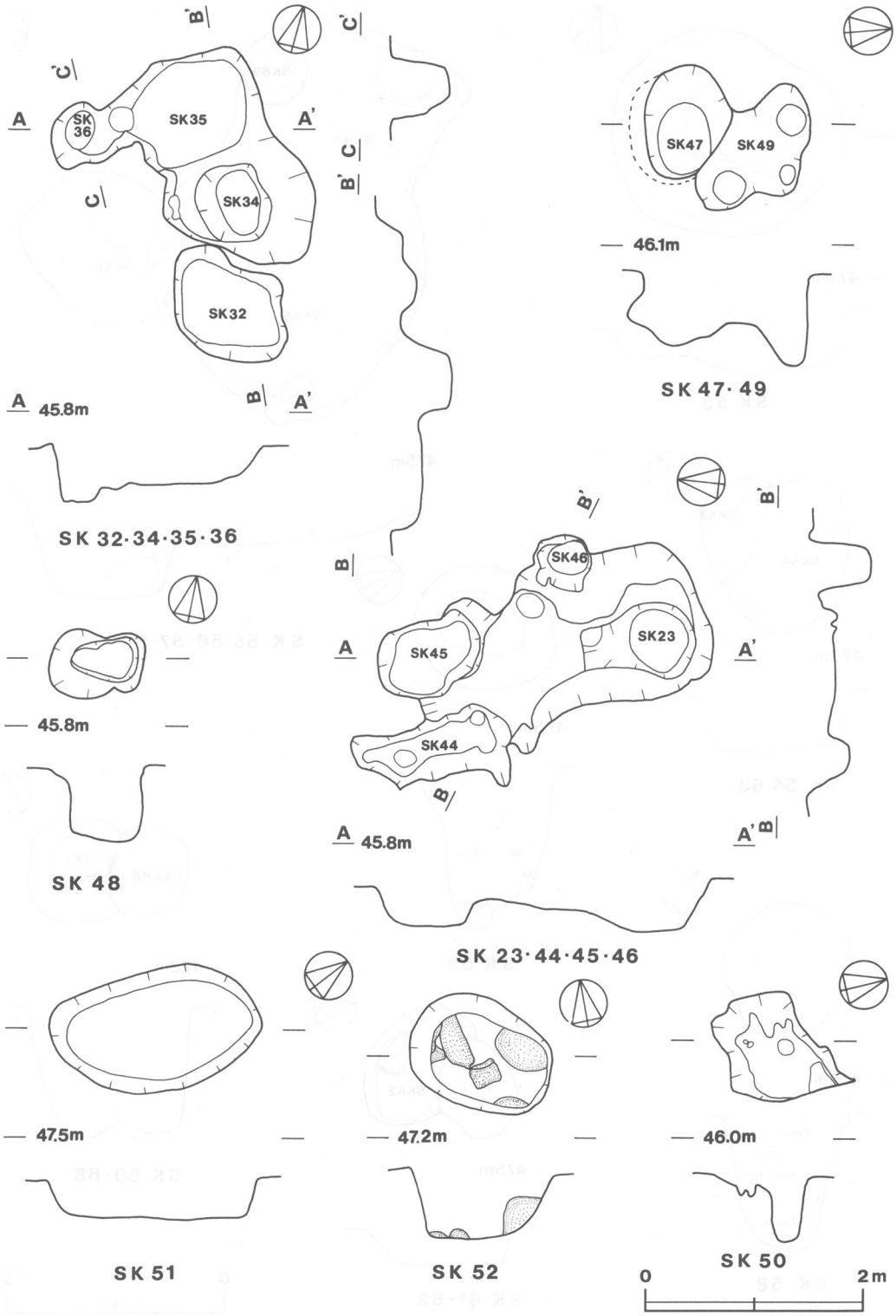
第133図　土 坑 実 測 図(1)



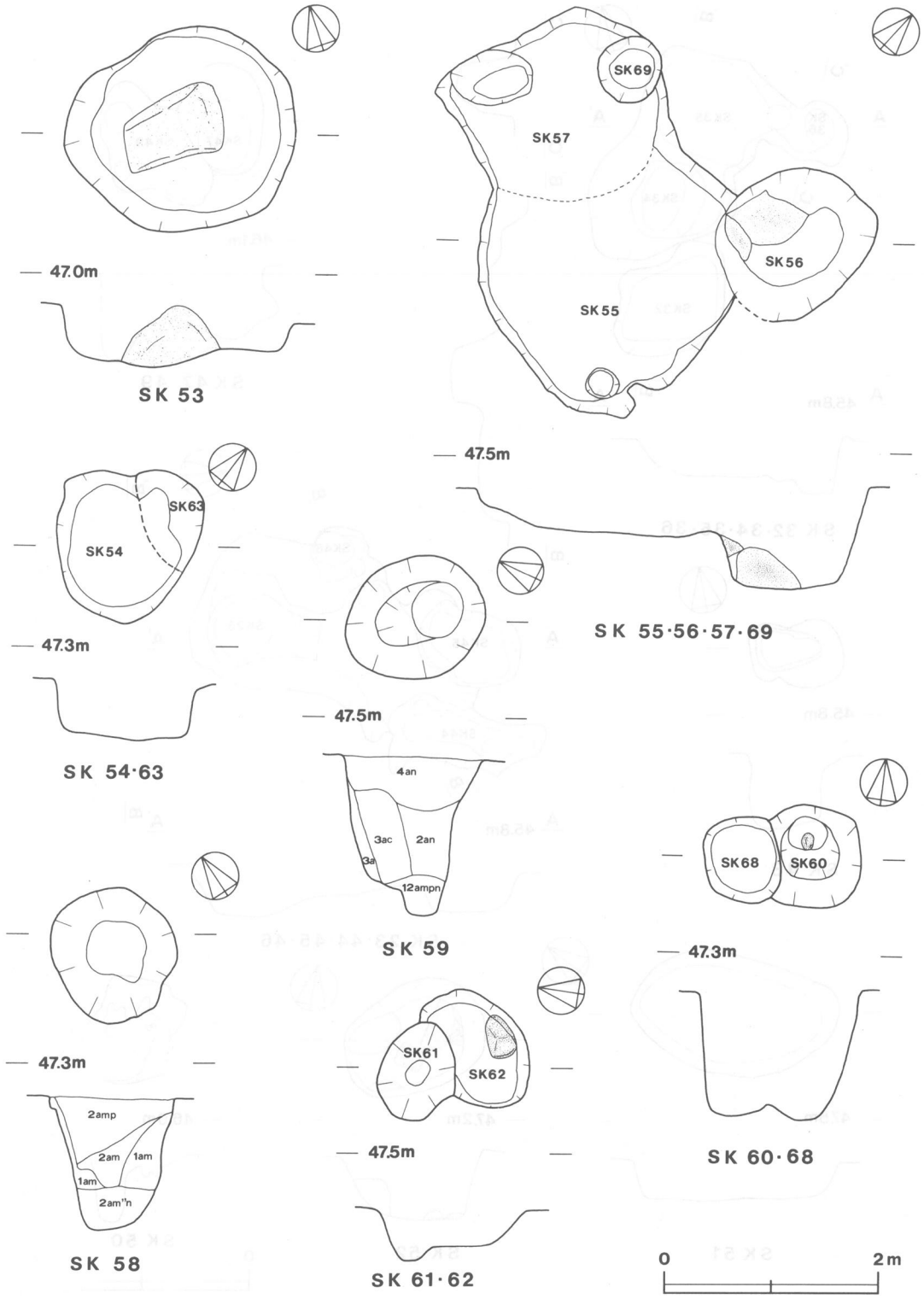
第134図　土 坑 実 測 図(2)



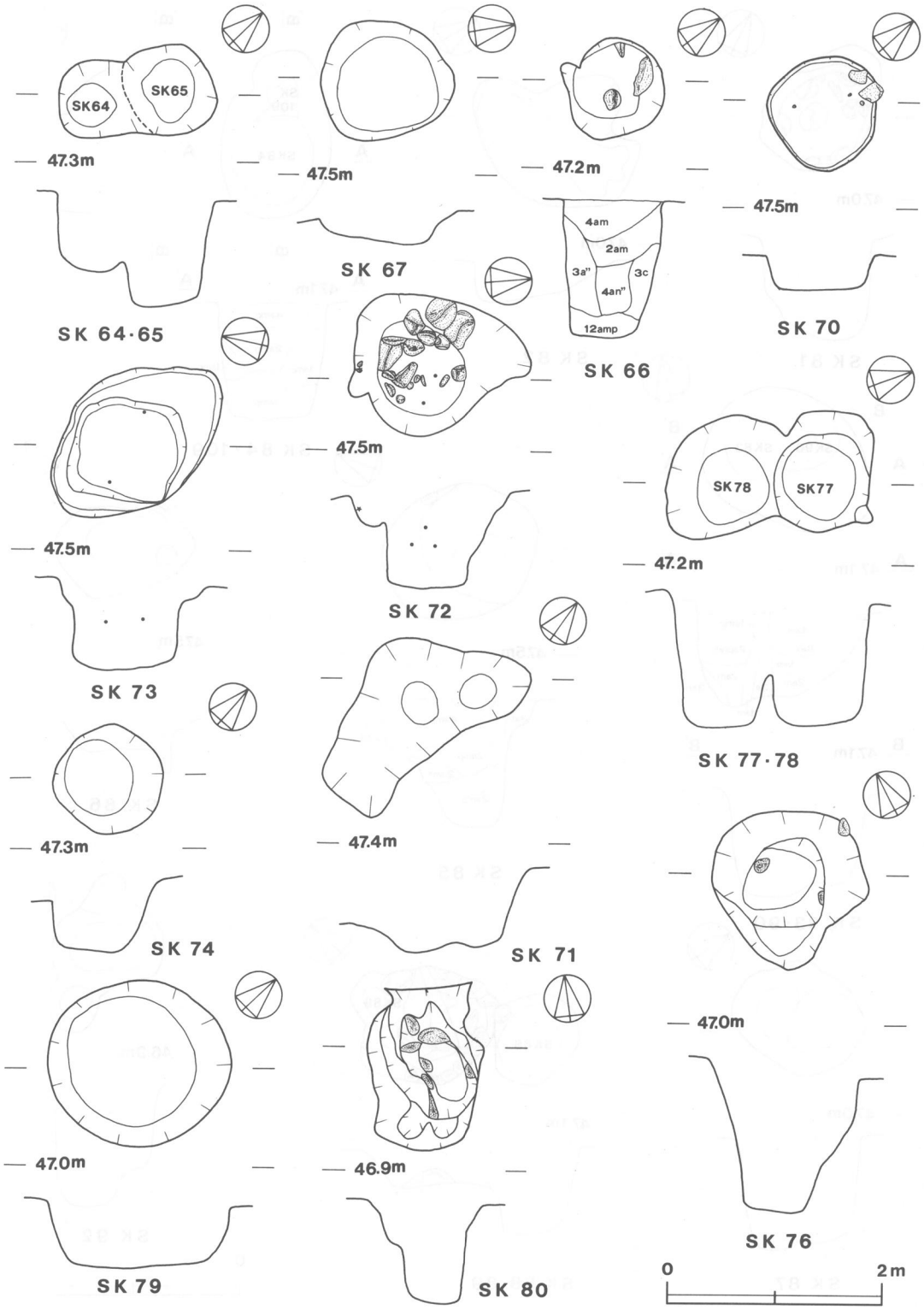
第135図　土 坑 実 測 図(3)



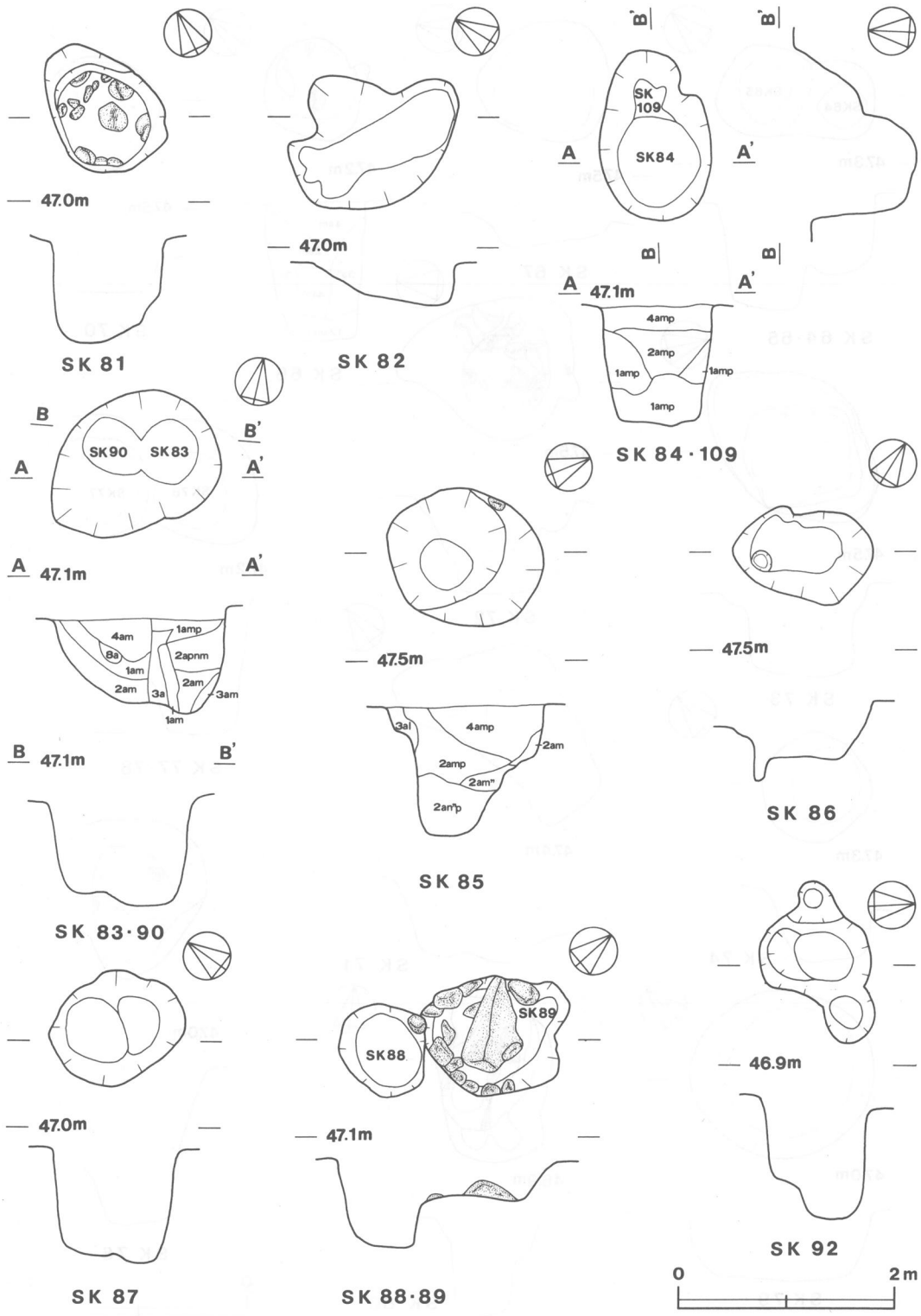
第136図　土 坑 実 測 図(4)



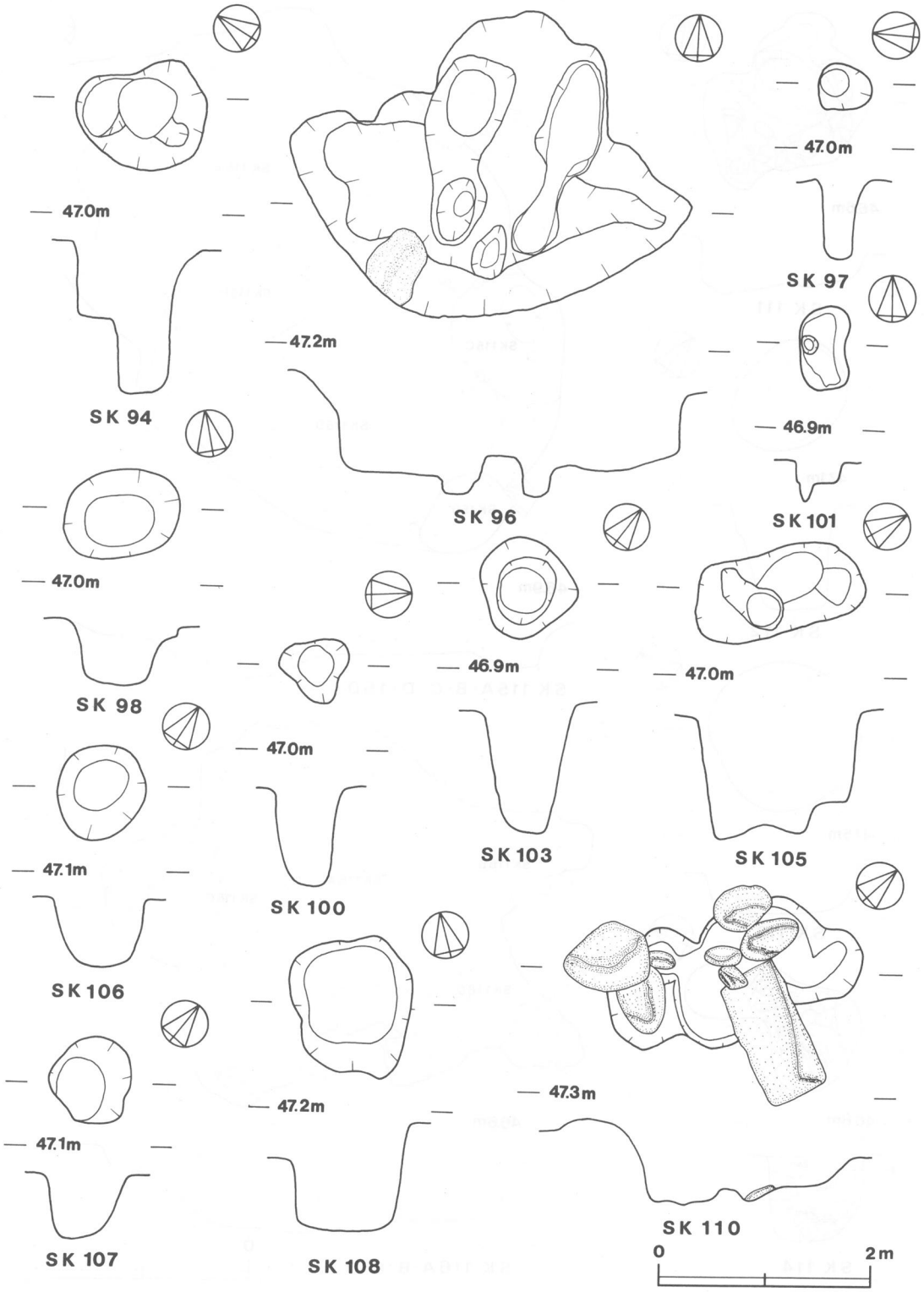
第137図　土 坑 実 測 図(5)



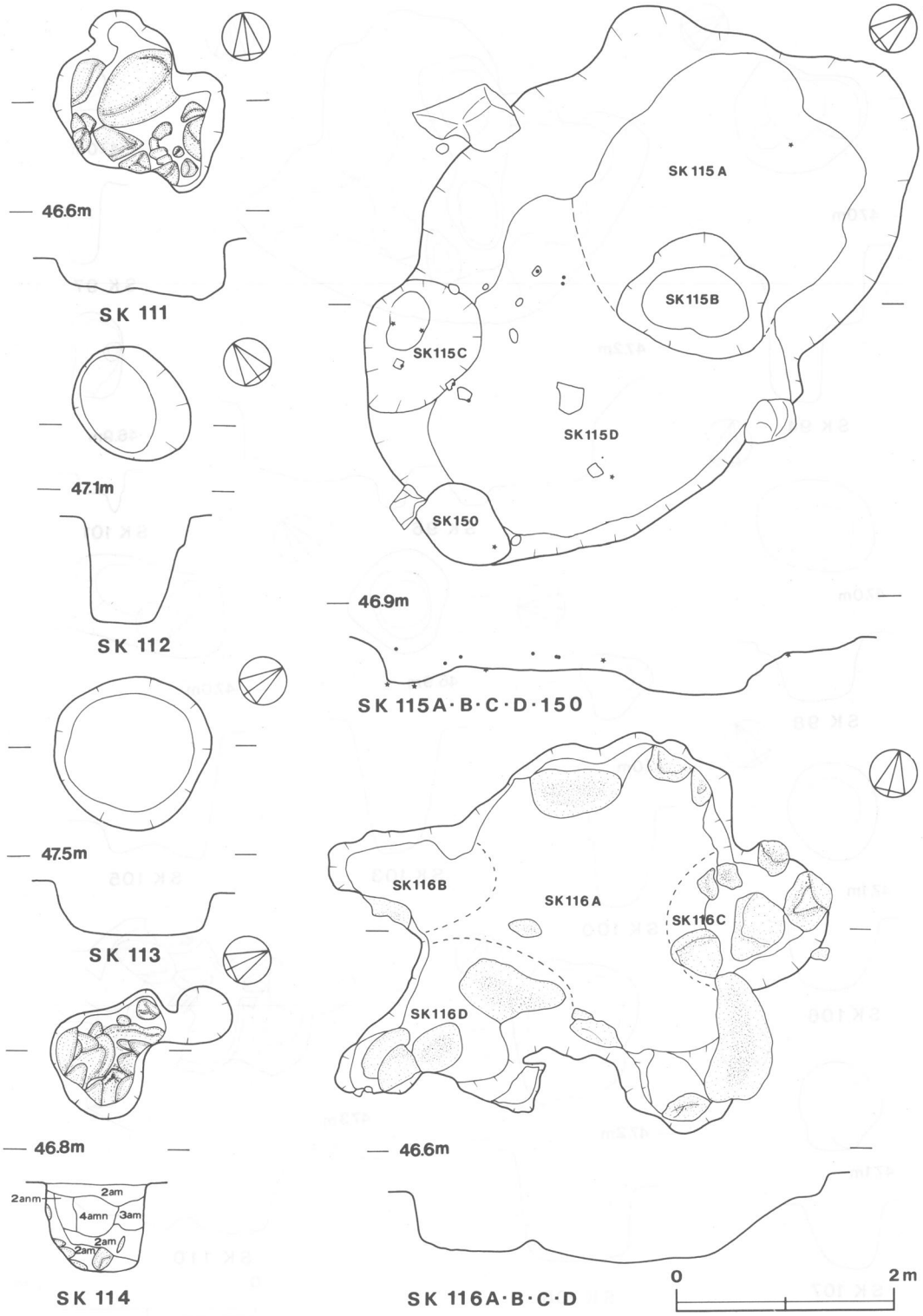
第138図　土 坑 実 測 図(6)



第139図　土 坑 実 測 図(7)



第140図　土 坑 実 測 図(8)



第141図　土 坑 実 測 図(9)